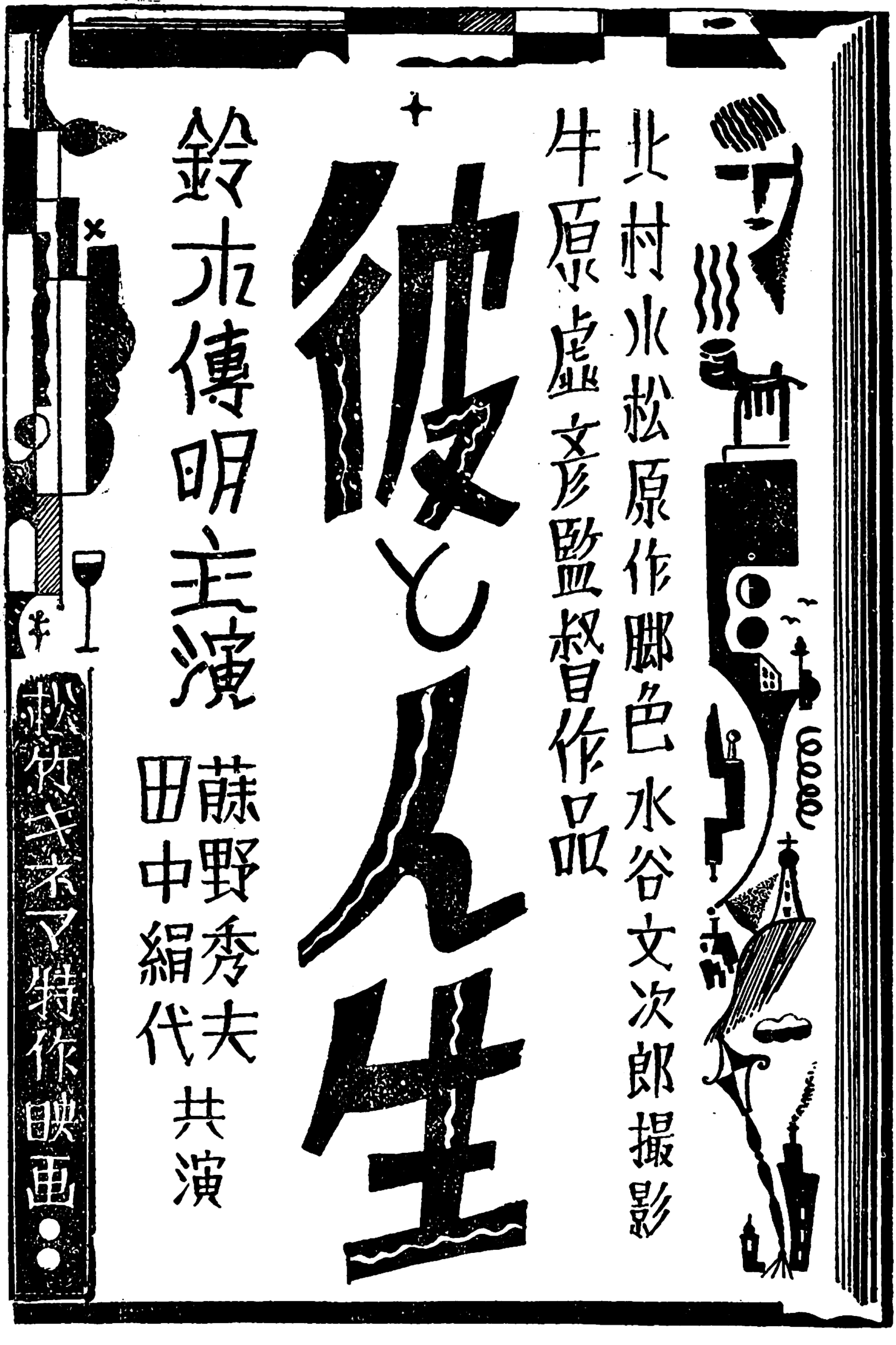
女人藝術

昭和四年一月十七日印刷納本第二巻第二
昭和四年二月一日發行（毎月一回發行）




北村小松原作脚色 水谷文次郎撮影
牛原虚彦監督作品
彼と人生
鈴木傳明主演
蘇野秀夫
田中絹代 共演
松竹キネマ特作映画

女人藝術二月號目次

——禁轉載——



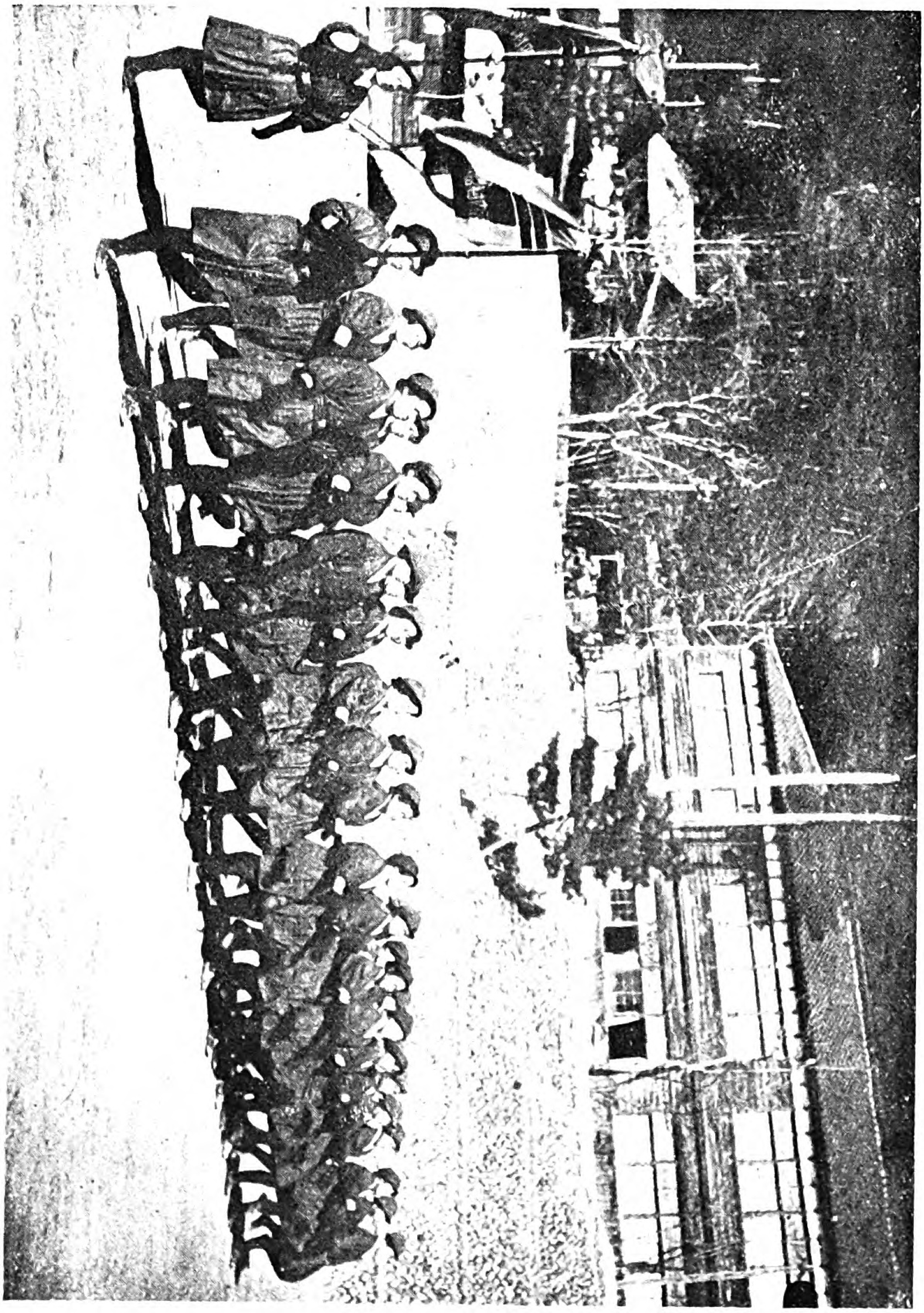
特別附錄

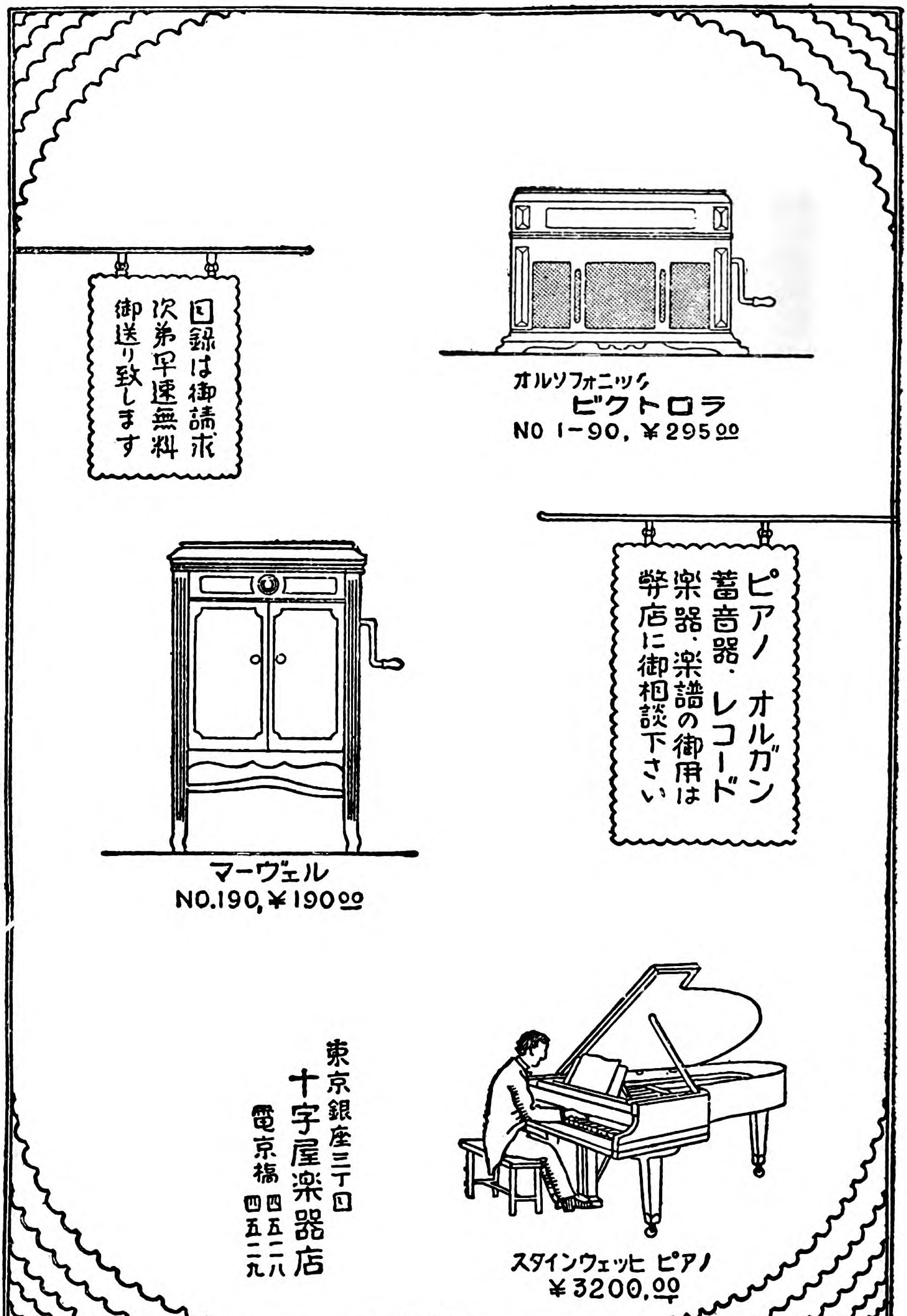
誌上議壇 II





モスクワ兒童劇場舞臺の上に於けるナタリヤ・サッツ女史及び故小山内薫氏——應接室秋田雨雀氏の記事參照——




目録は御請求
次第早速無料
御送り致します
オルソフォニック
ビクトロラ
NO 1-90, ¥295.00
ピアノ オルガン
蓄音器・レコード
楽器・楽譜の御用は
弊店に御相談下さい
マーヴェル
NO.190, ¥190.00
東京銀座三丁目
十字屋楽器店
電京橋 四五二八 四五二九
スタインウェッヒ ピアノ
¥3200.00



いろいろな落付き
にくいことにも平
氣になれて、心ゆ
くまで勉強出來る
境地になりたいと
想ひます。

——甲斐仁代——



人のおもひを
吹きすましては
いよよおどけし
世のふりの
名もうつそみも
なべてものかは
笛のはしため
笛を吹き候。

―深尾須磨子―

文藝創作講座

第二號

内容

文藝創作講座は第一號を配本するや、會員諸君の熱烈な好評を以て迎へられた。締切後にも多數の入會希望者があるので、特に本誌讀者に限り申込に應ずることにした。即刻入會されんことを。

内容見本進呈。

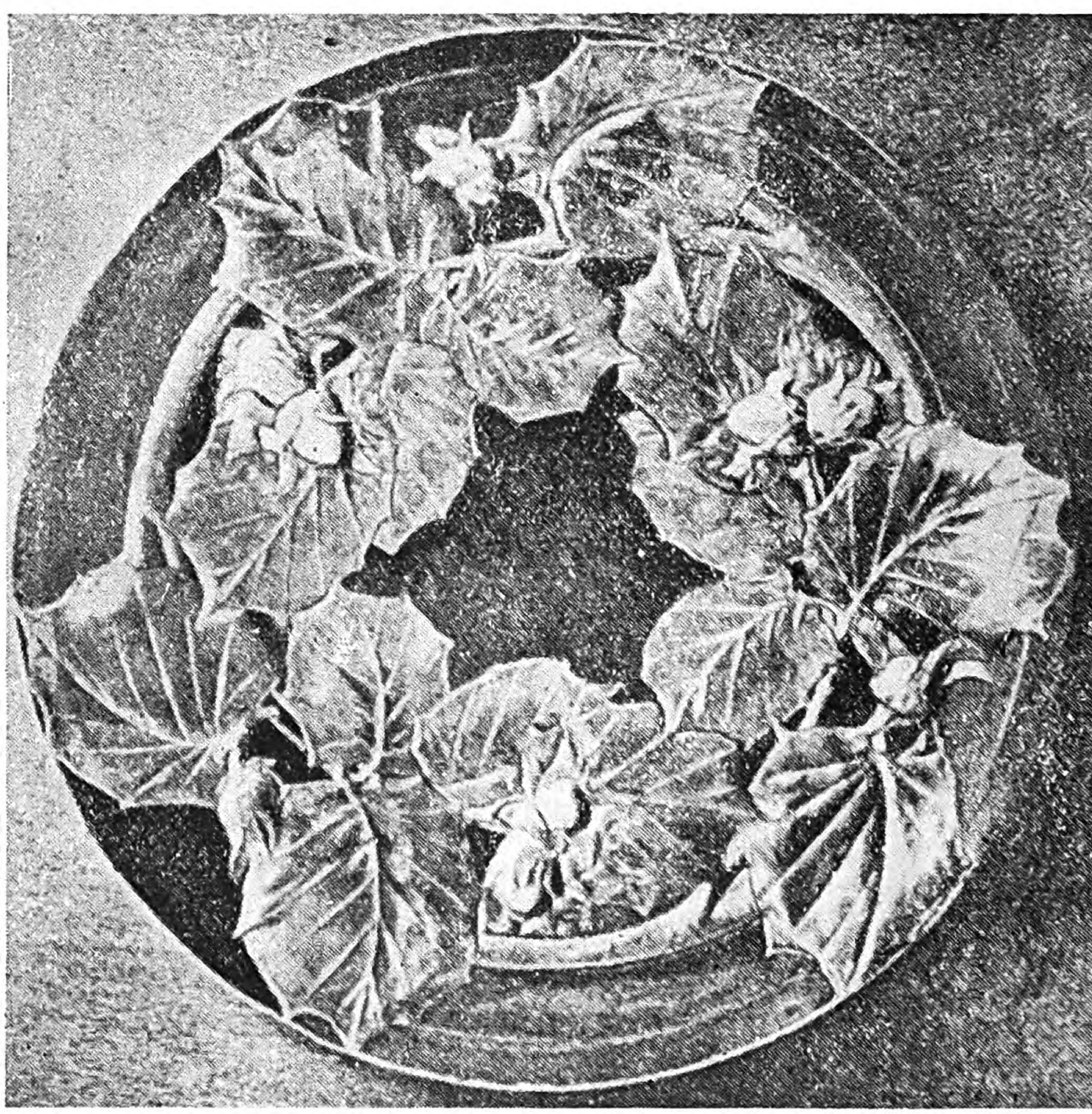
會費一ヶ月七十錢（入會金參拾錢）
全期七圓（入會金不要）

麴町區内幸町大阪ビル二階　文藝春秋社　振替東京一七六〇三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女人藝術

二月



誌上議壇

一、公娼廢止の問題…………一二縣會通過、及び議會提出を中心として。
一、市會議員選擧問題について…………婦人及び無産階級的立場から。
一、消費組合運動…………解放運動の一分野として——。

平塚らいてふ　山本和子
奥むめお　○
織本貞代　八木秋子
永島暢子　城しづか
松本日佐子　素川絹子

素川　公娼廢止の問題、市會解散とそれに伴ふ選擧問題、それから消費組合について、なほ時間がありましたら職業婦人問題、婦人辯護士の問題に付いてどうぞ願ひます。

永島　公娼廢止の問題は平塚さんが……

平塚　新聞を拜見しただけの知識しかありませんの。請願だの、建議案としては出てゐましたが、法律案として初めて出るやうになつたぢやないですか？　決定してゐるのでせうか？　法律案として、各派の代議士が賛成して、各派聯合で出るんぢやないですか？

素川　埼玉と福島では縣會を通過した樣な……

山本　秋田でも……

平塚　最近ですか？

素川　隨分長い問題なんでせう……

平塚　矯風會が出したのは、どんな風の内容ですか？

奥　この間、久布白さんにお會ひした時のお話は、埼玉縣で一票反對した人があつただけで可決になつた——こゝまで漕ぎつけるまでには、廢娼期成同盟會と云ふあの人達が、隨分各地方に手分けをして、基金を作つたり、賛成者を多くする爲に働いて來たと云ふことを言つていらつしやいました。だから現れて來るまでには、隨分皆さん運動してゐなさつたんでせう。

平塚　廢娼期成同盟と云ふのはどう云ふんですか？

奥　矯風會と廓清會とです。

八木　今年も議會を前にして、請願運動の署名を求めてゐるらしいですね。

奥　さうですね、集めてゐましたね。今年になつてさう云ふ風にパタ／＼と縣會を通過する縣が、三つも四つも出來るやうになつたと云ふことは、どう云ふ譯でせ

う。矯風會で三十年も同じ仕事をして來てゐるのに、ものにならなかつたのに、今年になつて現れて來たと云ふことは、考へてみて宜い問題ですね。

永島　公娼廢止の問題が、急に廢止の方向に向つたのは前の松村警保局長の時、諮問案を出してからですね。それがやつぱり一ッの機運になつて、それと一緒に活動の方もだん／＼白熱化して來たし、方々の人達の關心も變つて來たのぢやないですか。今度の廢娼運動では公娼廢止期成同盟が、廓淸會と矯風會の聯名で、全國にビラなど撒いてやつたさうでございますね。ですけれど公娼廢止の問題は今度は廢止した後のことが、問題になつて來るのぢやないでせうか。

奥　でもずつと家業としてやつて來た人間がさう云ふ風な風潮だけで、例へば警保局長が諮問案を出したとか、さう云ふ社會の風潮だけで、あゝ云ふそれこそ膏血を搾るよりほかにないやうな人間が、止めるやうになれるものぢやない。埼玉縣の人にも會つたので、その話を聞いてみると、遊廓の方でもやつて行けぬから止めても宜いと云ふやうなさう云ふ所もかなりあるらしいのです。横濱でもあの問題の時、實際世間の非難を反對してゞも、商賣を續けて行くほど帳面に合ふものでもないと云ふことを、隨分言つた人もあるけれど、大體に於ては矢張りさう云ふ營業者も非常に反對したさうです。私の方の福井縣でも、和歌山縣などでも話を聞いてみますと、非常に遊廓が不況で迚も立つて行けぬ。喰はして行くだけでも辛い。どうにもならぬからと云ふ所が隨分多いと聞いて居ります。

織本　公娼を廢止しますと禁賣制度になる。その點で矢張り儲かるんぢやないかと思ひます。もう一つは、新聞を見てみますと、廢止しましても何か適當な方法で續けさしてくれるだらうと云ふやうな豫測があつて、それで反對しないのだらうとか云ふやうな記事が出てゐましたが、やつぱりさう云ふ事が、官憲とか、縣當局なんかとも了解を得て、裏面にはあると思ひます。公娼でなくて、私娼であれば取締りなんかも緩和されますしね。却つて貸座敷業者からすれば利益ぢやないかと思ひます。さうして取締りが緩和されると云ふ點は、群馬縣なんか、私娼と云つたら實にひどいですね。

奥　ひどいですね。

織本　搾取され方が――。だから淫賣の醜業婦側からみれば、寧ろ公娼を廢止されゝば實際搾取される度數が殖えるだけぢやないかと思ひます。公娼廢止の問題に依つて、風俗を純良に導くとか云つて、觀念的にイデオロギーの問題があるでせうけれども、やつぱり斯う公娼廢止と云ひましても、根本的に失業した婦人の救濟の道が講じられなければ表面だけのものでございますね。

八木　織本さん、あなたの方の會では、今度の議會には何か公娼廢止の事を纏めてお出しになる企てがあるのでせうか？

織本　それは私の方では、婦人の參政權の示威運動でございますね、その方をやりたいと思つて居りましたので、その時に、たゞ婦人の參政權の問題だけでなくて、例へば勞働婦人の保護法の獲得運動、それから母性保護法の獲得、さう云つたやうな日常の利害の關係を付加へてやりたいと思つて居りまして、特に議會に對して公娼廢止に關する法案を提出すると云つたやうな事は考へてゐなかつたのですけれども、でもいつも、廓淸會、矯風會あたりから提出されるのでございますね、あれ等に何か合流してやつた方が宜いと云ふなら一緒になつてやらして頂いた方が宜いだらうと云ふ事が、



中央後向速記者次左へ粟川絹子、織本貞代、平塚らいてう、奥むめお、城しづか、一人おいて松本日佐子、永島暢子、山本和子、八木秋子、小池みどり、の諸氏、――レインボーグリルにて、――

話題になつたことはありますけれども、やつぱりそれよりも根本的の問題に主力を注がなければならぬと云ふことで、大きい問題にはならなかつたんです。

奥　矯風會が四五年前ですか――政治的に動いて來て方向轉換をしたのは。震災の後ですね――廢娼々々云うて來て、結局ものにならず、政治運動に、代議士を通じて動いて來たのは。さう云ふ風に急速度になつて來たので、この運動が割合に動き出したのぢやないですか。

山本　それはさうです。以前には宗教的、道德的だつたです。

平塚　新婦人協會あたりで、議會に提出しまして法律案として、治警案を出さうとしてやつぱり幾らかその氣になつた。それもただもう請願のほかに考へてない。その請願も別段に代議士を捉まうでもなし、宗教的なさう云ふ方面の仕事をして、たゞ出して居ると云ふだけで滿足してゐたやうです。それを何回出してゐるとか云ふ、結果の事は殆ど眼中に置かなかつたやうな……

織本　社會民衆婦人同盟の方、今日來ていらつしやいますか？　新聞に安部さんの名前がございますから、こちらにどう云ふ交渉があつたか、聞いてみれば分るでせうが……

粟川　民衆黨の方から赤松常子さんにお願ひしてあつたのですが、御都合で今日はゐらつしやられませんでしたので……

永島　この前、伊藤秀吉さん、あの方をお訪ねした時に、最初廢娼期成同盟ですか、あれで各縣に十幾つの支部があるさうで、そこで署名運動して、縣會にかけてそれが通過する。その機運を一つ作つて、それを今度議會に纒めて安部さんだの、政友會の星島さんと云ふ方々が各派の聯合で、それを

出して一氣に通過させやうと云ふ意氣込みであることを言つていらつしやいました。

平塚　星島さん先から公娼廢止は取りあげていらつしやいましたものね。

永島　だから別に輿論もあるでせうけれども今度のは上から取りあげたまでぢやなかつたでせうか。

織本　さうですね、議會の問題にしなければと云ふ所に、やつぱり一つの進展があるですね。廓淸會としても、何でも昭和二年の議會かに、初めて建議案として提出されたのぢやございませんから？　たしか‥‥。

平塚　建議案としてはそんなものかも知れませんよ。それまでは請願で、外で署名させなすつた事があつたでせう？

永島　現在では先よりだん〳〵公娼は少くなつて來たでせう。屆け出る人としては‥‥

織本　減じて行く傾向はあるさうでございますけれども、‥‥

永島　その代り私娼の方が多くなつて來るだらうと思ひますが‥‥

織本　經濟的の理由と、イデオロギーの兩方から壓倒されて行くでせう。さうしてもう一つは一般の生活が苦しくなつて行くと云ふことにも、原因があらうと思ひますけれども、やつぱり公娼、汚ない言葉で云へば女郎買ひに行けば金がかゝる‥‥（笑ふ）

平塚　地方に行けばどうでせう。まだ遊廓なんて相當にやつてゐる所もあるんではないですか？　奧さんのお話では、地方でも大分困難なやうな‥‥

奧　困難なやうに聞いて居りますね。私娼に追ひやられてしまふんではないでせうか。安上りで簡便で‥‥

永島　公娼廢止の問題は理論としては言ひ盡された問題ではないでせうか。それが議會に出て、通ると假定した時に、實際的な問題として、どう云ふ風な事で公娼の人達を救濟――救濟と云ふと可笑しいけれども、生活の道を講じさせて行くかと云ふことが、是から考ふべき問題ぢやないでせうか。

織本　さうでございます。やつぱりそれは敎化方面と、それから正しく働ける場所でございますね、それを與へなくては何にも出來いなと思ひます。初めの頃は女郎なんかになる人達は虛榮でなくて行くと云ふやうなことも隨分聞いてゐましたけれども、やつぱり生活が根本問題だと思ひますね。あすこに入つて行つた人の統計なんか見ますと、女工さんが三分の一、それから農村出の人が隨分多うございますね。そんな點も殆ど全部と云つて宜い位、生活から來て居ると思ひます。だからやつぱり無產階級の解放と同時でなければ、娼妓の解放は出來ないと思ひますが、何と云つても正しく働く方法を講じなければ、根本的に救ふ事は出來ないと思ひます。現在の儘であれば假令公娼が廢止になりましても、その場合淫賣窟になつて行くでせうし、どつちにしても現在の社會を肯定しての上での廢娼運動ならば、皮相的な、表面的な問題になつてしまひますね。

平塚　公娼廢止運動をしてゐる方は、根本的の事が出來ると思つていらつしやるのぢやないでせうが。

織本　それはさうかも知れませんね。

平塚　それを公認されて居ると云ふことに對しての運動で、それで以て賣笑婦その者をどうすると云ふことは出來ない。たゞその點だけで贊成するだけの事だわね。

永島　今までの公娼廢止の運動に對する考へ方、運動方法と云ふものは、人道的とか何とか云ふ事で取扱つていらつしやる樣に思ひますけれども、之はもつと經濟的に取扱はなければならない問題だと思ひます。

織本　さうでございますね。私共扱ひます時には、今から經濟的に考へなくちやならないと思ひます。今年の婦人運動の收獲は、無産婦人の側から云へば、やつばり根本的に無産婦人運動の意義なんかゞ、はつきりお互に議論されて、確立されたと云ふことぢやないかと思ひます。

平塚　折角法律案として出るやうになつても私達あまり公娼の問題に熱が出ませんね。永い運動の結果、ここまでになつたと云ふことは、結構だと思ひますけれども……

織本　それをやるだけの精力を、もつと他の事に注いだ方が經濟だと云ふやうに考へるのでございますね。（笑聲）

八木　一體あの人達は、今日是が法律案として通過したら、その次にどんな運動を起すのでせう。今度は私娼救濟とか……

平塚　公娼つて云ふ制度に對して、恥しいとか、さう云ふ風な事が非常に主な理由になつてゐたですから是で面目が立つでせう。

八木　だけど私娼にしても産業を與へてやつたり、職業を與へたり、經濟的な事をやるにしても、やつぱり根本は社會制度と云ふことが問題になつてしまふのですから……

織本　さうでございますね。近頃はどの一點をつゝいても社會制度に突當りますから……

永島　救世軍でも、矯風會でも婦人ホームのやうなものを作つて、一小部分の小さい救濟をして、自己滿足をして居るらしいですが、今度出て來るやうな、五萬と云ふやうな多數になると、殊に一旦あの社會に墮ちてしまふと、正業に就くとか何とか云ふことは、なかなか難しいらしいですね。

織本　それに例へばロシアなんかでも、醜業が大體禁止された後にもなか〳〵止まないさうでございますね。いくら説ききかせてもまたやるさうです。だから社會革命が完つても、なか〳〵無くならないでせうけれども、それでも少くなつて行く事だけは……

永島　所謂賣笑する事が苦痛であれば、あるうちは救濟の道があるらしいけれども、それがほんとうの賣笑婦になつてしまふと、一つの享樂的な氣持になるらしいですね。或る人達の話を聞くともうどうしても自分がそれを止す事が出來ないのださうです。それぢや結婚したらどうです——と聞くと結婚して一人の男を守つて行く事が出來ないと云ふんです。自分が結婚しても、その人と一緒になつて、自分は又稼ぎたい——と云ふやうな事を洩らす人があるんです。

織本　さう云つた人も有ると思ひますね。

松本　神經が遲鈍にさうならなくちや、迚もやつて行けないでせう。

永島　感覺の神經が痲痺してしまふから、單なる自分の享樂的の事しか分つて來ないんぢやないでせうか。そこに、たゞ正しい道にお就きなさいとか何とか云つても、そんな人道的な事では結末がつかない……

織本　さうなつた人は仕方がありませんね。その人一代賣淫生活に呪はれたんで……しかし、さう云つたやうな狀態に陷る人は少數だと思ひますね。それから又普通の人で如何に性慾の强い人でも、普通の狀態でやつて行けば、それは浮氣はするかも知れませんけれども、そんなに病的にはならないと思ひます。それ等の病的な人達は、まア救濟するとすれば、監禁するより仕方がないでせう。（笑聲）

永島　でもやつぱり問題を考へる時には、さうした事も考へをしなくちや表面的になつてしまふぢやないですか。

織本　それは一つの觀方だと思ひます。さう云ふ所まで考へてゐたら、社會運動つて困難になつて來ると思ひます。特殊な、病的

の現象まで、全く考慮の外に置くことは出來ないと思ひますが、それにまで一生懸命氣をもんだら、運動が出來なくなると思ひます。それから公娼となりますと、强制的に檢黴制度もございますし、何と云つても生活も違つて、どつか奥さん然とした所があるのぢやないかと思ひますが、……龜戸の淫賣窟と、吉原かなんとはまるきり空氣が違ひますからね。

山本　それにダラシのない職業に入るから、いろ／＼の規則があつたり、檢黴したりする事が非常に面倒で、從つてさう云ふことを大變いやがるけれども、私娼だの藝者だのになると、公娼よりも十分にダラシのない生活が出來るから、さう云ふ生活から拔けられないのでせう。

八木　救世軍の、方々の地方から逃出して來た娼妓達の隱してある所に行つて、その人達に會つてみましたが、非常に惡性の病氣を持つて目も當られない人達ばかりへトへトになつてゐて、斯う云ふ處があると知つたら速く來れば宜かつたと云つて、喜んでゐました。だけどそこでは自由に許してゐなくて、外出にも士官が伴いて行くと云ふ風でしたが、それから十日ばかりして、その中の半分位はいつか逃出したと云ふことを聞きまして、あれ程感謝してゐたのにやつぱり一つの生活から救はれて、一つの生活に移つたとしても、それが自由を束縛すると云ふやうなものである限り、そこに落つけないものかと思つたんです。貧乏しても養老院なんかに行きたくないと云ふ心裡ぢやないかと思ひます。

織本　それから私達永い間、廢娼して來た人を取扱つて感ずるのでございますが、親の人と共謀になつて、住換への爲に利用するのに三四人ぶつかりました。それは初めから共謀で逃げて來まして、全國婦人同盟に飛込んで、借金の事から一切かたをつけてさうして暫くして又吉原とかどつかに身賣りをするんです。

山本　さう云ふのは隨分あるでせうね。

織本　實に驚きました　貧乏すれば人間、そんなにもすさむかと思つて……

八木　さう云ふ風に逃出した人をどう取扱つていらつしやいますか？　その以後の生活に付ては見てあげないのですか？

織本　やつぱり見て上げたいと云ふ希望を有つて居ります。出來る事なら女中さんに入れたいとか、此方の手でしつかりした人に嫁けましたり――。情夫があつて逃げて來る人もありますが、そんな人は旦那さんが堅氣であれば、そこに落つけて、全然身寄りの無い人は女中さんに行つてる人も四五人はありまして、非常に眞面目に働いて居ります。その他は親が引取りに參りますので、それに渡しますが、大體又逃げて歸るか、それからの消息は一切分らないのなどあります。

永島　どう云ふ風にそれがなつていかなければならないかと云ふことは、ちつとも意見が出てゐない。それに付て、どう云ふやうにしたら宜い、斯う云ふ風にしたら宜いと云ふ、いろ／＼な意見を伺ひたい……

松本　公娼を廢止された後の人達の救濟の方法ですか？　具體案ですね。

永島　それでなければ此處の廢止問題が、非常に漠然としたものだと思ひます。

山本　斯う云ふ風な生活をさせてやる――と云ふのでなければ、娼妓自身の方だつて不安ですからね。私達のさう云ふ運動に對して贊成しませんね。

八木　だけどそれは、根本の社會制度の問題になるでせう。解放された人自身が自ら戰つて打立てゝ行くべきものぢやありません

か‥‥(笑聲)

栗川、氷島　(同時に)さうなれば理想的だけれど‥‥

織本　起つて闘ふにしても、無産婦人は無産婦人で、本當に金が無いのです。例へば政府當局に對して、救濟の爲のホームを造れとか、或はさつきお話したやうに、特に授産所、廢娼した人達の爲に授産所を設けるとか云ふやうな、さう云つたやうな要求運動ですね、それは是非起さなければならないと思ひます。

氷島　公娼や何かも無産婦人なんだから、一ッの自分達の問題として、そこに闘つて行かなければならぬと思ひます。

織本　それは本當に、公娼廢止建議案の向ふを張つて、一ッ出さなくちやなりませんね。

氷島　小さい時から貧乏と戰ひながら、搾られた糟を世の中へ出される。ですからさう理智的に生活しろと云つても、迚も出來ないでせうが‥‥。

織本　やつぱり授産所でせうね。職を授ける。職業紹介所と聯絡をとつてやるんでございますね。でもやつぱり特殊の機關が設けられなければ、今までの職業紹介所なんかでは、間に合ひませんね。

氷島　普通の知識的な職業婦人を捌くのだけでも役に立たないのに‥‥

織本　五萬乃至六萬人全部が、まるきり社會に飛び出して來ると云ふことはないと思ひますがね、やつぱり貸座敷業をやつてゐた連中はそのまゝ淫賣窟を續けて行くんぢやないかと思ふんですが、それは二業地の許可問題でどうなるか分らないけれども、洲崎などには矢張り淫賣窟として殘るのぢやないかと思ひます。

氷島　さう云つた傾向があると、猶更問題が大きくなつて來るでせう。私娼だと公娼より幾分樂で、搾取の程度も少いだらうと思ひますけれども、本當から云へば私娼は隨分搾られてゐるらしいです。公娼以上の苦痛を嘗めてゐる人も多いですね。

栗川　私娼で逃れて來る人が澤山あるんですか？

氷島　たまにはあるんです。餘り苦しくつて逃れて來る人が‥‥それに對してどう云ふやうな對策を構ずるかと云ふやうなことが必要ぢやないかと思ひます。

織本　それは對策を構じればありますけれども、例へば中間搾取の徹廢とか、さう云つたやうな方法で‥‥

氷島　輿論が大きくならないうちは、政府はさう云ふ人達の手先に使はれますからね。無産運動の一ッとして、さう云つた問題が起らなければならないと思ひます。どうしてもブルジョア婦人の運動ですと、現代の社會を肯定して、公約的に運動して行くに過ぎませんですから‥‥

八木　愛國婦人會、キリスト教婦人矯風會、さう云ふ政府の補助を得て、半官的にやつてゐる救濟機關はまるで官僚的で、そこに入つてゐる人も、その窮屈に堪へられないで逃出すと云ふやうなものでせう。その對策も考へなければならないけれども、本當に救はれなければならないのは、啻にあゝ云ふ人達ばかりでない。その他に一家を背負つて苦しんでゐる人達は、どれだけあるか分らないと思ふと、何から手を著けて宜いか、解放された娼妓、それだけ取りあげて救濟を叫んでゐる、それがまどろつこしい氣がしてしやうがないんです。

織本　ですから無産婦人としては、醜業婦の救濟運動もやらなくちやならないと云ふことは、分り切つたことですけれども、現代ではやつぱり根本的なものを先に解決しないと、そんな所ばかりいぢくつて精力を費

しても、結局仕方がないですからね。

八木　是からの無產運動は、ますます非合法的に當然なつて行くべきぢやないかと思ひます。

織本　日本で合法的の運動と云へば、治安維持法の緊急勅令の範圍內ですから、何も出來やしないです。一ッの手段としては「合法的に」と云ふ事を入れて置いてもそれは惡くはないと思ひます。

八木　救濟と云ふやうなことも考へますと、現實的と云ふ言葉に捕へられて、その爲に根本なものに行くプロセスを長引かせると云ふ一ッの妨げにならないかと思ひます。

織本　それはさうです。

八木　さう云つた悲慘を嘗める無產婦人は、公娼から解放された女の人達ばかりでない。目の先に幾らもあると思ふと、實際それは現實問題として、個々の問題を取りあげると云ふことは、確に有意義でもあるし必要な事でもあるでせうが、もう少し根本の問題に婦人自體が目醒めて來なければならぬか思ひます。

織本　全體の婦人大衆及び無產階級全體と云ふやうなものは、個々の闘爭を通じて最後の目的に達すると思ひますから、その意味で、今のやうな醜業婦の救濟運動にしても、それを指導する人は最後の目標についてゐなければならぬと思ひます。全體の人に最後の目標を信じさせる事なんか、なか〳〵容易ぢやございませんが‥‥

平塚　斯う云ふ事を捕まへておやりなさる方が一ッの手段ですね。廢止になつた所で、その娼妓達に、どう云ふ方面に生活を與へるかと云ふやうなことでも、こちらから案を出すと云ふのですが、さう云ふことが必要ですわね。たゞ委せると、それ程の問題でないからと云つて、棄てとく問題でもないから‥‥

織本　此處にやつて來て拾ひ物をしました。早速歸つたら、全國婦人同盟に建議案を出しませう。（笑聲）

秦川　それぢや次の市會の解散に移りませう。恰度二月が市會の選擧になるさうですから、その選擧について‥‥

永島　婦人としてどう云ふ風に働きかけるかと云ふことでございませうね。やつぱり日勞黨――今はさうぢやないけれども――候補者が隨分お立ちになるでせう。

織本　その對策は、今度の新しい黨で‥‥まだはつきり決つてはゐないと思ひますが、相談されて居ります。

平塚　大衆黨が合同なすつたんで、婦人の方でも合同なさる事になるんですか？

織本　今年の中に合同懇談會の提唱だけして置くことになるだらうと思ひますけれど‥‥公民權の問題は、婦人の立場としては、是非此の選擧制を通じて主張しなければならないと思ひます。私共全國婦人同盟としては、公民權獲得の運動はどうしても起さなくてはならないと思ひます。

平塚　その公民權獲得のことは確實なんですか？

織本　まア婦選獲得同盟の方なんかは、提出されると見て居りますけれども、私共は提出されないのが確實とみまして、今度の議會に對しては、寧ろ一般の婦人參政權の問題で、一般的な徹底婦選、二十歲以上の總ての男女に選擧權を與へろ――總ての選擧權を與へられたいと云ふ立場で、押して行きたいと思ひますけれども、斯うやつて市會の問題が起つて來ますと、公民權の問題も、一般の婦人參政權運動に加へて特に協强しなければならないと思ひます。ブルジヨア婦人の單なる權利を要求するのとは違ふと思ひますから。

永島　所がどうしてもブルジョア婦人に押されがちですからね。向ふは金もあるし、老練な人達が多いから、それに背後にも援助が多いから、どうしても今の所無産婦人の運動は押されがちだと思ふですね。

素川　さう云ふ方からもつと發表したらどうです。やさしい、而も生活に直接な方面からどん／＼書ける人達が主張すると・・・

織本　それを一ッお願ひしたいです。それに私今、婦選獲得共同委員會と云ふものゝ弱味を、あなた方の言葉で感じて來た譯でありますが、どうしてもやつぱりブルジョア婦人となると、無産婦人利益の直接代表すると云ふことに對して廻避するですね。

奧　私、どこから見てもあの會は炭と卵が寄つてるやうに、氷炭相容れないやうに思ふですが、あなた方としては、あゝ云ふ風な氣持でも仕事した方が宜いと思つていらつしやるんですか？　話合つても、可能性があると思つていらつしるかどうか——

織本　ブルジョア婦人を含めても、共同委員會を續けて行つて宜いのですが。たゞ私達としては、片方にどうしても無産婦人の利害を代表した運動を起して行かなくちや、あれだけで宜い氣になつてゐたら、それこそブルジョア婦人にごま化されてゐると言はれても、仕方がないですから。

奧　私共からみれば、參政權はどうせ窮極のものではない。窮極のものでないものを、參政權でも、公民權でも、結社權でも、何でも、同じですから、あゝ云ふものが、どうせ一ッ有る以上は、さしあたり今日の問題を闘ふ機關を拵へる爲に、もつと廣い無產階級の婦人の一ッの機關を拵へると云ふことに、何故あなた方、働きかけないのしらん？　あれでは參政權問題に揑廻されて、結局元も子も取らずにゐるやうに、私は思つて居ります。

織本　たゞあの、共同委員會の効果は、兎に角全部が寄り集つたと云ふ點で、多少輿論に與へる所も大きくなつて來たんぢやないかと思ひます。今奧さんのお言葉みたいな無產婦人團體だけの、日常闘爭をやる爲の共同戰線か、或は協議會は是非作らなければならないと云ふことは考へて居るんです。去年も無產婦人だけの立場から署名運動なんかやつて、その時共同戰線に持ちかけたんですが、ブルジョア婦人團體からは一つも應じて來ません。社民黨の婦人同盟からは、政黨の對立關係もあるのですが、應じて來ない。關東婦人同盟は應じて來たけれども、こつちから斷つてやつた。（笑聲）やつぱり無產政黨の對立關係に、或る程度まで支配されて、私共關東婦人同盟に應ずるつもりでやつてゐたんですが、ほかから抗議を持込まれまして、前晩におジャンになつたんです。

永島　あの時困つていらつしやいましたわね。

織本　政黨が統一されないと・・・

永島　今までの無產婦人運動ですね。本當に婦人運動としての根本的指導精神を持たないで、割合に普通の無產政黨の言ひなりになつて、餘りおとなし過ぎてゐたんぢやないかと思ひます。婦人の共通な利害に對しても闘へない。それで背後にある政黨の傀儡だけで操られて動いてゐたと云ふことはやつぱり無產婦人運動の一ッの間違ひでなかつたかと思ひますね。

織本　さう云つた批評も受けますけれども、それはやつぱり日本の無產階級運動全體が幼稚であると思ひます。私達、政黨にもつと働きかけて、婦人が今一番要求してゐるのは何かと云ふことを意識さして、さうして政黨の婦人部なり、婦人部委員會な

りさう云つたものを通じて、その指導の下に、やつて行かなければならないと思ひます。さう云つた事もやつぱり今年一年の闘爭を通じて、無産婦人團體の間に意識されて來た收穫ぢやないかと思ひますけれども――。

案川　(織本氏に)今度の市會議員の選擧に就ては、貴女の方では何う云ふやうなことを考へてゐらつしやるんでせう?

織本　それは婦人團體の統一を得ましてね‥‥統一と云つても矢張り社會民衆婦人同盟は一寸六かしいと思ひますから、今の所無産婦人聯盟と全國婦人同盟とで其他の團體にも出來るだけ勸誘して這入つて來て頂きたいと思ひますが、例へば臺所の生活を通じての公民權の問題なんかを大きい輿論にします爲に、無産婦人――特に婦人團體側からの一つの運動の主體を拵へまして‥‥

案川　今の所具體的には何も‥‥

織本　えゝそれはまだ定まつて居りませぬ。全國婦人同盟としても、まだ成案が出來て居りません。

永島　婦人の結社權があれば問題じやないですが、あまり男子が引摺るまゝになつて居て婦人が婦人自身の運動と云ふことを根本的に考へなかつたと云ふことなんですが。

織本　ところが、兎に角左翼系統は婦人運動に對する注意が相當に喚起されて居たと思ふです、關東婦人同盟勞働婦人同盟なんか男の人達が指導して居られたやうに思ふんです、それが右に參りますと、男の人達は殆んど婦人運動に對して、女は女だけでやつて吳れと云ふやうな態度が强いんです。何處でもさうで、政黨が婦人の爲に動いて吳れると云ふやうなことはないんですの、金の問題にしましても皆此方で集めてね‥‥、日勞黨婦人部長は麻生さんださうですから‥‥‥(笑聲)

奥　私麻生さんとは、栃木縣で選擧運動の時一晩寢ず語りでしたが、私を興味の對象に置いて聞かう〱とするだけで、まるで‥‥‥あまりひどいね麻生さんではね‥‥‥(笑聲)

織本　あまり麻生さんを棚卸しやらないで下さい、麻生さんを舁いで大いにやらうとして居るんですから。

奥　白紙主義で宜いかも知れん。

永島　私參政權を欲しいよりも結社權を欲しいですよ。

織本　さうですね、でも結社權が有つても參政權が無くては‥‥

永島　何方かと云へば結社權が先に欲しい。

平塚　結社權が無くても、もう少し婦人同盟が有力になれば結社權を持つと同じだけの働きが出來さうなものに思ふですね、何ですか私共外から見て居ると可成りもうちつと何か出來ないかと思ふ。

織本　黨の執行機關に、執行委員として入ることは出來ないですけれども、でも婦人部員にはなれるんでございますが。

永島　部員としては‥‥、黨員にはなれないんでせう。

織本　それは黨員には參政權がなければ出來ない。

山本　公民權が得られる時分には結社權も出來る、時間的に何方も‥‥(笑聲)

平塚　結社權は表面の問題にならないですね。

織本　議會などに提出される時には、きつと參政權の問題と結社權の問題と一緒ですよ。

平塚　結社權は地味ですからね。

永島　では市會に對する態度など、本に戻つて御話しませうか。

案川　主に今度の市會議員選擧に就て‥‥

やはり應援演說など盛にあるでせうね。

織本 それはやらなくちやならぬと思ひますね、迚も應援演說と云ふものは好い宣傳ですからね。

永島 でも日本大衆黨では何う云ふ人を出すとか云ふ條件で大抵定まつて居るじやありませんか。

織本 それは條件と云へば、兎に角無產階級的立場を嚴守する人、で無產政黨から選出された代議士は、歲費までも皆黨の方に取られますしね。さうして全く黨の綱領に從つて動かなければならない。ですからそれがいけない人は立たないまででございますね。

桑川 何か、水谷さんが‥‥歲費を皆取上げられるとか云つて‥‥‥

織本 さうです。‥‥皆取上げられる。

永島 此前の普通選擧の時、斯う云つては何ですか、日勞黨の候補者ですね、私共から見ればおや〳〵と思ふ方が隨分候補者に立つて居たらしいですけれども‥‥

奥 それは代議士なんてさう云ふものではない？ 仕方がないでせう。

永島 ですけれども、もう少し明確な要求と云ふものはあるべきではないかと思ふんですね。

織本 それは勿論皆望んでそんな人を立てる譯ではないと思ふんでございます。出ようと云ふ人が、保證金も納めて運動するとすれば、誰人でも構いで、さうして無產階級的立場を大衆に宣傳した方が有利なんです。吾々はやはり當選第一主義ではなくて宣傳が主ですからそれは本當におや〳〵と思ふやうな人が隨分ありました。ですけれども何方がいゝかと天秤にかけて見ればやはりそれでも立てた方が利益なんです。

永島 やはり自分が信ずる人でないと應援す乘るのに氣がらないでせう？ ‥‥

織本 けれども私達は、喋ることは、非常に自分の信賴して居る候補者の時でも、信賴しない時でも、同じことを喋るんですから、同じ言葉を――と言つて必ずしも蓄音器のやうに云ふ意味ではありませぬが‥‥

（笑聲）

平塚 何となく熱が違ふでせう。

織本 兎に角喋ることは何處へ行つても同じことを喋るんです。まさかブルジョア代議士の所へ行けば問題は違ひますけれどもね。‥‥。

奥 市會の問題は日常鬪爭の具體的問題だから、選擧と政治との關係など話したら何うでせう。

永島 市會選擧は政治的のものを認めての問題でせう、認めなくちや政治運動は出來ませぬもの。

奥 だけれども、政治運動と云つても、例へば電燈料値下とか云ふやうなものは、政治運動と認めない人でも、日常の事だからしますね。それを市會を通じてするとか何を通すと云ふでなしに、日常當面の鬪爭運動だから政治運動を認めないでも、總て生きとし生けるもの皆這入つて行けると思ふ。

永島 大抵無產運動のさう云つたものを通して政治的要求を高める方に連絡をつけて行くんですけれども、部分的問題を部分的として取扱はないで、無產運動でやつて居るではないかと思ふ。

平塚 ずつと左の方の方は、政治運動で行かうと云ふのは元來無理ですね。大きな矛盾があると思ひます、殊にあゝ云つた合法的と云ふやうなことは、一つの宣傳としてはあゝ云ふ方法を採るが宜いかも知れぬが理論的に考へて根本が矛盾して居ると思ひますね。

八木 政治そのものゝ矛盾ではないですか。

織本　まだ大衆の信頼が議會にある時には、やはり議會に送られて行つて中から、決して信頼するに足るものではないと云ふことを發くより他仕方がない、外からさうじやないと言つても大衆が納得しませぬ。

永島　話が前に戻りますが、今度の市議員選擧に對しましては、共同委員會などは、何う云ふやうな人を……やはり婦人に理解のある人を應援すると云ふ風になるでせうか。

織本　私どもは、婦人に理解のある人と云ふより寧ろ無產階級と云ふものを…

永島　共同委員會ではそれはまだ定められて居ないですか。

織本　人は定められて居ませぬ。

永島　では全國婦人同盟は何う云ふ方針でいらつしやるですか。

織本　全國婦人同盟は、片方に婦人の特殊な問題を取上げる一つの團體を作つて演說會を開いて、婦人の權利のないことを愬へたらよいと思ふ。それからもう一つの運動は生活を通じて愬へなければ何にもならないと思ふ。その片方では自分達の支持する黨から立つた候補者を應援する。それより仕方がないと思ふ。

永島　奥さんはなさいませぬか。

奥　私まだ考へて居ませぬ。私はあまり議會運動を好きではない。

山本　さう云ふ趣味の問題ではないですから

平塚　政治否定――とまでは行かなくても政治爭鬪で行くよりも、日常の經濟的の方で行く方がもつと面白いではないかと思ふ。

奥　私共も非常にさう思ふ。

八木　組織化されない一般婦人は、無產政黨の何の部に入ればいゝか、分裂して居て何處に入つてよいか分らない、一體何を吾々の爲にやつて吳れるのだと云ふやうな考を持つ、大衆が皆合同して、政治的に組織化しなければならないと云ふ、あまり政治的〳〵と云ふ言葉に醉つて、日常の經濟鬪爭を蔑ろにする、さう思ふでせう。

織本　それは色々の問題を含んで居ると思ひますけれども、此の日本大衆黨と云ふものが、雜然たる大衆黨で色色やりにくい事が起つて來るだらうと、誰しも一應は眞先に考へますけれども、併しあの中で無產大衆黨系統等で、兎に角しつかりした左翼的立場を保つて居る人が指導權を握ることが出來れば現在の無產大衆の欲して居るもの、例へば治安維持法の撤廢、を持ち出したとして現代社會民衆黨だつて、治安維持法に贊成だと云ふことは言へない程、切實な一般要求ですがそれに對して日本農民黨が其の運動を起してはいけないと或は言ふかも知れませぬ、さうすれば日本農民黨系統が大衆の信賴を失ふばかりで　脫退して去ると云ふやうなことも長い間にはあるかも知れぬが、其の人達の失墜を早めるだけであると思ふ。

八木　さうなれば又分裂を豫期して居る……

織本　いや豫期して居る譯ではないが、やはり永い間には、色々無產階級の中にも層があるでせう、ですから分裂を避けたいのは山々だけれども、しないと斷言は出來ない、其の分裂を恐がつてばかり居て日常鬪爭が出來ないやうなことでは、何も一緒になる必要はないですから。

八木　私は、無產政黨の分裂や合同を見て感ずるのは、大衆は色々層がありますけれども、皆生活は苦しいから、吾々は何とかして自分達の住みよい社會にしようではないか、何とかして暮しを樂にしたいと云ふ氣持から入る、それが分裂するとか合同するとか云ふのは、結局幹部級の人達の意見で一般大衆はそれが合同しようが分裂しよう

が大した關心を持たない、さう思つて來ると、どうしても無產政黨の問題にしても組合の問題にしても、指導者の人に依るではないかと思ふ、さうするとやはり無產階級の鬪爭も指導とか支配とか云ふことになると、其處に何うしても疑問が來る。

織本　それは指導支配を通じなければ無產階級の運動は有り得ないと思ふ、大衆がプロレタリアートとして皆目覺めて來れば指導者は要らないけれども。

八木　プロレタリア獨裁を認めることになりますと、私の議論と違つて來ますが、プロレツトカルトと云ふのは指導とか支配と云ふことなしに行く事を何うしても信じたい

織本　如何にも信じたいですが、何うしても科學的に行かない。私も無產階級の獨裁を毛蟲の如く嫌つた、皆が一足飛びに無政府主義時代が來るやうに考へたですけれども、それはプチブルジョア的の考へであつたと思ひます。

永島　それだけにして此處で斯う云ふ問題を一つ出してみませう。市會に斯う云ふ人を出したら宜からうと云ふ、人でなくて條件ですね、それを一つ話して之を終つたら何うでせう。

平塚　纏つた人を出したい〳〵と云ふ傾向ではないですかね。

永島　實際私共は益々議會と云ふものは如何にも詰らないものであると云ふ事を、無產代議士が出て行けば行く程感じますね。今度の議會にだつて、無產代議士は些つとも活動しないで後から隨いて行くし、何かブルジョア代議士のやうなことを言つて喜んで居るし、ブルジョア代議士と同じに取扱はれて大威張の代議士が出るし、勿論それが解放運動には一つの效果を齎して居るかも知れませぬけれども。

松本　過程として已むを得ないですね。

織本　でもやはり議會なら議會に代表を送つてみて、假令無產階級の代表面(づら)して居ながらブルジョアと同じことを言つて威張るではないかと云ふことが分つて來るでせう。

永島　それは一つの皮肉な效果を齎すだけで……

平塚　今度の市會の方も、纏つただけでも宜いとしなければならないですね。精々政黨の色のない人を出したいと思ひますね、あまり多くのことを期待しても駄目でせう。

松本　政黨の色のない人つて何う云ふ人でせう。

平塚　民政黨とか何とか、既成政黨に關係のない人ならば、今迄より良いでせう。

織本　既成政黨に關係のない人があれば素敵でせうけれど、地盤がなければやつて行けないですから……

松本　一つの政黨を背後にしてでないとね。

永島　個人的に誰さん〳〵と云ふのでなく、一つの政黨を背後として忠實にやる人が大切ではないかと思ひますね。

平塚　さう云ふ人が一人だけ出ても何にもならない。

永島　政黨を背景として活動しますから、大きな働きをして居ると思ひます。私達は大衆と云ふものを大きく見る、今までのブルジョアですと、大衆より其人を見たが、其の背後に何れ程の大衆が附いて居るかと云ふことが問題だと思ふ。其處に見方の違ひがあると思ひますね。

奧　でもまだ議會と、市會とか町會とか村會とか云ふものとは違ふから、市會議員として考へる時、私やつぱり政黨的色彩のないことを擧げたいと思ふ。さう云ふことも勿論一番望ましいことだと思ふけれども、現實問題として、非常に事務家が良いと思ふ市民の爲に色々の東京市の問題に就て非常

に事務的に目の届く、さうして色々の事を代表して考へて行ける人、さう云ふ事務家が非常に必要だと思ふ。

松本　それは必要ですね。これまではあまり無責任すぎたですね。

織本　專門家でも事務家でも無產階級的立場を持たない人は、何人出ても同じですね。

永島　今の市來さん、あの人は前藏相ですがあゝ云ふ財政家が出ても私達一般民衆には何の關係もないですからね。

八木　市來さんだけの問題じやない。

織本　市長さんなんかも一般投票でやらなくちや駄目ですね。

永島　それは其の位にして…辯護士、職業婦人のことも時間があつたらしたいですね先づ消費組合のことが吾々家庭婦人に取つて實際問題だから、一應あれを奧さんから話して下さい。簡單な…精神とか…

奧　消費組合と云ふのは、消費者として團結しようとする運動で、生產者として勞働者としての團結は勞働組合としてであり、資本家とか企業家の方面にも其の團結があるのに、消費者としての團結がなかつたと云ふことは、當然無ければならぬものが無かつたと云ふものであつて、近頃消費組合の運動が起つて來たと云ふのは、消費者がさう云ふやうな立場に目が覺めたから出來て來たものと私は考へて居ます。今東京で消費組合が…勿論最近の仕事ではなしに二十年三十年の歷史を持つた消費組合もあるですけれども…兎に角消費組合として世の中から認められるやうになつたのは最近のことゝ思ふ、で今迄消費組合とか購買組合と云ふものは、直接市場で物を買ふことの擔當者であつた女が割合に關係して居なかつたのが、最近女が消費組合の仕事に興味を持つやうになつて來たと云ふことは、……一つには不景氣のせいもあるでせうけれども女が社會的に目が覺めて來たし、生活的に色々の點で氣が付いて來たからだらうと私は思つて居ます。其の位のことで…

松本　奧さん、左翼の消費組合とブルジヨア購買組合と何う違ふでせう。

奧　して居ることは同じだと思ひますね。唯見方や立脚が違ふではないですか。

松本　何う云ふやうに違ふんですか。

奧　ブルジヨア消費組合でも、消費組合の運動をなさつて居る方達は、外からはブルジヨアと見られて居る人でも、意見を聽いてみると、資本主義社會の營利的に物を拵へたり營利的に物を賣つたりすると云ふことは何うしても間違つて居るから、營利のない社會、總て物を賣るのも營利の爲めでない、消費の必要の爲に生產する、又必要に應じて之を賣ると云ふやうな仕事をする、必要の爲めだと云ふので、營利的資本主義社會に叛旗を飜して居ると云ふ點では、皆其處迄考へて居なさるやうに思ひますね。それから或所では成績の擧がることが第一の條件になつて居る。一體消費組合と云ふのは中間商人を排除して小賣人や卸問屋の儲けるものを儲けさせないで直接生產者が消費者に渡すと云ふのが眼目ですから、さうすれば當然儲けから金が殘る譯で、殘つた金は普通の商人ならば之を儲けと云ふけれど、消費組合は儲けと言はないで剩餘金と言ひますけれども、其の剩餘金を半分は組合に積立て半分は組合員の購買高に應じて配當する、是が消費組合主義です、さうすると成績を擧げることを第一條件にして居る人は、兎に角早く配當をして早く剩餘金を積立てると云ふことばかり一生懸命にやつて、澤山買うて貰つて澤山配當をして、是だけ賣上げました、是だけ剩餘金が殘りました、是だけ配當を差上げます、と云ふ

ことにばかり一生懸命になつて組合員の教育とか、消費組合主義の宣傳を疎そかにする所がある。そんなものをブルヂヨア消費組合と言つて居る人もあるやうに思ふ。それから消費組合は寧ろ一つの社會××の準備行動と云つた氣持でやつて居る所もあるではないですか、さう云ふやうな消費組合は、成績は第二であつて、多少お客さんに……組合員に迷惑がかゝるやうなことがあつても、多少帳面づらに無理があつても、兎に角階級意識を高めると云ふことを、事毎に宣傳して行きたいと云ふ消費組合もあると思ひます。

永島 奥さんは何う云ふ風に考へて……

奥 私自身は、消費組合は非常に家庭婦人を動員するのに好い題目だと思ふ。さうして家にばかり閉ぢ籠つて居る女に社會を覗かせるといふ意味で、寧ろ私婦人運動の一つの手段としてやつて居る、だから私自身の氣持は寧ろ物を買ふと云ふことの生活を通して女の人が世の中の事を見るとか、又は政治に就て考へるとかさう云ふやうなことを第一にして消費組合主義を宣傳して行きたいと思つてやつて居るの。

永島 全國婦人同盟でも消費組合に對する運動はなさるでせうか。

織本 それはやりたいと思つて居りますけれども、まだ手が廻らないで居ります。

永島 理論的には何う云ふやうに考へていらつしやるですか。

織本 やはり奥さんの見方に異議ありませんね、もし一つ消費組合を通じて、消費者の團結と云ふことがやはり効果となつて現はれ、消費組合を通じて物質方面から階級的に訓練して行くと云ふことが主要點だと思ふんです。此間杉山さんの「改造」にお書きになつたものを拜見して感じたのですれけど、今から購買組合でなくて共同組合を起して行かなければならないと云ふ感じを持ちましたが、やはり平和な時に、平生に於ける無產階級の間に何うして團結を保つて行くかと云ふことになりますと、經濟的に壓迫された階級ですから、經濟的の問題を捉へたが一番好いですね。

八木 野田の爭議など長く續いたのは、一つは消費組合の基礎が固かつた爲めだと云ひますが……

織本 松本 それは確にあると思ひますね。

永島 はつきりした理論を持たぬと消費組合は單なる儲け運動にだけ利用されることになるですが……

奥 些つとも儲け運動にならぬと思ふ。些つとも安くないんだし、普通の市價と同じで寧ろ不便を忍ばなければならない。

八木 でも安くするのが目的ではないですか

平塚 高く買つて居ます。私共でも新宿へ行く方が餘つ程安い。

織本 必ずしも安く賣ることが目的ではないと思ひますね。それを通じて團結する……

平塚 家庭婦人を組織するには一番好いですね、家庭婦人は實に組織し難いものですが消費組合で組織して階級的に目覺めさせるのが一番よい手段ではないですか。

奥 貴方がたの明確な意識と云ふのは何う云ふことを仰つしやるんですか。

山本 以前には……今でこそ消費組合運動に加入して運動するやうになりましたが、昔は單に社會政策として消費者だけが團結して品物を安く買へるやうにすれば階級の對立を防ぐことになる、だからそれは結局官僚主義的傾向に陷りはしないかと云ふやうな認識があつたからです。

織本 それは、消費組合それ自體は決して階級的なものではないと思ひます。唯其の消費組合を指導して行く人達が、常に無產階

級的な物の見方を組合員に敎へて行くことですね。

永島　勞働者は、皆生産者であると同時に消費者ですから、それを結び着けて一つの勞働運動を强力に行ふ、謂はゞ誰かの言つた解放運動の三部――勞働組合運動、政治運動、消費運動、それが三つ結び着かなくちや大きなことは出來ない、此頃行はれて居る消費組合を見て居ると、あまりに常識的な官僚的なもので、決して無産階級のものではない。

奥　でも私、消費組合運動の主義を本當に皆の間に徹底出來たら、一番文句言はずに階級的にやつて行ける仕事だと思ふ。消費組合の仕事と資本主義のやり方とはまるつきり逆のやり方なんだから、あの精神を實際實行してよく解つたら、それだけでも資本主義の覆る一番大きい運動になると思ふ。唯あなた方の仰つしやるのは、消費組合運動を女だけでして居ると云ふ先入主から這入つて居るではないかと思ふ。政治運動の出來る人は政治運動、勞働運動の出來る人は勞働運動をする。併し一般家庭婦人と云ふものは、三裂の中何れが一番手短いと云ふと、消費組合運動だらうと思ふ。さう云ふ意味で家庭婦人は勞働組合にも入れない、政治運動にもまだ能う行かぬ婦人を組織するに一番よいと思ふ。消費組合の仕事がもう少し解れば家庭婦人が物を買ふ生活から考へて行けると思ふ。

平塚　これまでは其處の世話を見てやらなさ過ぎる、それで解らないですね、組織されない家庭婦人は隨分澤山あるですから、消費組合運動をもつと徹底的にする爲に、指導者が惡いのではないかと思ふ。指導者がもちつと力を入れるべきではないですか。

八木　消費組合運動は六ケしい問題だらうと思ふ。良い品物を少しでも安く買ひたいと云ふ要求ですからね。デパートでは溢れる程の商品を安くして、宣傳も上手(うま)いし、……：消費組合と云ふものは地域的に購買者をかためるものぢやないですか、それに色々不經濟や不便を忍んでも組合の方を發達して行かうと云ふ迄に家庭婦人が目覺めるのには、隨分長くかゝるだらうと思ひますね。

奥　松本さんなど議論があるでせう。仰つしやつたら？

松本　消費組合運動は、大衆を導くには何うしても利益と云ふものを揭げなくちや動いて來ないと思ふですね、大衆の動員は出來ないと思ふが、今現在やつて居るのは些つとも安くない。

奥　不安だしね。私共いつもさう云ふ問題にぶつかるんです。

松本　消費組合運動は組織運動の過程としてやつて居る以上、もつと社會的に進出して瓦斯問題とか、水道値上と云ふやうなことを一々取上げて行くべきだと思ふけれども、今迄の消費組合は一つもさう云ふ機會を狙つて行きませんからね。

奥　それは皆さう云ふ氣持は持つて居ることですが、それこそ餘裕がないから……

松本　講習會とか、內職取次とかやつて居るけれども、さう云ふことでは何んにも……

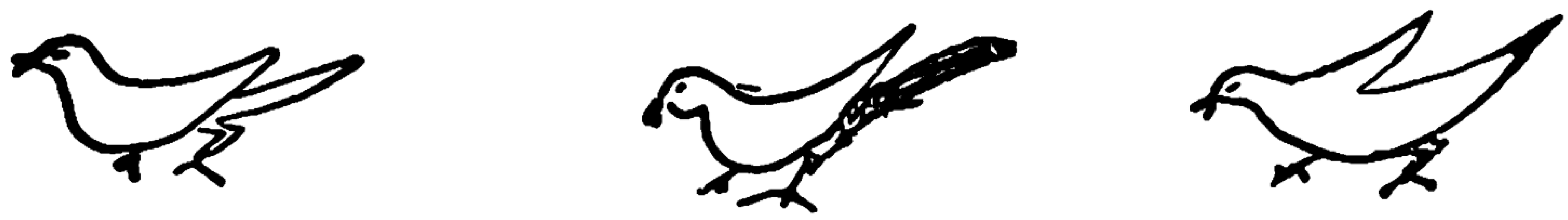
永島　此の間野田の爭議がありましたね、龜甲萬の、あゝ云ふ樣に消費組合で一つの勞働爭議に應援する時、各消費組合が動員して龜甲萬のボイコットするとか何とか云ふに迄働きかける必要あるではないかと思ふ

奥　やつたではないですか。

永島　もつと大きく宣傳なさつて良と思ふ。

奥　そんなに生れたばかりで……。東京の消費組合なんか帳面づらを合せるに汲々して居るんですから……

紫川　議題が殘りましたが、この位で……

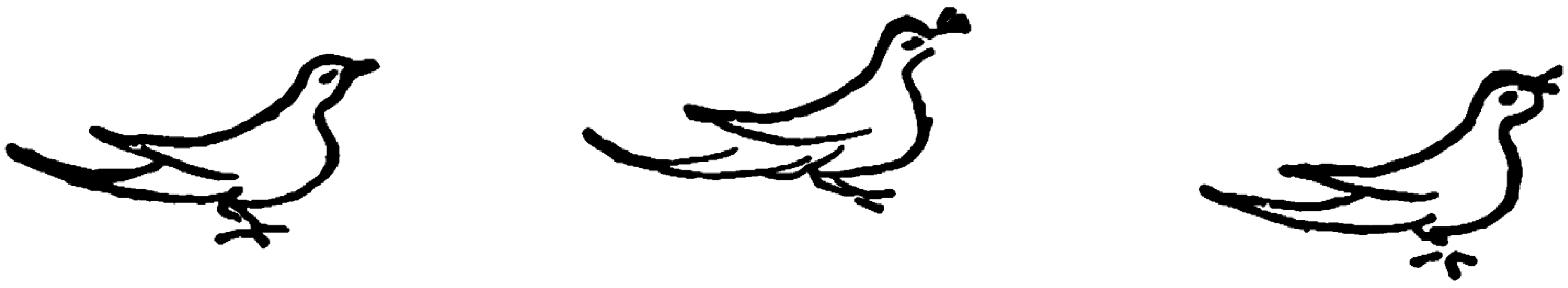


ちひさいもの

――ジエームス・スチインス

松村みね子譯

ちひさいものよ、走つたり、おぢけたり
靜かさと失望のなかに死ぬ小さいものよ
ちひさいものよ、戰つたり、負けたり
墜ちたりする、
海と地と空氣のなかの小さいものよ
畏にとらへられ、



ふるへる、すべての小さいもの
ねずみよ、うさぎよ、
われわれの祈りをきけ

われわれになさるる
すべてのことをわれわれが恕すごとく
こひつじよ、へにすずめよ、野うさぎよ

われわれのすべての罪をゆるせ

ありとあらゆる小さいものよ



星加

百面相

――放浪記――

林芙美子

四月×日

地球よパンパンとまつぷたつに割れてしまへ！と怒鳴つたところで、私は一匹の烏猫、世間様は横目で、お靜かにお靜かにとおつしやる。

又いつもの淋しい朝の寢覺め、薄い壁に掛つた、黑い洋傘を見てゐると、色んな形に見えて來る。

今日も亦此男は、ほがらかな櫻の小道を、我々プロレタリアートよなんて、若い女優と手を組んで、芝居のせりふを云ひあひながら行く事であらう。

私はぢつと脊を向けて寢てゐる男の髮の毛を見てゐた。

あゝこのまゝ蒲團の口が縮つて、出られないやうにしたら……。

――やい白狀しろ！――なんて、こいつにピストルでも突きつけたら、此男は鼠のやうにキリキリ舞ひしてしまふだらう。

お前は高が芝居者ぢやあないか。インテリゲンチヤのたいこもちになつて、我々同志よ！　もみつともない。

私はもうお前にはあいそがつきてしまつた。

お前さんのその黑い鞄には、二千圓の貯金帳と、戀文が出たがつて、兩手を差出してゐたよ。

「俺はもうぢき食へなくなる。誰かの一座にでもはいればいゝけど……俺には俺の節操があるし。」

私は男にとても甘い女です。

その言葉を聞くと、サンサンと涙をこぼして、では街に出ませうか。

そして私は此四五日、働く家をみつけに、魚の腸のやうに疲れては歸つて來てゐたのに……此嘘突き男メ！私はいつもお前が用心して鍵を掛けてゐるその鞄を、昨夜そつと覗いてみたのだよ。

二千圓の金額は、お前さんが我々プロレタリアと言つてゐる程少くもなからう。

私はあんなに美しい涙を流したのが莫迦らしくなつた。

二千圓と、若い女優がありや、私だつたら當分長生きが出來る。
あゝ浮世は辛うござりまする。
かうして寢てゐるところは圓滿な御夫婦、冷い接吻はまつぴらだよ。
お前の體臭は、七年も連れそつた女房や、若い女優の匂ひでいつぱいだ。
お前はそんな女の情慾を抱いて、お務めに私の首に手を卷いてくる。
どいておくれよッ！
淫賣でもした方が、氣づかれがなくて、どんなにいゝか知れやしない。
私は飛びおきると男の枕を蹴つてやつた。嘘突きメ！男は炭團のやうにコナゴナに崩れていつた。

ランマンと花の咲き亂れた四月の空は赤旗だ、地球の外には、颯颯として熱風が吹きこぼれて、オーイオーイ見えないよび聲が四月の空に彈けてゐる。
飛び出してお出でよッ！
誰も知らないところで働きませう。茫々として霞の中に私は太い手を見た。眞黒い腕を見た。

四月×日

一度はきやすめ二度は嘘
三度のよもやにしかされて‥‥

憎らしい私の煩惱よ、私は女でございました。やつぱり切ない涙にくれまする。

鷄の生膽に
花火が散つて夜が來た
東西！　東西！
そろそろ男との大詰が近づいたよ
一刀兩斷に切りつけた男の胸に
メダカがぴんぴん泳いでゐた

臭い臭い夜だよ
誰も居なけりや泥棒にはいりますぞ！
私は貧乏故男も逃げて行きました

あゝ眞暗い頰かぶりの夜だよ。

土を凝視めて歩いてゐると、しみじみ悲しくて、病犬のやうにふるへて來る。なにくそ！こんな事ぢやあいけないね。
美しい街の舗道を今日も私は、――女を買つてくれないか、女を賣らう‥‥と野良犬のやうに彷徨した。

引き止めても引き止まらない、切れたがるきづなならば此男ともあつさり別れやう‥‥。

窓外の名も知らぬ大樹の、たわゝに咲きこぼれた白い花に、小さい白い蝶々が群れて、いゝ匂ひがこぼれて來る。
夕方、お月様に光つた縁側に出て男の芝居のせりふを聞いてゐる

と、少女の日の思ひ出が、ふつと花の匂ひのやうに横切つて、私も大きな聲でーどつかにいゝ男はゐないか！とお月様に怒鳴りたくなつた。

此男の當り藝は、かつて藝術座の須磨子とやつた剃刀と云ふ芝居だつた。

私は少女の頃、九州の芝居小屋で、此男の剃刀を見た事がある。

須磨子のカチウシヤもよかつた、あれからもう大分時がたつ、此男も四十近い年だ。

「役者には、やつぱり役者のお上さんがいゝんですよ。」

一人稽古をしてゐる、灯に寫つた男の影を見てゐると、やつぱり此男も可哀想だと思はずにはゐられない。

紫色のシエードの下に、臺本をくつてゐる男の横顔が、絞つて行くやうに、私の目から遠のいてしまふ。

「旅興行に出ると、俺はあいつと同じ宿をとつた、あいつの鞄も持つてやつたつけ…でもあいつは俺の目を盗んでは、寢卷きのまゝあの男の宿へ忍んで行つてゐた。

俺はあの女を泣かせる事に興味を覺えてゐた。あの女を叩くと、まるで謳謠のやうに彈きかへつて、體いつぱい力を入れて泣くのが、見てゐてとてもいゝ氣持だつた。」

二人で縁側に足を投げ出してゐると、男は灯を消して、七年も連れ添つてゐた別れた女の話をする。

私は圏外に置き忘れられた、一人の登場人物だ、茫然と夜空を見てゐると、此男とも駄目だよ…あまのじやくがどつかで哄笑してゐる。

私は悲しくなると、足の裏がかゆくなる。一人でしやべつてゐる男のそばで、私はそつと、月に鏡をかたぶけて見た。

眉を濃く引いた私の顔が渦のやうにぐるぐる廻つてゆく、世界中が月夜のやうな明るさだつたらいゝだらう——。

「ねえ、やつぱり別れませうよ、何だか一人でゐたくなつたの…もうどうなつてもいゝから一人で暮したい。」

男は我にかへつたやうに、太い息を切ると涙をふきちぎつて、別れと云ふ言葉の持つ一種淋しいセンチメンタルに、サメザメと涙を流して私を抱かうとする。

これも他愛のないお芝居か、さあこれから忙がしくなるぞ、私は男を二階に振り捨てると、動坂の町へ走つて出た。

誰も彼も握手をしませう、ワンタンの屋臺に、首をつゝこんで、まづ支那酒をかたぶけて、私は味氣ない男の接吻を吐き捨てた。

四月×日

「ぢやあ行つて來ます。」

街の四ツ角で、まるで他人よりも冷やかに、私も男も別れた。

男は市民座と云ふ小さい素人劇をつくつてゐて、瀧ノ川の小さい稽古場に毎日通つてゐた。

私も今日から通ひでお務めだ。

男に食はしてもらふ事は、泥を嚙んでゐるよりも辛い、程のいゝ仕事よりもと、私のさがした職業は牛屋の女中さん。

「ロースあほり一丁願ひますッ！」

景氣がいゝぢやないか、梯子段をトントン上つて行くと、しみじみ美しい歌がうたひたくなる。
廣間に群れたどの顔も、面白いフィルムだ。
肉皿を持つて、梯子段を上がつたり降りたり、私の前帶の中も、それに並行して少しづゝふくらんで來る。
どこを貧乏風が吹くかと、部屋の中は甘味しさうな肉の煮える匂ひでいつぱいだ。
だが上つたり降りたりで、いつぺんに私はへこたれてしまつた。
「二三日すると、すぐ馴れてしまふわ。」
女中頭の、髷に結つたお杉さんが、腰をトントン叩いてゐる私を見て、慰さめてくれたりした。

十二時になつても、此店は素晴らしい繁昌で、私は歸るのに氣が氣ではなかつた。
私とお滿さんをのぞいては、皆住込みなので、平氣で殘つた客にたかつて、色々なものをねだつてゐる。
「たあさん、私水菓子ね。……」
「あら私かもなんよ……。」
まるで野性の集りだ、笑つては食ひ笑つては食ひ無限に時間がつぶれて行きさうで私は焦らずにはゐられなかつた。

私がやつと店を出た時は、もう一時近くて、店の時計がおくれてゐたのか、市電はとつくになかつた。
神田から田端までの路のりを思ふと、私はペシヤペシヤに座つてしまひたい程悲しかつた。
街の燈は狐火のやうに、一つ一つ消えて、仕方なく歩き出した私の目にも段々心細くうつゝて來た。
上野公園下まで來ると、どうにも動けない程 山下が恐ろしくて、私は棒立ちになつてしまつた。
雨氣を含んだ風が吹いて、日本髪の兩鬢を鳥のやうに羽ばたかして、私はしよんぼり、ハタハタと明滅する仁丹の廣告燈にみいつてゐた。
どんな人でもいゝから、山下を通る人があつたら、道連れになつてもらはう…私はぼんやり廣小路を見た。
こんなにも辛い思ひをして、私はあいつに眞實をつくさなければならないのだらうか？不意にハッピを着て自轉車に乘つた人が、さつと煙のやうに過ぎた。
何もかも投げ出したいやうな氣持で、
「貴方は八重垣町の方へいらつしやるんぢやあないんですかッ！」
と私は叫んだ。
「えゝさうです。」
「すみませんが、田端まで歸るんですけど、貴方のお出でになるところまで道連れになつて戴けませんでせうか？」
今は一生懸命、私は尾を振る犬のやうに走つて行くと、その職人體の男にすがつた。
「使ひがおそくなつたんですが、もしよかつたら自轉車にお乘んなさい。」
もう何でもいゝ私はポックリの下駄を片手に、裾をはし折つてその人の自轉車の後に乘せてもらつた。
しつかりとハッピの肩に手を掛けて、この奇妙な深夜の自轉車乘

りの女は、サメザメと涙をこぼした。
無事に歸れますやうに…何かに祈らずにはゐられなかつた。
夜目にも白く、染物とかいてある、ヘッピの字を見て、ホッと安心すると、私はもう元氣になつて、自然に笑ひ出したくなつた。
根津でその職人さんに別れると、又私は凛々とどゞいつを唄ひながら路を急いだ。
品物のやうに冷い男のそばへ…。

四月×日

國から、汐の香の高い蒲團を送つて來た。
フカフカとしたお陽様に照らされた緣側の上に、蒲團を干してゐると、父様よ母様よと口に出して唱ひたくなる。
今晩は市民座の公演會、男は早くから、化粧箱と着物を持つて出かけてしまつた。
私は水をもらはない植木鉢のやうに干からびた情熱で、キラリキラリ二階の窓から、男のいそいそとした後姿を見てやつた。
夕方四谷の三輪會館に行くと、もういつぱいの人で、舞臺は例の剃刀だつた。
男の弟は目ざとく私を見つけると、パチパチと目をまばたきさせて、——姉さんはなぜ樂屋に行かないの…人のいゝ大工をしてゐる此弟の方は、兄とは全く別な世界に生きてゐる人だつた。
舞臺は亂暴な夫婦喧嘩だ。
おゝあの女だ、いかにも得意らしくしやべつてゐるあいつの相手女優を見てゐると、私は始めて女らしい嫉妬を感じずにはゐられなかつた。
男はいつも着て寢る寢卷きを着てゐた。今朝二寸程背がほころびてゐたのを私はわざとなほしてやらなかつた。
一人よがりの男なんてまつぴらだよ。
私はくしやみを何度も何度もつゞけると、ぷいと歸りたくなつて、詩人の友達二三人と、温い外に出た。
こんなにいゝ夜は、裸になつて、ランニングでもしたらさぞ愉快だらう。

四月×日

「僕が電報打つたら、ぢき歸つておいで。」ふん！ 男はまだ嘘を云つてる、私はくやしいけど、十五圓の金をもらふと、なつかしい停車場へ急いだ。
潮の香のしみた故里へ歸るんだ、あゝ何もかも何もかも行つてくれ、私に用はない。
男と私は精養軒の白い食卓につくと、日本料理でさゝやかな別宴を張つた。
「私は當分あつちで遊ぶつもりよ。」
「僕はかうして別れたつて、きつと君が戀ひしくなるのはわかつてゐるんだ、只どうにも仕様のない氣持なんだよ今は、ほんとうにどうせき止めていゝかわからない程、呆然とした氣持なんだよ。」
あゝ夜だ夜だ夜だよ。
何もいらない夜だよ、汽車に乗つたら煙草を吸ひませう。
驛の賣店で、靑いバットを五ッ六ッ買ひ込むと、私は汽車の窓か

ら、ほんとに冷い握手をした。
「さよなら、體を大事にしてね。」
「有難う……御機嫌よう……。」

固く目をとじて、パッと瞼を開くと、せき止められてゐた涙が、あふれ出る。

明石行きの三等車の隅ッ子に、荷物も何もない私は、足をのびのびと投げ出して涙の出るにまかせて、なつかしいバットの銀紙を開いた。

途中で面白さうな土地があつたら降りてやらうかな……私は頭の上にぶらさがつた地圖を、ぢつと見上げて、驛の名を讀んだ。

新らしい土地へ降りてみたいな、靜岡にしやうか、名古屋にしやうか、だが、何だかそれも不安になつて來る。

暗い窓に凭れて、ぢつと暗い人家の灯を見てゐると、ふつと私の顔が鏡を見てゐるやうにはつきり寫つてゐる。

男とも別れた
私の胸で子供達が赤い旗を振る
そんなによろこんでくれるか
もう私はどこへも行かず
皆と旗を振つて暮らさう。
皆さうして飛び出してくれ
そして石を積んでくれ
そして私を胴上げして
石の城の上に乗せておくれ

さあ男とも別れた泣かないぞ！
しつかり　しつかり旗を振つてくれ
貧乏な女王樣のお歸りだ。

外は眞暗闇、切れては走る窓の風景に、私は目も鼻も口もペッシヤリとガラス窓にくつゝけて、鹽辛い干物のやうに張りついてしまつた。

私はいつたい何處へ行くのかしら……驛々の物賣りの聲を聞くたびに、おびえた心で私は目を開く。

あゝ生きる事がこんなにもむづかしいのなら、いつそ乞食にでもなつて、全國を流浪して歩いたら面白いだらう、子供らしい空想にひたつて、泣いたり笑つたり、又おどけたりふと窓を見ると、これは又奇妙な私の百面相だ。

あゝこんな面白い生き方があつたんだ、私はポンと固いクッションの上に飛び上ると、あく事もなく、なつかしくいじらしい自分の百面相に凝視つてしまつた。

—一九二三・四—



岡田かよ子

紅子の love affair

大井さち子

「三宅ねえ、君のことをとても好きになれない型だつていつてゐたつてさ……。」

日當りの好い窓の桃心木の卓の前に、朝食後の莨を美味さうにすつぱり、すつぱり喫むでゐた木村は隣室の紅子に聲をかけた。

「えつ!?」

外國の何とかいつた映畫女優そつくりの眉を顰めた表情を紅子は鏡にうつしながら、滿足氣な落着きかたで、それでも聲だけは表情そのまゝ大袈裟に問ひ返へした。

「そんなに、びつくりしなくつたつて好いぢやあないか。大學生の一人位に嫌はれたからつて、別に氣にするほどのこともあるまいし――」

つねにない木村のゆつたりした口吻に意地の惡いものさへ感じられて紅子はかあつとした。

「なんだい、ゆうべの態は、畜生！あんなに樂しますんぢやあなかつた。」と忌々しく思はれた。しかし、口では案外ゆつたりと、

「そりやあ、さうよ。だけれども、いまどきタイプで問題にされたりするのかと思ふと癪にさはるわ。」

木村は尙もゆつたりと、

「むきになるんぢやあないよ。誰が何ういつたつて、結局、僕さへ變りがなけりやあ、それ

で好いんぢやあないか。」
ふてぶてしく太つた腹をナイトガウンの紐に結むで木村は何處となく安心しきつた調子にいつた。
「いつたい、誰にそんなことをいつたの？」あなたはまた、だれからきいたのよう！。」
こんな時には喧ましくないまでも殊のほか氣にする木村だのに。いつになく取り亂しもせず、おつとりしてゐるのに氣附くと、何うかしてその和やかな心持ちをうち挫いてやりたかつた。今月は日數にしてあと幾日もない。それでも二百圓位は當分の小遣ひとして欲しかつた。それを思ふと、木村にかうして安心させておくのは不利のやうな氣もする。
殊に、自分ひとりだけしか、この女を自由にしやうとしてゐないんだなんつて、思はれるのは紅子のやうな人間にとつては寧ろ不面目でもあつた。
競爭者は多ければ多いだけ木村は熱してきて、自分の影にかくれてゐる美しい器具を優しく大事にしやうとする。こんな關係から男と一緒になつてるだけでも、世間は自分を輕蔑視してゐる以上、金だけでもふんだんに貰つてみたかつた。
「誰からつて、やつぱり三宅の口からさ……。」
紅子はパッフで顏をはたきつけながら
「えつ、三宅の口から？…直接、あなたにそれをいつたつていふの？。」
「あゝ」
「えゝんだ!!　嘘をついてらあ！三宅みたいな百姓大學生にそんな氣の利いたことをいへるものですか。」

木村は意外の結果になつてしまつた紅子の權幕に避易させられながら、
「いつたよ。」
「いふもんか、ちやんと知つてらあ……そんな嘘をいつてると……。」
さういつたかと思ふと紅子は窓近くの木村の傍まで、とび出して來て、いきなりその首つたまに兩手を噛りつかせた。
「さあ、ほんとうの事をいつて、ね、キッスしてあげるわよ。で、なきやあ、あたしは御免だわ。うそつきのあなたのお世話になんかなつてるの、」
「いふよ、いふよ、いふから離しておくれ。」
さういひながらも、木村は、にこ〳〵しい態度をくづさなかつた。
「――あのね、三宅が明菓のおみなさんにいつたんだつてさ。それをきなふ、こゝに來がけによつたら、おみなの奴、お安くないところにゐらつしやるんでせう、あたし、知つてゝよ、けど、あの方もお氣の毒ね、三宅さんをお好きなんでせうけれども、三宅さんはとても好きになれないタイプだつていつてらつしやつたわ。と、それだけさ、紅ちやん！」と、何氣なささうにいつて見せた。
「おみなつて、あの背の高い眼のくるりとしたひと？――」紅子はきいてゐるうちに對照が氣にくはなかつた。たかゞ、カフエーの女になんか！いんや、そんなことより自分の事を兎や角、話されるのが厭だつた。
農科大學生の三宅を紅子が知つたのは極く最近で三宅は聰明さうな、色の黒い大柄な男であつた。
こんな話しを聞かされてはゐるもの〻、これまで、なにも三宅に

特別好意をもつたこともなかつた。紅子にしていへば、おもひのほかのことをきかされるわけだが、相手が眞實か嘘構か知れないまでもそんなことをいつてゐるのだとしたら、

「ふゝん、」

つて、だまつてるわけにはゆかない。なんだつて、あのお百姓がそんなに自惚れやあがつたのだらう。肥料くさいくせに私を「振らうてんのか。」と思ふと、「ふられてたまるもんかい。」といふ反撥的な新らしい興味も出て來る。

「あゝ、さうさ。」木村は白つぽく脂肪の浮いた顔をつるりと撫でて、紅子のふんわりして軟かい腿の流れを見た……。

「ねえ、あなた、夕方にならない前に歸へつてくんない?――。」

紅子はけろりとしていつた。

「かへれ、つてのかい?」

木村は別段おどろきもしなかつた。紅子が夜更けてから急にかへれなんていひ出して、自動車を呼ばしにやることも珍らしくなかつたから。

「うゝむ、そんなにいはないけれども、ぐつすり寢てみたいんだから……。」

「ぢやあ、寢れば好いさ。いまからだつて……僕にかまつてくれなくつても好いよ。」

「いま、おきたばかりで、ピクニックのあとぢやあるまいし、まさか寢られやあしないわ。」

全體なら、木村がこゝに來た日は夕方から外出して、モナミあたりで晩餐をとつて、ぶら〳〵買物でもして別れるのだが、紅子がそれに應じない場合はそれでもよかつた。といふのは木村にしても妻こそなけれ、親讓りの二三の會社で相當の位置にあることを考へれば、下の若い奴等が自分達の散歩姿を見つけたりして、その翌日の机の前で薄笑ひに紛らしながらも、人の悪いコソ〳〵話しを興味深げに囁きあつてゐるといふのを、ないない知つてゐるからである。

が、紅子が何故そんなことをいま、いひ出したかそれは木村にも解つてゐた。一體、この女は、百圓だけ渡せば百圓だけの樂しみを手際よく木村に提供した。その金が二百圓なら二百圓だけ、百圓の倍は確かに、その効能があるやうに思はれた。しかし、その金高以上には油の切れた滑車のやうに動きもしない。働きもしなかつた。

木村のこれまで、あたつて來た女達は當然の報酬として金を得る時すら、外面は遠慮深げに、さも金を蔑しむかのやうな態度で受けとるか、さもなければ、金の姿を見るまで、あらゆる媚態をつくして見せるかの二種類であつた。紅子は、それを極めて事務的にあつさりと帖簿でも整理するやうに行つた。

しかも、木村にはその直線的な、いかにも冷やかな理智を潜ましたやうなやりかたが氣に入つた。些か心細い感じもしないではなかつたが、その條件が備はつた上で一緒にゐる間は、これまで、觸れてきた他のどの女達にもたちまさつて、樂しみの祕術をつくしてくれることは確かであつた。

木村はその數理的な愛情の計算を見るにつけて、この女に世のあらゆる財寶をくれてやる時は、この享樂を極端に高潮させて、あるひは、氣を狂はしてまで自分を喜ばせてくるのではあるまいかとす

ら思はれた。
　そんな時、傍で氣取つた指先きをして煙草を燻らしてゐる紅子に氣づくと、改めて、目を見張るやうな、たまらなく可愛らしい利潑さうな一個の女であることを知るのである。
　少し、小意氣な女でも交渉が深間にはいると、過去の女達に絡る歴史を、とやかくと聞きたがつたりして、うんざりさすものだのに紅子は木村にむかつて、自分の過去の事も語らなければ、木村のそれについても訊ねやうともしなかつた。それが時には、焦れつたくもなつて、氣拙い時に咳ばらひの一つもするあの氣持ちで氣を引いてみるのだが、手答へはなかつた。
　しかし、木村が嫉けと望むなら、上手に嫉いて見せもしさうに思はれた。
「いつか、一度、そんなにもさせて見よう。」
木村もひそかに、さう思ふのだが、逢ふとつい片一方の樂しみに氣を奪はれすぎて、いままで、うか〳〵としてしまつてゐた。
いまも、そろ〳〵とすべりの利かなくなつた齒車のやうに、不機嫌に口重な紅子を見ると、木村は、先日讀むだ外字新聞の諷刺的笑話につりこまれて、「なるほど」と、頷づいた自分を思ひ出した。
『諸君!!
　みなさんの若い美しい御婦人が不機嫌になつた時は、出來るだけ親切に抱いて、キッスをしてお上げなさい。それでも、なほ、きげんのなほらなかつた場合は、諸君!!　みなさんは三十弗以上の出資を吝まれてはならない。』
　木村にはこれが實際であつた。
彼は大らかな微笑をもつて、紅子にあてはめてみて、夕方には會計をしてやらうと心にきめた。
　ゼエラニーム、シクラメン、プリムラポフリアン、ETC……
……それから、早春のやさしい花々の繻子のやうな息切れと粉のやうな水蒸氣の溫室を、紅子と三宅とがうちつれて出た時は、もう、石竹色の空も暮れかゝつてゐた。
「さうだなあ……案内しろつていつたつて、紅子さん、あなたは獨り歩きの出來ない女でもないんだから、ゆきたいところには何處にでもゆくんだらうし、――弱つたな。ぢやあ、こつちの方にぶら〳〵歩いて行つてみませう。でも、けふは好いの、ヘルは……。」
若い胸を高くはつた三宅の聲は元氣がよかつた。
「ヘル！つてきむらさんのこと!?うゝむ、きのふの夕方からいゝの。勿論、けふは、ヘルみやけの都合をとつかまへるだけで好いのあたしのお仕事は今朝から、たつたそれだけ……。」
　三宅と一緒に、こんなにして歩くのは今日が、はじめてだけども、ふたりとも、ひとりでに一つの形に、姿勢をとりあつて、その歩調もひどく生鮮なものを樂しめた。
「そりやあ、恐縮だな……しかし、何だつて、僕のところになぞ來る氣になつたの?しかも學校なんでせう。だから、紅子さんの訪問をうけた時は實際、おどろいちやつた。」
「さうお、「おどろいちやつた。」あなたにさういつて、いたゞくために……なんてこんなこと云はないわ。あたし、逢ひたくなつたのほんとうに、とても逢ひたくなつちまつたもんだから……。」
「え、しかし、逢つたつて、こやし臭いこの男なんか、とても、

つまんない奴だなぐらゐにしか感じはしませんよ。それはたしかだな……。」

「三宅さん！遠慮ね、それとも、はにかみ？だけれども、會つてつまらないなんつて、思ふのは思ふ方が悪いわ。あふ以上は面白くしなきやあ……だから、おもしろくしませうよ、ね、三宅さん!!」

「賛成！」

「あたしね、こんな投げ遣りで、怠けものだけれども、花は大好きなのよ。動物をすきな人は善人で花を愛する人は詩人だつて、あたしは兩方とも好きだから、詩人で善人で……だから、三宅さんみたいに、その道の人達にあふのは好きだわ。どんな冬枯れのさびしい日でも、やさしい匂ひの好い花のお話しをきけば、想ひだけでも花園に近くなつたやうな氣がするんだもの。」

いつの間にか、ふたりは南面の桑と茶畑との間の傾斜地を歩いてゐた。

「そりやあ、さうだ。だけれども、美しい花作りでもつくることを考へると、紅子さんのいふやうな花園ばかりは想像しませんよ。種蒔きがすむで、幾日も幾日もしてから、やつと小さな芽が出る。その芽だけでも、枯すまいとするには、普通大抵の苦心ぢやあない。今度は肥料の心配が倍もいるし、蟲の驅除法だつて目に見えてくる。一人の子供を育てるやうな、——否、人間の子供よりもきつともつと難かしい。光りの具合も考へてやらなければならないし、室の温かさも計つてやらなければならない。それでゐて、一日でも怠ければ、いままでの苦心は殆んど跡かたもなくなるんだもの。」

「大變ね、だつても、三宅さんは、それが好きでなさつてるんでせう？、だから好いわ。」

「そりやあ好きさ。どんな花だつて好きです。花を見るとか、花を愛するとか、いふのは、人間を好きになること以上の慰めであり、悦びであるやうな氣がする。しかも、何物にも代へがたく素直なのがこの花なんだからね……。」

「いゝわ。三宅さん、そんなことをいつて……なるほど、さうかもしれないけれど、人間の感情にふれるのと比較は出來ないと思ふわ。それが、誇張なら誇張で好いのよ。そんな美しい誇張はないのだから……でも、あたしも、女よ。男の人からそんなことをいはれて默つてゐたくはないわ。殊に三宅さんみたいな立派なヤング、マンから、」

「でもね、これは僕の持論なんだ。で、なければ、僕は文學の方に行つたかもしれないんだから……」

「さう、それぢやあ、けふは、あたしも默つてゝあげるわ。」

「とに角、紅子さん！自然には人工的のあらゆるものが負けるんだ。」

「えゝ、しかし、自然を援けるのは人工だわ。たしかに人工だわ。」

紅子はさういつて笑つた。

二三歩、さきに歩いてゐた三宅は、くるりと紅子の方を振むくと、

「紅子さん！ちよつと向ふを御覽なさい。」

さういつて、温室のつゞきであるらしい丘を指さした。

「あれは、境彩花壇つていふんですよ。フランス式の花壇で出來るだけ、濃艶な紋様を描かうとして、色彩にしろ、圖案にしろ、技巧的な粋を集めてやるから、モザイツキユテユル、あるひは、コルベイユなんつていはれて、繪畫、建築に相對して、フロラルエテイク、そんな藝術の領域にまで進むでるものなんです。」

「いゝのね、三宅さん、つまり日本風にいへば友染模様を描かうとしたその意圖なのね。まるで、ゴブラン織みたいだわ。あんな上で青空を見ながら、寢ころんで見たいわ。」

「あの上へ寢ころべはしないけれど、これからの天氣の好い暖かい日なぞは、あの傍の芝生に寢ころがつて空を見てると、花壇から空まで、なんの支障もない一直線の線がひける。それが、とても愉快です。」

それから、ふたりは、どつしりした姿の、色の美しいケールの前に出て敎室の側に戻つた。

「三宅さん！遊びにいらつしやいな。木村だつて、あなたのお話しを嬉しさうにするときもあるのよ。」

「木村氏が!?――へえ、さうかなあ、あの人は立派な實業家なんだから、僕みたいな貧書生のことなんか問題にしてくれないと思つてたんだけれども、さうかなあ……。」

「遊びに來ると好いわ。あなたみたいな學者たちの話しは、木村には珍らしいにちがひないから。」

「學者ぢやありませんよ。紅子さん！あなたまでが、そんなことをいふんぢやあ、てれくさくつて、なほ行けなくなつちまふ。」

「まあ、また遠慮ね、三宅さん！こんなことをいつては手前味噌になるかもしれないけど、木村は普通の商人とは違つてるのよ。あたしね。自分と一緒にゐる者を豚みたいに取り扱かつたり、馬か、牛みたいに愚かしいものにしてみたくはないのよ。そんな尊敬も、もてない人間と一緒になつてることは、とりもなほさず、自分の恥だと思ふむだもの。」

「紅子さん！しかし、あなたは木村さんを随分酷にするつて評判ぢやあないの。」

「ふゝむ、噂なんかは皮相的なものだわ。ふざけたりしてる時は、それで好いんぢやあないの。相手さへ結局喜こんで、他愛もなく嬉しがつちまふなら、なにしたつて構はないと思ふわ。例へ、踏みつけたつて、蹴つとばしたつて！」

「凄いんだな……しかし、木村さんは幸福ですね、確かに！」

紅子は三宅の言葉を操つたさうに聞いてゐたが、

「おせつかいな他人の與り知らざる所だわね、三宅さん！」

さういつて、覗きこむやうに三宅の顔を見上げた。

ふたりがむせかへるやうなダッフオデイルの露路を通り拔けてから別れたのは、かれこれ八時近かつたか……。

「これ！　まあ、なんて好い匂ひなのよう！　と、三宅さん！」

紅子は、三宅から受け取つたばかりの室咲きのクリムソン、キングに嗅ぎ入りながら植木臺にのせる。

「あなたも、花がお好きだつていつたから……實はあの翌日、咲いたのですぐに摘下げて貰はうと思つたんだが、あの日、あなたの姿をちらつと見てから、いろ〳〵にうるさいことをいふ奴がゐたもので、つい氣おくれがしちまつて……。」

「えゝ、ありがたう、ほんたうに嬉しいわ。第一、いらつしやりさうにもなかつた三宅さんが來るなんてことすら、でも、あたしは思つてゐたわ。きつと、きつといらつしやつては頂けるんだらうつて！」

紅子は、しなやかな兩手を渚に打寄せる波のやうに、三宅の金ボ

タンの胸にうちかけた。
「あのう、けふは木村さんは、」
「いやな人ね、あたしのところへいらつしやつたんでせう。ぢやあ、そんなことをいふものぢやないわ。それから三宅さん！あたしちよつと、次ぎの間でお化粧してくるから、こゝで待つてゐてくださらない？」
「お化粧!?え、御遠慮なく、でも、もう、それで好いのぢやあないですか！」
「あらつ、ちつとも、よくないわ。なんなら、あなたもいらつしやらない？　え、三宅さん！　さうねえ、いらつしやいよ。ね、いらつしやい、ね、よう、」
紅子は三宅のがつちりした右腕を両手で次ぎの間まで、ひつぱつて行つた。
椅子に軀をおちつけた卵なりの輪廓の美しい紅子の顔と赤銅色をした、二銭銅貨みたいな三宅の顔とが三面鏡に三面以上の形を見せて映つた時、三宅は我ともなく頬つぺたを赤らめて、あたりを見渡した。
「明るいんだな……」
「そりやあ、さうだわ。化粧室だもの、あらは、あらで見なきや……　ああ、三宅さん！ちよつと、ちよつと、」
「なに！」
「あのね、あなたに嗅いでいたゞきたいものがあるのよ。何うおこの匂ひ！」
紅子は立ちあがつて、三宅の鼻より口唇近く香料のする指先きをつきつけた。三宅は可愛い靨のある指の群を、たゞ、ちらつと見たゞけで、
「結構です。」
「うゝむ、きらひか、何うかつてのよ。」
「好きです。僕にはなにもわからない。」
「だめよ。三宅さん！あなたは臆病ね、病める悪魔みたいに慄えてるの？　好きなら、もし、ほんとうに好きなら、口ではいへないなにかを、してみやうとは思はないの？」
「………」
「いゝわ。ぢやあ……」紅子はさういつて、傍の手洗ひのトリップを捻ねると手を綺麗に洗つた。
「三宅さん！あたしが悪かつたわ。これは人工香料だつたんだものねえ、あなたは、自然がお好きだつたのね、ぢやあ、三宅さん、香料もなにもついてない生地のまゝの紅子の手先きが、どんな紅子くさい香りをさすか何うか、え、三宅さん！　かいでみて頂戴。」
紅子の指先きが微風に揺れる花瓣のやうに、かすかに慄えてゐる三宅の口許を軽くついた。そして、その紅い唇は、甘いやはらかな戀慕に充ちて、三宅に後の日のいゝ接吻を約束するやうに、その白い歯と共に大きく綻びた…………

三宅は温室に出るのが辛かつた。
あんなに、愛し慈しんだものが、結局、一人の女性の指先きの戯れにも及ばなかつた。
あの産毛のやうに、柔かに凭りかゝつて來た紅子はまた何うした女であらう!?　あの時、あゝして厚かましいほどに際どいところま

で、誘きよせておきながら、さて、その後はといふと、關を設けて一歩も這入らせない。三宅は濃い油繪具から受けるやうな、紅子の軀の部分、部分に渺沙として分け入る自分を幻にすら見るといふのに……。三宅が尋ねてゆくと、「また、うるさい奴が來やがつた。」さういつたやうに、眉根を寄せながら、それでゐて明るい態度の晴々しさそれはかへつて、紅子を新らしくも見せたし、うすうすしたものを三宅の心に運びもした。

ウヰルヘルム、マイスターの事件みたいに自分もあの時以來、肉迫した感情問題にふれて行つたことを知つた。

それは、晝を過ぎた時間だといふのに、紅子は、まだ蓐の上にゐて、窓は天鵞絨でつくつた葉のやうな厚つぼいカーテンを幅廣に擴げて、夕闇のやうな身振りをもつこの部屋特有のなまめかしい匂ひが三宅の鼻に惱ましく流れた。

「――なにをいふのかと思へば、馬鹿にしてらあ……ちよつ、考へてもみてよ。」

三宅がくど／＼と哀願的にいふことを、半分眠つたやうな樣子に聞いてゐた紅子は、卓子からパスチールをつまむと、さういつてから大體、かういふやうなことを附け加えた。

――私は、はじめつからお前を翫弄してゐたにすぎない。それが例へば五十だけ、からかつてゐたものとすれば、からかはれる方の何處かにからかはれても好い五十だけのものがあつたに過ぎない。全部、からかひつくしてしまへば、もう、相手に興味の失はれるのは當然ではないか。お前に優しかつたやうにいふが、それは實際、お前の自惚れにすぎない。さうしてお前が自惚れるのは勝手だけれども、かういふやうに私にその責めを持つて來て吳れたりするのは實に不埒だ。」

三宅の態度を、ぢいつと豹のやうに窺ひながら、こんなことすら無表情に平然として、いつてのける紅子の底の冷たいやうな美しさに、三宅は惹きづられてこそゆけ、悄む氣持ちはおろか怒る心地にもなり得なかつた。

「紅子さん！さう思つたのは僕が惡いとして、それがもし、あなたの誇りを傷つけるものだつたら、僕はどんなにしてでも謝まります。この通り手をついて、あやまります。」

床に蹼のやうな手をついてゐる三宅をちらりつと紅子は見遣りながら

「うゝむ、あたしは、なにも、それが惡かつたら謝まります、なんつて恩を被せられるやうないひかたをされる覺えはないんだから……。」

「紅子さん！さう、おつしやらないで。」

「ふゝむ、本當に。あなたは馬鹿ね、からかはれたのを怒るのかと思ふと、さうではない。ぢやあ、もつと此上、からかつて貰ひたいといふの？」

「僕には、それが優しい心のものでなくつても好い。紅子さん！いままでの通りで好いのですから。」

どんなに手玉に取られたつて構はない。どんな扱ひを受けたつて心持ちなんか踏み躙られたつて、滅茶／＼になつても好いとまで、いふやうな三宅の腹が見えたとなると、紅子はます／＼有利な位置になつて、たしなめるやうに、

「が、もう、あなたにはその資格も要素もなくなつてしまつたの

ではないの、だからつまらないといふのよ。それが、そも〳〵あなたの不滿な原因ぢやあなかつたの。實は、あたしの方からこそ、いひたいことなのかもしれないが、あたしのお友達は、なにも、あなたひとりぢやあないんだから……。」

さういはれると、三宅は何にもいへなくなつてしまつた。――僕は、もう、紅子さん、何うなつても好い人間です。

女に惚い男といふ奴は
そのひとのためとなら
月でも日でも星をでも
ほんとに
閑つぶしの花火のやうに
うちあげもしてお目にかけます。――

高等學校時代、そんな詩句を何かで見てから、今のいままで、なんといふ世迷ひごとであらう、ひそかに笑ひもしてゐたものが、いまでは實際、その通り、身體中の持物の弱みも强みも缺點も長所も、全部曝け出して紅子の前に捧げてしまつても好い。健康な體はどんなに摩り減らされてしまつても好い。三宅は、こんな惱ましいうちに浸りながらも、丈夫でゐることを恥づかしく思つた。

「紅子さん：僕は、あなたの他のお友達たちにくらべて、まつたく取るにも足らないかもしれません。しかし、なんでも、」

紅子は鷹揚にさえぎつて、

「それは、誰だつて、おんなじよ。人間がさういふ、ふうになれば、機械と變りなくなる。たゞ、この機械は使ひにくいが、こつちのは好い、そのくらゐの差しかなくなるのだらうと思ふの。」

「紅子さん！さうです。機械でも好い。本當になんでもするから」

「本當になんでもする⁉ 機械にでもなる⁉ でもね、機械は壞れてよ。」

「こはれたつても好い。紅子さん、本當に、こはれたつて……：」

「ぢやあ、こはしてよ、好いのね、でも、その前に、」

紅子が、さういひかけた時、いま自動車の響きがしたのが多分、それだらう。

「紅ちやん！ 君、まだ寢部屋？――」

圓く太つた顏を、木村は、にこ〳〵させて部屋に這入つて來たが、あわてて、たちかけた三宅の姿を見ると、

「三宅さん、さあ、そのまゝ、そのまゝ、いつも、かけちがつて」

と、あとは、もぢ〳〵いひながら、床からとび出して、ガウンを羽おつたばかりの紅子とならんで長椅子に腰を下ろした。

「あたし、たぶん、だらうつて思つてたの。お風呂が湧いてるわ何う⁉ あたしも、ぢきにはいらうと思つてゐるの、」

紅子は、木村の眼に一直線の視線を流しこむでしまふと、眼を細めて猫のやうになまめかしく狡るさゝに笑つて見せた。

「さう、ぢやあ、さきに浴びてくるかな。」

部屋のつねとは違つた空氣のふれかたと、一つには三宅に極まり惡いやうな氣がかりな樣子に木村が、パス、ルームの方に行つてしまふと、蒼白な顏に眼ばかりを赤く血走らした三宅を、紅子は、さつきの勝ち誇つた態度で、また思ひ出したやうに壓へつけながら、しかし、いくらか柔らかな面倒くさゝうな調子になつて、

「本當に、こはして貰ひたいといひながら．　場合によつてはあたしも、はじめつから、考へなほして可愛がつてあげても好い

わ。しかし、いま、きむらがやつて來たら、手をついて、あたしの教へてやることを違ひなくいふのよ。でも、それが厭といふのなら、さつさと歸つてちやうだい、ね、」

かう、いつて紅子は脣の周圍にほんのり笑ひを浮べたが、それは三宅を高慢にみ縊つたあの冷やゝかな喜悅よりも、もつと、冷酷な感じを與へるものだのに、三宅には胸のうちに殘つてゐる、しつこい重苦しい眞暗なものに微かな溫みと光りを投げ入れられたやうに思はれて、

「僕、ほんとうに、どんな事だつて、どんな恥づかしい事だつて、」

紅子は、いそがしげに三宅にそれだけをいはしてしまふと、繊麗な軀をちよつとくねらして、

「ぢやあ、好い。そんなら、いま、あたしのいふことを、よく覺えてゐていふのよ。紅子さん、僕は、これまであなたのことを、得々として、何處で、どんな、くだらない奴らにいつてゐたかもしれません。それは、僕が、あなたと木村さんの仲が嫉ましいばつかりに、そんな、恥づかしい、失禮なことをいつてゐたのです。しかし、僕は、最初から、あなたのためになら、どんなに、身體を、千切れ、ちぎれにされたつて、構はない、さうまで、思つてゐた人間です。さあ、これでおはり、よく暗誦して、間違ひなく木村の前でいふのよ。え？　――それで、それがすむだら、けふは、おとなしく歸つてちやうだいね、いゝ!?」

さういつて、紅子は、霜に濡れた葉つぱのやうに俯向いてしまつて、もう拂ひのけることも出來ない三宅の頭に、床靴のまゝの足を載せて、つんと澄ました。

自己紹介

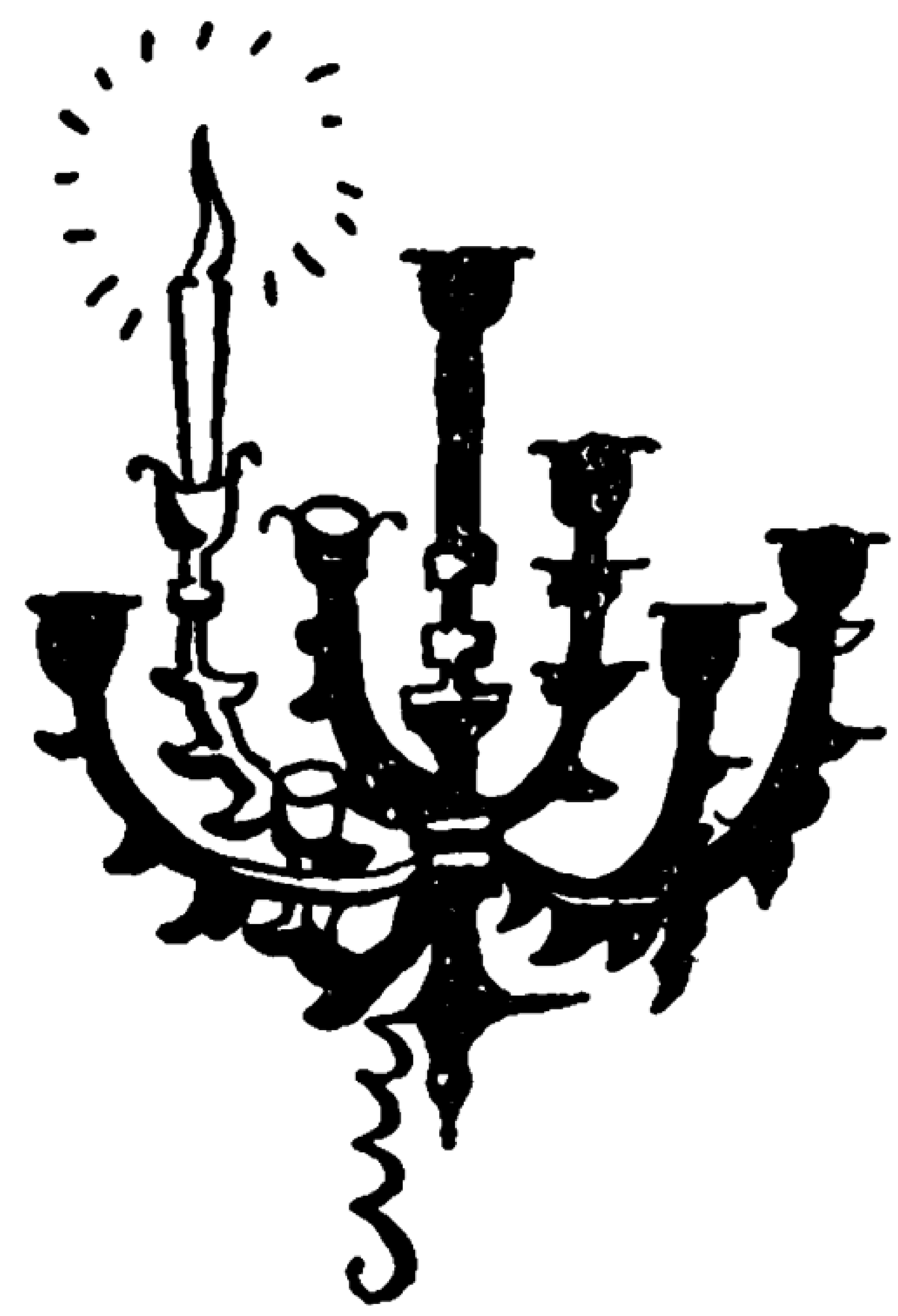
中本たか子

彼女は、山口縣山口町の產で、山口高女を出たさうです。音樂に少しばかり傾けかけた頭を、今度は文學の方へ突込まうとしてゐます。（神よ、彼方を向いて下さい）

作品は「アポロの葬式」「曲玉」「新聞紙が作つた海峽」（創作月刊）「赤」（女人藝術）「最後の煙火」（創作時代）など、發表させて頂いてゐるやうです。

性、怠惰で、洗面器みたいに放浪質（琺瑯質）に富み、不定な生活を送つてゐます。そして何と不心得なことには、集團的行爲を好ます――當世向なプロ派でもなく、勿論ブル派でもなく、ひとり自動電話程の家の中で餘生を送らうとしてゐるのです。

紅子



長流記（その七）

山田邦子

とはいへお慶さんにしても佐千子にしても時折は結婚生活に入ると定まつたお互の前途を悔ゐるやうな、嘆くやうな氣持になつた。あれ程の決心をして、親を怒らせたり泣かせたりしてふみ出した道を、二年足らずで方針がへにしてしまふやうな氣がして、それがあまりにいくぢのないやうに思はれるし、獨身の婦人のみが持つ矜氣な、未定の將來に何が潜んでゐるか分らない、福引の籤のやうな身の上を惜しむ未練もまつはつて、時々は互に心がふら／＼と迷ひ出す事があつて…言葉をかへて言へばお慶さんの結婚も佐千子の結婚も世に謂ふ戀愛結婚といふやうな結構なたのしいものではなかつたと言はれる。

初夏の或る日曜の朝、佐千子がおそく目をさますと、それは佐千子と同じく女子文壇に熱情の烈しい詩を寄せて名をあげてゐた高田とし子からの手紙であつた。とし子さんも同じ信濃の山國に成長した純情のこまやかな婦人で佐千子は日頃この友には心から敬慕の念を持つてゐた。

美しきひとみと紅き襟の色と微るみ聲と襖あけし時

とし子さんが、女子文壇の詩の選者であつた筑波根詩人として有名な夜雨師の紹介狀を持つて鹽尻峠を越えて東筑摩の奥から諏訪の佐千子を遠く尋ねて來た時、とし子さんは佐千子の第一印象を此歌にして佐千子に書いて示した。佐千子の方では丁度父親が世を去つて十日程たつた時でまだ白木の位牌が離れ二階の上段の間に飾つてあつた時であつた。一晩泊つてくれたとし子さんと一緒に寢て話し明したいと佐千子は心で思つて母親に一寸たのんでみたがその頃限りなく冷淡であつた母親はそれを許さなかつた。佐千子は困つて

「あのね、小さい妹があるものでね、みてやらなければならないの、私はあつちで寢ますからゆつくりおやすみになつてね」
さう言つて佐千子は何氣ない樣子で床をのべてあげた。
「エヽ〳〵いゝんですとも‥‥ランプを消していらして下さいなね」
さう言つて友は床のなかで目をつぶつてゐた。とし子さんが一泊して歸つてから佐千子に手紙をよこして「私は何も彼も解つてゐましたの、貴女はごくらうしておいでゝすね、一緒に寢られなかつた事もよくお心持がわかつてゐて‥‥」とちやんと書いてあつたので佐千子は涙の顏を赤くした。それから二人はほんとうに親しい深い友情を持ち合ふやうになつた。佐千子が家を出て上京する時も雪の深い田圃道を一里半汽車から降りて步いてとし子さんには別れをつげて來たのであつた。
そのとし子さんからの久しぶりのたよりで、いよ〳〵とし子さんも上京して文學の勉强をする事を許されたといふ天地に躍るやうな喜びの手紙であつた。‥‥此手紙を讀むと佐千子の心は動搖して來た。自分も結婚なんか止めていま一勉强してみたい願望が起つて來るのであつた。
その日の午後佐千子はお慶さんを訪ねて何氣ない樣子でとし子さんの上京する話をした、するとお慶さんは苦笑しながら豫防線を張るやうに
「ね。とし子さんが上京して來たつてあなた動搖してはいやよ。結婚の事‥‥」
佐千子も同じく苦笑して
「あなたもよ！」
いつまでも佐千子は忘れない。若も二人の内の一人だけがあの修業の道を捨てゝ平凡な結婚生活に入るのではあきらめられない、うらみつこなしに二人一緒に‥‥さういふ氣持が二人に流れ合つてゐた。
「長田さん、結婚なさるさうですね」
日頃はあまり言葉もかはさない、相場の方をやつてゐる、いやに色の白いのつぺりとしたそのくせ人の惡さうなM氏は金ぶち眼鏡を光らせて襟卷の絹ハンカチを結びなほしながらニヤ〳〵しながら佐千子の机にやつて來た。
「エ」
佐千子はすましてそれを肯定した。M氏は一寸鼻柱を折られた形であつた。
「いつ？」
まだ意地わるく追窮して來るのを佐千子は平氣を裝ふて笑顏もせず

に
「さあ……一度國へ歸つてその上でせう」
M氏はくるりと向ふをむいて
「オイ〱駄目だ〱女史は大眞面目だよ」
そして社のなかでも意地のわるさうな、人を笑つてやり度いやうな連中の三四人集つてゐる方へ歸つていつた。
社のなかには暗々のうちに奇妙な空氣が動く事があつた。佐千子の結婚の相手は由井氏と斷定する人もあり、いやさうでもないらしい國の方の人と聞いたとさゝやく者もあつた。がさすがに名を問寄つて來る人はなかつた。
「長田さん貴女のお父さんは北海道にゐたさうですね、何をなさつてゐたのですか」
「H市の市長でした」
或る日は又部長が佐千子にとひかけた。
「市長？」
部長は眼鏡の奥の小さい目をあげて一寸佐千子の顔を見た。
「何といふ方です」
「長田正彦」
部長は一層驚きの表情をして
「あゝ、あの長田正彦——以前道廳の視學官を長くしてゐた長田市長……あれはあなたのお父さんですか」
「御存じでしたか」
「よく知つてゐます、僕は北海タイムスに居ましたから」
部長は瞬間不思議に思つたに相違ない、北海道で人物と言はれた、長田正彦の娘ともあるものが、どう迷つてこんな新聞記者などになつたのか、あの嚴格な、保守的市長の娘にしては、どこか野性のある新らしい女の一人のやうな此娘は……それに身なりも粗末である此娘が、ほんとうにあの市長の娘であらうか……と思つたに相違ない。
佐千子の方では佐千子の方で、あれ程立派な嚴格をもつて聞えてゐた長田正彦の娘としてその方面のつてをもつて世に紹介されてゆくには自分は似合はない娘である事を知つてゐた。……地方の都市で上流の生活をしてゐる親の手元を三つの歳に離れて山國の祖父母に引とられて全くの田舍娘で育ち、新興文學に熱中して田舍大盡に嫁入る事を厭ふて着がへも持たずに家をとび出す程の空想を追ふ山國の娘であつた事は、新聞の編輯室の部長の机の前ではのべきれない自分の過去であつた。……佐千子は東京へ出て以來、親の名を言つて、そのつてゞ世に出る事は絶對にしない決心をしてゐた、父親を知つてゐる或る高い官邊の人が「長田の娘が東京に來てゐるさうだが何故自分の處へ顔を出さないか、一度來るやうにと知人を通し

て言つてよこした時もその家に行かなかつた。まして新聞社などで父親の名を出した事はなかつたけれどもう早晩結婚して社を退く事を思つたので部長の問にははつきり答へてみたのであつた。

二三日たつと政治部の、今まで外の人とあまり話もしない程上品な副部長が佐千子の處へやつて來て

「貴女は北海道の長田さんの令孃だつたさうで‥‥私は貴女のお父樣には北海道でいろいろ御厚意を得て居ましたが‥‥」

と叮嚀な挨拶をしてくれた、佐千子は赤面してたゞおじぎばかりしてゐた。

それから一日二日して佐千子は全く思ひがけなくも詩人三田雨光の手紙を受取つた。

お國からの御手紙を頂いてからもう幾年になるでせう、あの時はほんとに失禮しました。叔父から貴女のお話をきゝました。お目にかゝつていろいろお話を伺ひ度くおもひます、明日の午後お伺ひしてよいかどうか御返事を待ちます。僕の叔父は貴女の方の部長の白川梅雄です。

三田雨光――三田雨光――佐千子はしばらく信じられない程の驚きに打たれて手紙を膝の上にのせてゐた。當時日本の詩壇に隱れのない大原白夢と並び稱せられてゐた三田雨光――その秋の悲哀といふ詩を雜誌文庫で讀んだ時佐千子は感激のあまり山國の家の小さい机の上から感激の手紙を書いて東京の三田雨光に差出した事があつた。然し待つても待つてもその返事は來なかつた。佐千子は恥しめられたやうな寂しい氣持になつていま一度三田氏に手紙を出した、然しそれは前の手紙のやうに是非自分の詩をみて頂き度いといふやうな願ひ事は止めて忙しい貴方にそんな無理な事をお願ひしたのは間違つてゐた。自分は今後も貴下の詩を熱心に拜見するけれど自分の道は自分で步む事にする、此間文庫の紙上でレルモントフの詩の草稿の一部を見てあの書いては消し〳〵してある原稿に敎へられる處があつた。自分の詩は自分で練つてゆく事にする。といふやうなあきらめの手紙を送つたのであつた。すると三田氏から短い手紙が來て貴女はよい處に氣がつかれたそれより外に詩の勉强法はないといふやうに書いてあつた。佐千子は此返事を山國の娘らしい純な氣持で感謝して受けてそれきり三田氏に手紙を送るやうな事はしなかつた。そして四五年の月日が流れたのであつた。その三田氏から突然に會見を申込れた驚きに打たれたのであつた。

「一體三田氏は何の用があつて‥‥」

承知の返事を投函してから佐千子ははじめて疑問が深くなつていつた

三月號全誌面充當
自傳的 戀愛小說號

私達は長らく總ゆる桎梏の下に惱んで來た。今や性の美しき曙の光を浴びつつ、全裸の女性の愛の世界を語る自由を持つ。私達の戀愛の追憶と期待、夢想と焦燥、猥雜と神聖、感動と嘲笑の眞の告白を、全世界人よ、聽け！

執筆者發表！

豫告

地下水……今井邦子
未定……若杉鳥子
幻想……小寺菊子
未定……川島つゆ
歸路……樺山千代
飢餓途上……松田解子

鈍刀……林芙美子
車輛の泥……山本和子
黑い戀……高群逸枝
寒流をいろどる花……篠田ちか子
鈴蟲の雌……中本たか子
いまいづこ……小野春子

男性訪客

小說家 直木三十五
小說家 藤澤清造
小說家 三上於菟吉
週刊朝日 翁久允
サンデー毎日 安成二郎
日々學藝部 高信喜代松
文藝春秋 鈴木氏亨
文藝春秋 菅忠雄
元「女性」 古川實

佐々木ふさ
林芙美子
八木秋子
望月百合子
今井邦子
城しづか
長谷川春子
堀江かど江
大井さち子
時雨
金子しげり
新妻いと子

時雨 女人藝術の應接室欄に三上氏が書かれたものに、「女は夫を養ひ親を養ひ子を養ひ而して、戀人も養ふやうになつてから威張れ」つて言ふんですが、それに對してどうぞ女人藝術の方から一矢報いて頂きたい、其の力があつてから男と同じに認めるつて言ふんです。

新妻 女の方が威張つてる例があるんですか

三上 對等を認めないつて言ふんです。

新妻 女を男以下にしやうと云ふんですか。

三上 大いに劣つてゐますよ生活能力に於て

大井 賛成！ （拍手 哄笑）

三上 これは、大いに知己を得た譯です。女の人が自分で世に立つて行くだけで對等を認めさせると云ふことは吾々非常に不服です。男は遺傳的に色々のものを背負つて苦しんで居る、斯う言つては定めしお氣に召さないと思ふけれども……



新妻 女も先天的に苦みがありはしないですか、例ば子供を產むとか子供を育てるとか

三上 それは先天的不可抗で、さう云つてゐたら果しがないじやないですか。

新妻 それは生產的に云ふ言葉であつて、女の方が家に居つて男が生產的の事をすれば女が自然消費側の方をする、そこで以て生產して居る方が價値づけられるからどうしても女の方がひけめが出來て、さうして女の方がより以下の者だと云ふ風にされる…



三上　併し昔から貴方のやうに自覺した人のことは誰も低く見ません、ところが多くの今の若い人なんかでもひどく強がる一方だとか云ふのでは‥‥。併し女には容色とか美的なものが色々あるです、ところがそれが無視されかけて、生産的な——貴方の仰つしやる價値づけられて居る事だけが活動してゐる感じがある。

新妻　それは確にあると思ひます、やはり職業婦人などが起きて來たことは‥‥

三上　それをやるには男の人のやうにやつてから氣焔を揚げて貰ひたい‥‥

今井　お言葉中ですけれども、さう理窟で行くよりも、實際戀人を養ふまでに、中々社會が許して呉れません、戀人など一人でも持つたら大騒ぎですよ。

三上　一つ身を退いて養つて貰ひたいと思つてゐる。

今井　さう云ふ開けた方があれば‥‥

新妻　併し今は過渡期の現象で仕方がないと思ふんです、是は男の方が隨分長い間、何百年乃至何千年——と云ふと大きいですが千何百年、ずつと男の方が生産事業に携はつて、女の方は消費側に居たんで、それが初めて最近女子も生産事業の方に出て來た、だから歴史的に考へてみても女は其處まで行き得る地位に達して居ないんですね。

三上　だから男は詰らない、宿命に就て嘆じたんです、何故因果の身に生れたかと思ふ。

新妻　それは何百年か先に行つたらさう云ふ時が來るかも知れんが、其時までに生れ更つていらつしやるんですね。

三上　何代經ちますかね、權力があつた時はよいが、あべこべの時は矢張り多少そこに遠慮して貰はなけりや‥‥

佐々木　女に生産能力がない時‥‥

三上　生産能力のない女でもお前達尊敬するかと訊くの？　生産能力のない女で尊敬する女を見付けたいね。



佐々木　生産能力が五分五分の場合には何方が威張れるか、

三上　五分五分なら女を尊敬する。

佐々木　生産能力が全然ない女でも尊敬出來る場合がありはしないか。

三上　それはありますよ、生産能力がなくて尊敬出來る方僕達はさう云ふ方を非常に尊敬したいです。

新妻　私達もさう思ひますね。同感です。

三上　男にゃある、生産能力がなくて尊敬出來る人！

佐々木　有つたら養ひます。

堀江　併し男の方は、女に生活能力があれば



經濟の事や何かの上から非常に便利だと思ひながらも長い間男は女の支配者の地位に立つて居りましたから、さう云ふ方面から壓迫も感じますから、それで便宜の上からはよいけれども氣持の上から嫌ひだと云ふやうなことはあるでせうね。

三上　僕は斯う云ふことを思つて居る、詰り女の人に、そんな神經に壓迫を感じたり何かさせるのは、吾々男が至らない、さうして本當の傳說にあつたやうな素晴らしい男は、そんなことは貴女方に感じさせないで尊敬もするだらうし色々するでせう、さう云ふ優越した男や、そんな優越した男に尊敬される女の中から位此の世の中で見出したい、何の野心もなく、壓迫と云ふことは、兩方で變に神經を起すからです。

今井　私も素晴らしい男を望んで居ます。

三上　それはお互さまです。

金子　今の世の中は兩方とも實現しない世の中でせう。三上さんの理論で…・

三上　惚れさせて呉れる女が欲しい、惚れりや何んでもするなあ。

新妻　惚れると云ふこともほんの僅かの間ではないですか。

三上　氣に入つてさへ居れば何時までも惚れてるでせう。

新妻　惚れたと云ふことは續かないものではないでせうか。

三上　大抵の場合續かないですが、無いとも云へないかも知れません。

新妻　怪しいものでございますね。

金子　愛人を養ふ力があつてから何とか云へつて仰しやいましたが女が愛人を養へば男は養はれていらつしやる譯なんですか



三上　さうね、向ふが養つて呉れて滿足すれば、養はれちやうなあ。

金子　女の方、さう云ふ女になりたい？

新妻　不賛成。

時雨　私は養ひたいな。

大井　賛成。養ひたい。

金子　新妻さん反對なさつたんですから、男から養はれたい方ね。

新妻　私は何處迄も妻でありたい、養はれると云ふ言葉は嫌やだと思ふ。

金子　でもさう云ふことに聞える…・

新妻　ぢや養はれるでもいゝですが、大した素晴しい男でなくてもいゝ…・

時雨　さう？　私はそれは嫌やね。

新妻　素晴しい男を見付けても、素晴しいと思ふやうな男は此の世の中に存在は恐らくしないだらうと思ふ。兎に角自分の夫であるならば、自分は子供を養つたり家の事をすれば大概一ぱいですから、それを十分に出來れば私は滿足だと思ふ。それに就ては夫に對して尊敬が出來ないやうな人間では困ると思ふ。

三上　非常に結構な氣持を持つていらつしやる、さうでない人もありますよ。

新妻　それは私のことを何方か云へつて云ふから言つたので、若い人は別だらうと思ふ。

直木　尊敬される女から養はれるのは些つとも介意はない、尊敬に足る女なら何時でも養ひます。

大井　それは恥でも何でもないわね。

八木　皆さんの仰つしやる素晴しいだの尊敬すべきと云ふのは何う云ふ婦人でせう。

古川　それが分つて居れば摑みますよ。

金子　養はれたいと云ふ人と養ひたいと云ふ人と一遍明かにするといゝと思ふ。

長谷川（春）　私は兩方やりたい。

今井　養はれゝば養ひ、…・（各自　雜談）



藤澤　女の人達は同等になれないと云ふことを認めたんですか、それをもう少し何とかしなければ…・

佐々木　私は、養ふと云ふ問題は、經濟生活の上で金で…・もつと人格と人格の對等であるかないか…・

新妻　私もそれを言はうと思つてゐたんですが、養ふとか養はれないとか云ふ言葉で、お互別々に決めたら宜いではないかと思ふ、今の世の中とすれば、女の方に稼ぎの多い人も男に稼ぎの多い人も澤山あるでせう、それで結婚した場合には何方が養ふ方になるかも知れん。

時雨　私が思ふには、養ふほどの心意氣になつて貰ひたい。



翁　養ふと云ふ言葉は經濟的に例へば男が稼いで勞力を以て報酬を得て來る、それを妻に與へると云ふのが養ふと云

ふのですか。

新妻　さうなんでせう。

翁　妻が家で働くのは何うなるんです？

新妻　働かない場合のことでせう。

翁　では全然不具者の時ですか。

新妻　今の大勢は、さつきの言葉から云ふと養はれて居るんじやないですか。

三上　そんな理屈ではない、男と云ふやつは皆隨分苦しんで居るんじやないですか、ところが女は、御亭主を助けて居ると云ふ一つの職業かも知らんが、所帶を脊負つて苦しい經濟壓迫を蒙ると云ふとは女にはありませんぜ、僕など二十人位一家一門を：：

望月　さうすれば、全然養ふと云ふことがなくなる社會になればよいですね。



翁　女の人が養ふなど考へて居る間は此の問題は解決出來ない。

金子　ところが養ふ養はんと云ふ言葉ですが三上さんの女人藝術の應接室にお書きになつたのが此の言葉であると云ふ引つかゝりで、元々愛人を養はれるやうになつてから女はもつと威張れと云ふ挑戰です、それで議論の必要なしと思ふ連中は默つてゐる。

直木　贊成ですね。

三上　理想など言つて居られない、今の世の中で、僕等通俗小説で飯を喰つてゐるんだから、はつきりさう思ふ、理想とか空想とかそんなものでなく、貴女方持つて居る理想とか希望でも、認識出來ない、そんなものならもつと早く來さうなものぢやないですか、猿みたいな生活は忍べない、明日月末が來れば拂はんけりやならん。夢喰て生きて居る譯には行かん。

金子　それで此の月末からでも女に養つて貰ひたい譯ですか。



藤澤　實際問題として、女髪結、遊藝師匠など自分の亭主に對して威張る傾きがある。僕はどうしても、生活の保證の任に當つてゐる者が生活の被保證者に對して威張り得るものは、今までの習慣から來て居ると思ふだから威張つて宜いものぢやないかと思ふ。つまりもつと砕いて言ふと、それを威張つても宜いことになりはしないかと思ふ。現在までは女の人達がそれに反對して同等の權利をと云ふならばそれを持ち得てから威張らなければ駄目だ例へば、僕なんぞは飽まであなた方がやつていらつしやる事は見てゐても宜いが、自分達の持つてゐるその權利を明け渡さぬでも宜いと思ふ。それから女の人達は、どうしても生理上からも男にかなはないのぢやないかと思ふ。だから今のやうな習慣も作られて來てゐるんぢやないかと思ふ。それに付加へて頂きたい事は、男の弱點をつけ目にして威張る必要はない、さう云ふ風に各自が、生理上から約束されてゐるものを一方の人がその爲に惱んでゐる時、男が保護してゐれば間違ひない。



春子　生理上からつて言つたつて、頬ぺたに一ぱいに髭を生やすことを競爭したら、生理上男の方が優勢ですが、紅い唇、綺麗な頬とか丸い肩とか云ふ所は生理上こつちが優勢だわね。第一藤澤淸造が、男が女を養ふ：：：云々する資格が有るか無いかと云ふ：：（拍手、喝采、哄笑）

藤澤　假りに無いとしても、僕に無いとしても、一般から言ふと男が：：：

春子　そんな概念で話してやしない。藝術家の集りだからもつと個性的にやる：：：

藤澤　個性的になら個性的にして、一般的か



ら云ふとさう云ふことになる。僕が養ふ能力がなくて、反對に女の人にあつて…つまり女髪結が自分の亭主を養つて威張つてゐるやうに…

春子　さう云ふ話だと綿々として速記ばかり長くなつてしまふ。その邊で問題は切つても宜いだらうと思ふ。

三上　併し女の人が養ふなんて言葉にこだはるやうぢや駄目だ。養ふなんて牛や豚ばかり養ふんぢやない。親も養ふ。尊敬すべき者にも云ふ。言葉にこだはつて議論しては

時雨　併し親を養ふと云ふのは男が一本槍を立てるが、女でも養ふ時には養ふ、唯今までの社會狀態として、男が養ふべき位地に多くなつたからで、是からどうなるか分らない。今現に養ひつゝある者も有るでせう。

三上　義論を無視して養つても養はれても、いゝ氣持ちでゐてえな。

八木　社會運動なんかしてゐる家庭では、多く旦那さんが運動してちつとも構はない…

直木　三上などは養ふ本能があるのだ。誰でも養ひたい…

林　三上さんは養ひたいから云ふのよ。

（誰の聲か分らず）最も女を養ひたいでせう――。

春子　我々に巨萬の富をくれたら、あらゆる男性を養ひたいと思ひますね。

新妻　養ふと云ふことは、一種の支配慾ですからね。奥さんを養つてゐながらへイ〳〵する旦那様もあらうし、女の方が稼いでも旦那様を立てゝ置く人もあるでせうし…

三上　天地が動かなくなつても、女なんかに養はれたくない。

時雨　それが一ッ引つくり返ると、案外逆轉して養はれたいのかも知れない。

三上　そんな位なら養老院に入る方がましだ社會制度の逆轉を願ふより　…

新妻　三上さんに申上げますが、私は養はれたいやうな男と同棲したくありませんね。



菅 鈴木　僕等二人とも養つて貰ひたい方です。

時雨　ぢや採點するから女に養はれたい方の人は手を擧げて…

（鈴木、菅、直木、翁、四氏手を擧げる）拍手、喝采。

春子　手を擧げる人は勇敢なんだわ、藤澤淸造なんか擧げるべきで擧げられないのだから…（拍手）

藤澤　俺は養ひたい方だから…

新妻　不正直だわ、男は嘘つきだわね、女の方がよつぽど正直…

三上　佐々木さんも云つてたけれど、このセチ辛い世の中だと、空想か議論か、理論、いろ〳〵さう云ふもので生きてゐられることはいゝが、本當に生きてる人は、養はれる、養ひたいと云ふことは止して、のんびり生きたいと思ふから、つまり文句が出て來る。どんな社會が來ても、僕などの眼の前に來てみなければ承知が出來ない。



時雨　ではもう養ひ論は止めます。次に今度女人藝術側から、男性の方に要求して下さい。

春子　素晴らしい美男が出て欲しいこと。

三上　それは二七會など代表的なものだ。及びそれ〴〵の旦那さま…

春子　ドン、フアンのやうな人が出て來て欲しい、相手に取つて不足の無いやうな…

三上　鈴木君から質問が出てゐる。女と男は何人まで戀人を持つていゝか。それは無限だらうと云つてゐるが、僕もさう思ふ。

時雨　そこに二人並んでゐる人に聞いたらいゝでせう。三上と佐々木さん…

三上　僕なんか經驗が無いからね。

大井　をかしいなア、そんな事は無ささうだ

直木　三上に經驗が無ければ皆な默つてしまふ……

翁　代表的な問題です。我々を代表して言つてくれると思つてゐたのに……

三上　僕はきのふも考へたんだ。「死の勝利」を讀むとダヌンチヨオんて奴、名女優をラバーにして二人で旅に出て、旅先でそれをうつちやつて逃げてる。それでも女の方では思つてるんだ。好い氣持ちだね。さう云ふ男と女はないかなア。一々やかましく云はれてゐたんぢやたまらない。澤庵みたいになつちまふ。みんな、さうぢやない？

直木　知りもしないくせに……

三上　知らないから云ふんだ、議論してるんぢやない。

金子　贅澤な……

三上　贅澤な社會を早く持つて來やうぢやあないですか。

金子　あしたすぐ持つて來させやうなんて云ふのは……

林　三上さんが太鼓を叩いて探したら宜い、それよか私好いのを目つけて上げるわ。

古川　三上さんばかりでなく、僕等にも目つけて下さい。



新妻　男のくせにして、人に見つけてなんぞ貰はないで、自分で見つけて歩いたらいゝわ。

三上　駄目だ。（首を振る）

新妻　あなたが意氣地がないと云ふことになるわ。

鈴木　是ぢやちつとも速記が進んでゐないから、もう少し違つた方へ話をどん〳〵進めませう。

林　みんなで惚氣でも言合つたら宜い――

鈴木　男から題を出してゐるんだから、女からも題を出したら宜い。

金子　女は探してあげる約束なんだから……

（各自雜談）

今井　ちよつと私、男の方に伺ひたいのですが、奥さんだけで……どんな賢婦でも奥さんだけではどうしても滿足出來なさうに見えるんですが、その心裡を聞かして下さい。

春子　やぼな質問ね、甚だ古い……女性として大いに恥しい。さう云ふ古い御婦人達が男にさう云ふ問題を出すと、若い我々が困りますよ。

新妻　ぢや、若い方なぜもつと……いゝ質問を澤山なされば宜い……

春子　論ずるに足らない一般常識になつてゐるから……

直木　同じ物ばかり喰つてゐられますか？女も拵へればいゝ。その以外の方法は無いですよ。

今井　どうしても……

春子　それぢや御亭主だけで滿足出來るんですか、あなた方――。さう云ふ説明は、あなた方にして頂かなければ我々には分らない……

今井　併し、一般社會は隨分、その範圍は問題になつてゐる。

春子　それや無論さうだらうと思ひます。

翁　征服者、被征服者が今日は集つてゐるんだから、概念的に話をする……

三上　戀愛なんてものは運命だ。いつあるか分らない。

林　戀愛なんてあるもんかしら？

春子　それはある……

三上　言葉に囚はれてはいけない。戀愛なんてザラにある。

春子　無くちや生きてゐられやしない。

三上　キリスト、メーテルリンクなんか、いろ〳〵考へ方は違ふが、有るでせう。

翁　戀愛論と云ふものが…無いと云つたら無いし、有ると云つたら有る…

春子　言葉に拘泥すると何にも言へない…

（各自雜談）

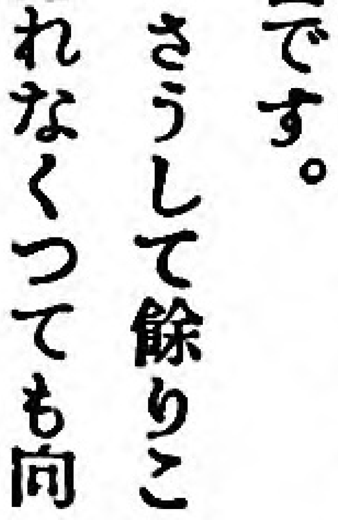
新妻　（翁氏等のとは別方面で、大井氏に）あなた達で型を破つて仰しやつたらいゝ、今までの話隨分古いと思ふわ、三上さんの仰しやること、古いと思つて…

大井　そんなに古かない、あなたの方が古い。



新妻　古い返答をしてゐるだけよ…

三上　古いとか新しいとか云ふうちに…二七會と云ふのは亂暴者ばかり寄つてゐるんだ。僕なんか憎まれちやつて、どうしていゝか分らない。とにかく、理窟がなくて、男も女もお互に賴つて、それに男の氣持をよく知つてくれる人、私が嘘をついてもすぐ怒らない、それで向ふは嘘を云はない人——さう云ふ女は無いもんかなア。



安成　やつぱりどこまで行つても惚れたらあばたも靨です。

三上　さうして餘りこつちが惚れなくつても向ふが惚れてる人…

安成　僕の一番好いのは別れる時泣かない人

大井　あたし、泣かないわよ。（拍手、笑聲）

新妻　戀愛つてをかしいと思ひますね。例へば鼻が高い所が一寸氣に入つて、鼻の高さに感じたり、或はそんなに綺麗でなくつても、全體が良く見えたり…

鈴木　それは戀愛ぢやなくて好きとか嫌ひとか云ふぢやないですか。



新妻　いえさうぢやないでせう。好きつて事は、まア電車の中で、一寸あそこが好いな…と思ふ事で、それとは違ふ…

安成　こつちで好きでも、向ふが應じない…

古川　片戀の戀愛…

新妻　片戀だつて戀愛は戀愛でせう？

安成　戀愛は戀愛です。片つ方が惚れたつてだけでは戀愛にならない。大井さんに惚れたつて云つたつて戀愛ぢやないでせう。だから片戀は戀愛ぢやない。

新妻　さうか知ら？　だけど小說を讀んでも自分だけ思つてゐて、向ふに言つてない片戀に苦しんでゐるのなんか、隨分あるぢやありませんか。

古川　戀愛の一部分と云へば文句なしだ。

（この時高信氏着席）

三上　高信君、僕ばかり憎まれてる所なんだ。

新妻　片戀つて死ぬほど苦しむものよ。

安成　僕は片戀で苦しんだ事はない。僕は自分が曾つて、片戀で終つた事はない。

三上　皆さんに紹介します。高信氏はあらゆる女人の禮讃の的となるべき尊敬すべき模範人物良夫の典型なのです。僕が婦女界の太田菊子さんとの一問一答にその事を話したら、それからは、御近所の奥さんが、彼の出入に、みな丁重にあいさつをする。旦那さんの歸りがおそいと高信さんの旦那さまはと引合ひに出される！



春子　そんな事を云ふのは貞女を表彰して、その貞女が煩悶するやうに、高信さんを紹介で殺してはいけない、可哀さうだ。

（誰の聲とも知れず）この止めはなぶり殺しで殺生だ。隨分惡黨ね。（騷然。速記止め）

望月　今井さんの御質問のこと、あれは餘程疑問だと思ふ、一夫一婦と云ふのは舊い。昔からある制度で縛られたそれが、本當の自然の人間の求めるものであるかないか疑

問です。さうではないと思ふ、だから是は本當ではないと思ふ、是からの社會組織になるとそれは何うなるか問題だと思ふ。



今井　私は兎に角、一夫一婦と云ふことは疑問だけれど、雜婚——例へば幾人も…あの露西亞の雜婚裁判と云ふ本にある、あゝ云ふ雜婚は、一夫一婦を否定しても私はしたくないと思ふ。

林　私もしたくない。



望月　今迄の社會制度——現在の社會制度で考へればさうなるが、やはり變つて行かなければならぬと思ふ。

今井　あの小説で…あれにばかり據るやうですが、最後に大變體をいためる、精力を取られて…どうしても戀人を變ることは出來ても幾人も一度に持つ事は出來ない理論する前に實際に疑問を持つ、兎に角一夫一婦の場合、雜婚等で到底味ふことのない特別の境地に入つて行くといふ、さう云ふことは雜婚などにない、理窟以外の、人間の持つて居る非常に深い、生理的から云つても精神的から云つても深いものが…

林　えゝ、さう、ほんとにね。



鈴　單純に決めることはいけない、道程がある…(騒がしくてよく聞きとれず)體力に於ては男の方が弱いですよ、喧嘩したりなどする力は男が強い、長い間の習慣ですから、併し本當の健康とか何とか云ふことは女の方が強いですよ。男の體質で何人も子供を産んだり朝から晩まで殆んど睡眠不足でやられる、今日の女の仕事は男には出來ない。喧嘩したりなどは男の方が強い、長い間の習慣だから…

長谷川(春)　それは、精巧な微妙な時計のやうな機械と、馬鹿に丈夫なタンクの樣なものと比べると同じで、結局結論はつかない。

鈴　けれども、男と女と比較する必要はないが、比較すれば男は女より弱い。

今井　だからどんな理窟でも決定とか斷定とかは出來ない、一つも、世の中の事何でも。

鈴。出來て居ればこんな下手な社會は作らない、出來ないから作つて居る。

今井　贊成。

林　疑問だらけでいゝではないですか。

望月　それは仕方がない。

鈴　男女の問題を一括して解決しようとしても駄目だ、菫は菫薔薇は、薔薇でよい處あがる、人の事を心配する必要はない。議論の必要はない。

今井　私も議論と云ふことは大嫌ひ。

長谷川(春)　稍々永遠の眞理とも謂へるのは美しいものがいゝとか、戀人の抱擁はいゝ氣持のものだとか、金持になつて金を使へばいゝ氣持だとか、それこそ永遠的の眞理

望月　それも疑問よ。

長谷川(春)　でも先づ永遠性…

望月　美と云ふことはさうかも知れぬが、美の内容が違ふ…　美と云ふものは永遠性かも知れないが、

鈴　美は永遠性ではないですよ。

長谷川(春)美の觀念は違ふが。…(聽取出來ず)

鈴　キリストも日蓮も…哲學者の日常生活は、人間的生活として亂暴な生活も、吾々の觀念で言うたところで仕方がないが人間として…

長谷川(春)バイブルなんて皆後人の作つたものですね。



かよ子

應接室

堺利彦

――市會議員選擧に就いて――

とにかく普選實現最初の市會議員選擧である。市民はこの際何を考へねばならないか。その一票を何者に投ぜねばならないか。それはあまりに明らかな事である、もと〱既成政黨の作つた普選である。普選の美名のもとに、我等新しく燃え出づる階級の力を抑壓せんとしてゐる彼等の態度――あるものは無意識の中に――を、市民は知らねばならない。あゝ人々はいふ。「市をよくする爲めには、政黨關係などあつてはならない。唯人物本位にしろ」と。では衆議院に政黨のある事は、國をよくするにさまたげあるものかといはねばならない。一體正しいとか人望があるとかいふことが、どれだけの價値を持つものか。例へば、既成政黨のことは言はず同選擧區で無産政黨から二人立候補する時、さしもA黨から社會的に有名な人が立ち、B黨から無名の新人が立つた場合、市民は決してその名に捕はれてはいけない。人物本位であつてはならない。A黨とB黨との政策、綱領を愼重に考へ、黨本位の投票であらねばならない。では、何故市民は無産政黨を選ばねばならないか卽ち、無産政黨の市の爲になすべき仕事は何か。勿論數多い市議の中、無産黨員は極く少數であるから、今すぐどう市政を改革するわけにもゆかない。然し、あの白日の下にさらされた市政の醜態については、更に突込んでその正體を既成政黨が如何に利權に眩んで市民を僞瞞してゐるかを暴露するであらう。又、現在の制限的普選を、眞の意味の普選とすべく運動するであらう。それが爲半分の人數を減ぜられてゐる婦人の公民權問題にも及ぶであらう。とにかく無産黨員のなすべき仕事は多端である。私も 今度は大いに立つ様に勸められてゐるのだがまだ運動について具體的な方針は考へてゐない。



秋田雨雀

――ナタリヤ・サツツ女史と故小山内薫氏――（口絵の説明）

この寫眞は故小山内氏がモスクワを去る日、一九二七年十二月十三日にモスクワ「アルス」の兒童劇場訪問紀念に撮影したものです。この劇場は、ソビエット・ロシヤの兒童演劇の最大なものゝ一つで、有名な舞臺監督、スタンスラウスキー夫人の妹である。美しい知識的なナタリヤ、サッツ女史によつて、主催されてゐるものです。ナタリヤ、サッツ女史の事は、小山内氏も非常に興味を持たれて、歸朝後も度々書かれた事があります。この人は革命後の十年内の演劇プログラムの大事な役を充たしてゐる人で、この人の事業に關する記録さへも立派に作られてゐる位です。

十二月十三日に小山内氏は他の日本の代表者達、米川、秋田氏などと、歸國のために非常な繁忙な時にも關はらず、この劇場を訪問したのです。ナタリヤ、サッツ女史はこの訪問を大變よろこんで、小山内氏の一行を、集つた四五百人の兒童等に紹介したり、俳優と引合はせたりしました。この劇場には日本の物語りの松山かゞみの舞臺面などがあつたので小山内氏はびつくりして、しばらくこのロシヤの舞臺裝置家の作つた日本の舞臺面を眺めたりしてゐました。

この劇場では劇場の關係者が、見物の兒童の中に立交つて觀劇中の兒童心理反應――喜んだり、悲しんだり、或ひは無感興になつたり、騷いだり――する事を、線の高さで「表」に作つて行きます。それによつて芝居の演じ方や、脚本選擇の材料にしてゐます。之は有名な心理學者の意見を採用したもので、ソビエット・ロシヤの劇場ではいたる所でこの方法を用ひてゐます。

寫眞の中にある役者の扮裝はこの日演ぜられたプーシキンの童話劇の人物のまゝです。この劇場では普通の童話劇の外に、ソビエット・ロシヤの名物の一つと云はれる人形芝居のペトルウシヤ（指人形）が演ぜられます。この日の夜、十時に小山内薫氏はモスクワを去つて歸國の途につかれたのでした。その夜小山内氏の出發される頃大變に雪が降つてきました雪の中に小山内氏の乘つた汽車が見えなくなるまで人々は、プラットホームに立つて見送りました。

或人は危いと云ふのを聞かないで、列車の窓につかまりながらプラットホームを驅け出して行きました。之はモスクヷに於ける小山内氏の最後でした。

或る日の對話

らいてう

A 相變らずいろんな雜誌がまだ座談會なんてやつてますのね、どうせ誰だつてああいふ席で自分の思想を十分言へるものぢやなし結局くだらないと思ひますわ。

B しかしそれといふのも今の一般讀者に一つ思想を徹底的に論じたやうな眞面目な長い論文を讀み通す根氣がなくなつたからで、今の讀書界の反映なんでせう。

A 婦人の座談會といふと矢つ張り何といつても性の問題が多く扱はれてゐますのね、そして性の問題を扱つたときが一番活氣があつて、話がはづんでるやうぢやありませんか、あなたいつかの「平凡」や「女人藝術」の戀愛座談會の速記をお讀みになつて?

B ええ讀みました。とにかくあたしたちがひと昔前、戀愛の自由を叫んだときなどから思ふと今の若い女の性に對する考への違つて來た事が目立ちますね、いゝ意味にも、わるい意味にもねえ。

A と、おつしやるのは?

B いい意味といふのは戀愛や性慾そのものを罪惡視する宗教的偏見や、差別的な性道徳の觀念や、性に對する過剩な羞恥などから綺麗に解放されて、ほんとに自由な立場で、戀愛や性問題を考へるやうになつたことで、わるい意味といふのは戀愛の情緒が忘れられて――少くともその情緒の價値が忘れられて、ひどく貧弱なものになり、枯渇しかけて、戀愛から離れた性慾だけが目立つて表面に出て來たことです。

A 時代の尖端に立つてゐるといふ若い婦人たちの戀愛觀が、非常に唯物的になつて來たことには同感ですね。全く。

B あの「平凡」の座談會、あの時私は出席する筈を病氣で行かれなかつたのでしたが、和田とみ子さんがしきりに一人で新貞操論を唱へ、戀愛の靈的方面を主張されたらしいぢやありませんか。ところがそれに對してさつぱり反響がなかつたといふよりも大勢は斷然反對でしたわね。

A ええ、下中さんお一人が――あの席で一番年輩の下中さんお一人が同感らしいことを洩らしていらしたのを面白いと思ひましたわ。

B　さう、さう。さういふ心持は誰れにでもあるものでせうなんてね。ところがそれに對して　誰一人肯くものがないのですもの、驚きますね。あたしがもしあの時、ゐたのだつたら、和田さんの應援をするのでしたのにねえ。尤も多少違つた意味にですけれども――

A　和田さんの言ひ方はあんまり概念的ですよ。和田さんとしてはどうも仕方がないのでせうけれどねえ。

B　誰だつたか、戀愛はもつと實際に卽したもの、地上のものとして考へなければいけない。和田さんのやうな戀愛觀をもつてゐると現實にぶつかつて破れたとき非常に寂しいだらうなんて言つて居ましたねえ、和田さんの言ひ方が抽象的過ぎるからですよ。しかし人が普通現實だの、自然だのと言つてることは外側に見えてゐるほんの上つ皮のところをいふので、さういふ現實や、自然は眞實でも、眞理でもありませんものね。眞實とか眞理とか、とにかく實在の本當の意味はさういふ現實や自然の奥底深く沈んでゐるもので、内側からでないと本當のことは分りませんよ。殊に戀愛のことは一層さうぢやないこと。それを現實を無視してゐるの、夢だの、といふのは間違つてゐると思ひますわ。

A　ではあなたも戀愛の永遠性をお信じになるの、今の新しがりの御連中にそんなことをいふと鼻の先で笑はれさうね。

B　そりやさうですとも。コロンタイ女史崇拜の今のマルクスガールに戀愛の永遠性などといふことが問題になりやうがありませんものね。しかし時代の思想がどうであれ、わたしはやつぱり戀愛の永遠性を眞面目に思つて居ますね。尤もあたしが永遠性といふのは和田さんのおつしやるやうな時間的永遠性ばかりぢやないんです。刹那的永遠性とでもいつたらいゝのでせうか。

A　では、一人の異性との生涯に亘る戀愛といふ意味ぢやあないのね。一生の中に幾度戀をしてもさう言へるんですの？

B　ええ、さう。純粋な全一的なものならばねえ。

A　あなたは只一人の異性との墓場の彼方までの戀といふやうなそんな意味の永遠性は望んでゐらつしやらない？

B　勿論望んでゐますわ。望ましい事ですわ。いゝえ望ましいばかりぢやないあたしはその可能を信じて居ますわ。第一愛し合つてゐる者は誰だつてその瞬間はさう信じてゐるでせう。さうしてその愛が變らないばかりかもつと〳〵深められていくことを願つてゐるでせう。どうせ續きつこはない、ぢきに飽きるに違ひない、その時は別れるばかりだと思ひ乍ら愛してゐる人がもしあるとすればその人は本當に愛してゐない證據でせう。まだ戀愛の門の外に立つてゐる人ですよ。もと〳〵戀愛情緒なしの戀愛遊戯、一時的の性的享樂かさもなければ性の便宜のための相互利用かですよ。あたしが刹那的永遠性といつたのは現在戀愛そのものの中に永遠を見る、なにも時間的の永遠ばかりが戀愛の永遠性といふことぢやない、とかう言ひたかつたからなのです。刹那に永遠を感じることの出來る戀愛といつたらいいのかも知れません。

A　同時に二人を愛してゐても矢つ張りその戀愛に永遠性を認めておいでですか？あなたは二人の愛人を同時にもつことも出來るし、又もつてもいゝ、道德的に是認されるといふやうな理論を以前もつていらつしやいましたわね。

B　あれは二十だいの時分のことぢやありませんか。――ほんとうの戀愛の體驗をしたものはあんな理論になど迷はされやしません

よ。戀愛共產なんて言葉をこの頃の若い人の口からきかされると、あたしはハヽアあの人はまだ戀愛の門の外にゐてしやべつてゐるのだな、とかう思ふだけですよ。

A 男が言ふならともかく女が戀愛共產なんて言ひ出したら、それこそ女性の自己破產ですわ。自滅への道ですわ。男の浮氣――男性の戀愛の浮浪性と言ひますが――それをおさへて行くものは女性でせう、女性の性に對する信仰でせう。それを女が男と一緒になつて戀愛共產などと言ひ出し、男の浮浪性を肯定することにでもなつたら一體どうなるといふのでせう。あなたがおつしやる通り、戀愛共產などといつて滿足してゐられるやうな戀愛はどうせ戀愛感情の伴はない性的享樂ですよ。さもなければ單なる機械的な性慾滿足の肯定ですよ。どの道戀愛感情なしの性慾の肯定は女にとつては特に明に自己破壞ですよ。無論男にとつてもさうですけれども殊に女にはねえ。又コロンタイをおひきあひに出しますけれど、あの「三代の戀」のヒロインなんてとんでもない氣の毒な女ですね、革命の渾沌が生んだ性的犧牲ですよ。あんな唯物的戀愛觀を嶄新がつて、かぶれたらたいへんな間違ひでせう。女性の名に於て抗爭すべきですよ。戀愛の純情のために長い、長い間制度と戰つて來たその女性の名に於てね。これは種族の命令ですからね。

B ロシヤでもだいぶん反對な意見があるやうですね。ゲニヤのやうな思想が若いコンミユニストの間に或る勢力をもつてゐるのは事實でせうけれど。

A 何とか性道德の方面を整理しなければなりますまいよ、いくらロシヤだつて。

B 戀愛の上での一切の所有慾、所有觀念の否定といふこと――それは勿論分つてゐますよ、けれどそれがあんな無謀な結論を引き出すとすれば理論の上にどこか大きな誤謬があるのですね、たとへばゲニヤが自分のレニン以上にも敬愛するお母さんの愛人と關係して、當然なことをしたやうに平氣でゐたり、お母さんがそれを知つてあんなに苦しむのを見て、お母さんの戀は時代おくれだ、ブルジヨワ的だ、醜い所有慾だなどと非難してゐるのはあんまり亂暴ですね。戀愛感情は斷じて所有感情ぢやありませんよ。愛人を失ふことは、自分の所有物を失ふことぢやない、自分を失ふことですよ。少くとも自分の半分をね。もしゲニヤのお母さんがゲニヤの考へてゐるやうに苦しまないものとすれば、それはゲニヤのやうにそのコンミユニスト(何とかいふ名でしたね)をちつとも愛してゐない場合だけでせう。それが戀愛といふものぢやありませんか。所有慾否定のあまり戀愛感情まで否定するのは無法です。

A 全く無法ですよ、あれぢやあ。あんな理屈は人間性が許しませんよ

B とにかくコロンタイ女史の婦人觀や戀愛觀は方々で問題になつてゐるやうですけれど、もつと嚴正に批判される必要がありますね。思想としてどれ丈の獨立した價値がありますか。革命途上のロシヤの特殊な社會事情と引離して考へたら間違ひでせう。若い人達がそのまゝ受け容れるのは全く危險ですよ。あなたのおつしやる通り實際女性の自己破壞への道ですからね。

A しかしわたしたちもこんなことを言ふやうになつたのはそれだけ時代おくれになつたといふのでせうねえ、やつぱり舊くなつたのだわね(笑ふ)

B 何にせよ、女性といふものをおつくりになつた神さまは今日のこの戀愛觀には大反對でせうよ、きつと。

Aわたしはかう思ひますね、自分が生存してゐるこの一つ時代しか見てゐないやうなものには本當のことは分りやしないとね。

B今の時代はとにかく女が餘程しつかりと女性といふものを掴んでかゝらないととんでもないところへもつて行かれさうで危險ですね。コロンタイ女史は美貌で幾人もの男性から愛されもし、愛しもしたといふけれど、どうも戀愛の門を出たり入つたりしてゐただけなんぢやないでせうか。そこへいくとエレンケイね、あの人は生涯獨身で暮したといふのに、戀愛の門の中のずつと奥深くにひらける世界の景色までよく知つてゐたのには驚きますね。

A女性の心情をその本質に於てしつかりと把握してゐたからでせう。ケイの社會思想は過去のものとなつても、女性そのものについて、又母性そのものについて言つたことには色々の眞理がありますね。――それはさうとあなた「婦人公論」に宇野千代子さんが書いていらつしやるのお讀みになつて？

Bえゝ

Aわたくし、ゆうべ讀んで感心しました。感心といふと妙な言ひ方かも知れませんけれど、現在の自分自身のことを、とにかくあれだけしつかりしたそしてちつともいやみのない態度で、書かれたことは、やつぱり作家でなければ出來にくいことでせう。わたしは始めから終りまでたいへんあの人に對していゝ感じをもつて讀み通しましたわ。前の號に出てゐた原阿佐緒さんの「悲しき破局」などとはその書いてゐた態度が比較になりませんものね。尤も比較するのが間違つてゐるかも知れませんけれど。

Bおきまりの三角關係からの家庭破壞でないところにちよつと心をひかれました、なるほどさうもあつたらうとうなづける點も多うございました。平凡な言ひ草のやうですけれど、あの方たちにもお子さんが出來てゐたらだいぶん違つたものになつてゐたらうにと思ひましたね。

Aさう、男と女とが性として向合つてゐるだけでなく、ふたりの子供に對する共同の責任者としての別な關係が當然出來て來ますからね。

B勿論それもさうですけれど、又一つには愛するもの同志が同棲すると、とかく自由な――といふよりも自由な爲に放縱になり易いお互の性生活が、子供によつて、自然と適當に調節されてゐやしなかつたかといふ氣がしたのです。ずいぶん單純な見方、考へ方だとおつしやるでせうけれど　これは同棲後の成長にとつて可成重大な問題ではないでせうか。自由なだけそれだけ夫婦間の性行爲には自律的な制限が大いに必要だと思ひますね。戀愛の天國と地獄の岐路だとさへあたしは誇張なしにほんとに思ひます。あの方たちの七年間の戀愛生活もひよつとかするとその邊に地獄の門の扉が口を明けてゐやしなかつたでせうか。

A夫婦間の性行爲が習慣的な只のくりかへしになることは實際おそろしい事ですね。醜いことですね。戀愛の墮落、喪失ですね。全くその點は同感ですわ。

B愛するもの同士はお互の愛のために出來るだけ性行爲を制限することです。たとへどんなに制限しても過ぎたといふことはないでせう。あたしは昔からききふるされた東洋流の禁慾とか制慾とかいふやうな消極的な德の本當の深い意味が戀愛生活の上でも解つたやうな氣がします。先達もね、早稲田大學生だといふ若い人たちが見えてね――一人は支那人でしたが――、わたしは例の日支

關係の話でもするつもりで訪ねて來たのかと思つてゐましたら、さうでもなく、いろ／＼な雜談の間にとう／＼戀愛問題が出ました。でわたしはその人たちにもやつぱりこの制限論を話したのです。戀愛は自由なものだから自分で出來るだけ制限しなければいけない。安つぽく肯定すべきものでないつてね。尤もその時は夫婦間の場合ではありませんでしたけれど。つまり大きな本當の戀愛の肯定のための否定をですね。

A　夫婦間の性道德といへば、今迄は「戀愛即貞操」といふことに盡きてゐて、それ以上のことも、それ以外のことも全く言はれてゐないやうですね。

B　夫婦間の性生活の自主的制限！　十年、二十年、いえ生涯に亘る結婚生活を通じていつでも、又いつまでも、童貞と處女の心で相愛することの出來る夫婦！　人間の戀愛感情はここまで深められ、淸めらるべきものだと思ひますね。

A　あなたが戀愛の永遠性とおつしやつたのもそのことなの？　あなたはやつぱりわたし以上の戀愛の理想主義者ね。浪漫主義者ね。

（昭和三、一二、五）

悼　小山内薫氏

劇壇の先驅者小山内薫氏を今失つた事は傷みに堪えません。政府はなんらかの方法で此人の殘した夥しい功績を、充分に讃へるべきだと思ひます。

冬の夜のゆく道遠し曉遠し、燈とる人よいづこにかゆく。

むぐらの吐息



[illegible]加[illegible]乃

時雨

十二月廿五日夜の東京日日新聞主催の「大東京座談會」の席上で復興の途上にある大東京は、最初の豫算三十億の時から十億に削られた時まで、一千萬圓の國立劇場建築費が保存されてあつたが、終に最後の七億になつて消滅してしまつたといふことを、復興局長官の堀切善次郎氏によつて語られた。

讀もの中心の座談會では、もとより長講を誰しもが謹しんで避けてゐる。と、共にあまり專門的な質問で時間を逸し、面白くない記事をよぎなくする事も失禮である。で、ぐつと安く——三十錢位で見せてもらはなければ、國立劇場が出來ても仕樣がないとあたしは言つた。堀切氏も同感だといはれ、尾佐竹猛氏は、一體國立劇場といふのは無代で見せるものではないかと言はれた。

國立劇場といふものが無代のものかどうかを知らないあたしは——各國の國立劇場がどういふ組織のものか、寡聞なあたしはこんな時小山内氏に聞くのだが、悲しくも恰度其日其夜、本紙十月號記載上田文子氏の「晩春騷夜」上演記念の會で發病逝去されてしまつた——無代ならば大變結構なことと思つた。だが、さて、その無代といふことについて考へさせられた。

假に無代として、どういふ觀客が無代でその劇場へ招じられるか？　お上のお仕事である——其實は市民の懷から出てゐるお金であるけれど——服裝は何々、資格はどうといふことになると、十圓の入場料でも五圓でも出せる人が、豪然とただで濟ましつかへつてはひつてゆくやうになる。そのほかには作家だとか、俳優だとか劇場關係者の家族が、何か素晴らしい特權でももつた人間のやうな顏をしてのさばりかへる。と、いふのは、あたしは何時も劇場について見て不愉快なのは、觀劇費の幾割かを觀客からもらつて生活してゐる人間が、ぬつとした顏をしてゐたり、平等の藝術愛好者でなければならないのに、いささかの座席の料金の差がつくらせる大面な上等席のブルジョア見物の顏である。それ故、折角の無代であらうとも、一千萬圓も建築費にかけた其立派な劇場は國賓を招く場合があるとか、なんとかかんとか名をつけて、いはゆる庶民はいつも三

階、もしくは四階五階へ押上げられて一等席は貴女紳士と名づけられるものでなくては許せないとなるとなんのための無代ぞやと言ひたくなる。

そこで、そんな、創られて消えてしまつた案などにコダわつてゐないで、あたしはいつもあたしのユートピアだと笑はれる、あたしの案の大劇場論をここですこしばかりいひたい。ばか〳〵しいと思ふ利口者は讀まないでもよいし、理想を實現してくれたいといふ人があれば三拜九拜する。

食べられない人が多くあるのに、夢のやうな大劇場論など何が必要だと、女人藝術のお友達には叱られるかも知れないが、あたしは脚本作家である故か劇場の方のことが妙に頭を支配する。

そこで、あたしはずつと前から大小二ッの劇場がほしいと思つてゐる。一ッは最も小さい、會員組織――單に藝術にたづさはる者のみによるもので、他から望まれたなりは或ば一夕の觀覧料を貳百圓からとるかも知れない。なぜならこの會員は、演者も道具方も音樂も、上演脚本もみな會員から出たもので、しかもその劇場の維持費さへ負擔しなければならない集りであるから、そこへ頭を突つ込んで、他で見られない高級演劇を見やうとならば、貳百圓が參百圓でも出せる側の人たちには安いものであらう。といふと、この劇はその限られた會員以外には、見るすべがないのかといふとさうではない、それはも一ッの大劇場の方へゆく人たち――民衆劇場とでも大衆劇場とでも、その名はなんでもよい、そこへゆけばおなじものを見る事が出來るのだ。要するに小劇場で吟味された劇が大衆の前へ、もつとも安價に示されるためにその小劇場の必要があるのだ。

なぜそんな餘計な手數をかけるのだと言はれるかも知れないが、今の世はあまり安かれ惡かれにしつけられてゐる。大量生産のものは品が惡いとされてゐる。(圓本は別)そして勢ひそれが當前のことになつて、惡いが安いからがまんするとなつてゐる。それがいやだからで、價で見せるのではない、正しい藝術を、みんなの心の糧のたしに――心の糧といふほどにならずとも、せめて肥しぐらゐにでもなるやうに――それが望ましいのだ。ほんとに藝術を守るものと大衆との握手、富で買ふ人たちだけが不自由する――そんな劇場の一つや二ッあつてもよい筈だ、ぜひ持ちたい。

でも興行者側はなんといふか? 少しでも障りになるか? いえ、ちつとも痛痒は感じないであらうと思ふ。第一見物が在來の劇場側にちつとも屬してゐない――這入りたくてもはひれない人たちだから。では、高給で抱へてゐる俳優たちを動かされては? さうした心配もまづ無用だと思はれる。小劇場によつて試演される劇は、高價な場代を拂つて樂しむ見物にはあまりよろこばれない代物だと、いはゆる玄人筋は樂觀するだらう。俳優は給金をとつてはやれない芝居を、眞に力一ぱいに――それは出來不出來や人氣が生活を脅やかさないグループの中だから、ほんとに熱心にやれるよろこびをもつて眠つてしまつた藝術慾と、おとろへた生活力を盛返すであらう。そしてこの小劇場の會員である事を誇らしくさへ思はなければならなく思ふだらう。尤も此舞臺では役者の等級はない。十代目市川團十郎より、名なしの權兵衞氏の方が、權助の役においてすぐれてゐれば、それが主役であらうと、合議の結果は大劇場の舞臺に出されるなりは組みかへられることになる。

此處で三十錢說を繰りかへして稱へる。三十錢は安いやうでまだ

高いがこれは單に觀劇料ばかりではない。食べものも含んでゐるので、最初から好むところを述べると、切符は赤、靑、白、などの色によつて食事劵をも代用する。そして、二階に三階に、左右に、いづれの食堂もよき食事をすこしの騷音もなく、その日の入場者の數と、最初の指定によつた數を、みだれずに配置よく、一人の不滿もないやうに、美くしく心地よく並べる。食事の不滿があつては、いかによき演劇を見せたからとてなんにもならない。

氣の早い人はもうここらで笑ふでせう。なるほど夢だと――三十錢で、どうしてそんなに何もかもが出來るかと。

それは立派な劇場を建てるのは非常な金を要し、幾人かの株主がそれを出すかはりに、出したが最後、支出金の何十倍に達する利益を收めたからとて、もうよいよとは決していはない、だから、こんな劇場は出來やう筈もないが、建築費は無論勘定には入れない、あとはみんな勞資協定、必然な費用だけ引いて一錢づつでも殘りを割る。一厘でも一毛でも積立をする。或は最初は無給かも知れない、又は幾錢かを受取る千兩役者も出來るかも知れない。――しかし、料理人もボーイも、切符賣りも道具方も、むだをはぶけば――つまり怠けてはゐられないと思へば、不必要な懷手をしてゐるおかひこぐるみの道樂者は退いてしまう。不入りな高價な興行をつゞけるよりは、一年三百六十五日の日はかなりなものを運ぶから三十錢滿員の方が、或は遙によい成績をあげないとはいへない。そして利息をもつていつてしまはないから、關係者たちは直に利益をうけることが出來る。そこで、雇はれた者でない本當の親切が劇場の全部にみなぎる。

で、その配當は見物の方へも割り戻されてよいわけであるが、數多き人を一人づゝ記入しておく事は出來ないから、その配當をもつて、ますます設備をよくしなければならない。雨の日雪の日の自動車は、本所行、市外行、深川行といふ風に、一目にしてわかるやうに赤い塗や靑い色で現はし、なる可く無料で老幼婦女から送り出すやうにする。自動車の厄介にならない男子たちには地下室に理髮や浴場を、入口には靴磨きを――これはちつとおせつかいめくが、誰しも好んでむさぐるしいのを悅ぶものはない。心地よさはやはらぎを與へるものである。そのやはらぎこそ人類が生きてゆくのに大切な愛ではないか。

細かしくいへばこの最小劇場の土地は、辨慶橋の中あたりの靜かなところ、長椅子の三ッ四ッをおき、座るとも腰かけるとも隨意で二階もなにもない。たゞ舞臺をこわさないだけの柔らかみのある、贅澤でない居心地のよい無裝飾にちかい一室、階下や階上は、俱樂部や讀書室に貸して、劇場の維持費を助けさせることなど。

復興局案國立劇場設立地は丸の內の印刷局のあとだつたさうだが、あたしの大劇場は、丸の內なんてお役所ぢみたところには建てたくない。すこし片寄るが、隅田川を裏にして、淺草藏前の以前の高等工業學校のあつたあたりにしたい。靜かに開演を待つ若人が河にむかつた讀書室の欄によつて思索し、或はボートをうかべて樂しみ、老人はまたそれを見て笑む――そんなよきことは出來ないであらうか? 借問す、みなさん。

ことのついでに

寶塚歌劇の創始者で、箕面電鐵の專務で、先年脚本集をくださつた東京電燈の重役――近年芝居道の方も大資本家化したので、當り前のことではあるが、劇壇のお仲間にしてはお氣の毒な氣のするほど立派な、小林一三氏のお口から、最近二度ばかり妙なことをきいた。

一度は久米正雄氏の渡歐送別會の席上だつたが、その時はあんまり氣にしなかつたのでわすれてしまつたが、十二月二十日東京會館で松竹の大谷、白井兩氏の祝賀會が終つたあと、ふとした座談のはしが耳に殘つてゐる。

控室の隅の長椅子の前に、菊池寛氏とあたしと三宅やす子氏とが居た。そこへ小山内氏が來て――その時話したのが最後となつたが――「毛剃」を見てくれるなら(歌舞伎座、左團次所演)早く行かないと元船のところが五分位で幕になるからといはれた。それからまた高橋が(左團次)家内が雜誌へ何を話したかと心配してゐたが、などと話してゐた時、山本有三氏が寄つて來られ、その他の人と小林氏とがあつた。その時小林氏はあつさりとかういふ意味のことをいつた。

「今に役者がゑらくなると、脚本作家なんかは入らなくなる。あつたところが、あゝ書け、かう書けと注文される位なものだ」

「そんな馬鹿なことはない」と否定する山本氏の聲が極立つてきこえた。菊池氏や小山内氏は笑つてゐた。

思ひ出すとその前に、テーブルスピーチでも小林氏は俳優高級論をとなへてゐた。今よりももつと高給を彼等に與へよといふのであつた。

その場にもつとも多く――殆んどといつてよいほどゐた俳優諸氏をよろこばせるための、資本家の奸手段――お上手と見ればなんでもないが、また、おだてられて、さうだと思ふ役者もある筈はないが、武陵桃源郷もあるものだと思つた。

といつても、あたしの近くには、小林氏を當代實業家中の異材として嘆美してゐる人もある。わたしもまた異敬してはゐるが、役者全體がシエクスピアになるものではない。最も俳優が、全々違つた方面から巣立つたらば知らないことだが――だが、それほどの人材ばかり出たら傀儡となつて叫び狂ふ自己の職業に滿足するかどうか?

この小林氏も大劇場をもつ抱負のある事を述べられた。これは直にも實行力のある人の仕事だから確固たるもので早晩實現されるものに相違ない。願はくば消滅した國立劇場の如く、無代ともゆくまいが安くしてください。但し俳優高級論とは一致しまいが――

これは小林氏にお願ひする。

婦人に公民權を附與することは趣旨に於て何等妨げないが、凡て公民權の附與は眞に婦人大衆がこれを要求してゐることを前提要件とするから、現時の如く一部には運動が繼續されてゐても本當の輿論とならない限りは時期尙早とみる外はない云々——望月內相聲明——

——與謝野晶子——

善事は國民全部が要求しないでも、之を奬勵し、普及せしめ、實現するのが最も明白なる道理です。明治初年に國民敎育の普及を實行したのを初め、總ての文化的施設が國民の要求を待たず、少數者の要求に促されて實現せられたのです。望月氏がこの自明の道理を知られない筈はありませんから、純理論と實際的見地とから、直接御面會の上、同氏の反省をお促し下さいまし。女子の進出に由るのでなければ、政界の革正は出來ません。その事が却つて旣成政治家に怖ろしいのでせう。

——奧　むめお——

望月內相の意見は、支配階級の誰しもがよく云ふところです。公民權の如きは（參政權もさうですが）女であるといふ單なる性別理由で決して拒むべきものではないものを、勝手に拒んでゐて勝手に理由づけてゐる手前味噌にすぎません。かういふことを取上げて問題にする程でもありますまい。

むしろ婦人達は、彼等がなほかくも當然なる婦人の權利を自分達の裁斷一つで考へもし、考へざることも勝手の樣に思ひこんでゐることの愚を思ひ知らせてやるべきだと思ふのです。そしてその爲にこそ、婦人全體のもつと根強い聲が必要と存じます。

——平林たい子——

內相の言葉は、本音です。公民權の樣な些少な權利でも、支配階級は利用以外の目的では決して與へません。「輿論」が高くなつた時は最も與へ甲斐のある時であり卽ち最も利用價値のある時期であり、「與へなければもうだませない」時期なんです。ところが未だそんなに「輿論」が高くない時は、强いて與へるにも及ばない時で、それになるべくなら、女なんていふものは家の中にとぢこめておくべき無能力者の樣に扱つておいた方が彼等には得なんです。生產要素として、新しい搾取の對象物として女の需要はますますふえるから、女が家庭外に出ることを、彼等は絕對に嫌つてゐるわけでもないが女を卑しめておく習慣は、賃銀の上でも家族制度維持のためにも非常に必要なんです。與へた方が得か與へない方が得かも少し考へるんでせう。

——菊川靜子——

望月氏すらも公民權附與の趣旨には反對でないと云つてゐる程であるから、婦人にも公民權が必要である事についてはここに申さぬ。元來あらゆる自由獲得の鬪爭は常に前進分子によつて起された。しかして、現在に於ては、婦人の政治的自由獲得の叫びは、工場、農場、毫所、街頭の各所に起つて來てゐる。にも拘らず望月氏が、婦人の公民權の要は「婦人大衆の要望でなく、一部婦人の運動にすぎぬ」と云つてゐるが、それは最後迄奴隸的待遇に甘んずる有閑婦人と待合藝者のみを以つて、婦人を論ずる彼等のみの言葉である。そして又全婦人大衆の政治的自由要求の叫びに仕方なくチラつかせた參政權を、いつの間にか公民權に、すりかへる藝當の出來る彼等のみの言葉である。婦人大衆は公民權と共にすべての參政權を要求してゐる。五十五議會を通じてその後の大衆運動を起すべきである。

――松本　正枝――

婦人に遲かれ早かれ公民權を與へると云ふ事は政治家たるもの丶少しも異議をはさまない事でせう。婦人が公民權を持たずに支配されてゐるといふ事は即ち婦人を勝手に無理に支配してゐる事になりますがそれに公民權を與へて支配するならば貴方樣の支配毛頭異議無之と云ふ證書を出させて支配する事になりますから政治には便利でせう。婦人が漸次に自覺して來て完全な社會的自由平等の理想を抱いて來る時、此れはその眼光をゴマ化すいゝお菓子です。今日婦人の單なる對異性的ばかりでなく社會的の自覺が日進月歩する時婦人に公民權の與へられるのは時期の問題にすぎません。故に私共の任務は此の公民權の與へらるゝ時期の遲速を如何する事でなく、發達しつゝある婦人の社會的自覺を如何して此のお菓子に依つて阻碍されずに益々發達させるかと云ふ問題を研究するにあると思ひます。公民權の行使は支配の承認であり、隷屬の甘受である事を暴露しなければならぬと思ひます。

――葵　イツ子――

「まだ一部分の運動であるから」と云ふ。では最後の一人までが、殘らず要求しなければ時期尚早と云ふのであらうか。否大多數で無いと云ふのであらう。だが、明治維新も、憲法發布も、普選も、一部分の運動で斷行されて、効果を收めてゐる。「婦人の現在の能力では難かし過ぎる」と云ふ考へも混つてゐるのであらうが、大多數の人間の利益の爲の行動と、その反對とを見別けることは、現代人の常識では餘りにも簡單である。

――松田　解子――

思想善導の名の下に國民の大々的な動作と、解放運動彈壓を事としてゐる內相の立場としては、資本家地主の繁榮のために如何なる意味での、デモクラシーをも大衆に附與したくないのが本統だらう。婦人の公民權附與に就いても婦人大衆が要求してゐないからと云ふ口實で時期尚早を稱えるのはむしろ當然の事だ。――婦人大衆の階級的自覺と力によつてのみ、正しい意味での公民權の獲得も、引いては全ての政治的自由の獲得をも成し遂げられる事と思ふ。

――望月百合子――

强權を基礎として大泥棒組織の今日の社會に仲間入りをさせて貰ふ公民權などと云ふものは、そも〳〵婦人を侮辱するものであります。それを與へないといふ愚な人物のあることも不思議です。また婦人が暴動でも起さない限りまだ輿論がそこまで到達してゐないなどと望月さんがお考へになるのは、今日の政治家といふものが如何に愚劣なものだかといふことを表白するものでありませう。

――窪川いね子――

普通選擧法の施行に依つて、居住年限、年齡の制限、また昨春の普通選擧等に於て見られたる言語に絕した政府の干涉（殊に左翼選出の候補者に對する計畫的斷壓は注目すべきである。）にも關らず、ブルジヨワジーに對する支配階級の恐怖は說明するまでもない。かゝる事實に依つて見ても、婦人公民權に對する望月內相の時期尚早論など、あまりに見えすいた欺瞞である。然し、公民權の獲得に依つて、市町村自治機關であり、ブルジヨワの支配下に於ける自治機關である限り、何ら勞働者農民無產婦人の利益と幸福のための機關たらしめ得ない。山川均一派の左翼、鈴木文治等の右翼、兩社會民主々義者が稱ふるところの、自治機關に我々の代表を多數參加せしめる事によつて何等かの期待をかけ得るかの如きは、支配階級の味方となつて、勞働者農民階級を欺くものである。私たちはこの自治機關に參加することによつて、私たちの鬪爭舞

臺をより一層擴大强化しなければならない。
十八歳以上の男女に選擧權を與へよ。
市町村長を一般市町村民の公選にしろ。

——金子しげり——

あの新聞記事に對しては、何日の何會議で決定したといふ程のはつきりしたものでないので、信用しかねます。但しあの內容である內相の意向は、已に前々より洩れきいてゐるのと同一であります。そして望月氏その人の婦人觀としてそれは今更驚くほどのものでもありません。婦選附與反對の有力なる一の議論に時期尙早論があり、これは絕對反對論より始末の惡い（表面反對と見えないから）實際運動者いぢめの論ですが、いつ迄たつてもこの論者はなくなりますまい。これに對して今度の場合特に私共としては方法を講じやうとは思ひません。むしろ當面の東京市會選擧に對する實際運動を猛烈に起す事によつて、婦人は公民權を如何に行使するかを暗示しようと思つてゐます。

——堺　眞柄——

單なる口實にすぎないと思はれます。婦人大衆が要求すれば何でも附與してくれるなら何百萬の女工や何千萬の職業婦人の生活に必要なお金をドシ／＼附與したら、よさ相なものではありませんか。無産階級の女は、貧乏を取除きたいために、これほど、あへぎ、これほど叫んでゐるではありませんか。これほど本當な輿論はないではありませんか、望月內相はもつと正直に『自分に都合の惡いことはギリ／＼まで引ばつてゆきたい』といへばいいのです。

——堀江かど江——

現代の社會制度に於ての議會的進出は結局或程度の改良主義に終るものですから、この問題に就て興味を持ちません。

——八木　秋子——

時期尙早といふのは內相の遁辭でせう。私は思ひます。政府が公民權を與へないのは、與へては危險なほど婦人の新興階級が尖銳になつてゐる爲だと　英國の俚諺一つ。「懇願するものは與へられず强請するものは少し與へられ、奪ふ者は全てを得るなり。」全的自由といふものはこの金言の法則によつて得られるのではないでせうか。

——菊池小夜子——

望月內相の言はブルジョア政治家が婦人大衆の眞の生活と要求——婦人の生活は今日尙家庭奴隷の地位を脫してゐない。從つて婦人は家庭奴隷からの解放を心から要求してゐる。——をいさゝかも知らないと言ふ事を、先づ第一に雄辯に語つてゐます。時期尙早などゝは全く大衆をゴマカス詭辯であり、噴飯に耐えません。制限選擧に等しい普選であつたとはいへ、選擧權を最も眞面目に行使したのは新所有者でありましたし、買收に乘つたのは殆どブルジョアと小ブルジョアと農民の一部であつたといふ事實はプロレタリア階級の政治に對する眞面目な態度を證明してゐます。時期尙早などゝいふことは、それを實施して後、その實際を見て始めて云ひ得ることでありますし、又政治的敎育は大衆がその舞臺で演說してのみ敎育されるのです。とはいへ、我々プロレタリア婦人は公民權が與へられたとしても、決してそれだけに滿足するものでもなく、婦人の眞の解放があるとも思ひません、勿論、公民權の獲得を始め、その他一切の男女不平等的諸制度の徹廢のため、又同一勞働に對する男女同一賃銀獲得のため、戰はなければなりませんが、それと同時に、それらの鬪爭を通じて、プロレタリアが政權を奪取しない限り、婦人の解放は絕體にないといふことを勞働婦人大衆に知らしめることにありませう。しかも婦人大衆は今やことを急速に自覺しゝつあるのです。尙一言忘れて

ならないことは、望月内相を始め、一切のブルジョア政治家がこのやうに常に婦人大衆の要求を裏切つてきたことであり、それ故、かゝる政治家は永久に決して婦人の味方でないといふ事です。婦人を解放するもの、婦人の解放のために眞に犠牲的に戰ふものこそが、婦人のための政治家かと存じます。

――織本　貞代――

望月内相の婦人公民權云々につき、我々無產婦人は政府が參政權を與へずして、畸形的に公民權のみを與へんとすることに僞瞞政治の正體を見此の態度に執拗に反對するものであります。併したとへ公民權のみであつても、それを通じて婦人が政治的に敎育され、訓練されて行くことの效果を見れば、それに積極的反對はしなかつたのです。そして『日本の婦人には未だ政治的訓練なきが故に先づ公民權を與へて婦人に政治的訓練を與へ、然る後參政權を與へようといふのが、政友會幹事會の公民權のみに限る表面の理由ではなかつたか？されば今更に輿論とならない限り時期尙早等と云ひ出す望月內相は一般婦人の利害を些かも代表し得ないのみか己が所屬してゐる黨の意嚮すら代表し得ない無能大臣といはざるを得ません。第二は我々は支配階級は常に被壓迫階級を蹂躙し去る。被壓迫階級は支配階級からすべての自由を奪ひ取るべきもので與へらるゝを待つべきではない事を說いて來たのですが、輿論とならなければ與へる必要がないといふ、望月內相の言は 以上の我々の主張を完全に裏書きするものといへませう。我々は支配階級が決して無產階級乃至婦人大衆の利害を代表し得ない。否むしろ自己の存續上無產階級乃至婦人大衆を僞瞞せんとする以外には決してわれ／＼の要求を充すものでない事をはつきりと知るのです。

――永島　暢子――

民衆の要望に對して、時機尙早とか過激とかいつて壓迫する事は、支配階級の常套手段で、今に始まつた事ではないのですから、今更望月內相が、婦人公民權について時機尙早といつたからとて、別に驚くには當りますまい。彼等の支配的心理は、自分の思ふ事だけ民衆も思ひ、欲する事だけ欲するとこけの樣に考へてゐる事は、食に飢ゑ、自由を縛られてゐる無產階級が、自己の非人間的な鐵鎖を斷ち切らうとして、身を賭して鬪爭するのを、あらゆる彈壓で以て押へつけ、そして平和の御代だとか、萬民は幸福だとか空うそぶいてゐる事でも明かでありませう。ですから彼等は、いよ／＼、臺閣にしがみつきが出來なくなつた時に、僞瞞的に婦人公民權を持ち出し、切り札として用ふる時でなければ澎湃たる公民權並に參政權結社權獲得要求の聲は、輿論として耳に響かない事でありませう。

叩頭運動で、當然なる自分の權利を、有り難く頂戴しやうと思ふ事からして腐つた根性なので、私達は、彼等支配階級が、時機尙早と思ふと否とに拘らず、堂々と獲得する樣彼等に對して鬪爭すべきだと思ひます。

お問ひ合せとは別ですが、最近婦人運動は何から始むべきか、が再考される樣になつた事は婦人運動の一進展として喜ばしい事です。しかし誰も常識的な一般理論ばかり言はれるには耳蛸です。しかも口や筆では、強く階級的運動を力說し、實行上では、ブルヂョア婦人運動に曳かれてゐるのでは、運動家諸君の原稿料をふやすか、世間的に名高くなるのが關の山で、一般婦人大衆には何等の關係がないといふもの、寧ろ婦人大衆の歸趨を迷はせるものではないでせうか。それはとにかく、まづ當面の問題婦人公民權を皮切りにでもして、大衆にもはつきりと肯かれる樣な鬪爭の展開される事を希望して止みません。


當世住吉踊
女人藝術應援
肝チイサキ男

文壇動物園 （女人入園無料）

（昭和四年度現在）

ヴイタミン缺乏の鵜	志賀直哉
毛の抜けた孔雀	佐藤春夫
鮫	谷崎潤一郎
牝鹿	谷崎精二
白雀	秋田雨雀
山鳥	泉鏡花
山猫	室伏高信
茶色の兎	本荘可宗
コマネズミ	有島生馬
ゐのしゝ	青野季吉
リス	里見弴
星をねらふ狼公	稲垣足穂
はぜ	池谷信三郎
カメレオン	宇野浩二
喧嘩魚	岡田三郎
足のない章魚	小川未明
鹿	尾崎士郎
食用蛙	加藤武雄
河馬	木蘇穀
カンガルー	近松秋江
かもしか	片岡鐵兵
鰹節	加藤一夫
手長猿	久米正雄
フランネル製の象	久保田萬太郎
あうむ	小島政二郎

ローザ・ルクセンブルグの手紙を見て

あさの・あさ

此夏讀んだ本のうち「ローザ・ルクセンブルグの手紙」は私に實に深い感動を與へた。

この手紙を見て私の世界は非常に廣く且つ明るくなつたと感じた。長谷川如是閑氏は序文に「現代の女性に是非とも讀ませたい」と云つて居られる。私も亦之を讀み終へて是非とも現代の女性に讀ませたいと痛感した。

代表的な革命家であり、社會主義者であつた彼女の手紙は、一九一六年七月から一九一八年十月までの間にベルリン、ウロンケ、ブレスラウの監獄中から、同志カール・リーブクネヒトの妻ソフイー・リーブクネヒトに宛てゝ書かれたものである。私はこれらの手紙を見て、彼女の自然に對する深い愛をしみじみ思つた。

彼女は獄中に於て觀察し得る限りの動物、植物、その他自然界の現象について一々細くしらべ澤山の發見をしてゐる。彼女は部屋に飛びこんで來た蜂を再び、瀕死のヒオドシ蝶を助け、椋鳥が二三日鳴かぬと云つて、何か襲つたことでもあつたのかと心を痛め、毆りつけられて血を流す野牛を見ては、一緒に泣いてゐる。そして彼女は云ふ「あなた、私の代りに自分でうんと凡ての物を味はつて下さい……それは吾々が人生で決してよけいに得すぎる例のない常に同じ新らしさの刺戟を持つた、そして我々にいつも眞實に止る唯一のものです」又

「こゝでは人達は楡の木の植つた街に十年も住んでゐて、而も花をつけた楡がどんな風に見えるかを未だ「注意」しなかつたのです。そして同じ愚鈍さが一般に動物に對してもです。大多數の都會人は根を立ち割つて見れば本當に粗野な野蠻人です」

昨冬、秋田刑務所に於て社會主義者某の自

墨いか	ささき もさく
くさつても鯛	島崎藤村
獏	武林無想庵
鵜	辻　潤
ゴンボ鯨	田山花袋
くん製さけ	德田秋聲
かます	千葉龜雄
三毛猫	細田源吉
ブルドツク	前田河廣一郎
みゝづく	正宗白鳥
朝鮮虎	眞山青果
沼の主山椒魚	三上於菟吉
人道ゴリラ	武者小路實篤
むじな	室生犀星
穴熊	安成二郎
からす	中河與一
なまけもの	直木三十五
ヒグマ	中村武羅夫
近代的狸	新居格
龍のおとし子	葉山嘉樹
温なしくなつた豹	廣津和郎
もぐら	藤澤清造
縞馬	藤森成吉
七面鳥	細田民樹
正覺坊	北原白秋
太刀魚	西條八十
象	菊池寛
諂ふ老猫	野口雨情

殺したといふ報道を聞いた時、——ぴりぴりと膝から背から傳はるきびしい寒さ、ぽたぽた落ちる鼻水、その中にうんと自己を支持せねばならぬ——その樣を想像して深く考へさせられた事があつた。

　が、今彼女の手紙を見た時、何と之は喜びに滿ちて居ることであらう。彼女は幾度か「今こゝでは何て美しいことでせう。凡ては綠し、花咲いてゐます。」「今は何たる宵、何たる夜でせう。筆にし難い人の魂を奪ふやうな美しさが、凡ての物の上に横はつてゐます」と讃美の言葉を放つてゐる。

　夜——彼女は薄暗い獄屋の中で石のやうに硬い寢床の上に横臥してゐる。窓から街頭の反射が掛蒲團の上に落ち、時折汽車の遠い響と窓下の哨兵の咳嗽と硬ばつた脚を動かす爲めに重い長靴を徐ろに運ぶ時の砂のきしりとが聞える外、何の音もない。墓場の中のやうな靜寂さの漂ふ闇の中で彼女は微笑む。そして考へる。

　「自分が始終喜ばしい狂悦の中に生きてゐるのは何といふ珍らしいことであらう。——私は此等の複雜な闇黑や、倦怠や、不自由や、冬の黑布に包まれて靜かに横はつてをる。——そして其の時、私の心臟は恰も私が眩しい日光を浴びながら花咲く牧場を行くかのやうに解し難い内的歡喜から動悸をうつ……」

　彼女は人生に對してほゝえんで居るのであつた。ソフイーに對しても

　「どんな狀態にあつても人生の美しいこと、喜ばしい事を知覺せられ、それで以つてあなたも亦狂悦の中に生き、絢爛な牧場を行かれるやうな魔法鍵をあなたにお傳へしたい」と云つてゐる。

　あゝ、この信念こそ、ローザ・ルクセンブルグの實に廣い自由な精神の世界、自然の世界に呼吸してゐる事を證するものでなくて何であらうか。

　女は愛慾以外の世界に住めないとある人は云つた。私たちは私たちの周圍を見る時、あまりに狹い世界の中で、あまりに小さな人間同志の感情にのみかゝはつてはゐないだらうか。私たちは自分達の住む自然界に對して、あまりに無關心ではないだらうか。

　銀座を散歩する令孃達、映畫に、音樂に、芝居に、買物に行くを以つて足れりとする所謂上層社會の女性達は、ローザ・ルクセンブルグの云ふ「粗野な野蠻人」でなければ幸である。

禿鷹	野口米次郎
スペイン猫	堀口大學
眠り好き針鼠	山本有三
カナリヤ	吉田弦二郎
なまこ	生田春月

女流植物園（男性入園無料）

（昭和四年度現在）

シクラメン	さゝきふさ
鈴蘭	山本安英
牡丹	岡本かの子
黄色い蓮	柳原白蓮
うまごやし	神近市子
桃	小寺菊子
緋のカンナ	宇野千代
夕顔	眞杉靜枝
西瓜の花	三宅やす子
鬼あざみ	深尾すま子
鐵砲百合	中條百合子
白梅	野上彌生
みせばや草	葵イッ子
カカリア	林英美子
蠟梅	鷹野つぎ
濱朝顔	目次緋佐子
深紅のダリア	深澤紅子
ざくろ	樺山千代
白桃	上田文子
ぎぼし	堀江かど江

ある手紙

竹内てるよ

「二十九年の間、私は空奉公をして、いま、自分の葬式のために金を貯める心がけをしなければならない」

小母さん

あなたはさう云つて、しみ〴〵泣きました。

利己主義な夫につかへて三十年、髪の毛も白くなり、からだも舊の健康がすべて失はれて、いまになつてしみ〴〵と人間の孤獨をかんじてゐる小母さん、あなたの大切な三人の子供が、それ〴〵大きくなつて一人前になつたときに、あなたはその子供達の中に、どうにもならないあるものを感じて、そして、子供も頼りにならないと云つて嘆いてゐるのです。あなたの家は、無一文から漸く成り上つて、家作の二三軒も持ち、相當な資産をも造ることが出來ました。薄給の夫に仕へて、今日を築くまでには、恐らく血と汗のかくれた勞力が拂はれてゐるであらうことは私達にもようく判ります。いま、一番上を大學を卒業させ、二番目を相當な家庭に片づけ、あなたは廣い家の中に、事ずみに似た氣持で毎日を送りながら、そしてその毎日をしみ〴〵と人生の孤獨を感じてゐるなどゝは、お氣の毒な不幸なことにちがひありません。

小母さん

あなたの心持はようく判ります、成程、金をためることに一生をつひやした夫は、金が出來たとき、老年のあなたを出てゆけがしにするでせう、成程、この子達のためにだけ一生を堪え忍んだとあなたは思つたのに、子供達の魂ははるかにはるかにあなたを離れて、遠くあこがれてゐるのでせう。

あなたは、その水の中につかつてゐるやうな淋しい淋しい毎日に、この自分の絶望は、何から來たのかとお考へになつたことがあるでせうか、その來るところ遠く且つ深く、すでにあなたが現在の生活をはじめるときから根ざしてゐたすべての不合理なのだと、かり

ぼけ	今井邦子
つゝじ	太田菊子
白桔梗	中田信子
露草	素川絹子
雁來紅	長谷川春子
野茨	篠田ちか子
蝦夷菊	中本たか子
木蓮	平塚らいてふ
松葉牡丹	生田花世
ほうせんくわ	大原アヤ子
月見草	窪川いね子
野菊	網野菊
もくせい	富本一枝
凌霄花	森三千代
八重山吹	原阿佐緒
おいらん草	英美子
寒菊	竹中繁子
我亦紅	山川菊榮
山茶花	甲斐仁代
朝顔	若杉鳥子
ポンポンダリア	望月百合子
桃色のスヰートピー	城しづか
桃色カアネーション	北川千代
風船かづら	杉浦みどり
紅いチユリツプ	大井さち子
しやぼてん	伊福部敬子
すかんぽの花	尾崎みどり
サルビヤ	野溝七生

にもお氣づきになる時があつたならば――

小母さん

あなたは今日の絶望を、立派に乘り切ることが出來るのだと、私達は思ひます。

小母さん

あなたは、人のためにあなたの一生を生きたと思つていらつしやるでせう。

あなたの純情を夫と子供にかたむけつくして、あなたのいはゆるふみにじられた三十年を持ち、報いられるものは無學な母としての子供らからの冷笑、老いたる役立たずの妻としての利己主義の夫の冷酷。

小母さん

あなたの今はじめて知るその底知れぬ孤獨は、誰もの胸にある孤獨です。强權と、手前勝手と、殺し合ひと、まちがつた制度の下にいのち悲しく生きて來た、誰もの持つてゐる淋しさです、さうです、どうすることも出來ないやり場なさです。純情を持ち、正しい人間らしい心持を持つて生きたときには、傷けられなければならない氣持です。併し、もし私にかう云ふ僭越を許して下さるならば、小母さんは、人のために生きることにも、完全に生き切つてはいらつしやらないと思はれます。小母さんは子供達に、報いを求めていらつしやるからです、子供達を小母さんの子供達にしやうと思つていらつしやるからです。子供達は、決して親のものではないと申し上げましたら、あなたはさぞ非難なさるでせう、けれども、今後の社會にあつて、今後成長して來る子供達は、恐らく、且ての時代のように、親孝行といふ一つの概念づけられたもののために、自己の一切をすてゝしまふようなことはしないでせうと思はれます。

小母さん

小母さんの三十年の生活を、今日になつてもし泣かねばならないならば、泣いて泣き沈むだけのものであるならば、これは當然、事の今日にならない前に、小母さん自身ですてゝしまふべき生活でありました。

小母さん

小母さんの三十年のその空奉公を、もう一度、安心と、希望とにおくことは、ほんとうにたやすい事ではないでせうか。小母さんの子供に對する愛を、もう一歩、たつた一歩でいゝから深くすることです。

小母さんは嘗ての日に、三人の子供らを產む動機について、子供らに、生んでやつたと恩に着せる何を持つていらつしやいますか。生んで育てゝやつたから親孝行をしろとい

白い芍薬	龜高文子
うどの花	高群逸枝
雪のした	澤ゆき
山ざくら	與謝野晶子
ガーベラ	高安やす子
へちまの花	吉屋信子
れんぎやう	中河幹子
野ぶどう	米澤順子
しだ	八木秋子
乙女椿	平林たい子
淡紅色のコスモス	ダン・ミチ子
さくら草	戸田豐子
赤いダリヤ	高橋鈴子
りんどうの花	岡田八千代
蘭	長谷川時雨
すゝき	八木さわ子
茄子の花	新妻伊都子
あぢさゐ	若山嘉志子
柿の花	柿内青葉
立藤の花	正宗乙未
霧島つゝじ	中原綾子
白いジンジヤ	有馬さと江
ひまわり	佐藤美子
ライラック	萩野綾子
アマリヽス	關鑑子
紅薔薇	關屋敏子
夾竹桃	武岡鶴代
黄水仙	立松房子

ふ、何を持つていらつしやいますか。もしも子供が、この下らない、僞ばつかりの世の中に、何故生んだのかと反問したら、どうお答へになるでせう。

生殖は人間本能の中でも最も重大な意義を持ちます、よしんば小母さんの結婚生活が、小母さんの本意ではない生活であつたとしても、否、さうであればなほ、小母さんは子供達の成長と、自由と、進出を引止める、何の資格もないことが、お思ひ出されにはならないでせうか。親としての愛、母としての愛、その愛が、小母さんの一生の灯であつたならばなほ、子供らが、社會人として、一人の人間として成長してゆくことに、小母さんはおさへ切れない光をおかんじになるのではないでせうか、このとき、最も孤獨なる人間の、その孤獨をけとばして、大ぜいになるために社會へ結合してゆく、子供達の進出と突切る意志の前に、あまりにも小さい小母さんの愛と、あまりにもせまい絶望をごらんになるでせう。手をひろげて下さい、抱いて下さい。利己主義な夫の家に、三十年のたゝかひを戰つたあなたの力を、あなた、そして未來のあなた、過去のあなた、現在のあなた、血にまみれ、足げにされて死んで行つた多くの母のために、正しい愛に生きやうとする子供の、ほんとうのものを知つてやつて下さい。

小母さん

問題はあなた一人ではないのです。

あなたの子供が、あなたに孝行をしないこと――その孝行が、あまりにも單純ですが――が、たとひあなたを、死の境地にまで行かしめたとしても、あなたの子供達は親のためにだけ存在するやうな嘗てのよこしまな思想をぬけて、まちがつた社會の中に、まつすぐに目をひらいて生きやうとするほんとうにうれしい新芽ではないでせうか。

小母さん

まとまらないことを云つてしまひました。あなたには、私の云ふことがすべて反逆にしかきこえないでせう。併し、子供は決して親の所有物ではない。まして、親孝行のために存在するものではないと、私達は思ふのです。あなたにも、そして私達にもひとしくある、生きてゆくための絶望、それを無くすることのためにのみ、私達は、あへてあなた達をすてるのだと、時が來たらばお判りになるでせう。

小母さん

ほんとうにそれまで――ほんとうにそれま

ユスラウメ　永井郁子
蜀紅　松平里子
黃薔薇　柳　兼子
しどめ　江口章子
男郎花　永島暢子
三色菫　松村みれ子
八ツ手の花　加藤鐸子
撫子　壺田花子
露の花　水町京子
錢あふひ　水谷靜子
白藤　茅野雅子
大根の花　市川房枝
馬れい薯の花　金子しげり
藤袴　奥　むめを

小サロン

紫の麗人と自ら名乘る深尾須磨子女史、コレット女史のレアを譯した「紫の戀」が出來上ると、卽日一本を携へて長谷川時雨を訪問し、コレット女史の日常を細微に語りつくして、八疊の室半分もある大寢臺の構造を自分も造るのだといふ。

寢臺一ぱいの紫色の大ふとんを三ツも重ねて誰もが胡座でその上で話すのだときかされ、では貴女のところへゆくと胡座をかかなくつてはいけないのですかと時雨が恐々として問ふと、深尾女史事もなげに其肩

で、生きてゆく人間の當然の權利、その上につみ重ねられた、多くの制度と邪な僞、利己主義をもつて、最上とすることのみにくいみんなの間違ひ、――よし、百年、千年、一萬年であらうとも、人間が、人間を取りかへすときが來たなら、――そのときあなたのやうに嘆く母親もなく、あなたの夫のやうに妻をしひたげる父親もなくなるであらうとを信じて、もう一度考へなほして下さい。

あなたが、一個の自分ひとりのことのみでなく、それよりももう一歩さきの自分が判つて下さるときがあつたとしたら、あなたは、廣い家の中にねても起きても、絕望と向ひ合つてゐることはなくなるでせう。

最後に、僭越を御わびして、御健康を祝つておきます。

母として

藤ゆき子

私は女性であつた、と同時に妻であり母でもあつた。女性であると云ふ事に何の不思議も感じない自分は、妻である事に、又母である事の爲めに樣々な事に考させられる事が多い。否惱み苦しみさへもする。單に女と云ふ立場から見れば異性に追從する猫の如なものでもよいのであつたか知れない、異性の性慾の爲めに存在し彼等を樂しませ、生活さする爲めの存在であつてもよい。何故に?。化粧し衣裳に工夫をこらす女の存在は彼女自ら樂しむのみの故ではない。それによつて對者である異性の眼を引く爲めに外ならないではないか。此の世界に異性の存在を消したら、女性の美は何の爲めに光りを增す事が出來やう。變態的な同性愛にしても男性同志に於けるよりも女性同志にはげしく又不純なのが多いと云ふ事も、女は愛されなければ生きてゆけないからではないだらうか。妻はすでに充たされた女性の姿であつた。

そこまでは從的な生活であり無意識な成長であつてもよい。

母となる事によつて彼女の生活は全然その

を打つて、いえ來てもらうのは、無論男ばかりですハツハツハツハ、私は七いろの戀をしやうと思つてゐる。

×

その話を聞いたものが、深尾さんの七種の戀つてほんとですかと時雨にきくと、トンガラシの様にキイたから本氣でせうと。

×

女人藝術社編輯部の忘年會へお客に加入した翁久元氏、文藝春秋社の鈴木氏亨氏が餘興の劍舞に入用だから袴を脱いてかせといふと、どうしてもいけないといふ。代つて安成二郎氏が袴はかしたが、翁さんの斷はる言葉が振るつてゐる「なにしろ米國からかへつてから、これで三度目に穿いた袴だから、脱いだらあとの方がつかない。」その辭を金子しげり先生――どうしたのか其日金子さんを呼ぶに先生と男の方で敬意を表してゐた――が聞洩らさず、「ではおくさまがおはかせになるのですか？ すると貞操帶ですね」と、翁さん大ニコ〳〵、四邊を巡る女史連盃をあげて翁氏のために乾盃する。

×

城さんが朝がへりするお正月
おとそによつたのだから仕方がないわ。

立場を替るのだ。すべてに受動的な昨日から能動的な自分をとりかへさなければならない。自己を主として生きる處に母がなければならない。もう其時は異性の爲めの女性の存在ではなく。生活をすら超越した、人類の爲めの母であるのだ。然し、母となつた日も彼女は女であり妻であるのだ、そこに昨日をすてかねる自分があり苦惱がともなふ。

女性は單に女性であつた日は無自覺であつてもよい婦人解放運動によつて男子と互してても何程の事があらう。母性である日は男子と歩調をそろへてゐる位な事で何になるのだ。

一歩を否數歩を先んじて母性の愛は歩まなくてはならない。それほどの自覺を持つてこそ妻としての立場の中にも母性の愛は成長して行けやう。私は思ふ。夫の愛を信じ切れない場合はある。しかもその人の子たる幼なき者へ、母の愛は裏切り得ない。若しも母性愛も戀愛、性慾の變態的示現であると云ふなら、私は正しき理性によつて母こそは神の愛であり萬物への聖愛であると斷言しやう。

あらゆる苦惱をも母性の愛は淨化する。

そこに最も弱かつた女は最も強き母として人生を馭してゆく。戀愛の自由を認める私も母である日はすでに女性の自由は子供を基調として始められなければならないと思ふ。

故に女性を束縛するものはその子であり。母として復活させより昨日より高き自由に導くものもその子であると信じられる。

私は始めに妻であり母である事の爲めに苦しみ惱むと云つた。私も又情痴の世界では平凡な女であり妻でもあるのだ。愛慾の焰に感情の燃えゆく日もあつた。しかも母である爲めに私はすべてを理念の中に思考しなければならなかつた。究めゆく處に哲學がある。すべての先哲はそこに様々な事實を理智の奥にあるものを敎へ示してくれるであらう。

然し、私は信ずる。女性は、人生の母であらねばならぬ事によつて、男子よりも以上に哲學し、より深く究め進まなければならない。否異性より以上の哲學を求め所有しなければならないのであると。

滿洲路上交錯曲

新妻伊都子

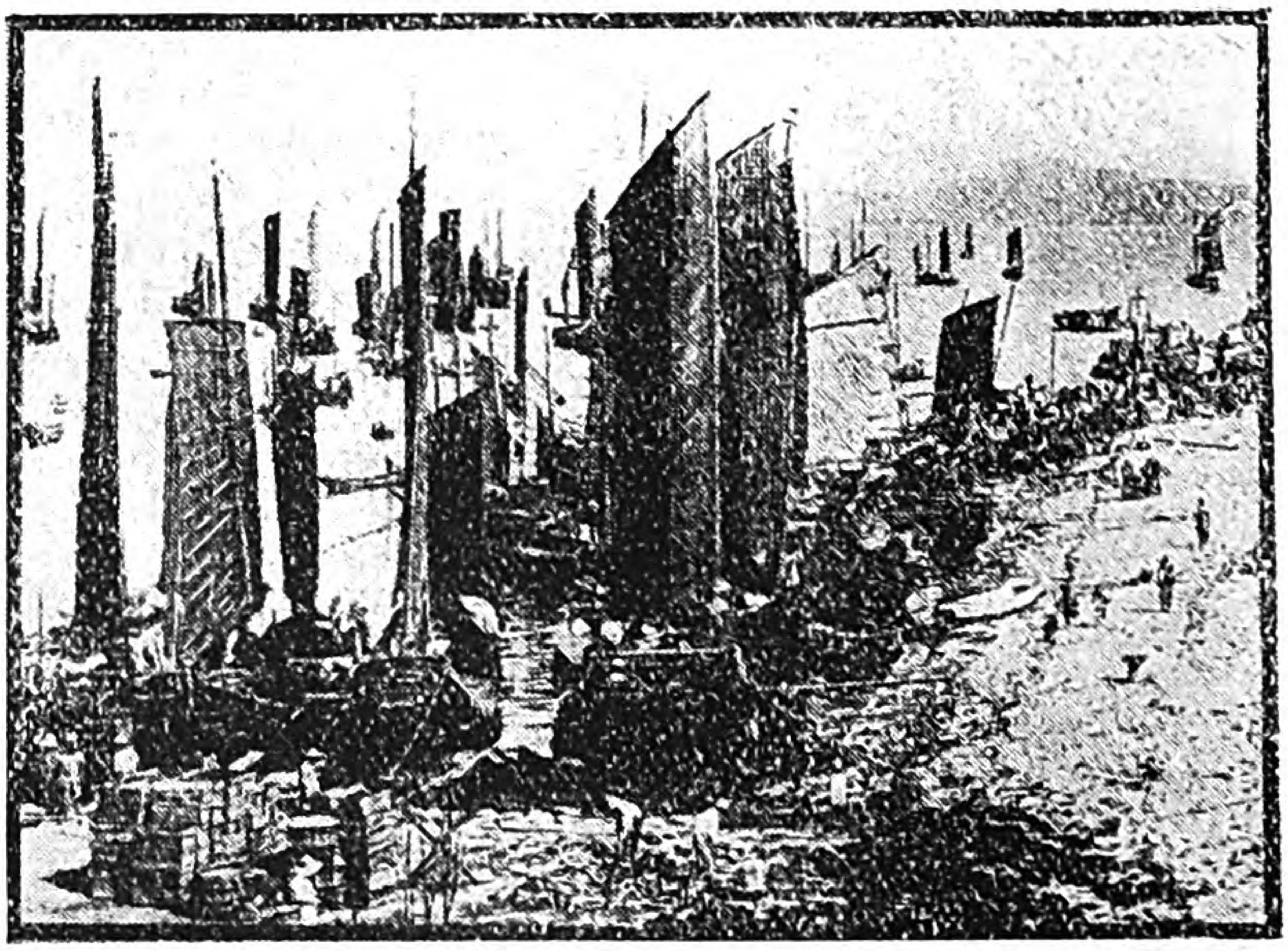
豚ちゃん

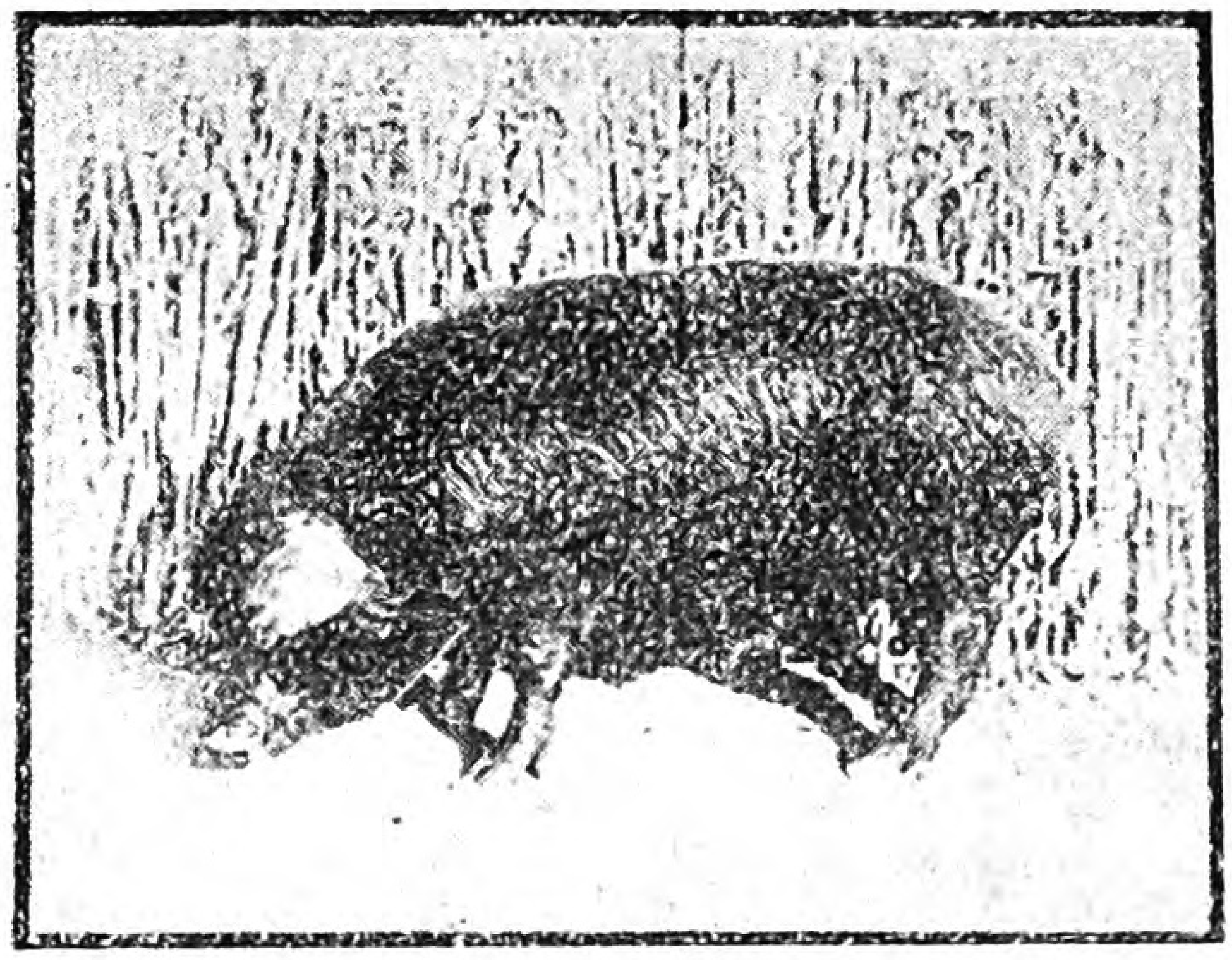
お日さま　くるり
くろ〱と　青空をのぼる
ぶたの子　ころり
ころげろ〱
いくらころげても　野はひろい

これは滿洲唱歌集のなかにある、島木赤彦氏作の『ぶたの子』です。本當に、見るかぎり擴がつて居る曠野に、眞赤な陽ざしがながられて居る大地に、黑いおべゝを着て、まるまると肥つた、そして細い短いしつぽを振りながら、ころ〱ころがりながら、餌をあさつて居る豚ちやんは、實に可愛らしいものです。まだ學校へ行きざかりの子供等が、手に鞭をもつて、十數匹も居る豚ちやんの親玉にとなり、此愛すべきもの等と遊んで居ます。豚ちやんは小さい支配者の云ひつけをよく守つて、呼ばれゝばすぐついてゆきます。

小さい支配者にも遊び友達が居ます。五ッ六ッ位ゐの男の兒は、お腹から下はぺろりと出して居ます。まあ、おちやん〱のやうなもの一枚しか着て居ないと思へば間違ひはありますまい。それが眞夏ではありませんよ、十月の初旬、內地よりずつと寒いので、丁度攝氏の十度ぐらゐだつたでせう。幾人もさういふ子供を見ましたが、お腹の皮が厚いのでせうか、ともかく、私達は自分達を標準にして考へるので、見る度びかなり心配してしまひました。

ガシヤ〱〱〱〱、これは鵲の鳴聲です鵲と云ふと、すぐ百人一首のなかにある『鵲の渡せる橋に……』を思ひ出しますが、滿洲には隨分澤山居ます。一名朝鮮烏と云つて、烏よりすこし小さく、兩の翼だけが白くはありますが、他は眞黑で、一寸烏に似て居ます。此烏は大陸的な支那人の傍に居て見習つて居るせいか、大變鷹揚でもあり、ずう〱しくもあり、とても本家の烏は、其點では敗けてしまひませう。と云ふわけは、自動車が爆音たてて走つて行つても、路上に遊んで居る鵲は、轢れさうになるまで逃げません。『權兵衛が種まきや烏がほぢくる』と云ふ俗諺がありますが、鵲はこれ以上です。支那人が麥の種蒔きをして居ましたが、其後から鵲がせつせと種を啄いばんで居るのです。シイーと逐へ





ば、ガアーとも云はずに、次の筋へ行つてなほも食べ續けて居るのです。豚ちやんも隨分呑氣者です。鵲が背に止つて居るのに、平氣な顔で遊んで居ます。

おみくじ

道教のお寺へ寄りました。

幾つも〲。澤山ある部屋毎に、それ〲の佛様が飾つてあつて、お賽銭を待つて居ました。たかが一錢や二錢で御利益を買はうとするのもかなり蟲のいゝ話ですが、それでも願事をする氣になるから嬉しいものです。

金色に輝く御佛がずらりと並んだ、その前のテーブルの上に、筮竹のような細い棒が、いくつもの筒の中に入れてあるのを見て、私達は『おみくじ』であらうと察したのでした。

『あなたは男科つての取つて御覧なさい、男難の相があるかも知れないのよ』

云はれるまゝに男科を一本引きました。坊さんはその棒を無言で受けとつて、部屋の周圍一面につる下げられてある、その中の紙切れを一枚もつてきて呉れました。

呂　第二籤　男科
祖　服藥須靜坐　不可殺心機
靈　三七還爾復　一劑可行軀
籤　白芍二錢　甘葛　蒼木各一錢　金銀花
　二錢　酸棗仁一錢　甘草八分
　引黄土一塊　燈心一子　忌五辛

いやはや、とんだ男難のおみくじでありました。男科は即ち男の病に對する處方箋であつたのでした。當るも八卦、當らぬも八卦、疝氣に頭痛の藥でもよし、肺病に淋病の藥も信んじようできくのかも知れませぬ。

卜(うらな)ひは問科でなければいけないことを知つたので、もう一本頂戴しました。けんげんこうり〲、來年の運勢がよくつて下さいますやう。

大清宮呂祖樓
純陽道祖　降奉靈籤
墻傾屋折　大勢已裂
防而無悔　土崩地決

當つた様な、當らない様な、當らない様な、當つた様な、くすぐつたい感じがします。

俳優

滿洲と云つてもほんの小部分、關東洲の取締り得る關内に、俳優が二、五二九人居ます。何とお驚きにはなりませんか、たかが關東洲



全部と、鐵道附屬地とで、ようやく奈良縣一縣程もないと云ふのに、こんなに俳優が居ては、さぞやさぞかしお芝居は全盛であらうとお思ひになるでせう。

すこし種を明かすには早やすぎますが、まあおきゝ下さい。此俳優と云ふのは、舞臺で芝居をする俳優のことではなく、支那人の娼妓のことなのです。何故に娼婦のことを特に俳優とよんで居るかと云ひますと、日本人の娼婦なみに彼女等を取りあつかふことが出來ないので、形式上賣娼婦とは認めずに取締つて居るわけなのです。日本人の娼婦は檢黴をしなければならないのですが、支那人のそれは、民族的な習慣から無理にも檢黴は出來ないのださうです。そのかはり、病毒を多くもつ彼女等に日本人を接近せしめない爲、支那人の妓樓には日本人を登樓させないように、禁じても居れば、又日本人を遊興させたことが知れゝば、その樓主に苛重な罰金を課することになつて居るのです。

俳優が澤山居ると、一寸驚かしてみましたものゝ、底を割つてみればつまらぬ事でした。



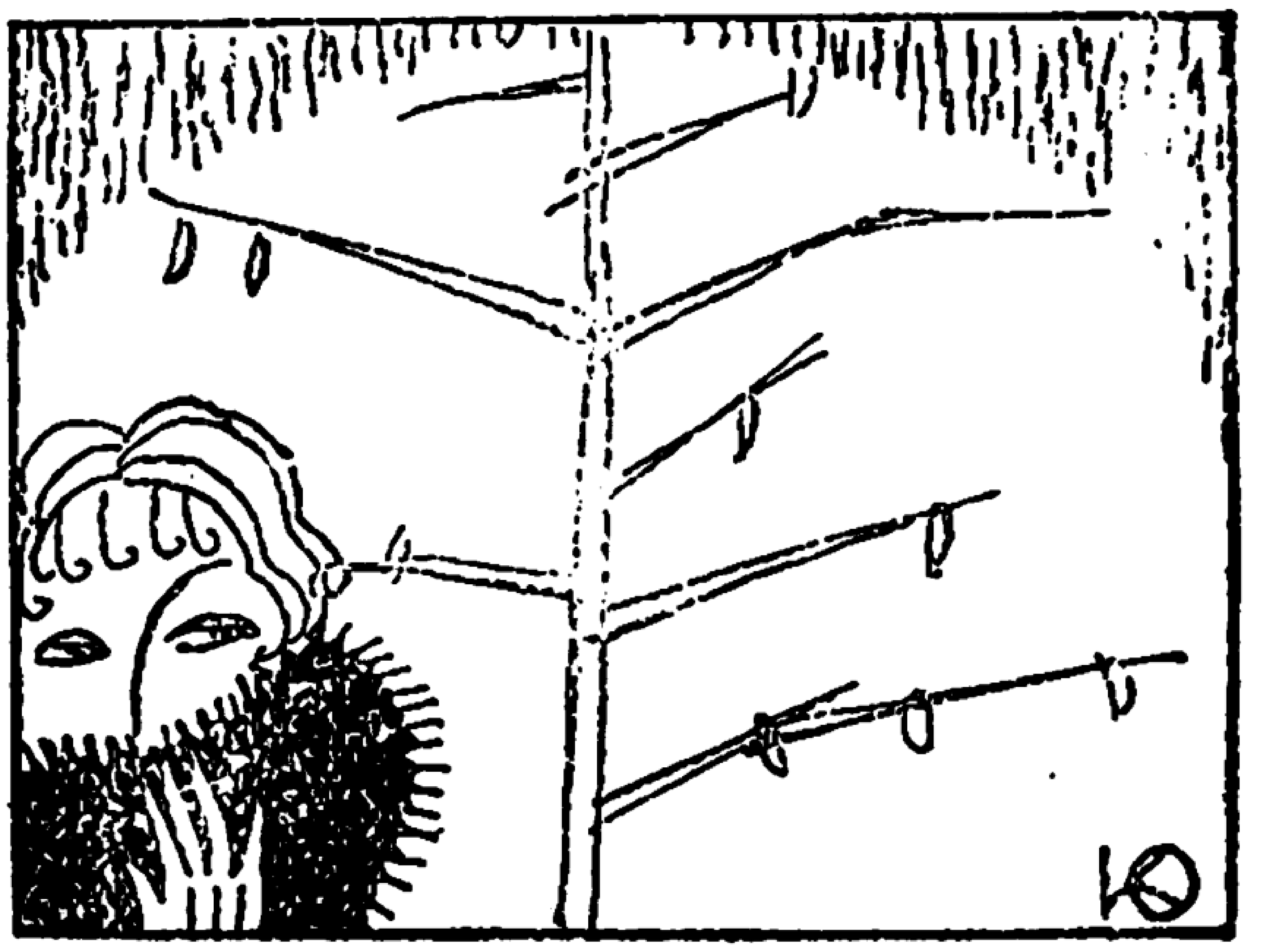
ついでに支那の藝者のことをつけたしませう。支那の藝者と云へば、日本のいきなねえさんを思ひ出させるやうに、一種特別の美しい藝者風俗があらうと思つて居ましたのに、これはまた、私の出會つた子は、羅紗の支那服に、斷髪姿、すこぶるつきのモガさん、蛇皮線や胡弓は少々古くさいのですが、それに合せて唄ふ歌も、河々曲をアルトでと云ひたいし、オペラものの一部をサプラノでなどと申したい唄ひぶりでした。もとより音調をわざと新らしく研究したものでもありますまいが、日本音樂より、はるかに聲の出し方など西洋音樂に似て居ると思ひました。

纏足から斷髪へ、急激な支那の變化を此藝者の中にみいだしたのでした。

路上交錯曲も家の中へはいつて藝者の歌まできいてしまつたのですから、この邊でやめておきませう。(三、十二、二十五)

小サロン

女人藝術社の二階から洩れろ床しい爪彈きの音——お鏡びらきのよろの團欒にめづらしや時雨女史が昔なつかしくも三味線の弦をひきしめた。彈くは時雨女史うたふは新妻女史。まつた長唄の唄ひ手はかはり合つて。——江島生馬の切々たろ情緒のなかに歔りなきのこゑが洩れろではありませんか。見ろと、城しづか女史がさめざめと咽んでゐろ。戀愛の永續性がはらんだ玉の涙かと思つたら意外——城女史の曰く「ああ、時雨さんの粋なこと——わたしこの氣分にもう魅せられちやつて——」



みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリツト
望月百合子譯

第一章——三

その夜、ボア・ド・ブロオニュの輪伐林を貫いて、ロンシャンの競馬場と、セエヌ河とに沿つた道を、一臺の自動車が緩やかに辷つてゐた。ヘッドライトは遠くから、瀝靑を引いたやうな舖道や、光線の輝やかしい束の中に、夢幻的な葉叢を垂らしてゐる樹立を照らした。そして通りすがりには、森の下陰の叢林や灌木の側面を扇形に照らし出した。

見えないけれど、黑い爽やかな流れが想像される大河の近くだのに、空氣は生溫く重たかつた。沈默が、休息が――都會からこれだけ離れたばかりで、かくも和ごやかな――天鵞絨のやうな空から降りてゐた。濃靑の空はサン・クルウの丘の上のあたりでは星のまたゝきをちりばめ、巴里の上あたりでは、混然とした反射が、春の夜の褐色がゝつたうす明りを漂はせてゐた。

『いい氣持ちだこと！』とシモンヌ、ルルダルは、落つかない調子で呟やいた。ヘッドライトの光りに明滅する半影をぢつと見つめ乍ら……彼女は光りの屆かない蠱惑的な暗を、その暗の怪しげな愛の巢を見透さうとしてゐた。

『いい氣持ちだ！』と、彼女と竝んでハンドルの前に腰かけてゐたピエール・ルボオも氣のない調子で言つた。『だが私達は餘り早すぎたと思ふがね』

その朝、アニックにあんな速達を出した――ルルダル夫人の嫉妬で喧嘩をした揚句――けれども、實際は、彼は巴里を發つたのではなかつた。シモンヌと彼は大型トルペドの中に、たつた二人きり

だ。そして厄介な證據人になる運轉手はゐない。ルルダルはフロイドと性愛説の講演をしに、前夜、リヨンに向けて出發したのであつた。この物質主義至上論の著者は、歯が抜けたり、頭が禿げたりすると、思想も變つて、さう云ふまだ頭髪もふさ／＼としてゐるし、元氣でもあつた青年時代に愛した思想の君臨時代がくるといふことに耐えられなくなつてゐた。

『けど、こゝよ…ね？　小路の角の古いアカシア…こゝよ、みんなの自動車が集るのは、ロンシャールがさう云つてゐたぢやないの』とルルダル夫人が注意した。

ロンシャールは、あの有名なヴィングレ鑛山の千萬長者で、アッペル紙の自稱共和主義重役で、同時に貫目をつけるために、バス・セエヌ縣選出の反動代議士であつて、ピエール・ルポオやシモンヌ・ルルダル同様、倦怠から常に新らしい刺戟を求めて、かうした冒險に興味を持つてゐた。かうして時代におもね、頽廢に荒み切つた彼等は、常に極度の流行的放蕩に走るのであつた。

ポア・ド・ブロオニュの無禮講は、最近に始つたものだ。けれど、それは夜會の喫煙室の會話ばかりではなく、新聞の社會面をも賑はすやうな遊蕩だ。かうした遊びに馴れてゐるルポオは『郊外の街の汚行』といふ記事を書いて、モダーンや藝人達が怪しい人間と密會しにメニイルモンタンの方へ行くと胡魔化した。そして社說では『戰慄すべき亂行』の題下に、貞操や社會利益の上からこの『一掃』を力說した。

この記事は輿論を動かした。けれどもその代り、ある無頼漢達から來た強迫狀はルポオをびつくりさせた。それでその翌日直ちに、彼は自分には、フランスの健康のために、僞善や弱點に遭遇する度にそれを公表する義務があるのだと聲明した。

アカシアの小路の附近は、戰爭前旣に、浮浪人や、變想性慾者達の姦淫と、野合の戀人達の樂しみの場所になつてゐた。ヌイイの森のやうになつてゐた。そしてこの惡風は次第に擴まつて、やがて森全體を浸してしまひ、今ではロンシャンの木かげにまでうよ／＼するやうになつた。賭博仲間や見物人も行つた。森の茂みに入つた後では、木立のない草原に出た。そこでは皆が車座になつて遊んだ。

あらゆる階級の女が、かうして古くからの賣春婦の仲間に加つた小さな墮落女工も、一日の勤を終つて、肉の切賣りをしにくるデパートの賣子も、心もお腹も空つぽな輕薄なモダーンも、常に新奇を求めるけば／＼しいお轉婆も、毎年巴里に道樂にくる外國女も…かうして始めは僅かな獨身者の放埒に過ぎなかつたのが、年々に擴がつて、いまではこの野合の實演や見物人が非常に殖えて來た。

胴が少し縊れてゐるけれども、無雙の器量自慢のル・ポオは、いかにも高潔な誠實らしい假面を被り乍ら、只一つの目的しか、人生に持つてはゐなかつた。それはあらゆるものを出來る限り享樂することだ。惡と怠屈とまた野心に蝕ばまれた魂にとつてはそれは複雜

な目的だ。彼のかうした追求を、シモンヌ・ルルダルは益々助長せしめた。

東洋の熱い血の混つた、ブルガリア系ユダヤ人の彼女は、マッサアジや、外科的手術にもかゝはらず、餘りに肥りすぎてゐるのを悲しんでゐた。そして注意深く、マホガニー色の卷毛の下に、巧みに伸された皮膚の創痕をかくしてゐた。

アッペル紙の藝術部長たる彼女は、年をとるにつれて、益々賣淫媒介に依つて、その地位にへばりついた。おべつかなお友達も、年頃を過ぎたモデル女も、人氣のない芝居者も、みんな彼女にとつては、『主人』の變り易い好色を引き止めるための役に立つのであつた

前夜も、モルヴアル家の晩餐の後に――『凡てたゞ』といふデパートの所有者の一人、レイクマイコーの勳章のための會――ロンシャールが煙草を口にくわえ乍ら、一隅で最近の冒險談をしてゐると、きゝてはもう誘惑された。

『まさかほんとに森はそんなかね？』とルボオは自分も加つた最近の冒險の時の事を思ひ出し乍ら、氣がなささうに白ばつくれた。

『あゝ、さうだつたよ、だがいまはもつと……』とロンシャールは嘲笑するやうに口をとがらし乍ら言つた。『詳しく話してくれ給へ！……』『だが夫人を赤面させると困るんでな……』『私は藝術家よ、畫家よ、だから男同志もおんなじことよ。お話なさいよ。なんだつて、きれいな人間には、きれいだわね』とシモンヌは宣言するやうに言つた。

そこでロンシヤールは、芥溜をぶちまけた、するとこの墮落女は感嘆して言つた。『何んですつて！……あなた、またランデエ・ヴウをしたんですつて？……ぢや、私達も行きませうよ、ねえ、ピエール？ あなただつて、ロンシャールさんのやうに見とく必要があつてよ……十八ですつて？ それやあ大變だわ、私には……ほんと？ ちやんとした人達？ まあ！…アントレエヴさん方や、あの美しいマックスなら、びつくりしませんけど！……でもレイヨが！ あの前の總理大臣だつた人が！……』『だが奥樣、勿論、レイヨだつて、貴女や私のやうに、只見にくるだけでせうよ。それにあの通り耄碌してゐるんですからな！ 何しろ政治つてものはやき餅やきの情婦のやうなもんですよ、他の情婦なんかにかまけでもすれば、ぢき復讐しますからな。レイヨの前には、ある貴族院議長が……だがあの有名なリュエイユの病院が、多くの名士及び政府の最高位の人物を泊めたことで誇り得ることを考へて御覧なさい。吾々の友人ユチエ自身も、もう半年もあの病院の最も立派な裝飾になつてゐるではありませんか？……だがルボオ君、もう何んとかしなけやならん時だよ、君のあの『牛糞』といふ印象をさ、右手に鞭をとつて、吾々國家の支柱は、政府の本堂を淸淨な水中に引き戻されねばならん時だよ……』

ルボオはくすぐつたいやうな氣持ちで、シモンヌが、よくきかう

として、ヴェールでもかぶるやうに、激しい非難と威儀で身を包んだのを思ひ出した……あんなに澤山の淫らな裸體を描き、そしてその描いた繪よりももつと多くの男を無造作に愛撫した女のくせに！……併し、結局、女嫌ひのルポオは、あらゆる女を、殊に玩具のやうに弄べる女を侵して蔑んでゐた。

『氣をおつけなさい！　自動車よ』

彼女は腕時計を見た。小さなランプのうす明りに、肥つた手首のダイヤモンドがきらめいた。

『十一時よ、あれはきつと連中の人達だわ。ヘッドライトをお消しなさい……そして約束の合圖でまたつけるのよ』

彼は息づまるやうな氣持ちで、言はれるまゝにした。彼等は注意深く竝んで控へてゐた。そして同じやうに體を縮め乍ら、各々待切れないやうな氣持ちをぢつと押へた。彼女は近づいてくる未知の唇の感覺を樂しみ、彼は、彼の官能を刺激するであらう幻影に好奇心をそゝられて……

自動車は靜かに、移動燈で步道や、小路を探し乍ら近づいて來た。そして通りすがりにづつと速力を緩めて、彼等に無遠慮な光りを投げた。

『いくたりです？』

『二人』

『ぢや、足らない！　また』

そして、ルポオがまだヘッドライトをつけない先に、これ等の道樂者達は遠ざかつてしまつた。

暑い空氣が重たくかぶさつた。時々逃げるやうな影が通つたり、暗に消えてしまふ前に、囁やき乍ら立ち止つたりした。獸性で重たくなつた暗は、混然とした活氣を帶びた木立を瞰下してゐた。

『今度こそ！』とルダル夫人が囁やいた……また他の自動車が、ポルト・ド・ラ・セエヌの方から進んで來た。不意に現はれたそのまばゆい光りは、細いリボンのやうな通や、木立の酸いやうなエメラルド色を、むき出しにしたり、吸ひ込んだりした。ルポオが發した合圖――二度、ヘッドライトをつけたり消したりする――に、仲間は同じ仕方で答へた。

『あの人達だ！』

高臺にくる前に、自動車は靜かに辷り乍らいつぱいの光りを投げた。ルポオも同時に照明燈を向けた……サンポオムはニッケルと、赤エナメルとで光りかゞやいてゐた。そしてその中には三人の女と三人の男が乘つてゐた。ルポオはアントレエグ夫妻と、マックス・ド・ロオムを知つてゐた。諸顏の知らない男がハンドルの前に乘つてゐた。侯爵はその男と並んで、つゝましやかな女のやうな樣子で、身を屈めてゐた。その後ろには、ミッシエルと、美しいマックスと、それに向ひ合つて厚化粧の娘達が二人――一人は茶色、一人はブロンド――くつくつと忍び笑ひをしてゐた。サンポオムは止つ

た。アントレエグ夫妻もマックス・ド・ロオムも、同時にルポオもシモンヌも車を降りた。『此處でお目にかゝるなんて！』『奥様……』『今晩は……』挨拶が一通りすむと、アントレェグは『これはヂムさんといふ私の調馬師です……一寸若い牡馬を試してみるんでさ』と紹介した。そして彼は左の眼鏡に單眼鏡をはめて、小さな、利益もない競馬の時の、馬大盡のやうな尊大さで笑つた。

『貴女がいらつしやるとは思ひませんでしたよ』

とマッス・ド・ロオムが言ふと、ルルダル夫人は辯解しかけた。

『實を言ふと、ロンシャールが……』

『そんなことどうだつていいわ！　一層愉快よ……』とミッシュルが言つた。

そして彼女はシモンヌを抱いて接吻した。母親の死後、アントレエグ夫人は再び、サロン・ジャックを近代風に塗りかへたり、大きくしたりして、開いてゐた。シモンヌ、又はそこに集る五本足の羊達や、選り抜きの四足獸の群の中によく調和してゐた……マックス・ド・ロオムは、永遠の、そして時によれば不死の候補者達が、あらゆる努力をしてゐる中で、榮冠をかち得た。そして、第十七區から一部選擧で選出されて、議會に入つてからは、文學的ハイカラと、政治上の議論の王者として、世人は彼を、美術院歳計豫算會の有力な委員として、やがては文部大臣となり、アカデミイ・フランセエズの會員になる——彼自身が仲間の新聞記者を使つて宣傳した噂——人として尊敬してゐた。

ピエール・ルポオとシモンヌは、ミッシェルと一緒に自分達の自動車に乗つた。そしてマックスはその自動車にもたれて、しづかに喋り始めた。最近の出來事が次ぎ次ぎに持ち出された……まづ、ヂネット・ユチエの離婚のこと。彼女はオンデュラ共和國の全權公使と再婚するさうだが、さうすればやつぱり公使夫人だ。だがそんなことは下らない！　併しともかくも三十萬法の利子收入は素敵だ……結局いい結婚だ。ブランシェ夫人——前に中性娘であつた！——が二人目の子供を産みかけてゐることをきくと、シモンヌ・ルルダルが言つた。

『二年たゝない中に二人！　捗が行くことね！……改悛て大したものだわ！』

『それや改悛のせいぢやなくつてよ。馬のせいよ』

『何んですつて？』とマックス・ド・ロオムは呆れて叫んだ。

ミッシェルは肩をすぼめて言つた。

『當り前よ！　器官の位地を變へるには馬乘りをする程いいことはないのよ。それはアメリカの有名なお醫者があの女に勸めたのよ』

『で、その後、あの女にお逢ひになつて？』

とシモンヌがきいた……、

『どうして、あの女は誰とも交際しないのよ。實の處、あの女は評判程の人ぢやないんだから……あの女はブルジョアよ！　惡いこ

とをするといふよりは寧ろ試みただけなのよ‥‥だけどあの女は、何事でも夢中になつて、殊に華々しくやる無邪氣な人なのよ。あの女は何んにもかくしませんよ。あの大きな滑稽にさへ見えるお腹をだつてかくさうとしないのよ。それに無作法なくらゐよ。昨日も、ベルギー藝術展で、あの女を見かけたんですがね‥‥そのお腹つたら！　そのお腹つたら！‥‥それは猥褻な‥‥』

『お話中を失禮だけれど‥‥』それはいつもの通り禮儀正しいアントレエグ氏であつた。彼は待遠いのだと言つた。

『ロンシャールが見えるまで、堤の方でも散歩して見ませんか？ヂムは喜んでお伴をしますよ。それはこのお孃さん方が退屈してゐなさる』と云つて二人の女を指さした。女達は心から親切さうに微笑した。

『併し若しロンシャールが來たら？』とルボオが反對した。

『そんなことは構はないことよ、あの人は場所を知つてゐるんだから、分りますよ！』とミッシェルが自動車を降り乍ら言つた。そしてマックスには構はずシモンヌを引つぱつて行つた。

『では僕は、殘つてゐます』とマックスはかまはれない口惜しまぎれに言つた『一本の美味しいシガレットは貴女方の體操程の效果がありますからね』

『そんなことを言つて！　何か意想外なことが起るかも知れなくつてよ』とミッシェルは言つた。

『何んですつて？　だが誰か車の番をしてゐなけりやなりませんよ』

『さうだとも、君の言ふ通りだ、ぢやうまくやり給へ』

みんなは小路から森の茂みの中に遠ざかつて行つた‥‥アントレエグとその一行は、ルボオが目ざしゐる森の草原に出ない先に分れてしまつた。ルボオはその草原を探した。

『おや、もう塞がつてゐる！』

そこでは、×と×が入り亂れて遊んでゐた‥‥シモンヌはミッシェルを空いてゐる方につれて行つた。ルボオは淫蕩な小聲を立て乍らダンスの仲間にはいつた。そして、そこで！　丁度！　動いてゐるマントの下に、輝やくばかりの裸體を見つけた‥‥彼はいきなり××ついた！‥‥そしてそれは忽ちみんなの夜宴となつた。生きた輪の鎖は、互に入り交り乍ら、暗い狂暴な力でほぐれて行つた。寒い程の陶醉、痙攣的な息ぎれ‥‥

一方、サンボオムに乘つたまゝ、眼にも耳にも注意を集中してゐたマックスには、實際、意想外なことが、ありふれた樂しみ以上のものをもつて近づかうとしてゐた。不意に暗闇から拔け出した一組の男女があつた。女は優雅な風姿をしてゐた。二人はしづかに通りすぎた。そして立止つて、また歸つて來た。男はひどい外國訛で囁

やいた。

『お獨りでは怠屈でせう？』

『え、非常に』

『しばらく私共の仲間におはいりになつてもいいですよ』

『いい思ひつきですな』

『そして、若しこの女が、貴方のお氣に入つたら……』と、その男は一方の腕で腰のあたりを抱いてゐる女を示した。『御遠慮なく、私が番をしてゐますからね』

その未知の、非常にあでやかな女は、小さな鋭い笑ひ聲を立てた。彼女の香料――白薔薇――は自動車の上まで薫つて來た……マックスは女を車に乘せた。そして『遠慮しなかつた』男は明らかに滿足さうだつた。彼は獨りはなれて、女のたえ入るやうな聲が證明する快樂を味つてゐた。

マックスの心はこの冒險の辛味でいつぱいになつた……この人達は、全くどう云ふ種類の人間だらう？ この快樂の後で、ブラウニングを出しはすまいか、そして『手を擧げろ！』と言ふかも知れないだが女は靜かに車を降りた。マックスはピストルポケットをさぐつたり、財布をさぐつたりした……併し只それだけでこの美味い心配から逃れた。調子の外れたこの一組は、默つて遠ざかつて行つた。

貂の毛皮に包まれた大理石のやうな女が起き上つた時、ルボオは思はずびつくりして叫んだ。彼は思ひがけなくも、ヴァリエテの花形リュス・メラックと最も深い交はりをしたのであつた。女は彼の顏を見分けようとして近づいた。

『おや！ ピエール・ルボオ……今晩は、いかが？』

彼は微笑しながら、一本の指を唇のところに持つて行つた。

『あたり前よ！』

二人を結びつけたのは祕密結社なのだもの……別な道を通つて、彼は鎭まつた氣持ちで自動車の方に歸つた。ミッシェルとシモンヌは何事もなかつたやうな極く普通な樣子で、彼の先に立つた。彼等が自動車の傍に歸りついた時、マックス・ド・ロオムは

『ほら、ロンシャールだ！』と指ざした。

二つのランプが夜の暗の孔のやうに光り乍ら、ムウドン・ド・ロンシャンの方から進んで來た。併しそれは非常にゆつくりだつたので老巧なルボオは

『あれは自動車ではないよ。二人の自動市乘りだよ、きつと……そして二人の査公だよ！ ほらね！ 平氣で話してゐようよ……』

と言つた。

丁度、偶然出逢つた友達ででもあるやうな、落ついた聲が交はされた。贅澤な二臺の自動車を見て、敬意を表した巡査は、これ等の風采に非の打ち處がないのみか、手の出しようもなく見える立派

な散策者を、尊敬の目なざしで見て過ぎた。

マックスは危險が去つたのを見ると、この夜警を一寸止めてみたら面白からうと思つた。彼はミッシェルから離れて、慇懃な會釋をするために、帽子の緣のあたりに、軍隊式に指を持つて行き乍ら、一歩進み出した。彼は四年間も陸軍大本營の補佐官をしてゐたり、保護官をしてゐたことがあるので、さうしたことは巧いものだつた。

『失禮！　君方、マッチを持つてゐられないだらうか？』

彼はポケットから黃金のシガレットケースをとり出した。

そして感動し乍ら一人の巡査が差出したマッチの火で、悠々と煙草を吸ひつけた……それから二人に大樣に『ありがたう、諸君！』と言ひ乍ら、一本づゝシガレットを與へた。二人の巡査は兵卒のやうに敬禮すると、また自動車に跨がつて行つてしまつた。

ルボオは笑ひ乍ら言つた。

『行き給へ！　よき僕べよ！　もつと遠くへ風紀を取締りに行き給へ。その間に吾々は稍一杯樂しむよ』

『それやアンドレエグの事だよ！　ものの三十分以上もたつてゐるのに……どうしたのか見に行きたいが！　その間にロンシャールが來るだらう。どうしたつて持つてゐなけやならないよ。あの男一人が吾々の行先を知つてゐるんだから……』

とこの國民の代表者は言つた。

ある方面からの苦情に刺激された警察の最近の宣言以來、用心深くなつたこの冶金家は、隣りの森のほとりまで、離れた場所を探しに行く一人だつた。その場所は――モルヒネ同樣、文學にも中毒してゐる侯爵の得意の引用に依れば――『心おきなく遊ぶに自由な處』だ。

數步行くと、マックスは四辻に出た。一番目の角がよささうに思へて、それを曲つた。長い準備が必要な侯爵は、都合のいい草原を待たないで、おくれず、この、危險味が一層快樂を增す甘さに浸らうとしてゐた。彼は、見つけられるといふ危險な魅力に依つてのみ、興奮する例の病人の一人であつた……マックス・ド・ロオムが現はれたので、彼の官能は頂點に達した。

アントレエグは起き上つて品よく衣服を正した。それから單眼鏡をかけて、競馬場の騎士の體重を衡る場所かのやうに口笛を吹いた。

『競馬がおしまひになつたところへ來ましたね』

ヂムは無作法にやじつた。その間に人形達は皺苦茶になつたスカートを輕く叩いた。そのとき好奇心に引きづられたシモンヌが現はれた。そしてこの調馬師のがつしりした體格に惚れ〴〵とした目なざしを投げかけた。ヂムは反身になつてしなをつくつて見せた。ルルダル夫人は、たしかに自分の氣持ちがヂムに通じたと思ひ乍ら、厩の主人と一緒にマックスに護られて、近道を通つて自動車の方に歸つた。

『何んて厭な女！』とブロンドのレアが呟やいた。

『うんざりするわ！』と茶色のフレッドが言つた。そしてヂムは

『他のだつてうんざりするよ』と結んだ。

三人共、ダンス場の二人の賣春婦と、馬丁上りの男は、自分達に金を拂ふ『野暮漢』達に對する卑しい者の輕蔑の感情で、お互に通じ合つてゐた。併し女達が『誰よ、あの女は？』ときいた時、ヂムは深い沈默で遮ぎつた。自分は引出されて、仕へる、只それだけだ。あゝ！　若し暇を出されるやうな不幸な日が來たら！　それまでは職業上の祕密だ。

『おや！』道に出た時、フレッドが呟やいた…『援軍が來てゐるわ！　ごらん…』

『おや！　あの女なら、私知つてゐるわ』とレアが言つた。『あれはクリ、ブロンチエよ…兩性なの！』

『あんた！　若しあんたがあの女に橫目でもつかつたら！…』とフレッドは威脅した。

けれどもヂム氏の肱でつゝかれて、二人は默つてしまつた。默つて彼女達は、元の坐席について、そこから新來者の妙に叮嚀な挨拶を嘲笑的な目で眺めてゐた。この三番目の、運轉臺が內側にある車はルポオの車の傍に並んだ。ロンシャールはアントレエグと握手してから一同に紹介した。

『ブロンチエ孃、一名、『それを除いて』と言はれてゐる、モルリセットの賣子さんです…この女(ひと)のおかげで、諸君は、私が諸君にお約束したやうな饗宴に列し、若しお望みなら、その仲間にお入りになることも出來るのです』

『で、レイヨは？』とルルダル夫人が訊ねた。

『えゝ、ぢや御存知ないんですね！　あの人は國庫委員會で、輕い腦溢血で倒れたんですよ、いま床に就いてゐますが、再起は出來ないでせう』

胴體が長くて、脚が短い、そして頭髮も髯も金色ブロンドに染めたロンシャールは生來の下品さを、贋アンリイ四世のやうな顏につくつてゐた。ぶくぶくに肥つた彼は、瘦せた背の高いこの一夜の伴侶者と妙な對照をなしてゐた。彼は一方の腕を厳かに差し伸べて、弔辭として言つた。

『仕方がないではありませんか！それが人生です…（それから調子を換へて）——ぢや行きませう！』

彼は再び箱自動車に乘つて、全く運轉には馴れ切つた男の器用さで、ハンドルを握つた。そして先頭に立つた。

高速力で車は走つた。漠然と——マックス・ド・ロオムが出たらめのことを言つて若い女同志の世帶の話をして興がつてゐる時——ミッシェルは、リリ・ブロンチエの男女兩性が氣に入つて、窓外に移り變る景色を眺めてゐた…速力から起る風にも動かない外景は非常な速さで逃げるやうに移り變つた。そしてまだセエヌ河を越したとも村や森を過ぎたとも思はない間にもう、彼等は、大きな庭園の中に埋もれた、とある別莊の入口に着いた。物音で、世にもつゝま

しやかな赤毛かつらの婦人が車寄せまで進み出て來て、鄭重にこの立派な客達を迎へた。客達の名前は知らなかつたけれど、サン、ヴァレンタン夫人は、リリ、ブロンチエの話で、彼等が——少くともある幾人かは——最上流階級に屬してゐることを知つてゐた。

冒險成金の彼女自身が通つて來た冒險の一つ一つから、出來るかぎりのものを取り入れ乍ら、あらゆることをして來たのであつた。彼女はスイス生れで、初めは子供のお守りであつた。それが最初の主人から墮落させられ、それからある倫落の女の小間使になり、バルナム一座の女曲馬師となり、それからウヰンナのある策士と公けに結婚して、伯爵夫人となつた。そしてバルトのある男爵のために離縁になり、最後に未亡人になつた。それからベルギーで祕密な家の持主になり、戰爭中、ヘイグでオースタリイの爲に間諜を勤め、フランスの爲には間諜の間諜を勤めて財產をつくつた。この保證を得ると、彼女はブルッセルに歸つて、收入の多い不動產を買つてしまつた。そしてクエージュの近くに城を買ひ、同時にサン、ヴァレタンの名をかち得たのであつた。

それから儀式として三年間、僧侶を招いたり、聖きパンを捧げたりして罪の償ひをした。併しこれは再び活動に移る準備期間だけのことであつた。その後、彼女はロオラン夫人の假名でシャンゼリゼに素晴らしく莊麗なアパートメントと、ヴィルボンの別莊とを借りた。そしてシャンゼリゼでは、半分藝術家、半分世俗人といふ仲間を招いて遊ばせた。田舍の別莊には、靑札を見せて、行きたいといふ人々だけを招いた。かうして代る〴〵サン、ヴァレンタン或はロオランとなつて、彼女は萬人の(警察をも含む)尊敬を受け乍らパリジャンスの生活をしてゐた。

モオリセットの最上のお得意で、彼女が、リリ・ブロンチエを知つたのは、そこの假縫の時であつた。結婚が近づいたのや、毎晩のやうなコンセールや、オーケストラで心も時間も一杯になつてゐるポオルから、日增しに取り殘されたリリは、節制もなく、この新らしい仲間の方に向いてしまつた。そして殆んどランクリイ町には歸らずに、シャンゼリゼに落つく日が多くなつた。

比類のない狩出人で、場合に依つては自分もその仲間に加はる彼女は、頭數や金高で、收入を、サン、ヴァレンタンと分けた。さうして彼女はロオランのために金をつくるのであつた。

かうして、別莊アドリアンスには、約束の時間に、いつも遊びを裝つて、道樂者や、どんな惡でも實行するやうな人々が、樂しみに集つた、女達は郊外の森では、常にそこで働らいてゐる泥棒仲間を相手にしたり、それに少しの報酬しか得られないけれど、そこでは夜食が得られると共に安全であつた。

『森は民衆化しましてね、民衆にはいいですよ!‥‥こゝは(鼻唄で)「こゝは上品な仲間のランデヴウさ!‥‥それに少くとも落つけますよ。ブロンチエさんが匿名の約束をしてくれたんだから』

とロンシャールが言つた。
　そして彼はリリが、彼の本名を知らしてましつたロオラン夫人と、ちらと視線を交した。當が外れたルボオとマックス・ド・ロオムはつまらなさうに、長椅子を一杯に周らし、クッションをまき散らした廣間を見まはしてゐた。そこには、彼等にはおかまひなく、一群の生きた繪が恥もなく連らなつてゐた。
　彼等は十人程で、或は裸體、或は市場もののキモノをまとつてゐた。男が四人で　その中の一人はスラヴ人で、他の一人は東部地中海沿岸の人間で、能なしの金持ちの成れの果てらしく、道樂者のやうな下賤な顔をしてゐた。彼の二人は、黒んぼと支那人だつた。そして六人の取柄のない女共だ。それは、多分昔は若さも、活々しさも、風情もあつたのかも知れないやうな人間の敗殘者で、この陰氣な陳列を見てゐると肉屋の店のぶよぶよの肉が思はれた。
　召使がゐないので、ヂムと二人の女とは主婦を助けて働らいた。主婦は冷たい料理とシャンパンを戸棚から出させた。そして傍を通りながら注意深い眼で壜を數へた。
　一本百法！……
　シャンパンの栓は徒らに飛び、泡は黄金色の壜の口から溢れた。食物は低い卓子に置かれた。とりとめのない言葉が交された。
　この饗宴はあんまりみすぼらしいので、もう少しでこの一行を逃げ出させる處だつた。併しいい主婦であるロオラン夫人は蓄音機を開けて、ジャヴァの曲をかけた。コーカサス風の騒々しい曲で、そのリズムは異國風の賑やかさと、思ひがけない騒ぎを展げた……そしてダンスが陰氣な空氣を一掃した。この人形達の一群は主婦の親切な注意で、彼等だけで遊び始めた。二人一組になつて、體を搖つたり、黒んぼの叫び聲で、ジャズの調子に合せたりしながら踊つた。レアとフレッドも組になつて、彼等の仲間に加つた。彼女達はやつと場末者の呑氣さに歸つて、めまひも恐れず踊つた。
　調子をとつて搖り乍ら　騒々しいジャヴァの曲に合せるダンスは猥褻ではあるけれど、ミッシェルもリリ・ブロンチエの神經質な腕に抱かれて踊り出した。そして曲が濟むと、
　『それを――（もつとディスクをかけるやうに一生懸命に手をおき乍ら）――さあいい！』と言つた。
　彼女はまた、熱い痩せた體と組んで、その骨つぽい體に、自分の柔らかな體を押しつけた……ある片隅では、シモンヌがヂム氏を閉ぢ込めてゐた。そして眞珠の飾りのついた手提げから、手離したことのない小さな手帖をとり出して、それに、この頑丈な馬面を手でさわつて見ながら、四分の三の正面像と、横顔とを描いた。そして、『全くどこかの皇帝のやうな顔！』と言つた。
　かうした遊びを蔑み乍ら、國の運命の一部を荷負つてゐる三人の男と、アントレエグ侯爵とは、疲れて長椅子にへばりついてゐた。そして彼等はフレッドとレアが、言ひつけられて、相手をしに來て

も、話し込んでゐた。まだ元氣なロンシャールとマックスはルボオのれい〱しい哲學的意見にはぽつ〲しか答へなかつた。ルボオは寛大な自由な氣持ちで、シモンヌがヂム氏を獲ようと努め、ミッシェルがリリ・ブロンチエを誘惑しようとしてゐるのを見てゐた。アントレエグは居眠つてしまつた。

ロンシャールは大きな身振りで、蓄音器の音につれて幾組も踊り廻つてゐる廣間を、包むやうな恰好をした。騒々しい音樂の次にはハワイヤンワルツのメランコリーの調子だ。ギタアが仄かにノスタルヂックの音を立て、時々山彦のやうに悲しげな歎聲がまざつた。

『全く參考になる夜でしたわい』と賢アンリイ四世は言ひ出した『なあルボオ君、君はこれから、フォルティフの祕密に比べて、森の祕密が法外に大きくなつたことを立證することが出來るよ。いま吾々の目前で行はれてゐることなんぞ、要するに、つまらない子供だましだ。何も吾々の風俗の根本的の正しさに反する程のものではない…吾々は此處に調査に來たんだからね、それに、全く、吾々は大して悪いことはしないんだから、なあ？』

そして彼は手を伸して、フレッドのむき出しの腰のあたりをぴしやんとぶつた。するとフレットも負けず拳骨を固めて彼に報いた。

『あんた！　あんたの可愛がりやうはまるで象のやうよ！』

ヴァレンタン夫人のあでやかさをいつぱいに發揮してロオラン夫人はトランプを持ち出す時が來たことを知ると、『紳士方』にボッカアの小さい勝負を提議した。この言葉をきいて侯爵は耳を聳立てた。他の人達も、することがないので贊成した。ロオラン夫人はヂムに手傳つて貰つて折疊卓子を展ろげ、綠色の絨檀のそこゝに札籠を置いた。

『さうだな、これから面白くボッカアだ！　あの奥樣方（ルルダル夫人とアントレエグ夫人を示して）が濟むのを待つてゐる間』と言つた。

併しどちらも、めい〱始めたばかりだつた。最も直接に興味を感じるルボオとマックス・ド・ロオムは肩をすぼめ乍ら彼女達に背を向けた。かうして何んにも見ないふりをして、それが立派な男らしい行動だと思ひ、それで無事だと思つた。そして丁度好都合なロンシャールの重い冗談に耳を傾けた。ある點の無道德性に於けるやうに、多數者の最低水準に於ては、下卑も、愚劣も、げすも、自然に感じられなくなつた。彼等の目にはそれが――ロンシャールにとつては――常識と、權威と、華奢でしかなく、他の人々には、哲學的靜穩でしかないのだ。

有名な諷刺作家と、未來のアカデミシャンの同意を得たので、この冶金家の雄辯は奔流のやうに流れた。そして時としては、マホガニーの箱から、倦まず迸り出る金板を打つ音や弦の軋む音がまざつた甲高いオーケストラをさへ蔽ふ程であつた。音樂はランプ・ボラからシカゴに變つてゐた。

ダンス・マカアブルの痙攣するやうな調子の狂熱的な野蠻人の音樂に合せて、獸物のやうにこの、食べることにも、寢ることにも、遊ぶことにも使ふ部屋に閉ぢ込められた哀れな人間達は不規則に動いた。この同じ瞬間に殆んどこれと同じやうな音樂が世界の到る所で軋つてゐる。そしてこの同じ臨終の音で崩壞に瀕してゐるあらゆる社會の、同じ選良の、同じ標本を慰めてる‥‥

俄然、突き刺すやうな叫び聲がひゞき渡つた。サン・ヴァレンタンの人形の一人がコカインに醉つて支那人に倒れかゝると、支那人は亂暴にもそれをつき飛ばしたのであつた。そのための叫び聲だつた。

『何？』ルボオがきいた。

『何んでもありません』とロオラン夫人は言つた。その間に、リリ・ブロンチエは黒んぼを手傳つて、この座興ざましの痙攣女を外にかつぎ出した‥‥『何んでもありません。仕方のない女ですわ』

『道徳新聞がなければ』とロンシャールはつゞけた『墮落をけなし、今や本から劇場へとはみ出しつゝある春畫の波を堰止めようとする道徳新聞がなければ！‥‥吾々はおしまひだ。淫亂はその汚らはしい波で、凡てを蔽はうとしてゐる！‥‥若し吾々がそれを取締らないならば、吾々は外國人をして、かくの如き風俗畫が正確であると信ぜしめるであらう。そこで、僕は、諸君をそれが誤謬であるといふ證人にする！‥‥』

『何言つてるのよ！』と言ひ乍らレアは彼の唇に自分の唇を押しつけた。

『うるさい！ 凡てのものに於ける如く、文學に於てもまた批判を立て直さねばならぬ時だ。今日は鐵工所の委員會を通して、シャベロン内閣を攻擊さへもする。何んとなれば、この委員會が、ルールに於て、國政を支持してゐるからである‥‥明日の吾々は何處に行くであらうか？‥‥』

『停車場へ！』とフレッドは口惜しまぎれに言つた。

『お前達牝鷄は行つちまへ！ もうお前達にや用はない、あつちへ行け』

そして彼はなをも誇張して喋りつゞけた。

『シベロンはあんまりしつかりしてはゐない。一人のよき暴君が、一人のムソリニが、次の選擧には出ねばならん！ 諸君、フランスは統治されることを欲してゐるのです‥‥』

併しロオラン夫人は、自分の儲けを考へてゐた。そこで、甘やかな調子で演說の糸を斷ち切つた。

『ボッカァの用意が出來ましたよ、若し一時間しかお遊びにならないならつまりませんから‥‥私、御酒の用意をしますよ‥‥』

そこで彼等はボッカアの卓子に就いた。

『手法、よろしい？』

髭

石井留美

　老父と、妻と、六人の誰一人仕上つてはゐない子女とをひきつれたその日暮しの下級官吏であつた父が、早くも老朽陶汰の鐵鎚にどやされた時は、總領の留美が十七で、まだ女學校に通つてゐた。

　一體それまでの留美の父は、妻子の運には特に惠ぐまれない方の人だつた。留美の母は留美の父にとつて三人目の妻だつた。

　最初の妻も、二度目の妻も、子供を一人生むと死に、その子供のために、かなり永い間づゝ父は强固な無妻主義の不自由を忍ばせられたあげく、どつちの子供にもまた死なれてしまつてゐた。

　それで、留美が三度目の妻の長女として生れたのは、すでに父の三十九歳のときだつた。從つて、それから二年おきと三年おきとに男三人女二人留美を入れて六人の女子が生れてゐても、六十歳に近い父のために、支へとなるだけの年齢にまでゆきついてゐる子供はないのだつた。それどころか、留美と、すぐ下の弟とを除いたほかの子供らは、かうした事件の心配にかゝわることさへ知らない位な稚なさの時代にあつた。

　それだけに、父の失職による留美一家の途法にくれ方は格別だつた。

　それと知れた日など、それは幾分、それまでには豫期されてゐたことにはちがいない事態の實現なのにかゝわらず、家中の大人たちは、いかにもふい打ちの變事にぶつかつた時のように、カサ〳〵な青ざめ方をして聲も出せなかつた。留美もいきなり胸がつぶれて、頭がぐらぐらした。

「一體、これだけの人數がこの先きどうすればいゝといふのだらう……」

　一家の人の心が、すぐこの思ひで凍り固まつてしまつた。

　二百圓あまりの退職金なぞ、家中の生活を三月ともさゝへはしない。また、それを資金にして商買を初じめるなんていふことは、お役人の古手になんぞ、てんで見當もつかなかつた。それかと言つて、新らしく六十のおぢいさんを雇つてくれるものずきのない事は、三十そこ〳〵に見える立派な若者の守衞が、官省の入口なんかにぼんやりとつつ立つてゐるのをよく見かけるのでも知れ切つてゐた。

「では、どうすればいゝ……」

　しかもどうにもならない中にも、矢張り晝になり夜になつて日はたつてゆく。

　重苦しい空氣が晝間中さんざんみんなの頭の上から押さへつけておいて、夜になると誰もの口からひつきりなしにため息をしぼり出させた。

「ふん、今ごろじたばたしたつてなんになる。とうから知れ切つとつた事ぢやないか。お前方の心がらだわ。」

　父の義姉は白い眼をしてかう罵しつた。

　けれどもいままで通つて來たどの月にしろ、恰度家中の者がしがみつき合つて、ギチ〳〵の岩洞をでも、押し合ひへし合ひくゞり

ぬけて來たかのような、かすりきずだらけの月々だつた。振り返つて、悔ひの殘こつてゐさうな隙間もない生活だつた。

　幾人も子供なぞを生むのからしてわるいのだ相で、生まれるのが仕方がなかつたら、片からさつさつと他人にやり、せい〴〵後繼端者一人を滿足に育て上げるのが貧乏人には分相應な分別だとその留美の義伯母は言つた。

「自體、十七にもなる女の子をのこ〳〵女學校にやつて遊ばせておく親も馬鹿なら、自分から身を投げ出して一家の危急を救はふともしない留美は恩知らず義務知らず、犧牲的精神とかの缺けた大馬鹿三太郎の親不孝者だ。」

と、その、お茶屋のねえさんから出世?をした娘に養しなはれてゐる黃金萬能の仕合せな義伯母は、入齒をむき出してまくしたてた。

「この娘を役に立てなさい、本人のためにも出世の早道だ。わしから我家娘に頼んでやる。ぜひさうしなさい……」

　父は默つてゐた。母は泣いてゐた。

　留美は見たくもない世界に無理から首を捻じ向けられた樣な怒りに震へて、胸を惡くした生唾を横を向いて窓の外にパッと吐いた。

「――なにくそつ！。石にかぢりついてもあの茶屋女の足跡を踏んでならうか。」

　留美はどうにでもして女學校を出たいと思つた。

「學校さへ卒業したら……。いまに見てゐるがいゝ。私が女學校をさへ出たら……」

學校をさへ卒業したら、そこにはどんなにものぞましい救ひの何かが、必ず留美を待つてゐるやうに思ひこまれた。

　結局は、十七の留美でしかまだなかつた。

　それで、今日は明日はと退學の相談を言ひ出しかねてゐる母の素振りに氣がつくと、留美はすつかり苛々し出した。

　留美の眞正面から、家の生活に對する此の後の心痛が少しづゝずり出していつて、あとの心配はたゞ、自分と學校だけの問題になりかゝつてゐた。

　さうしたある日であつた。

　學校から歸へつて來て、いつもの通りに茶の間の外に膝をつき、只今を言つた留美がその唐紙を開けると、中には祖父を初め父も母も三人の弟も二人の妹もみんな居た。

　そして留美が顏を出すと、誰も彼もが笑つてゐた。それがまるで留美一人に何かのいたづらでも企らむでゐるかのような、へんな笑ひかただつた。

「あら、何なの?……」

　さう留美が言ふと、妹二人なぞ、クックッとお腹を押さへて笑ひ出した。

「妙な人たち！……」

　留美は少し怒つたように言つて、膝で居座てずつと長火鉢の方によらうとした時、それまで後ろ向きになつてゐた父がひよいとおどけたような身振りをして留美の前に顏をつき出した。

「あつ!!……」

　留美は思はず立ち上つた。

　その、あんまり、留美の驚き方が大仰だつたので、瞬間、座敷の中がかへつて寂とした位だつた。留美の眼の前には、生れて初じめて見る、髭がなくなつて鼻の下のばかに伸びた父の顏が、まのわるさうに笑つてゐた。

「……まあ!……」

　けれどもぢき、くた〳〵つと留美が座ると、それを待つてゐたようにみんなで聲を上げて笑つた。妹たちなぞ、涙を出して隣りの部屋まで笑ひころがつて行つた。

　その間、留美はまるきり身體中の上皮膚が硬ばつてしまつたような感じのまゝで、まじ〳〵と父の顏を見つめてゐた。

　しかし、めつたに笑つたことのない父が、ちぐはぐな笑ひを不器用にいつまでも浮めて

市川左團次夫人の海外話

　何かよく解る人が行つたらためになるのでせうが、私ぢや勿體ないわ。女には支那位が丁度好いのね。景色で覺えてゐるのは伊太利のベニスと北京の萬壽山、カタマリ（建築）ではロンドン塔。ロシアで馬の鞍や杖や冠にダイヤモンドが一ぱいについてゐて、とても立派なものを見た時は、貧弱な自分の指輪がそつとぬいてしまひたいほどだつたの。

　困つた事は澤山あるけれど、ドイツで日本食をたべさせてくれるつて鯛を出したのよ。嬉しいと思つて眼玉を口へもつてゆくと臭いつたらない、お魚の顔を見せてもらつたら口がトンガラかつてて西洋人の鯛の顔だから、とてもだめ〳〵！お豆腐を御馳走するといふから行くと、妙な豆でこしらへた生豆腐に唐辛だけなの。とても食べられなくつて日本を思出すばかりだし、はばかりは男にきいてはいけないつていふし帽子は被つたままでムン〳〵するし、ホテルの室へかへるとホッとするのでせう。とてもあたし達のやうな舊式ではいけないと思つたわ、婦人參政權でも持つやうにならなくつちやねえ——と。（左から市川松蔦夫人・小山内夫人・岡田八千代氏・時雨・市川猿之助夫人・左團次夫人・木村富子氏。



眞正面に射りつゞけてゐる留美の視線を、具合惡るさうに受け止めてゐるのを知ると、留美もまたどうかしてこだわりなく皆と一緒に笑つてしまはなければ惡るい樣な氣がした。

「どうしてお髭なんかおとりになつたの？お父樣！」

　留美は一生懸命に輕るい調子で言つて、無理に笑つた。唇がぴく〳〵した。

「どうしてつてお前、これから父さんもうんと若返へつて、天秤棒でもなんでもかついで、お前方を養なつてやらにやならんのぢやないか。どうだ、十歳位は若ふなつたらうがな？」

　そしてまた顔をつき出して二三度振つて見せた。

　留美はその時、父の頭にも毛のなくなつてゐるのに氣づいた。

　留美のその表情を父も感じたか、半白の、薄くなつた毛を五分苅りにした頭を大きな掌でするりと撫ぜた。

　うそ寒げな、いたましさが、留美の鼻柱をぐんと打つた。

　留美はその晩、誰にも默つて、しょんぼりして、退學屆を書いてゐた。

朝鮮よ

後藤郁子

朝鮮よ
何が何を、何を何に代へようとするのか
知つて居るか

嘗て人情的であつた愛
嘗て美術的であつたおまへは
多くのよい生命を失はうとして居ることを知つてゐるか
私のあこがれは深い深い霧の彼方に
かくされてしまつた
濃霧に閉された朝鮮よ
おまへを圍む霧の中に堪へ切れないもの
反抗するもの
追放される者
だが

私は、忘れはしない
白磁の壺を生んだおまへの先祖の
無限の素朴と、そこに溢れた十全の愛

飢えたる白鷺の群に
悩める片脚を抱いて闘ふ時も
その素朴は
何ものにも代へてはいけない
素朴こそ野人の腸だ
唯一の力だ。

朝鮮の露路

夕暮は鉛のやうに



煙突の無いオンドルの煙が
地にはら這ふ、朝鮮の露路

牛肉一片　葱二本
包みもせで兩掌にぶら下げて歸る小兒
鹽肴一尾　唐辛子三つ四つ
ぶら下げた鬚長き老爺
水氣のない豆腐一丁　ニンニク一束
パカチに入れて頭にのせて行く主婦
ああ　そこはかとない夕餉の支度をする
人達が往き交ふ　朝鮮の露路

わづかの惣菜が
小さく　きざまれ
貧しく鍋の中へ鹽と共に散らばつてゆくならん
オンドルの焚口にすぐ續けて
汚れた鍋を懸けて凝視めてゐる女達の
痩せた姿の多い侘びしさ

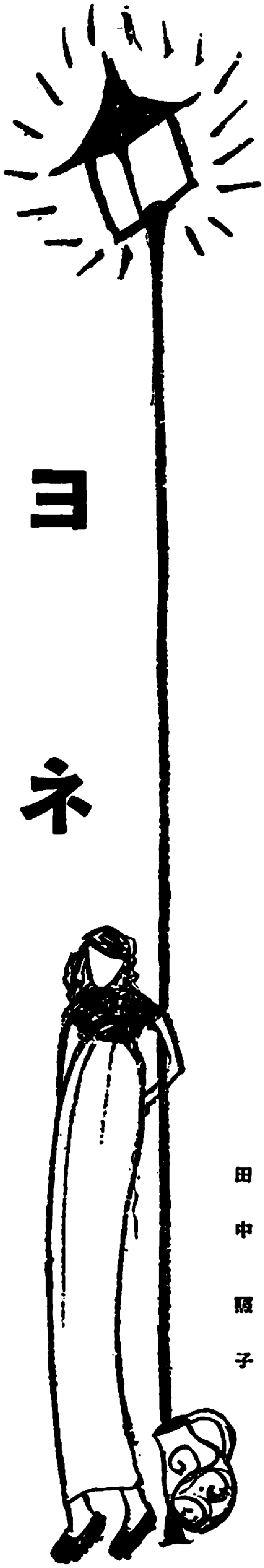
痺れる程唐辛子をつかつて
味覺を失つて仕舞はうとする
生活の哀しみが朝鮮の露路に匂ふよ。

陰影

熟れて　腐れかゝる
紅赤味すぎたるユスラ賣る
漆黒味褪せたるサクランボ賣る
しなびた胡瓜一盛五錢に賣る
かたいチシヤ葉を賣る　ニンニクを賣る
黴びた
朝鮮干柿賣る
干棗賣る
鮮人店の　おもにいよ
其處に並べられて居るのは
おまへの貌の陰影だ
おまへ達の生活の陰だ
あの壯んな都會の貌
高層建築の増えてゆく傍らで
これは、似てもつかない
へら〳〵　あざ笑つてゐる
京城の陰影だ。

ヨネ

戸田豊子



田中照子

ヨネは踵から頭のしんまで冷えきつて歸つた。追はれた犬のようによろめき乍ら。

戸締りを開けてくれた婆さんは中將湯くさい息を嗅がせながらブツ〳〵小言を言つた。窓外の街燈から、仄明りをうけてゐる裏二階六疊へ電氣を點けると何もかも二日前と同じ樣子に取り散らされた部屋であつた。押入の裾からふだん帶がはみ出し、林檎の皮や廣告紙をおしこんだ火鉢、しみのついた窓掛は半ばひきよせられたまま。

十二時が打つた。しばらく机に凭れたなりで鳥肌立つた頬を抑へてゐたヨネはやつと身を起した。階下の婆さんの犬を追ふやうな短かい罵聲が耳についた。十遍も戸を叩いて起したからだとはいへ、その怒りと呪ひに充ちた調子は何となくヨネを不安にさせる。

青い飯蒸器を覗くと粥みたいにねつとり固まつた冷飯が少し殘つてゐた。彼女はお湯も欲しかつた。カタカタ物音が續いた、茶椀がなりニユームの箸がすべる。隣室の同居人が二度舌打をした。

ヨネはぼんやり頬を抱へた。結局この時刻はづれの夕飯を咽喉へ通す氣もなくなつて。そのまま帶もとかずに冷たい寢床へはいつた。夜具の襟へかじりついたまま聲も立てなかつた。ひどく絶望してゐた。が疲れてもゐた。窓越の街燈がいつか仄白くその寢顏を浮きあがらせた。しみのついた窓掛は半ばひきよせられたまま。

「墮落といふのは何にも恐れなくなることだ。草履のやうに生命を

はきへらすことだ」
六時間ばかり眠つた。彼女は決して寢足りてはゐなかつたが、隣室から焚付の燻くさい煙りが流れこんで呼吸をつまらす程だつたので自然目を覺ました。考へるともなしにこんなことを考へた。
「草履で結構。うんとはきへらせ」
すると、まるで朗らかな朝がやつて來たかの樣だ。留置場も、赤髯の巡査も、調書も、リリーのお内儀もどつかへフッ飛んだ。二度とはいつて來たら今度こそ十日以上食はしてやるぞ、と脅しつけた憎々しい髯面も消えてなくなれよ、と思つた。
それにしても昨夜のセンチメンタルな絶望は――ヨネは今になつて苦々しく思ひ返した。警察を出されてからマリ子を送りかたぐくリリーの店へ行つて見ると案のじやう、若いお内儀は咽喉へヒステリーをつまらせて赤黑くなつてゐた。
その前日の朝である。引き留められてはじめてリリーの店へ宿つたヨネが、朋輩のマリ子と二人で、天井のひくい四疊半を女らしい臭氣や亂雜さで一杯にしながら寢こけてゐると、お内儀のヒステリ聲が階段をせり上つて來た。
「てるちやん！マリちやん！」
それから、ぢやどうぞご覽になつて下さい、と言ひ乍らガラリ引き開けた。
「まあ、だらしのない、てる子！マリ子！この通り、うちぢや決してそんな變な眞似をさせてはゐませんよ。第一部屋だつてこれつきりで、隣の方は――どうぞご覽なすつて、この通り物置に使つてをります。私が第一そんな眞似、大嫌ひですからね。昨夜は電車の都合で宿めましたんですよ。さよですか。お前たち！もう、とつくに起きてるんだらう。今お巡りさんが戸籍を調べて下さるとさ。ちやんとして階下まで降りておいで！さあ、どうぞ、階下でお茶でもおあがり下すつて」
一寸でいいからと言ふので赤髯の巡査へくつついてゆくと、もう淫賣婦の取扱ひであつた。其晩は歸して貰へなかつた。マリ子は無表情な顏をしてゐた。埴輪のようにきれこんだ眼をしだいに細め、窮屈な恰好で眠ることもできた。ヨネは何かの本で淫賣婦の血税――といふ言葉を覺えてゐたが、マリ子は生れながらの罪人のように從順であつた。誰かの板を叩くような肺病咳が夜通しヨネの神經をかき亂した。
「昨夕はさうでなくても何時もはどんなザマなんだ？ちやんと調べてあるぞ」――髯面が言つたものだ。
マリ子は相變らず無表情な顏をしてゐた。ヨネは興奮のあまり、自分のでないやうな變なカスレ聲で食つてかかつた。どうして自分を淫賣婦だなんて言ふ權利があるんだ…女だと思つて馬鹿にして…女給をしてからまだ三日にしかならない…リヽイへ宿つたのも昨夕が始めてだ…

「白ばつくれる女だ、圖々しい奴だ、あのカフエそのものが淫賣屋だつて何べん言つて聞かすんだ。警察では夙から内偵してあるんだぞ。あんな店へ前借ではいつてゐながら淫賣婦でないなんてよくも吐かす。おい、お前いくらの女だ。五十錢か一圓か？」

マリ子へ向けた。彼女はその髯面のズボンの邊りへ目をつけ乍ら懶げに答へた。

「一圓の時もあれば、カツ一枚の時もあります」

邊りのものはドッと吹き出した。

夜八時すぎに出されるとヨネはマリ子をリリーまで送り屆けてやつた。彼女は面を脱ぎすてた人のやうにはしやぎ、白い齒を見せて笑つた。

「かう見えてもね、私しや拘留には馴れてるよ。美術へ行つてた頃からやられたんだからね。あんたみたいなキナ〳〵娘なんか出さないさ。ふん馬鹿にしてる。あんなもの、笑はしてやつた方がいいぢやないの」

リリーのお内儀は咽喉にヒステリーをつまらせて赤黒くなつてゐた。まくし立てた。

「お前たち！よくものめ〳〵來られたもんだね。お蔭で名譽を汚されましたよ。一週間も停業にされてさ、本店の旦那に會はす顏がない。お前たち何て答辯したんだい？嘘つき！私の惡口を言つてきたんだらう？旦那はね、あれはれつきとした旦那なんだよ。コックのことなんか男だとも思つてやしない。とにかく家ぢや女給不用なんだからね、どつかへ行つちやつとくれ！」

マリ子の顏がまた剛ばつた。二階へ上つて包みをこさへて來たかと思ふともう土間へ屈んで下駄を探してゐた。お内儀が浴せかけた。

「前借をどうする氣なんだい。前借を。恩知らず！ぬすびと！」

ヨネは好加減にしてそこを拔け出した。暗い通りを寒風に曝されながら歩きまはつた。女らしく混亂した。

……このままでゐたら遠からず脛をさらはれる時が來るだらう。あの髯面を得意にさせるだけでも口惜しいぢやないか。といつて今更、肺を痛めた體でうんとコキ使つて煮豆やおさつばかり食はせる工場生活へ戻れるもんぢやなし、戻りたいにもどの組織で拾ひ上げてくれるだらう。女事務員もした。一日惡い空氣に閉ぢこめられて間代と電車賃にしかならなかつた。それで工場通ひをした女だなんて嗅ぎつけてごらん、誰もまじめな結婚の相手と考へてくれなくなる。ただお臀を覘はれるだけなんだ。獨身の悲哀を感じてる樣な蒼ざめた疲れた眼の男たちに、身寄りもないんだつて？これは耳寄りだといふ恰好で圖々しくつけ廻され、「コロンタイをどう思ひますか」とか、「處女ぢやないんだね」とか「案外ウブだね」とか言はれ、好きな樣にされて了ふのだ。そんな男はあはよくば金にしてやらうとスリの樣にキョロ〳〵して——何處へ魂を落つことしてくるものか——もう澤山だ。このうへ騙されて田舍娘のように蹈にじられる

口惜しさに堪えられるもんぢやない。金を相手にした方がどれ位あつさりして氣持がいいかわからない。蒼ざめた顏、骨だらけの體。

モデル市場でも引き取手がなかつた。醫者は電氣ストーブで眞赤になりながら、「體を使ひすぎたね」と言つた。レントゲンで見なくても解つて了ふのだ。飛び出した肋骨、黑ずんだ皮膚、平べつたい腰、着物を巧く着て胡魔化す必要がある。口紅をどつさりつけてソラソラ、お前は今魂を落つことそうとしてゐる。そんなものや、こんなものに、ならうとして生きて來たんぢやあるまい！一人前に頰つぺたを膨らまし乍ら背負ひきれない程の苦しみも運んできた。歎した男を屑つきれのようにいやしむだけの元氣があつたではないか。弱い男！　私はいつでも自分の主人だが、あなたは主人公をどこかへ隱してしまふ、空々しくそんなこと許りしてゐて淋しくないのか――。なるほどそんな時代もあつた。食ふにさへ困らなかつたら人間はどんなにでも强くなれるものさ。

――この通り混亂した頭をのせて歩き廻つたものだ。それで結局、絕望して追はれた犬のようによろめき乍ら。

ヨネは今、毒々しく唇を曲げてゐる。

「大いそぎで墮ちるんだ。お行儀の惡い死にざまをしてやらう。白いウヂとあんまり變らない樣に」幾月かを暮らした。人間はどうにかして生きてゆけるものだ、といふ結論の一例にでもなり相な生き方で――。

山田が現はれた。全く突然に。

蓄音器の松井千枝子が「淺草のカフエにゐた時……」をやり出してゐた。女給たちはマノン・レスコオで交ぜつ返す。ヨネは勘定台に近いテーブルで會社員の客が「君は北國人だらう。ばかに憂鬱だよ」と言ひ乍ら呉れた一本の金口を喫かしてゐた。その時はいつて來た鳥打の客へ陰鬱な眼を向けてやつたが、相手の顏といふよりその恰好を古い記憶から呼び起した時、自分の目を疑つた位だ。それから棒のやうに突立つて無言の挨拶を交した。

腰まがりの小男の山田は鳥打の下から窪んだ眼をキラ〱させた。女給たちは山田の風體を輕蔑して、いらつしやい、とも言はなかつた。ヨネは會社員と金口を打つちやつて、別のテーブルへ彼を迎へた。おなじみ？とか、うはァとか、どう？とか囁き合つて足踏みをはじめたりした女給たちの注目のなかで、二人は早速荒々しく喋り合つた。それは喧嘩してる樣な調子であつたが、東北人の言葉で朴訥にこの邂逅を喜び合つてるのにすぎなかつた。山田は全く消息をなくしたヨネを探し當てるにどんなに苦心したかを、しやべつた。ヨネはまた山田が東京へ出て來てるとは夢にも知らなかつた、と言つた。

「俺のお袋も死んだよ」

「さう――」

一寸顔を見合つた。話がきれてから、何ものつてないテーブルに氣がついて、ヨネが腰を浮かした。

「何かそう言ひませうか。ビールでも」

「いや、いいよ、いいよ。それより此處を出られないかなあ」

大きな手を振つて、山田は眩しげに邊りを見まはした。このカフエはリリーの三倍位は大きいだけに女たちも一層けば〳〵しかつた。まだ宵の口なのに學生たちのテーブルから頽廢的な歌が盛りあがつてきた。

ヨネはさうして貰ふことにした。泥のついたゴム靴、曲つたズボンの後姿を見せて、山田は一足先に出て行つた。懐中鏡を覗きこみ乍ら、ヨネは恥かしい顔を見られたもんだと思つた。ゴテ〳〵白粉をつけて――まやかしてはゐるが、工場にゐた頃の樣に素顔のギリ〳〵爺になると路傍の犬さへ振り向かなげなやつれた顔になるのだ。あの頃は若さと健康があつた。

坂下の電車道の方へ山田の後を追ひかけ乍ら、彼との記憶とつながる死んだ自分の母のことも思ひ浮べた。

母親の眼はいつもおど〳〵と疑ひ深く、がらんとしてゐた。それにはこんなわけがあつた。日露戰爭當時、H港でヨネを産み落した母親は産脚氣で半年ばかり腰が立たなかつた。

父親の戰死で打撃を受けた。名譽――とか遺族扶助料とかいふものはヨネ達親子へは來なかつた。父親は菓子屋の職人で母親は同じ家の御飯たきであつたが、二人が夫婦であつたこと、パン竈(かま)の蔭で固く未來を契り交したことなぞ神樣より外にご存じがなかつた。行路病者にされて養育院にゐるうちにも、北に近いH港は流言に脅かされて、蟻の樣に荷物をくくりつけた住民が一齊にH山深く避難することが二三度繰り返された。その度に箱に詰めこまれ車に載つけられたまゝ狼籍の町へ置き忘られて了ふ母親は、ヨネをボロで塞ぎ自分は舌を噛みきる筈だつたのに、それさへなし得なかつた母親は何時の間にか失神してゐた。住民保護の爲上陸した水兵達が山の上から威赫し續ける大砲の音、それがどうして味方のものだと思へたらう、と語つた。その時以來母親の眼がそんな風になつたものらしい。

――ヨネは或る坂の上を思ひ出す。

むき出しの臑をさむ風に曝され乍ら、小さいヨネが毎晩、行商から歸る母親を待ち侘びる坂、その坂は、次の日の分を仕入れて歸るため再び重くなつた菓子の荷に、平たく潰されながら哀れな母親があえぎ登つて來る坂でもあつた。港の船に赤や青の灯がゆれる頃。

――それから、ランプを掃除してない、ホヤを破つた。薯をみんな食つちまつて何て意地汚い子供だらうとか、ブツ〳〵小言を言ひ乍ら母親の眼は疲勞のため一層がらんとしてゐるのだ。使ひに出されるヨネは半分眠りかけてるので、ふら〳〵し乍ら、醤油とまちがへて酢を買つてくることもないとは言へない。釣錢を落す。すると一日中のムシヤクシヤを破裂させて母親は一生懸命なぐつた。それか

ら娘に少し熱があるやうだと思つて心配し、晝中ヨネがきやはんを穿かないでゐた故だと叱りつける。

そんなことを何年も繰り返してゐるうちに、母親も亦俯向いて肩をしぼめて歩く種類の女になつた。港町の小路を、年甲斐もないハデ拵りを指さされ乍ら。ヨネは東京の紡績へ送られた。或る夜更、監督が一枚の電報をつきつけた。

見窶らしく毛のはげた毛布にくるまつて母親は寢てゐた。ヨネは埃をかぶつた髪毛を、物言ひたげに結ばれた紫色の唇を、ちらと見た。母親に部屋を借してゐる婆さんが一人、ちよこんと坐つて枕邊へ線香を立てゝゐた。山田はこの婆さんの息子であつた。彼はその頃驛で轉轍手を勤めてゐたが、夜勤の翌朝眞黒に汚れた顔で歸つてくると、きび／＼した調子でヨネを慰めた。香典だけを目當の貧しい葬式を出した時も親身も及ばぬ程よく世話してくれたのだ。わづか一週間位の交渉であつたが、別れてから二人は思慕の情を告白し合つた。

山田が晝休みに石炭殼や鋸屑の散らばつた驛の材木置場でヨネの手紙を讀み返して感激してることや、空が青いことや、鼻柱をひどく負傷したため絆創膏を厚くはられて了つたことや、暴風雨の夜勤、俺たちの仲間、についてまで一々ヨネは知ることが出來た。俺たちはこんな歌をうたつてゐると言つてゴリキーの牢屋の歌を書きつけてよこしたこともあつた。俺たちの時代がくるまで、君はお母さんの様にならないで頑張れ。俺の手はこんなに大きくなつてゆく。――山田の手紙がだん／＼過激になつてゆくと、ヨネは一本も渡して貰へなくなつた。監督が握りつぶして了ふので、髪を伸ばしてるのがキケン思想だと言ふ理由で驛を追ん出されたことも、北海道へ働きに行つたことも知らなかつた。

「病氣をしてゐるのか。俺は信じてゐる。金にだまされて監獄部屋へ來てしまつた。母が飢えかかつてゐるのだ。五圓でいいから送つてやつてくれないか、賴む」

最後に鉛筆のはしり書きのこの手紙が監督の手に落ちた時、ヨネの方は最初の男に連れ出されて、もう工場にはゐなかつた。それ以來の山田であつた。

「どうせ俺たちなんかぬれたり汚れたりしなくちや生きてはゆけないんだ。淫賣したからつてめそ／＼へたばつてしまふのはブルジヨアの屑つきれか、おあまりの考へさ、俺たちはそんなこと何とも思つてはゐないよ」

山田は事もなげにさう言つた。さうかも知れない、しかし、母のこともあつただけにヨネの頑張らうとする意地は可成り根強いものであつた。それだけに、その目に見えない支えが一擧に崩折れた日から、ヨネは彼が考へてるものとはまた別のものになつてゐた。トメドなく虚無的なもの、人間の手と足がさらけ出せる限りの狼藉な

もの、にしか眼を向けまいとした。性慾が永い不自然な壓迫によつて變態的になる樣に、ヨネの場合には思想が同じ形の變化をうけてゐた。よかれ惡しかれ、裏をかくもの、ぶちこはすもの、でなくては興味を持てなくなつてゐた。

「切迫つまつて君は淫賣もしたと言つたが、どうせ高の知れた金でだらう。その高の知れた金が、俺たちのとこにはさつぱりなくて奴等のとこにだけ、どうしてごろ〳〵してるんだい。ごらん。立派なお邸だね、ピアノの音も聞えてくらあ。お孃さまか若夫人つてとこだらう。俺たちの仲間がよく丸太のやうに縛られて刑務所へぶちこまれるのは、かういふお邸の御主人どもがコンクリ塀へ硝子を植えつけただけや、ブルドックを飼つただけでは安心が出來ないからなんだ。だから山法師みたいにかつぎ廻すんだ。自分等のピアノや庭園やお孃さまだのお妾だのを守るために」

ヨネは寒さうに鼻を鳴らした。

「わたしの樣に腐つた肺を持つちや、そんな元氣もなくなるわ。革命なんて」

「俺だつて血の交つた痰を吐くんだぜ」彼はまたさう言つた。獨居房で過した北海道の秋から冬が、古い肋膜を再發させた。「こんな體だからこそ、一層確かな正しい道を辿らうとしてるんだ。奴等をとつちめてぐうの音も出させない樣な。——俺たちは、病人で候なんてフク〳〵の寢床へなんか寢てられはしまい。君だつてさうだらう。默つてたら、どつち道投り出されるか壓し潰されるかなのさ」

「一寸待つて、——ぢや私みたいな女は今から何を始めたらいいの。どの後へくつついてゆけばいいの。肺病で、おまけに淫賣もした女が。……恥さらしぢやないの。それに誰も問題になんかしないわ。俺たちの時代が來たらどうかうなんて氣休めは、私たちには餘り關係のないことよ。しまひまで聞く必要もない位だわ。どうせ、一年生きるか二年生きるかわからない體が。」

「……そんなに體が惡いのか。ヨネちやんは、困るな」

「やつと働いてるのよ」

「可成り苦勞もしたらしいね。よし、もうブルヂヨアの尻くそをなめすぎたからだなんて苛めないよ。——肺病には何と言つたつて革命より日光と空氣がいいさ。靜養と肉食がいいだらう。併しそれらでさへみんな金持が持つて行つちやふんだ。淫賣か奴隷になつて膝を屈しなきやおあまりさへ貰へないぢやないか」

會ふ度に淋しくなる位お互の食ひちがひを見ながら、どうにもならない氣持に引きずられて、まもなく二人は一緒にゐることになつた。山田は工場の方の仕事を探してゐたがなか〳〵見當らなかつた。一時或る看板屋の下職に頼まれて、めし代だけは稼いでゐた。東京へはヨネに逢ふために出て來たやうなものであつた。感傷でなしに生活が欲しくなつたのだ。自分自身轉機に立つてもゐた。民衆を離れた革命家アナーキスト——彼が自由と健康と鬪志を捧げてき

た——であることを踏み潰して、始めから出直さうとしてゐた。
「下つ端ぢや仕様がないわね、何になつたつて。煽動されたり、闘ひとられたりばかりしてるんぢや詰まらなくないの。貴方だつてドイツ語でも讀めたらちつとは花々しいこともやれるんでせうにね」
ヨネは時々揶揄的な眼を向けた。山田のピクともゆるがない信念を嫉んで。シラミの様にでもスパイの様にでも賤しくなれることだけがヨネの强味であつた。
「Oさんみたいに代表者會議へ出て注目されたり、尾行をつけられたりしたら面白くもなるでせうけどね。Oさんて一寸いい男ね。苦みばしつて、」
彼はもう何も逆らはなくなつた。前にはよく、君たち女つてみんなそんな奴かい、とか、そんなことを言ふ様ぢやロクな女ぢやないぜ、とか言つたものだが。ドングリ眼の手の大きい男が默つて自分た輕蔑し出した——みんな得體の知れない憑き者の故なんだ。この男の眼へ指を突つこんでやらうかしら、
「私、體が惡いんだから餘り苛めないで頂戴。毎晩、毎晩。襖一重のお隣りには人がゐるんですからね。きまりが惡くなるわ」
かう言つておき乍ら、恥もなく女をさらけ出して見せる。男の眼を光らせることなんかエボナイトをこすつて電氣をおこすよりも他愛のないことさ、と思つた。千遍一律な男の情慾など白いパンの様に興味がなかつた。相手を焦らし、のたうたせ、自分は冷やかな傍觀者になる、——ことより外に何もなかつた。ヨネは、あんなに求めた溫かい心の傍にゐながら輕薄な惡ずれた男たちを戀しがり出した。或る貧乏詩人とヨリを戻すことなんかも考へた。その男はヨネをある金持の友人へ賣り渡さうとしたので、淫賣夫！なれのはて！出て行つちまへ！と罵り乍ら掃き出してやつたこともある。その頃はまだ何かを掴みたい情熱を持つてゐたので、相手の汚れた弱い魂に我慢ができなかつたのだ。
白いチョッキを着こんで紳士振つたりする灰色の男——影をなくした男と言つてもよかつた。それ程キョロ〳〵して落付きがなかつたので——の虹色の眼も拒まなかつた。勿論金にもしようと思つて。
「お前は吃驚するかも知れないが、實は俺は泥棒なんだよ。紳士ぢやないんだよ。驚いたらう」
「ちつとも驚かないさ。同じことだもの、紳士つたつて泥棒つたつて。コソ泥？」
ウイスキーのグラスを嘗め乍ら相手はドロンとした目を据えた。聊か上向いた鼻、一枚缺けたままの前齒から白つぽい舌を覗かせたり、張つたあぎとを突き出して鼻くそをほじつたりするさまは愚鈍そのものの様であつた。
「嘘ぢやないんだよ。あの昨夕一緒に來ただらう。モジリなんか着こんで茶の中折を冠つた奴、彼奴は俺の乾兒さ。一個三圓なんて偶

造のピンを持つて歩きやがつて、御婦人專用の金屬線さ、お買ひになつたお方には仕掛けて差し上げませうてんで、ヘッヘッ、彼奴ばかに女を引つかけるに巧い奴でね、今、でぶのキミ公を覗つてるわけさ。お前を提供したつて惡かないと思つたんだが、彼奴、あんな痩せちまつてる女ご免だなんて吐かすんだ。ヘッヘッ、結句幸さ、滿洲でもシベリヤでも賣り飛ばされるぜ」

「あんた前科者」

「さうさ、三犯だぜ、驚いたらう」

「へん、驚くもんか」

グラスが空いた。勘定臺の方へ緒のゆるんだフエルト草履を引きずつてゆき乍ら、ヨネはこの前科者の言ふ話が全くほんとの事らしいと思つた。酒に氣をゆるめた許りでなく、暗いものが暗いものを嗅ぎ出す本能が働いてゐたのだ、山田の前で一寸睫毛を伏せただけでは隱し了せぬ位汚れきつた自分に氣がついた。

或る日山田が言ひ出した。

「俺は行くぜ。一人で淋しくないかな」

「構はないわ。何時まで一緒に居たつて。死ぬ時はどうせ別々なんだから」

「さう感傷的に言はれても困るが、O君から縣の方でいくらでも人が要るから是非來てくれつて言はれたんだ」

政友會全盛の縣では小作爭議を暴力的に鎭壓しようとしてゐた。彼がアナーキストとして頑固な指彈を受けた土地も今、若い組織者の努力によつて、着々組織を進められ、相當な地盤も出來てゐた。彼は其處へ歸つて、始めから學び直さうとしてゐる。冬中、獨居房の感傷から追ひまはしたヨネの幻影も完全に蹈み潰した。東京へ出たことも、大して無駄ではなかつた。で、起つんだ！

「あなたは私を救はれない女だと思つてあきらめたんでせう。わかつてるわ。世の中は單純な人間ばかりぢやないわ。私みたいな――つまり手のつけられない屑つきれだつて、隨分澤山ゐるに違ひないのよ。どうしてでせう」「もういいよ」

ヨネが施療院へ入る日が來た。

前の晩、彼女は机に肘をつき乍ら林檎を食べてゐた。ゆつくり、ゆつくり、顳顬を動かした。鹽からい泪も一緒に呑みこんだ。窓の外の往來では緣日の露店が安い吳服を糶賣してゐた。モジリ外套の男が赤や黑の布類の中を、踊り廻るやうな恰好で手足を動かしてゐた。衿卷で鼻を抑へた女や兩手を袖に引つこめた女が群がつてゐた。

マントの裾を吹き飛ばされながら歩いてゐる男もある。寒くなつたので斑な露店を一人二人が立止つて覗きこんでゆく。

「何がさ」

ふと、意味のない呟きを洩らしてヨネは林檎の芯を窓から投つた。

山田には何にも言つてやるまいと思つた。



紅子

春來る前

島本久恵

山科村の片隅の竹林の奥にある蓮行寺といふ小さい寺の住職になつて、もう三年を過した徳生は、あんまりひとりで仕方がないので一つ寒念佛に出てみようと思ひついた。どんなに小さくても寺といふものはがらんとしてゐてとりとめがない。そして臺所に米ばかりたまつてそれを食うて鼠ばかり繁殖する。それが實にづぶとい鼠で、ぞろぞろ不精さうに這ひ廻つてゐて追うても逃げない。一軒から三合のお月米(つきまい)を六十五軒の檀家からくれるので、米は際限なくたまるばかりで、こくぞうがわいて、するともう徳生はそれを食ふ氣もしないのだ。賣つて小づかひにしたいのは山々だけれど、百姓ばかりの村で買ひ手はないし、京の方に買つてくれる家を拵へるといふ運びもつかない。そして徳生はやつと二十五の若さなのだからなほたまらない。

でもまあさしづめ一つの仕事がみつかつたのだから、めづらしく張合ありさうにして、煤ぼつた廊下わきの納戸に入つて、いくつもある破れ提灯の中から張り更への利きさうなのを一つ探し出さうとした。寒念佛には提灯がいる。

實のところ徳生はこの納戸が嫌ひで、一切のぞかないことにしてゐたから、眞つ暗な穴藏のやうなその奥に、何かあるやら、よく知らなかつた。たゞ廊下からにじんで來る、ない方がもつと安心出來さうなぼんやりした明り先きに、いくつかのあかちやけた提灯が、丁度ぬぎ捨てものをつくねたやうに、ぢゞむさくつくなりあつてゐるのだけが、戸がとれてゐるものだから廊下からいつでも見えて、も

のがものなのでそんなにいやだとも思はないで見て通り見て通りするうちに、だんだんそれが馴染みの顔のやうになつて、その上に積つた埃なら觸つたつてさうきたなくないやうな、そして提灯の方でも妙になつこい顔をして、ほんとうに此方向きに凝と眼をあいてゐて、さながら德生の一瞥を待ち焦れてゐるやうに見えてくるのだつた。

　そんなに感じ初めてからもう長いことなのだが、提灯と德生とは今まで至つて氣不精にちつとも距離を變へなかつた。いつたいこの寺にはへんな魔物が住んでゐて、この寺に入るとみんな氣不精になつてしまふ。それが人間ばかりでなくて、器物でも壁でも柱でも樹木でもみなさうだつた。實際草一つだつて違つた場所に種を下ろしたことはなく、いつもきまつて庫裏の裏手の濕地には淺青いちどめぐさが生え、前栽にはをだまき草が生え、軒下の雨垂れ落ちには石菖のやうな葉の下に暗紫色の實を隱したお市のめだまといふのが、砂利のたゝき出されたくぼみに引つ着いて居り、鉢前の石の根には疲れた一つ葉が一枚もふえたことがなく、木戸口の梅の樹は年々なりが減つて來てゐた。そして代々の住職がみな氣不精になつて、ぶくぶくと肥つて長命で呆けてしまつたり、若いのに出世のつてが切れてぢゞむさく老いこんで、つまらない食當りなどで死んでしまつたりして、竹林の中の憂欝な墓場の隅に順番にまるい茶栓形の墓をならべて、いまはもう永遠に氣不精に眠りこんでゐる。

　だがいまこの德生の納戸に對する氣不精は氣不精でも、ちよつとそれとは異つてゐた。德生はまつくらな納戸の奥がひどく氣にかゝる、その暗がりにあるものはきつと蛇のはかまや猫の死骸や、いやほんとの處はどうもそこに人間の屍體が想像されてならないのだつた。別に誰が殘虐を加へたのでもなく、誰が祕しておいたのでもなく、たゞぼんやりとそこで居眠つてでもゐて、それきり醒めないで、無論自分でも知らないで死んでしまつた、そして別段蛆もわかさないで氣不精な生き姿のままで、何のこともなく成佛してゐる。どうもそんなきがらがそこになければならないやうな氣がするのだつた。何も特に怪奇を追ふのではなく、極めて自然に、ほんとうにこの寺のこの納戸の最も自然なこととして想像されるのであつた。

　尤も先代の住職が三十五六で一人こゝで首を縊つて死んだといふ事實があつて、その比較的近い聞きつたへの記憶が、さういふ想像を助けるには違ひもなかつたが、大體こんな寺だからそんな死など別段取り立てゝ考へるほどのことでもなく、死なるものが何も或る一人の死に限らない。まして德生はまだ若くても殆んど一つも記憶しない位澤山の人の死を見て來てゐる。七つや八つのお小僧の時分から和尚さんについて檢葬にゆくと、きつとそこで間違ひなく一つの死骸を見て來るのだつた。だから二十五にもなつたいま、數へてみた處で數なんか分らない。それが馴れこで死骸なるものが怖くも氣味わるくもなく、そんな方には先づ不死身といふ氣持になつてゐ

た。

或る時も、それはまだ京で、或る相當な寺の納所をしてゐた時分のこと、みよりのない友達の學僧が死んだので、朝まだ暗いうちに一人棺に添うて花山火葬場へ送つてゆくと、寒中のことでどうにも冷えて堪まらない。それで隱坊達の働いてゐる中に交つて、友達を燒いてゐる火屋の口で暖たまつてゐると、別の葬式を送つて來て骨上げを待つてゐる喪主の娘が

『まあ、あの坊さんはきれいな顏してはるくせに』

とびつくりした。そんな風で德生にはまあ生と死とが極めて普通のことに觀られる。どんな立派な家だつて土藏だつて德生の眼には、實は澤山な死骸を充滿させながら、胴殼は涼しい顏をしてゐるだけのことに觀えた。

だから、こゝだから特に怖いといふことはないのだが、やつぱり、一ケ所でも想像の可能な一隅が殘されてゐると氣がゝりで、暇だからなほと心がそこへ吸はれる。そして無論好きな氣のする筈の處ではないし、それで苦しい位な時もあつた。

では窓をあけて納戸の中をもつと明るくすればよい、實際外から見るとたしかに納戸の上に當る處に一つの窓があつて、それはこんな貧乏寺のことだから締りなどある筈もなし、ちよつと手を伸しさへすれば直き外からでも開かるにきまつてゐる。それなのに德生はわざとこの窓をあけないでそつとしておくのだつた。窓があいて明るくなつたら、狹い納戸のことだから、忽ち隅から隅まで分り切つてしまふ。さうするともう何でもないただの納戸で、それだけこの寺のぽかんとした窟屈が廣がつてしまふ。だからかうして放つておく方がまだしもましなのであつた。

それが突然念佛の思ひつきから德生は一も二もなく提灯に接近してそれに手を觸れ、一遍に納戸のじんめりとした黴くさい澱んだ空氣に浸つてしまつた。

さて手にとつて一つ一つ張りのべてみると、みな丁度よい弓張りのまる提灯で、それが上のから下のまできれいに油蟲に食ひぬかれて、ぷすぷすと大小さまざまのべつたりの穴だ。そしてわづかに切り拔き紋のやうに殘つてゐる處の紙も油がぬけてがさつらしく、骨つた指がいらいらする。でも提灯自體は弓も袋もしつかりしてゐて、揃つてまだ中古（ちうぶる）までも行つてゐないしろものだつた。

で、德生は何といふもつたいないことをしたものだらうと、あれを取り上げて見、これをとりあげて見するうちに、ふと妙なことを發見した。それはこの澤山の提灯が一つだつてこの寺のものでないことだ。どこの提灯も同じことで正面には定紋を描き、その裏に當る處に細字で名を入れておく。その細字がやはり貪婪に食ひぬかれて、ばらばらに極めて乏しく墨のあとを散らかしてゐる。それを丹念に拾つてどう綴り足して行つてみても、蓮行寺となりさうなのは一つもない。蓮の字でなければならない處にどうしても草かむりが

出來なかつたり、しんにうがみつからなかつたり、するうちに德生の頭の中にある京のいろいろの寺の名がそこにしつくりとはまつて來て、とうとうこの提灯は誓願寺、この提灯は淨樂寺、この提灯は一行寺と、だんだん素性が知れて來出した。してみるとこれはさうした寺方に花供養とか遠忌とか晉山式とか、何か大きなつとめごとのあつた時に招ばれて行つて、歸りが夜に入つて借りて來た、そして返すのを不精した、さういふ提灯がたまつたものに違ひない。

德生は代々の住職の氣不精に呆れてしまつた。そしてもう一つ一番下敷きになつてゐた提灯をとりあげてその字を見ると、今度はほんとうに氣に入つて德生は思はず悠揚とした微笑をうかべた。さすがの油蟲もこの夥しい供養にたんのうしたといふものか、感心にこの一つだけは名の處を完全に殘してゐて、それがたいへん佳い、春長寺と讀まれるのだ。

春長寺、佳い名だ、これにきめやうと思つて、德生はほかの提灯をもとの處にもとの順で重ねて行つた。そして氣がつくと暗がりに馴れたせいか、納戸の中が思ひのほかほの明るんで見渡される。もう見るも見ないもない行きがゝりで、德生は珍しさうにそこらを眺めた。行燈がある、やぐら炬燵がある、皮籠がある、別にさう變つたものがあるでもなくて、しかもみなぢゝむさい垢まぶれの人間が想像されるものばかりだ。

やがて德生は棚の上に七八寸のあかちやけた、やゝ長方形の箱のやうなものがあるのをみつけて手を觸れてみた。するとそれは箱ではなくて、實に澤山のお布施紙がていねいに折り目をのばして耳をそろへて、きちんと重ねてあるのだつた。それが一分一厘のゆがみもなく、おそらく物差で寸法をとつて据えたであらうと思はれる位、まつすぐに几帳面に三四寸の高さになつて動かずにゐる。そつと埃をゆびさきで拭いてみると、いちばん上の紙にはいかにも百姓らしい拙い手で御回向料とあつて、その下に小さく藤田太郎吉と名前があつた。二枚目のをみるとおんふせと假名で書いて、吉村はつとこれは女名前だ。それから下のにはただ上と書いただけのも澤山あつた。

德生はすつかり感心してしまつた。で、考へてみると、檀家でまだ現存してゐる名前が多いし、ずつと下積みの方の紙にしてもやはり駿河半紙やロー引きのつるつる紙などで、格別床しがらせるやうな時代な紙もみつからないし、まづ年代を考へてこれはどうも先代の首を縊つた住職の仕事らしく思はれる。そして無論一朝一夕になされた仕事ではない。德生はそれから紙の高さを目分量で一年分二年分と計つて行つてみると、十年を少しはみ出る位まで行つた。なんといふ怠屈なさびしい仕事だ、德生はつくづく眺めて嘆息した。

いつたいお布施紙といふものは、盆正月兩彼岸、それから葬式や年回や、また町中の寺なら近所の寺の役僧に賴まれたりして、その都度中味は直きに消散されても、からの紙だけはよくたまる。だから見えない處の障子はそれで張つたりするのだが、ここはこんな瘦

せ村の貧乏寺で、六十五軒の檀家が高低なしの水吞み百姓で、寺にとつては書き入れ時の盆にだつて、冬瓜やかぼちやこそ惜し氣なく持ちこまれて、それが臺所の板の間で下から下から腐つたりする程だが、金の顔を見ることはそれこそ珍しい。魂祭りの棚行といふものなども、この小字の脊骨になつてうねつてゐるぼうぼうとした竹林に、寒むがりらしくすりこんで低くちよぼちよぼとならんでゐる麥藁ぶきの腐つたおどろおどろしい軒端軒端を、おやぢもかかも畑をしまつて來て湯でも浴びてゐる黄昏ごろに、ちんちんと鉦を叩いて念佛してまはる。するとあわてゝ肩にものを引つかけた半裸體の老婆や娘が、蚊くすべの煙に眼をこすりこすり、剝げた切手盆に二寸程の紙包みをのせて來て、お辭儀してさし出す、それがお布施で、棚行がそれですんだのであつた。中味はもとより貧しかつた。

　そんな鼻紙にも足らないお布施紙をわざわざ使はないで溜めてみた、さうして或日に何のこともなく首を縊つて死んでしまつた、さういふ先の住職の寂しいしぐさをしつくり感じて、德生は思はず

『なむあみだぶつ』

と殊勝に手向けた。そして紙をもとのやうにしておいて、春長寺の提灯をさげて、大津街道の方の傘提灯屋へ張り更へてもらひに急いで行つた。一生かかつてお布施紙をためてみるのも、寒念佛に出てみるのも、首を縊つて死んでみるのもみな同じことだ。

『一つ寒念佛に出てみよう』

自分がさう思つた處を、

『一つ首を縊つて死んでみよう』

さう思ひついて死んで行つた先の住職がふつくりとなつかしかつた。

　火の見の下の處の九尺ほどの板間の店で、提灯屋の亭主は禿げた頭のてつぺんの處にぼんやり冬の陽を映して、しきりに日傘を張つてゐた。それがなまめかしい繪日傘で、桃色や水色や色とりどりに、蕪村が足をとゞめて微笑みさうな風景を、こぢんまりと展げてゐた。

　亭主は德生の手から春長寺の提灯を受取つてしらべてみて

『こら上等や、どこもかもこんなりいけます、へえ寒念佛、ああさうでつか、よろしおす、おい急きもんや、そつちは後廻しでよかろ』

さう言つて息子の方へ提灯をやつた。德生は思はず莞爾とさせられた。

『今年は寒の入りは六日かいな』

息子は提灯を受取りながら柱ごよみをちよつと見上げた。薄雲がすつと切れて夜が明けたやうに店いつぱいに日が當つた。

あの日の出來事

田中[illegible]子



ささき・ふさ

一

うら子は昨夜ちやうど仕事を終へ、目先に何か變化を欲してゐるところだつた。で原稿を金にかへがてら出京し、或外人婦人倶樂部の午餐會へ出席することにした。久しぶりで外人の中に入るとなると、多少は服裝のことも考へる必要があつた。服裝に趣味のないうら子でもなかつたが、何を着るべきか、どんな種類の服を選ぶのが、至當か——そんなことを考へるのは久しぶりのことだつた。午餐といつても午後にかかる社交的集合であつてみると、肩や腕の幾分透いて見えるアフタヌーン・ドレスが好ましいやうだつた。がもう春だといふのに空は灰色の冷い日で、目にとまらぬほどの小雨が外氣をよけい冷いものに想はせてゐた。彼女は此日にそぐふやうな外套を持ち合せてゐなかつたので、でいつそ目立たぬスーツをきちりと着て行くことにした。

K會館の横廣な階段を登つて、うやうやしく扉を引く金釦の少年に接すると、うら子はふとパリの生活に戻つたやうな氣がした。制服の美少年も、少年といふよりはギャルソンと呼びたい感じだつた。すると其處らにうろうろしてゐる紳士達まで、同胞といふよりは、何か非常に東洋臭い男達に見えてきた。彼女は彼女自身の感覺にちよつと混亂を感じないでは居られなかつた。

「どちら樣で?」

「T倶樂部、――」

その瞬間うら子は視野の外れから彼女に注がれた視線のあるのを意識した。急いでその方にピントを合せると、頤の張つた一つの淺黒い顔が巨大な圓柱の蔭に隱れやうとするところだつた。頤の主は旣に充分彼女を見定めたあとらしかつた。――

「T倶樂部ならお二階でございます。」

その言葉に、うら子はもう一度或混亂を感じながら、動作には何の躊躇も表はさず、足早に昇降機の方に歩いて行つた。グリムプスともいへぬほどの短さだつたが、その間に捕へたあの顏には何か見覺えがあるやうだつた。といつて誰とはつきり記憶から手繰り出すのには、あまりに稀薄な印象だつた。

二

二階の廊下や廣間には英語特有の Hissing sound が、走るE線のやうにぶつかり合ひ、交叉し合つてゐた。s s s x s sh s x s s sh s……その間に、はずみのあるステップ、仰山な身振、目。見渡したところ知人等はまだ來てゐないやうだつたので、うら子はこつそり廣間の一隅に身を落ちつけた。目立たぬスーツを着てゐたおかげで、彼女は人の目を惹く氣遣ひなしに人を觀ることが出來た。そこらのきらびやかさは思ひのほかだつた。婦人達は悉くアフタヌーンよりはイヴニングに近い薄絹をまとうてゐた。さういへば此午餐會は彼女等にとつては此春の新調を見せびらかす好機であるのに違ひなかつた。だがうら子はさつき階下でパリの生活に戾つたやうに感じたその氣持が、又一つの混亂の中に導き入れられるのを意識した。此處に見えるのはパリの流行では勿論なかつた。パリを眞似ようとしてパリたり得ない一つの妙な流行だつた。强ひていへばアメリカナイズされたパリの流行だつた。原始化、或ひは原色化されたパリの色だつた。うら子はさうした意地の惡い見方をすることによつて、あまりに簡素な、しかしシークとはいへる彼女自身をジャスティファイしてゐるらしかつた。

「あそこにゐるあの奧さんね、」

隣席の夫人がふと小聲でいつた。「あの方はもう若くはないのに、若くないと見られまいと、――そして御自分も若くないといふことを忘れてゐるやうな顏をしてらつしやいますのね。」

夫人は夫人自身のいひ廻しの巧さを自慢してゐるやうだつた。又夫人は少くとも夫人が若がつてゐると評したその女よりは若いといふことを言裏にほのめかしてゐるやうでもあつた。うら子はそれにまつたくねといふやうな微笑を酬いながら　肚の中ではアメリカ人でも女は女だなと呟いてゐた。うら子に私語したその夫人は某大學敎授の夫人だつた。のみならず夫人自身外人子女の學校の校長でもあつた。

食卓のカードを見ると隣りは偶然又敎授夫人だつた。百人あまり

の女の發する Hissing sound は幾分食器の音に消されたが、それだけに堂內のかまびすしさは、――E線の交錯は今や交響樂の不協和音にまで進轉してきた感じだつた。うら子は敎授夫人のいふことにしぶしぶ相槌をうちながら、卓を圍んだ婦人等のマニキユーアの美しい手に光る寶石を、――手のみならず腕や首の周圍に光る寶石の群を、ひそかに見調べてゐた。それらの寶石は彼女等の晴着よりは遙かに正確に、彼女等の富の度を、――或ひは彼女等の夫達の富の程度を語るものだつた。うら子は彼女等との懸隔を想ふと妙に茫然とした。氣を變へるつもりで、出るべきでない席へつい出てきてしまつたのではないか、――茫然とうら子はそんなことを思ひもした。

「いいアスパラガスですのね。」と不意に敎授夫人がいつた。

「御國西部産のアスパラガスは、――アスパラガスのみならず果物も、眞に驚嘆に價しますね。歐洲なんかではとても、――」

「私、こんなアスパラガスだと、殘さずに食べてしまひたくなりますのよ。」

敎授夫人はうら子のお世辭には無關心に、目を細くしてアスパラガスを味つてゐた。でうら子も話をアスパラガスに戻すよりほかなかつた。

「ある點まで口に入れると、殘さうと思つても、自然殘らず咽喉に入つてしまやしません？」

不用意にいつてしまつてから、うら子は此場合ひどく下品なことを口にしてしまつたものだと思つた。が敎授夫人の目の驚きは明かにその經驗のなくもない事實を示してゐた。するとうら子は又急にさうした夫人の隱しだてのなさを輕蔑したくなつた。で彼女は殊更お上品ぶつて、パリ式に、アスパラガスのふくらんだ穗先を輕くフオークですくふだけに止めた。

うら子はふと向うの卓にモーヴ夫人の後姿を見付けた。モーヴ色の衣裝が色白のその夫人には實によく似合つてゐた。夫人自身も似合つてゐることを過分に意識してゐるとみえ、さつきから切りに人の間を縫ひ歩いて、モーヴの存在を目立たせてゐた。が今後向に座つたところを見ると、その衣裝は案外くたぶれたものだつた。すると食卓についてからも放たうとしない白い毛皮の衿卷は、カツトの古さや膝の汚れを隱す爲のもののやうにも見えてきた。さういへば夫人のさつきからの應待のはでさには、何處かうつろなところがあつたやうだつた。うら子はモーヴ夫人の世帶を想つた。世帶のやりくりを想つた。うら子は此處に來て初めて親しみ得べきものを見出したやうな氣がした。それと共に、いつの間に自分もこんな世帶じみて、――僻んでしまつたのだらうと思つた。

三

餘憤に似た憂鬱を嚙みしめながら、うら子は一人早めに Hissing sound を逃れて、階段を降りて行つた。二重戸の硝子の向うにはい

つか勢を加へた雨の白い線が斜めに落ちてゐた。

「車を、――」と彼女がギャルソンにいはうとすると、その拍子に昇降機から出てきた英國大使夫人が彼女を追ひ越した。彼女は彼女を迎へたギャルソンのやうにうやうやしく大使夫人に道をゆづつて、厳めしい大使館の自動車に夫人の乘りこむのを見送つた。彼女はすぐその後へみすぼらしい圓タクを呼んで乘る氣もしなかつた。現にもう車寄には、大使夫人のよりは遙かに新鮮な高級私用車が鼻先を出してゐる。金釦の少年は彼女の前の硝子扉をうやうやしく引いて、「どうか。」とその車の主の爲道を開けてゐる。彼女はもう一度道をゆづらうとした。が振り返つて其處に何人も立つてゐないのに呆然とした。

「どうか。」

重ねて彼女の注意を惹くやうにいつた少年は、振り返つた彼女に親しみと敬意との籠つた微笑を送つた。

「いいの？」

「は、どうか。」

も一人の少し大人びた少年は、もう自動車の扉を開いて待つてゐた。うら子は又パリの生活に戻つて、氣取つた足どりで二少年の前を通り抜けるよりほかなかつた。勿論通りがかりにそれらの少年に小金を握らせることも忘れなかつた。車の外でうやうやしく目禮してゐる大人びた少年に輕い會釋を送つて、運轉臺の方に向き直つた時には、車は既に石疊を辷つてゐた。運轉手は呑込顔にアスファルトの上を京橋の方へ走らせてゐる。彼はどちらへと硝子越しに訊ねるつもりもないらしい。行先をいつたかしら？――うら子は又しても或混亂に襲はれた。が混亂にはさつきからもうかなり慣れてゐた。それに午餐會を退いてからの物事の辷りのよさは、午餐會での妙な憂鬱を一掃してくれた。それに又彼女は今朝から目先の變化を欲してゐたところでもあつた。彼女は物事の辷るまゝになつてゐることに或よろこびを感じさへした。

「パカードかな？」と彼女は思つた。パカードかなと思つたのはその車の乘心地が彼女の兄のパカードのに似てゐるからだつた。彼女の兄は政府の高官だつた。高官には高官專用の自動車が與へられてゐた。彼女は性來兄とは相容れない質だつたが、兄に對する反感は彼がパカードを自由に使ふやうになつてから一段と強くなつたやうだつた。肥滿症の兄にとつては官職を拋つよりはパカードを失ふことの方が遙かに苦痛であるに違ひない、――彼女はそんな辛辣な考へ方もした。兄は今何かの會議の爲國外にゐる。歸朝後兄と顔を合さねばならない時のことを思ふと、うら子は急に又別の憂鬱に襲はれた。

ふと或匂ひがうら子の鼻についた。或匂ひは明かに一つの體臭だつた。車内の何處から發するともないその體臭は、そこらの圓タクの中で感じるあの混然とした臭氣とは全く違つたものだつた。一つ

の體臭、或男の、――うら子はその男の手がいつの間にか身近に働きはじめてゐるのに氣付いた。するとあの圓柱の陰に隱れた淺黑い顔が、――顋の張つた顔が、稀薄なままざまざと彼女の視野に迫り出されてきた。おそらくはあの岩田、岩田萬介、――顔を見せたのがK會館で、K會館の出資者の筆頭が岩田萬介であつてみれば、此車が彼のものであり、彼の手が此處に働いてゐるのに不思議はなかつた。では彼は彼女をどうしようと思つて、――どうしようと思つて彼は一年前パリで彼女を、彼女一人を遠乗に誘つたのだつたらうか。どうしようと思つて彼は、絨氈もない四階分の廻梯子を、彼女の下宿まで登つてきたのだつたらうか。栓拔型の欄杆が二三旋回した底から、

「うら子さん。」

さうあへいでいつた時の彼の顔を、顋の張つた淺黑い顔を、うら子はもう一度目に見る氣がした。目に見ると共にもう一度むしづの走るやうなその時の氣持を全身の神經に感じるやうな氣がした。

「何かお困りのことでもあつたら、――」

彼は又そんなことをいひ出すだらう。彼女はいつだつて困つてゐる。彼などの思ひも及ばぬほど困つてゐる。のみならず此苦しい生活といふものを何時(なんどき)でも抛り出したいほど疲れぬいてゐる。だが何で彼などに、六十男の彼などに、弱音が吐くものか。一代で巨萬の富を貯へるなどは不當だ。不當であるのみならず、そこに何らかの不正が働かなかつたとは信じられない。そんな富は、――さうだ、彼は彼等腐敗した長者等の色情の爲に、トルコ風呂でも經營するのが一番氣が利いてゐる。――

四

車はいつか築地の水邊を走つてゐた。雨はいつか又衰へて、白つぽい霧ほどの水沫を宙に漂はせてゐるだけだつた。煙つた水邊に、早めにともつた外燈が、暈を被つたクリーム色の月を並べてゐた。さうした異國的な雰圍氣を呼吸すると、うら子はふと淡い鄕愁に似た憂鬱の中に陷ちた。彼女は肉を蝕むやうなその想ひの中に、いつか不覺にも彼女自身の今演じつつある一役を忘れようとしてゐた、

不意に置き殘されるやうな感覺が、彼女を放心狀態から喚び覺した。車は徐徐に速力を緩めて、やがて何處かへ、――おそらくは同じやうな車の着いてゐるあの門口あたりに停るらしかつた。果して車はその車と目をつき合せて停つた。うら子はきちりとした彼女自身の輕裝に一分の利を感じながら、神經の末梢までをひきしめて、いかな敵にでも怖ぢぬだけの身構へをした。

「岩田寓。」

その表札をかかげた粹造りの門口も彼女の豫想通り、――いや豫想通りだつた。甕を盛つた石壘も、金屏風に塞がれた玄關も、そこにそはそはと出てくる女達の氣配も、――何もかもが豫想通りだつた

運轉手が扉を開ける間に目早くそれらを見極めると、うら子はうら子自身豫定通りの行動をとるかのやうに、決然と、しかし急がず、目をつき合はせたもう一つの車の方に歩いて行つた。さすがに彼女も、手袋のまま自力で扉を開ける時には、腕のみならず肩から背筋まで或戰慄の傳はるのを意識した。

「新橋。」

「は、――」

彼女の決然とした貴婦人的態度と、稍高飛車な命令とは、從ふことに慣れた運轉手に反問の隙も與へなかつた。彼は不用意だつたことにただ恐縮して、忽ち把手を廻しはじめた。車が今停つたパカードの横を掠め水邊の道から一曲りすると、彼女は一つの安堵と共に新たな身震ひのはづみ出てくるのを押へることが出來なかつた。うら子は戰慄する彼女自身に或苦笑を感じながら、平靜に戻りつつある胸の中で、あんな粋造りの中にトルコ風呂が、――そしてきつと近東風のデイヴンが、――しやれてゐるな、などと思つてゐた。岩田萬介も、彼の巨萬の富も、戲つてきた今は、さして憎むべきものとも思へなかつた。うら子はあんな技巧を、――トルコ風呂などを必要とする老實業家の色情に、或憫情を感じさへした。

五

うら子が兄の歸朝を新聞で知つたのは夏近い頃だつた。歸つてきたなと思ふとさすがに懷しい氣もしたが、出かけて行つて會ふのには氣が重すぎた。そのうち嫂の上書で、氣張つた彼女の餞別に對しては輕少すぎる土産の化粧品が屆いた。うら子はその小さな函を見ると兄に對して又一寸むつとした。がさうした配分に關しては兄一人を責むべきではないのかも知れなかつた。ただ彼女は嫂の上書に對して答禮の訪問をしなければならないのが不快でならなかつた。

山の手の一角を曲ると、塵一つないパカードが待遠しさうに停つてゐた。晝日の中に白く光る頭光の目を見ると、うら子は妙にぎくりとした。が出先であつてみれば兄と顔を合す時間も短くてすむ、――さう思ふと彼女は何となく氣が輕かつた。

「やあ、お珍しい。」靴を穿いてゐた兄は、外遊の餘波か、晴れ晴れとした目で、社交的だつた。

「お出かけ?」

「ぢきに歸るから、上つて遊んでらつしやい。」

「ほんとにさう遊ばせよ。」

嫂の口振にも噓はなかつた。うら子はちよつと兄等に對する彼女自身の氣持の濁りを恥ぢた。で、自然心から、

「先日はお土産をどうも恐れ入りました。」といはずには居られなかつた。

久しぶりで上つた兄の家には、何か匂はしいものが籠つてゐた。それは勿論廊下に開いてゐるトランクや、持ち歸つた品品から發す

る異國の匂ひであるのには違ひなかつた。がそればかりともいへなかつた。いつもに似ずいそいそと、愛想のよい嫂も、床の間に堆高く積まれた歸朝祝の贈物も、何か晴れがましい香氣を發散してゐるやうだつた。

「まあお坐り遊ばせ。今日はうら子さんのお好きな物があるのよ。」

「?――」

「ちよつと。あの、冷蔵庫から果物を出してきて差上げておくれ。」

女中が立つと嫂は、目を輝かした歸朝祝の贈物は、メロンとキャリフオニア葡萄とのこんな籠だつたと腕を擴げて見せた。

「四五十圓はするだらうと母も申しましてよ。どちらからだか、當てて御覽遊ばせな。」

「どちらからつて、兄様の御交際範圍なんか、わたくし、存じませんし、――」

「でもたいてい、――あの麻布の、實業家の、――お判りになつたでせう?」

うら子は何となしにはつと頬の上氣するのを感じた。もうその先は澤山だつた。が嫂はそんなことには少しも氣付かず、

「岩田さんですのよ。」と目を丸くした。「あの岩田萬介さん、――御存じでせう?」

嫂はただ岩田の大層な贈物がうれしいらしかつた。うれしいと同時に誇らしくもあるらしかつた。するとうら子は急に嫂のさうした單純さを見下げたくなつた。

「岩田さんとそんなにお親しくしてらつしやるの?」

「さあ、うちにはおみえになつたことないけど、外では、――御宴會なんかでしよつちゆう御一緒なんでせう。」

「ぢや、何をお受けになつたつてかまはないわけね。」

うら子はその言葉で嫂に一矢を放つたつもりだつた。彼女は兄が贈賄に對して極端に潔癖なのを知つてゐた。時には嫂の欲しがつてゐるものをさへ自動車に乗せて返しに行く兄なのを知つてゐた。オルゴル附の華美な置時計を早速ピアノの上に飾つておくと、兄は翌朝コロコンと唱ひ出すのを無造作に摑んで、――嫂はさも惜しさうに語つたこともあつた。だが今岩田の贈物に對しては、嫂は何等のうしろめたさも感じてゐないらしかつた。だからうら子の放つた矢は手答へもなく宙に消え去つてしまつたわけだつた。何等の不安も何等の隠れた意味も、――

「ね、見事でせう? 籠に盛つてあつたところをお目にかけたかつたやうよ。さ、お一つ如何?」

小皿にとつてくれた葡萄の房に、うら子は勿論指も觸れなかつた。うら子は思ひ返すうち、あの日の出來事は白雨の醸し出した一つの悪夢ではなかつたかと疑ひはじめてゐたが、此一房によつてそれが動かし得ない事實であつたのを慥めたやうな氣がした。

星加雪乃



清少と生昌

―喜劇―

上田文子

時。一條天皇の御宇。長德元年正月中旬。

處。京師。中宮大進平生昌の邸。

人。藤原定子。中關白藤原道隆の女、一條帝の中宮。

大納言藤原伊周。定子の兄。

三位中將藤原隆家。定子の弟。

中宮大進平生昌。

右近の内侍。

大輔の命婦。定子の乳母。

清少納言。
中務。
小宰相。
左京大夫。
（以上）中宮付の女房。

辨の尼。

その他女房、女童、隋身、白丁等各々數名。

舞臺正面に中宮大進平生昌の邸の寢殿（南おもて。）を見る。建築樣式は當代の所謂「寢殿造り」の常套なるもの。正面に階、その上は室を圍つて三方簀子、東（觀客より見て右。）西の簀子から、各々對の屋に通じる渡殿、（透殿なり。）を出し、そのつけ際にも各々階がある。簀子の内は廂の間、格子は東西南總てあげられてゐるが。東西には御簾を降ろし、南面のみ卷き上げられてゐる。廂の間の奥に一段高く母屋があるがこれにも御簾が降ろしてあるので内部は見えない。母屋の御簾に平行して、東西の廂へも御簾がかけ渡されてゐるので、觀客からは東西の廂の間もあらはには見えない。南廂の間には屛風一雙、二階の臺一脚、几帳數個、炭櫃、火桶などを適宜に配置し、別に琵琶、琴、碁盤、雙六盤など手すさびの具も用意されてゐる。

南面の栽には、階の左右に紅梅と白梅が一株づゝ植えられ、各々美しく咲き初めた上を今方降り出したらしい粉雪がちらちらしてゐる。

長德元年正月中旬の午後、「方違へ」の爲、先刻から中宮定子がこの邸に行啓されてゐるので、邸内は人出入りが頻繁で何となく落ちつかぬ雰圍氣につゝまれてゐる。

賑かな笑ひ聲と共に幕開く。

母屋の前稍、上手よりに右近内侍（二十四五歲）、無紋の唐衣、裳、五衣の宿直姿で、獨り二階の臺から降ろしたらしい繪卷物をくり擴げてゐる。几帳を隔てたずつと下手の方には、中務、小宰相、左京大夫など若い女房達が色とりどりの宿直衣を着（但し以下若い女官のつける裝束の色は主役の色彩を尅さず、それと色調をなすことを必要とする。）長炭櫃を圍み、話しに興じて笑ひ崩れてゐる。

東西の廂にも女房達の透影が御簾越しに見える。汗衫姿の女童が二三人、御菓物御湯など捧げて東の渡殿から母屋へ入つてゆく。（母屋への出入は東西よりし正面を用ひぬこと。）

中宮の御乳母大輔の命婦。（五十才前後の老女、小袿に白袴をつけてゐる。）母屋から正面廂の間に出て來る。

大輔の命婦　（右近の側に立つたまゝ、）大そう賑かですこと。何か面白いことでもあると見えますね。

（若い女房達又笑ふ。）

右近内侍　あゝ、きつと先到のあのことで未だ笑つてゐるんでせう。皆。（立つて來て。）どうなつて?、淸少さんの御袴、あら！　いらつしやらないの?

中務　餘り汚れたからつて今、鳥渡更へにお下りになりましたわ。本當に少納言さまの御裾はひどくなりましたもの。

右近　さうでせうね。私なんか大して汚しはしかつたけど——ねえ隨分いやだつたわねえ。本當に氣のきかない人よ。此處の家主も、

大輔　如何なさつたの？　一體、

右近　（座に歸り繪卷物を卷き乍ら。）いゝえね、此の邸に入る時に大騷ぎしましたのよ、皆。貴方は宮さまへ御輿についていらしつたから御存じないでせうけど。（繪卷を臺におさめる。）

大輔　ちつとも存じませんよ。何がありましたの。

右近　いゝえ、私達も穩しくお輿について四足門から入ればよかつたんですけれど、人がみるとうるさいから、乘りうちしてしまはうつて、するいことを考へてわざと北の門へ車をまわしましたの、さうしたら、まあ如何でせう、惡いことは出來ないもので門がそれは〳〵小さくて（笑ふ、中務等も和して笑ふ。）檳榔毛の車なんか、一輛だつて通るどころではありませんの。

大輔　まあ、そりやお困りでしたね。で、如何なさつて？

右近　仕方がありませんから、筵道を敷いて貰つて降りたのですけれど、その間に陣へ大勢集つて來ましてね、殿上人ばかりか地下のものまでよい見ものにしてのぞくのでせう。皆、そんなつもりもなしにつくろはないで來たところ見られるので辱しがつて、びつたり扇を貌へあてゝ歩くもんですから、筵道をふみはづして、ぬかるみに落ちたり、はねを上げたり——ま、簀子に上る迄が一騷ぎでしたわ、清少さんは大そう袴を汚したとかつて着更へていらつしやるんですつて、

清少納言　（二十七八才、同じく宿直衣をつけてゐる。西の渡殿を通つて、南廂へ入つて來る。）

小宰相　あら！　お早かつたのね、少納言さま。

清少　（それには答へず、柱によつて立つたまゝ。）今日の雪は積りさうね。嬉しいこと。

左京　なに、あ、あの雪の山のこと。

中務　さう〳〵、少納言さまは宮さまと賭けしていらつしつたのね本當にこの分なら、廿日迄は大丈夫もちさうですわね。

右近　（座つたまゝ、聲をかける。）駄目駄目。今日降つたぶんは賭けには入りませんよ。

清少　あら！　何故？

右近　内裏をお出ましになる時に宮さまが、今日の雪は決してあの雪の山に積らせない樣につて、主殿司に仰せつけ遊ばしたんですもの。（笑ふ。）

清少　まあ、宮さまもお意地の惡い！

大輔　清少さん、御災難でしたつてね、先刻は。

清少　（笑ふ。）飛んだ恥をかいてしまつて。

右近　いま、そのおはなしをしてゐたところよ。

清少　（右近内侍の側に座る。）宮さまは？　まだ、辨の尼君とお物語り？

大輔　えゝ、久しぶりにおあひになつて、よもやま御話しがつきない御樣子ですよ。（ほゝ笑んで。）御袴がだいなしになりましたつて。

右近　血色の羅裙がどうかといふんでせうね、清少さん、

清少　いくら血色の羅裙でも、あゝ、泥に翻つて汚れたんでは、歌にゃなりませんね。

大輔　（にこ〳〵して。）貴方なら、その泥まみれなところで一首出來るかも知れませんね。

右近　さう〳〵、そりや清少さんなら出來ますとも。（稍、冷笑的に。）先刻、あんなに人立ちがしたのだつて、考へてみると貴方のせいらしいわ。この頃の內裏の評判をきいて、清少納言といふ女は一たいどんな女だか、それを見たくつて——ね、それであんなに大勢のぞいてゐたのよ。きつと、さうよ。

清少　（鳥渡、厭な顔をしたが、直ぐに大膽に笑つて。）大方人を節會の白馬とでも間違へたのかも知れませんね。でもさうとすればあれ丈、すべつたり轉んだりいろんな藝をしてお目にかけたんですもの、さぞ、たつぷりお土産話しが出來たことでせうよ。

中納　一體、あんな小さな門をつくつて置くのが間違つて居りますわね。歩くつもりなら、初めつからちつとよくお化粧していたんですけど。

大輔。車のまゝ入るにしたつて、そんなにうちとけないでもいゝぢやありませんか。皆さん、お若いくせにそんなおたしなみの惡いことぢやいけませんよ。內に入つたつて、みる人は大勢あるぢやありませんか。

清少　いゝえ、宮の內の方達ばかりなら、私なんか殊更におめかしでもしたら、返つて不思議がられますわ。（獨語の樣に。）本當に中宮大進ともあらう邸に、車の入らない門といふがあるものですか。大進が來たらからかつてやりませうよ。

大輔　そんな惡いことをなさるなよ。宮さまが方違へにおいで遊ばしたのを、大變喜んでゐるのですから——氣の毒ですよ。

大進生昌　（三十六七才、進士上りの世故慣れない男。狩衣に無紋の指貫をつける。重ね硯の箱を持ち、東の渡殿から急き足に出て來て御簾の外から聲をかける。）こちらに御硯が參つて居らなかつたさうです。さし上げませう。（硯をさし入れる。）

（女達目を見合せる。）

右近　どうも有難う御座います。

清少　大進さん、鳥渡お入り遊ばせ、お訪ねしたいことが御座いますわ。

生昌　はあ。（鳥渡考へて、）入つてもよろしう御座いますか？

清少　構ひませんとも、貴方のお邸ではありませんか。

生昌　しかし――あんまり、御座近う御座います。

清少　まあ、よろしいのよ、鳥渡――鳥渡お入り遊ばせよ。

生昌　(廂の間の隅に入る。)

(大輔の命婦は氣の毒さうに再び母屋に入る。中務、小宰相、左京大夫などは笑ひ乍ら西廂へ逃げ込んでしまふ。右近内侍は几帳の向ふに座つて硯を引きよせて何か書き乍ら話しをきいてゐる。)

清少　(もう三尺の几帳を楯にして顔をみせない。)

生昌　(手持無沙汰に。)何か御用ですか？

清少　大進さん、貴方まあ、見かけによらない人の悪い方ね。つく〴〵感心してしまひましてよ。

生昌　(けげんさうに。)はああ、(間。)何かお氣に障つたことでもありましたか、何ぶん取込でゐるので、行届きませんが――

清少　おとぼけになるものぢやありませんよ。何故あんな小さい門を造つてお住みになるの。お蔭で私達はいゝ見せものにされてしまひましてよ。その御禮を申さうと思つてお呼びしたんですわ。

生昌　あゝ、あの北の門のことですか。お車が入らなかつたさうでさぞ、御迷惑でしたらう。相すみません。(生帳面に御辭儀をする。)何しろ御覧の通り手狹な住居のことで、中宮さまが一夜でも御宿り下さるなどゝいふ事はゆめにも思つてゐなかつたものですから――つひ、門も家のほど、身の程にあはせて狹く造つてしまつたのです。

清少　(微笑して。)家の程にあはせて――とおつしやるのね。

生昌　えゝ、全くこの邸の北の門を檳榔毛の車が通る事などは、私一代のうちにありさうにも思はれませんでしたから。(無骨に笑ふ。)

清少　大そう氣の狹いことをおつしやるのね。でもね、大進さま、門だけを家の程にあはせず廣く造つて住んだ人のことも世には傳はつて居りますよ。

生昌　(けゞんな顔して。)え、(長い間。)あゝ、それは于定國のはなしでせう。あんな故事を御存じなのですか――恐ろしい方ですね前漢書などゝいふ書物は古い進士などでなくてはよんでゐないものと思つてゐましたが――ふうむ、さうでしたか、よく御承知ですね、驚きました。(無邪氣に感心する。)香爐峰の雪のおはなしは誰からも聞かされて感服してゐたのですが――あんな古い書物にまで心を入れていらつしやるとは知りませんでした。いや、全く、私なども折よくこの道に足を入れて居りましたから、御言葉の謎が解けたのです。それ丈でも光榮としなければなりません。

清少　(勝誇つた冷笑を浮べて。)そのお道もあんまり氣が利いては居りませんでしたよ、筵道なんかお敷きになるから、皆、ぬかるみに落ちて騷ぎましたよ。

生昌　(飜弄されてたじ〳〵になり乍ち、猶、惡意のない笑ひを漏

して。）とても、どうも貴方の御相手はつとまりません。又、何か叱られない中に逃げ出しませう。（簀子へ出る。）

清少　お逃げになるのは卑怯よ。歌でもよんで詫びていらつしやいまし。

生昌　飛んでもない！　（東の廊を急ぎ去る。）

（右近を初め女房達、頻りに笑ふ。これより前中宮の御兄大納言藤原伊周（二十二才。美貌の貴公子。櫻の直衣に紫大紋の指貫をはく。）（枕草紙「初宮づかへ」の本文による）が、西の簀子の奥から出て來て西廂の間に入り、聲をかけ樣とする女房達を制して、御簾の影に立つて南廂の間の問答を聞いてゐる。）

伊周　はゝゝゝゝ、大進がひどく苛められたな。（御簾を排して入つて來る。）

右近　（初めて氣づいて、同音に。）　あら！

清少　大納言樣

右近　何時の間にいらつしやいましたの？

清少　御前を驅ふ聲も聞えませんでしたのに、何處からお入りなりまして？

伊周　君達の通つて來た氣の利かない道から來たのさ。

（皆笑ふ。）

大輔　（東の廂から出て來る。）降りますのによくおいでになりました。宮樣もさぞお喜び遊ばすで御座いませう。

伊周　方違へにお出ましになつたといふから、どんな御樣子かと思つて來てみたのさ。宮さまの御機嫌はいゝか？

大輔　殊の外に見えさせられます。先ほど、久方振りに辨の尼が御きげんうかゞひに伺候いたしましたので

伊周　何、辨が。それは珍しい。（母屋をさして。）では、ずつとお側に侍つてゐるのか。

大輔　はあ、それからそれへと御物語がはづみまして。（立つ。）たゞいま、御取次、致します。

伊周　あゝ、大納言が面白いはなしを持つて伺つたと申上げてくれ。

大輔　（母屋に入る。）

清少　大納言さま、登花殿の御前の雪の山は未だちやんとして居りますで御座いませうね。

伊周　さう〳〵少納言はあの雪の山が廿日まで消えないつて言つたんだつけな。知らないよ。おれは先刻、烏渡參内して直ぐにまわつて來てしまつたんだから。それより少納言。お前を喜ばせるお話しをきかせてやらうか。君の人氣が又上つたんだぜ。

清少　何をおつしやつていらしやるの。私には解りませんわ。

伊周　なあんて、實は見當がついてゐるんだらう。それ！　これを御覽。（持つてゐた扇を投げる。）

清少　（開いてみて。）まあ、いやだ！　こんなもの、どうして。返

へす。）

（その時迄に南廂に集つて來た右近内侍、中務、小宰相、左京その他數人の女房逹皆、伊周を取卷いて扇をのぞき込む。）

右近　鳥渡拜見。（扇を取って。）行成の卿の御手蹟で御座いますね。

伊周　あゝ、宮さまにお目にかけ樣と思つて先刻書かせて來たのさ。（微笑して、若い女房逹をみる。）讀めるか、君逹。

中務　眞名が御座いますのね、むづかしいこと。（間。）蘭省花の時錦帳のもと――で御座いますか。

右近　文集に御座いましたね、たしか、その句は。

伊周　さうだ。蘭省花時錦帳上、廬山雨夜草庵中――廬山の閑居から白氏が都の友人に送つた詩だ。その下の問をわざと假名で「草の庵を誰か訪ねん」と書いたのは誰の業だらう。こゝろ憎い才ぢやないか。（清少を見て笑ふ。）

中務　まあ、それはきつと少納言さまのことですわ。昨夜御宿直の時、更けてから主殿司が御文をもつて來たのに、お返しなさつたあれなのでせう――ねえ、少納言樣、さうなのでせう。

清少　（それに答へず、笑ひ乍ら伊周に。）頭中將は何とおつしやつていらつしやいましたて？

伊周　あつと感心した拍子に今迄の恨みをすつかり忘れてしまつたとさ。（笑ふ。）

辨の尼　（老ひてゐるが美しい尼法師。墨染の法衣を着る。）母屋から出て來る。）大納言樣、お久しう御座います。

伊周　あゝ辨の御許か。暫く會はない間にすつかり行ひ濟した風になつてしまつたね。その樣子ではもうさつぱり濁世の煩惱を厭離することが出來たらしいな、羨しいことだ。

辨　御言葉で恐入ります。この年頃、心細い老ひの身を一筋に彌陀の御慈悲に縋つて他念なく暮しては參りましたが、今日久方ぶりに伺候致しまして、宮さま初め殿樣方の御立派な御姿を拜して見ますと、捨てた浮世が今更なつかしく思はず涙が漏れます（と泣き。）何時までたつても、下根の凡婦心、お恥かしう御座います。

大輔　（出て來る。）宮さまが對面遊ばします。

伊周　おゝ、さう。（居住ひをなほす。）

（女房二人正面母屋の簾を卷く。）

母屋の正面奥は障子（繪襖）東西は御簾の中側に更に壁代をかけ渡して仕切る。屏風一雙、厨子棚一基を置く、正面に三尺の几帳を斜め背にして中宮、藤原定子、東京錦の茵の上に座し、沈の火桶に手をかざしてゐられる。（廿歲。輝く美貌。紅うすやうの重ね、紅に浮、紋の小桂を着る。（同じく「初宮づかへ」の本文による）背後に女童二人、女房三四人侍座してゐる。（服裝前述に同じ。）

伊周　（禮して。）御方逹への御見舞に伺候致しました。行啓といふ

のに折惡しくこの雪空で、御氣色も如何であらうかと、關白殿もおぼつかながられますので、

定子　有難う。貴方こそ御物忌みに籠つていらつしやるときいたのによく出ていらつしやれてね、それでなくとも、この空模様では「道もなし」と思ひましたのに、

（笑ふ。）

伊周　今日はひどく道がたゝるのですね。宮さまに讃めていたゞかうと思つて輕い物忌みを押して參つたのです。生昌とは違つて大いに朝臣の道をつとめたつもりなのですが――

定子　（微笑む。）本當に大進は大さう苛められてゐましたね。少納言にあつては適ひませぬ。今、話していらしつたのは何ですの？面白い話しとおつしやつたそれですか？

伊周　又、少納言の鼻を高くする話しが一つふえました。宮さまもお聞きになつたら御喜びになるでせう。まづ、これを御覽下さい

（扇を出す。女童中宮の御前に捧げる。）

生昌　（登場、中宮の出御を見て内に入らず簀子に座つて内の話しを聞く。）

定子　（取上げて。）蘭省花時錦帳下――草の庵を誰か訪ねむ――草の庵を誰か訪ねむとは、こゝろにくい譯しやうですこと。（微笑む。）少納言にこんな問ひをかけたのは誰ですの？

伊周　齊信の頭中將が發頭人らしいのです。少納言、君は何か大そう頭中將を怒らせたことがあるさうだね。

清少　あちらで思違へなさつていらつしやる丈で御座いますわ。こちらからわざ〳〵言ひ解くのも煩はしう御座いましたから、うちやつて置きました。

伊周　何だか知らないが、頭中將は大そう君の惡口を言つてゐたよこの頃。

清少　（平氣で。）私、人に憎まれることなんか慣れて居りますわ。

伊周　はゝゝ、悟つたものだね。頭中將の方は君の樣に思切りがよくないものだから、惡口をいひ〳〵、昨夜の樣なこともしてみたわけさ。

清少　本當に人困らせな惡戯をなさいますよ。

定子　頭中將はお前にこの詩の下の句をたづねて來たのかえ、少納言。

清少　はあ、昨夜、宮さまの御寢遊ばして後で御座いました、主殿司がその上の句を書いた文をもつて參りまして、この下を早く早くと居座つたなり火のつく樣に催促致しますので――私、困つてしまつて。末知り顏に眞名を書き散らすのもいやだと思ひましたで、つひ、出委せに、炭櫃の炭のもえさしで、紙のはしに、あんな句を、（笑ふ。）

定子。（扇をうちかへして見乍ら、伊周に。）それで、頭中將はどうしまして？

伊周。何でもこの返しが出來ない樣だつたら淸少といふ女のこの世に生きてゐることさへ忘れてしまふとかいつて大變に意氣込んでゐたさうですがこの「草の庵を誰か訪ねん」で、すつかり參つてしまつて、これ迄惡口を言つてゐたのが返つて恥しくなつたさうで御座います。

定子。誰かこの上の句の方も、歌に譯したものはありませんか。

伊周。それも、昨夜一晩中、宿直の殿上人が總がゝりで考へたさうですが、あんまり下の句が見事なのでこれに對しても、原の詩に對しても、ふさはしい上の句は到々出來ずじまひに夜が明けてしまつたさうです。いやもう、今日は朝から殿上はその噂でもちきつて居ります。少納言、君の名は當分、草の庵とつけたさうだから、そのつもりでゐるといゝよ。

淸少。まあ、忌々しい！ そんないやな名はお斷りで御座いますよ。

伊周。斷りは頭中將にいふがいゝさ。僕は知らないよ。(中宮に。)主上の叡聞にも達しましてね。流石にこの宮の女房ほどあると大さう御賞美になりました。

定子。それはまあ、少納言のおかげで私まで面をおこすといふものですね。有難う、いゝお話しをうかゞつて嬉しう御座います。(扇を伊周に戻す。)

伊周。殿上ではもう皆これを扇に書きつけて持ちあるいて居ります。(淸少に。)明日、內裏へかへると君の手蹟でこれを書いて貰ひに押しかけて來るのが大勢ゐるよ。待ちかまへてゐるんだから、

淸少。まあ大變。里へでも逃げ出しませうかしら。

右近。淸少さん、御目出度う。

(「御目出度う」「御目出度う御座います。」と女房達、わやわや淸少を祝す。)

生昌。(簀子に座つたまゝ、感に耐えて話しを聞いてゐたが、突然、)大納言樣、突然の御入りで御挨拶も申上げませず失禮致しました。

伊周。あ、大進か。(鷹揚にふり向く。)今日は宮さまの御宿で、何かと心遣ひなことでせう。關白殿からもよろしく申されました。

生昌。どう致しまして。こんなむさくるしい邸が一夜でも宮さまの御宿になりますのはこの上もない家門の譽れで御座います。

伊周。(笑つて。)門のことは言はない方がいゝ。少納言が又何か云ひたさうな顏をしてゐるよ。

生昌。は――(てれて鳥渡默る。間。思切つて。)大納言さま、唯今おはなしの草の庵の句を、淸少さんの手蹟で書いて貰ふことは出來ないもので御座いませうか、どうぞ御口添えを御願ひ致します。

(女房達目を見かはして笑ふ。)

伊周。(も笑ひ乍ら。)君が女房の手蹟を欲しがるなんて珍しいことだね。餘程、少納言には降參したらしいな。

生昌。(もぢもぢし乍ら。)どうぞ、これにお願ひ致します。(扇をさし入れる。)

右近。（扇を手にして。）ほんとに珍しいことですわ。清少さん、大進さんが折角の御熱心よ。早速書いてお上げなさいよ。（扇を清少の前に置く。）

伊周。（からかふ樣に。）大進に手蹟を所望されるなんて、御前の作(さく)文(もん)に召されるより餘程名譽なことだよ。お書き、少納言。

清少。（むつとして默つてゐる。）

右近。（ぢろりと清少の顏をみて。）そら、硯は此處にありますよ。

清少。（稍、間。ふと。）大進さん、貴方本當に私の手蹟が欲しいとおつしやるの。

生昌。どうぞ、その草の庵が願ひ度いのです。

伊周。じらさずに早くお書きよ。

清少。（いやに落ちついて。）ぢやあね、大進さん、私も貴方にお願ひがありますわ。それをきいて下さらなければ書くのは嫌ですよ。

生昌。どんなことですか。身に適つたことならば、何でもします、

清少。きつとですね。

右近。大そう勿體ぶるのですねえ。

清少。ぢや、貴方、この草の庵の上の句を假名に譯して下さいましな。さうすれば、私、すぐにこゝで、上下揃へて書いてさし上げますわ。

生昌。そんな、飛んでもない。秀才の聞えの高い頭中將さへ、よみかねたといふ句を、どうして私共の非才で譯すことが出來ませう。それは無理です。

伊周。そりや本當に無理だよ。少納言。

右近。てんで出來ない相談ですよ。

伊周。意地の惡いことを言はずに書いておやりよ。

清少。いゝえ、大進さんはいま約束したんで御座いますもの。ね、大進さん、おや、この扇は貴方の御返事の出來るまでお預りして置きますよ。（ふいと立つて、兩廂の方へ行つてしまふ。）

伊周。（不興氣に清少を見送る。）

（しらけた沈默。）

定子。（辨の尼を近く呼んで何か話してゐたが、この時、とりなす樣に。）大進、大進、

生昌。はは、

定子。案じることはない。扇はその中きつと書かせて上げるから、

生昌。（恐縮して。）恐入ります。

伊周。宮さまがうけあつて下さつたら、まさかに大丈夫だらうよ、

大進。（中宮に向つて）どうもあゝいふ駿馬はとても、私共の手にはあひません。あれに、見事乘りこなしていらつしやる宮さまは、天晴稀代の達人でいらつしやいますな。はゝゝゝ（苦く笑ふ。）

定子。（たゞ微笑む。）

（右近その他の若い女房達、やゝ怏げに笑ひかはす。生昌は唯、恐縮した樣子で座つてゐる。）

雪、いよ〳〵降る。)

――幕――

――第二幕――

(一)

同じ夜の深更。

同じ邸内、西の對の屋の廂の間の一部を内から見た裝置。正面は障子(袷襖。)、上手は御簾に壁代を垂れて仕切る。下手も御簾を降ろしその向ふは簀子で格子が全部降されてゐるこゝろ。室内には几帳二基。一つは上手よりに立てゝあり、その背後に辨の尼が讀經してゐる。(姿はみえない。)下手より斜めにもう一つの几帳、その前に襖(夜着)を方よせてそれにより伏す樣に清少納言(裳、唐衣など脫ぎすてた袿姿。)筆をとつて頻りに何か書いてゐる。背後の几帳に裳や唐衣がしどけなく投げかけられてゐる。切燈臺二基。朧ろげに屋内を照らす。

辨の尼の法華經を誦す聲が細々と澄んで聞える。遠く鐘の音。――長い間。

じとりと音がする。

清少。(氣づかず、筆を走らす。)

間。又、ごとりと音がする。

清少。(鳥波、目を上げるが、やがて又書きつゞける。)

(床をふむ音がみし〳〵と聞え、やがて御簾の外に男の影が浮ぶ。)

清少。誰? どなた?

(辨の讀經の聲はたと止む。)

外の男はそつと御簾をかゝげ、半身をあらはす。大進生昌である。(前場と同じ服裝。)

生昌。(おづ〳〵と。)私です。お側に參つてもおさしつかえありませんか。

清少。(几帳越しにその人を見定めてふき出しさうになる。何氣なく。)どなたです? お名のりにならなければ、お入れすることは出來ません。

生昌。(云ひにくさうに。)私ですよ。お解りになりませんか、

清少。(空とぼけて。)聞きおぼえのある樣なお聲ですね。さあ、誰でしたでせう。

生昌。(いよ〳〵身をかくして。)この家主(いへあるじ)です。大進生昌です。

清少。あゝあ、さうおつしやれば、成程大進さんのお聲ですね。――私は又泥棒ではないかと思つてびく〳〵致しましたよ。

生昌。私なら、そこに行つてもおさしつかへないでせうか。

清少。ま、ま、お待ち遊ばせ。こんな夜、更に何の御用が御座いますの。先刻の上の句でもお出來になりまして?

生昌。さういふわけではないのですが――折入つて御相談したい事があるのです。

淸少。何でせう、御相談なんて。門を廣くなさいと申しましたけれど、國の御簾をおあけなさいとは申しませんでしたよ。

生昌。(困つて。)その門の事についても、もつとお話したいのです。いけませんか。本當に、お側へ行つては？

淸少。飛んでもない！ (笑ひ乍ら、やゝ聲を高く。) 辨さま、辨さま、御覧遊ばせ。あれ、あんなおかしなものが居りますよ。(指さし笑ふ。)

辨。(迷惑さうにわざと咳する。)

生昌。(驚いて。)おや！ 外に人が居られたのですか。

淸少。(笑ふ。)

生昌。(敗亡して去る。)

淸少。おかしな人。(辨に。)御免遊ばせ、辨さま。御讀經のお邪魔を致しましたね。

辨。(几帳をいざり出る。前場と同じ姿。) いえ、もうそれは、すみましたから。(鳥渡間。) でも、あんな人のよい人をおなぶりになるのは罪が深う御座んすよ。

淸少。だつて、なぶりたくもなるぢや御座いませんか。ま、何處の國に女の國へ忍んで來乍ら、しかつめらしく案内を乞ふものがあるでせう。入れとも言はれないではありませんか。

辨。でも、それが大進の正直なところです。さうお思ひになりません？

淸少。正直といふより愚かしく思はれますわ。(間。)大そう堅人だと聞いたのに――あゝ、きつと何ですね、宮様が邸に行啓遊ばしたので、急に氣が大きくなつて、こんなことをするのですよ。生意氣だこと。

辨。さういはれては大進も可愛相ですわ。いゝえ、きつと先刻の門のこと以來、貴方の才に感心して、つひそんな氣になつたのですよ。それに違ひありませんよ。

淸少。大そう大進が御ひいきですのね。でも、今夜の樣子では堅人もあんまり當てになりませんね。ほゝゝ(上氣嫌で。)あの人の北の方はどんな女でせう、面が見たい樣な氣がしますね。

辨。貴方、御存じないのですか、大進の北の方は、去年亡くなつたのですよ。私の有緣の僧が加持(かぢ)をしたので知つてゐます。

淸少。まあ、ぢや今、大進は獨身(ひとりみ)なのですか。

辨。えゝ、ですもの(微笑して。)大進が今通つて來たのも浮きごゝろではなしに、貴方に北の方になつて貰ふ相談だつたかも知れませんよ。

淸少。(いやな顏して。)猶いけませんわ。私、そんなに安つぽくみられてゐるんでせうか。大進なんぞに。

辨。(淸少の顏色をよみつゝ。)氣を惡くなさるものぢやありません

よ。冗談ですわ。（炭櫃の火などかき起こし乍ら。）でもね、清少さん、私の様な身になつて、捨てた浮世をふりかへると、貴方の莫迦になさる大進の様な人が返つて、なつかしく、たのもしい様な氣がするから不思議ぢやありませんか。

清少。（あざける樣に辨をみて默つてゐる。）

辨。本當ですよ。聖人は中庸の徳を道ふとか聞いてゐますが、徳はおいて浮世に住むものゝ――わけて女の幸福などゝいふものは、尊いとか、賢いとか、美しいとかいふ優れたものよりも、平凡な正直な中品の夫婦の間などに具つてゐる樣に思はれますね。

清少。では大進の北の方などは天下の幸福者かも知れませんね。（冷嘲。）

辨。貴方はお笑ひになさるけれど、まあ、考へて御覧なさいましよ。この宮さまの御幸ひは別としても、女御更衣の御息所とうやまはれて、今をときめく上臈の方々でさへ隨分人に言はれない御苦勞をもつていらつしやるものですもの――まして、移り氣な公達や殿上人の薄衣の様な輕い御心をあやつる女房達の色や才の朝顔の様なみじかい榮え、おとろえゆく行末のはかなさ、哀れさを、目の痛くなる程數々見もし、自分の心にもまざ／＼思ひあたるにつけて、幸福などいふものははなやかな名のもとなどにあるものではないとしみ／＼思ひます。

清少。（輕く笑つて。）でもそれは私達のうゑばかりにも限りませんわ。妻子も珍寶も、帝さまの御位でもあの世まで隨へてゆくことは出來ないと御經にもあるでは御座いませんか。泡沫夢幻――浮世の幸ひなどといふものは皆はかないものなのですもの、水鏡にうつる影の束の間美しさに生涯の幸ひをかけて、身を果たすのも、いつそ面白いではありませんか、（間。）私なんか、何の優れた才も色もない良人をもつて、浮世の榮えの片はしも知らず閉ぢこもつてくらす女のつゝましい幸福など、幸福の中に數へては居りませんよ。

辨。貴方の氣象ではさうお思ひになるでせうがね。（稍、長き間。）でもね、清少さん、今の貴方の様な日を過してゐらしつて時々、淋しいことはありませんか。私、今日、久しぶりに宮に上つてみて、しみ／＼さう思はずには居られませんでしたよ。

清少。（ふと默る。長い間。）貴方、私の淋しさがお解りになつて――珍らしい事ですわ。世の中の人は十に十まで、ほこらしさうな樂しさうな、私といふものを知つてゐて、私の淋しさを知つてはくれませんわ。でもそれは無理もない――、私位、自分の弱さをみせまいと骨を折つてゐる女もまづ、ないでせうもの。

辨。さういふ我がさぞ貴方を始終苦しめてゐることだらうとお察しします。あゝして毎日の様に貴方の才を試めしに來て負かされて歸つてゆく男達は、皆が皆、今の大進の様に素直な人達ではありませんものね。貴方は輝かしい榮えと一緒に恐しい恨みを大勢の

人に貢つていらつしやるのですよ。

清少。（稍、青ざめて、神經的に身慄ひする。）私みたいに澤山の恨みはなまなかの男には背負へません。（聲のみ笑つて。）恨まれたも本懐ですわ。心から戀し愛される男もない浮世なら、人を笑つて玩んで、呪はれて過ごすのも、結構、生き甲斐のある一生だと思ひますわ。

辨。（苦笑して。）ひとむきなことをおつしやる――（小机の上の經卷をさして。）この御經（おんきやう）の樣ですね。

清少。えゝ、私は一乘の法（のり）。例へ、阿彌陀如來が水品蓮臺に迎へてやるとおつしやつても、下品（げぼん）ならばお斷りしたいのが本性なのですもの。

辨。ま、もつたいない――

清少。（淋しく笑つて。）隨分身のほどを知らない願ひでせう。ですから、それがいけなければ、いつそ、無間地獄の底へでも突き落して頂きたいのですわ。（間。）

辨。（も無言。）

稍、長き間。

清少。辨さま、貴方、今夜、私に意見したいと思つていらつしやるでせう、解りますわ。

辨。お察しの通りです。私、佛に仕へる身として及ばず乍ら、貴方のその淋しさを和げて上げたいと思ひました。貴方の才が閉ぢこめてゐる氷の地獄から、貴方を救ひ上げて上げ度いと思ひました。それには宮さまも――

清少。（狼狽して遮る。）もう、おつしやらないで――解ります。貴方の御親切はよく解つて居ります。有難い、勿體ないと思ひます。

辨。何故、そんなにお逃げになるの？　他人のあたゝかいこゝろに觸れるのがそれ程お苦しいのですか？　貴方にも似あはない、御卑怯ですよ。

清少。でも――それは

辨。ま、お聞きなさいまし。宮さまはどの位貴方といふ人を慈（いつく）しんでいらつしやるか知れませんよ。それ丈、あなたの上にさま〴〵の恨みのかゝつてゐることを誰よりも御氣にかけて、御心を痛めていらつしやるのですよ。才をたのむもよいが、清少の樣にこと〴〵に他人に異をたてゝ、恨みをかつて、行末はどうなるのであらう、もう少し、平らに世を渡る術はあるまいかと、最前もしみ〴〵私に仰せになりました。（間。）清少さん、浮世には貴方の思ふ樣な鬼ばかりでもありません、佛の心も生きてゐるのですよ。

清少。（默つて泣いてゐる。稍間の後、）辨さま、御寛遊ばせ、私でも涙を流します。こんな心のあること丈を、宮さまにも啓し上げて下さいまし。

辨。では、貴方も宮さまの仰せごとを尤もとお思ひになりますか？

清少。思つたとて、今更、何になりませう。私には、もう自分でさ

へ如何することも出來ない別の自分があるのですもの。幼い頃から他人と異つた心に、身寄りもうすい世に生立つて、人に負けまい、指さゝれまい、勝たう、優らうと、名聞に囚はれて世を渡る中、いつの間にやら、優しさうな女心など持つてゐるのが我れ乍ら恥しい様な氣質になつてしまひました。折々は獨寢の夜半などふとわれに歸ると、うるさく世に噂する清少納言と呼ぶ女はどれ、どこにゐるのやら思ひ迷ふほど、遠い〳〵雲の向ふに自分の影をみることもありますわ。それでも、夜が明けて晝間になれば、又あの清少といふ增長慢の女らしくふるまつて歩かなければ、自分も他人も承知が出來ない様になりますわ。何も、因縁因果でせう。（間。）こんな身にふさはぬ他人の情けなど負ふのはつらう御座います。良人も子も人の情けも、富みもいりませぬ。私は他人に憎まれる自分の才を負つて一生の業を果します。卑怯にみづからのみにくさを塗りかくさうとは思ひませぬ。

辨。清少さんほどあつていさぎよいお覺悟ですね。（稍、長き間）成程、考へてみれば、一天をしろしめす帝さまさへ、攝政關白とやんごとない御位人さへ、御身の末を思ひ、長い榮えをお望みになればなる程、世のおもはく、人の心を推しはかつて御心の思ふまゝには遊ばし得ぬ今の世に、貴方の様な人の出來たのも御佛の御心かも知れませぬ。さかしらに生悟りの意見はもう致すますまい。

清少。さうおつしやられると、又、淋しい氣にもなりますわ。我儘ですね。（間。）實のところ自分にも自分をもてあます事があるのですわ。他人に爭つて勝つた時、他人を笑つて手を拍つて喜んだ時――そんな時のあと程、切ない悔ひが身をせめて――他人を弄んで喜んでゐる自分の才と呼ばれるものが世にも大人氣ないあさはかなものに思はれて――もう、そんな時の私の心の淋しさ、やるせなさは、（間。）誰に解つて貰へるでせう。（空間に目をやつて）未だものごころも覺えない子供のころ、ふと、死ぬといふことを知り初めてこの生々と動いてゐる身體も聲も、皆、いつか――いつか一度きつとこの世から消えて行かねばならぬと知つた時のあの暗い闇の中に吸ひ込まれてゆく様な淋しさ、心細さが、大方それにたとへられるかと思ひます。

辨。貴方は佛の聖道門を辿つていらつしやる様な氣もしますね。貴方の様な淋しさは千人に一人、萬人に一人、選ばれた人の耐えてゆく自力の正道なのかも知れません。（間。）私共、下根の凡婦心に推しあてゝとかういふべきではないのでせう。

清少。（急にくだけて。）ほゝゝゝ、そんなに堅くおつしやらないでもよろしう御座います。古い馴染の貴方にお目にかゝつたので、つい言はでもの愚痴が出て。（間。）この話しは、どうぞ今宵の夢と思つておきゝすて下さいまし。

辨。よろしう御座いますとも。誰にも漏しはしませぬ。

（妻戸の風にあふる。）

清少。（立つてゆく。）ま、御寬遊ばせ。大進があはてゝ行つたとみえて、御殿の口が開いて居りますよ。

辨。道理で寒いと思ひました。裁から忍んで來たのですね、この雪に、さぞ寒かつたでせうに——氣の毒な。

清少。飛んだ深草少將ですこと。（閉めにゆく。軈て戻つて來て、立つたまゝ。）でもね、辨さま、憎まれ口はきく樣なものゝ、大進の樣な心はさぞ氣樂なものでせうね。

辨。本當にうらやましいと思ひますよ。私なども御佛の御慈悲で一日も早くあゝした氣もちになり度いと思ひますが、なまじひな智慧に邪魔されて、我を捨てることも出來ませぬ。（吐息して。）道に至るのは難しいもので御座いますね。

清少。（獨語の樣に。）あんな心に產れた人は仕合せかも知れませんね。

辨。お羨しいのですか、貴方もで。

清少。（笑ふ。）私のこの短い髮が一夜の中に宮さまの御髮の樣に美しく變つても、來世を九品蓮臺の上品に迎へられても、大進の樣なこゝろに生れかはることはお斷り致しますわ。

辨。（も淋しく笑つて。）やつと、いつもの清少さんらしくなりましたね。

清少。その筈ですわ、もう夜が白らみますもの。

（雪折れする木の音、遠く鷄鳴。）

燈臺の光薄れる。

舞臺暗くなる。

（二）

明くなるもとの寢殿。その翌朝。

雪は全く晴れて厚く積もつた上に、朝の光がまばゆく照り輝いてゐる。鶯の聲が閑かに聞こゑる。

格子は南と西は上げられて東は未だ閉ざされてゐる。廂の簾も南のみ上げあとは全部降りてゐる。

賀茂の齋院に仕へる侍の長（おさ）（深緣の袍白の指貫宿直姿。）結び文を松の枝につけたのを持ち、西の渡殿の下をうろ〳〵してゐる。

清少納言。（一幕目と同じ姿で西の渡殿を渡つて來る。）おや、何處からのお使ひ、大そう早いこと。

侍の長。（階の下にひざまづいて）齋院樣から中宮樣へ奉る御文で御座います。

清少。ま、それは勿體ない。直ぐさし上げませう。（文を受けとる。）鳥渡待つてゐて下さい。（急いで廂へ入る。）

渡島間。

大輔の聲。（母屋の中から。）誰ぞ居りませぬか、東の御格子を上げて下さい。

清少の聲。皆、下へ降りて居りますのね。私、致しませう。（出て來る。廂の間に置いてある碁盤を持出し、その上に乘つて格子を上げる。格子の軋る音。）

（東の渡殿から右近内侍、左京太夫、小宰相、先に下臈女房二三人出て來る。）

右近。（思はず笑つて。）あら！　貴方なの、何だかひどく軋る音がすると思つたら。一人ぢや大變でせう。

女房達。お手つだひ致しませう。

清少。い丶え、わけないんですよ。ぢや、他の處を上げて下さいな。

（皆々格子を上げる。朝の陽ざしが屋内に流れ込む。この中、大輔命婦指圖して母屋の御簾を卷く。内に中宮、御髮を上げ終られた姿。前場と違ふ小袿を着、文を讀んで居られる。御前に鏡臺がある。背後に中務は櫛など整へてゐる。女童二人侍座する。伏籠には別の小袿がかけてある。）

右近。（初め皆、中宮をみて禮する。）

定子。（輕く會釋して、中務に。）有難う、もうそこはい丶。料紙を、

（中務料紙硯を持つて來る。中宮、筆をとつてすら〳〵と何か書いて結ぶ。女童一に。）あてき、前の栽の紅梅を一枝折つておいで。

女童一。は、（立つ。）

定子。あまり散りすぎない程がい丶。少納言、お前よくみて、

清少。かしこまりました。（簀子へ出る。）

女童一。（庭へ降りたつて梅のもとに立つ。）こ丶らがよろしいでせうか。

清少。さあ。少し蕾が硬すぎて愛がない樣ね。

女童一。（手を延べて稍高い枝を掴みつ丶。）では、これは、？

清少。あ丶、それ〳〵、その枝がい丶わ。

女童一。（枝を折る。雪はら〳〵肩にか丶る。）お丶、つめたいこと！

清少。（受けとつて。）御苦勞樣。（中宮に。）これでよろしう御座いませうか。

定子。結構よ。ではこれをつけて、（文を渡す。）

清少。（いたゞいて梅が枝につける。）

大輔。（梅重ねの衣一領持ち出て。）では、お使ひにこれを！

清少。承知いたしました。（文を持ち、女童に衣を持たせて西の階のところへ來る。）お待遠うでした。では御返しを、

侍の長。（文をいたゞく。）

清少。これは宮さまから賜はります。（衣を渡す。）

侍の長。かたじけなう御座います。（衣を肩へかけ花道へ去る。）

定子。（廂の間　出で雪をみてゐる。）よく積つたこと。御覽。齋院の使ひの青い袍が雪に映えて美しいぢやないか。

右近。本當に、何か鳥の羽色の樣にみえますこと。

定子。（ふと。）少納言の雪の山には積らなかつたらうねえ。

右近。多分、屋根でもいたしましたでせう。
清少。屋根をなさつても、もう廿日迄、三四日ですもの。この賭は私の勝で御座いますよ。
定子。まだ、その中に雨が降るかも知れないよ。
清少。でもそれは屋根がふせいでくれますもの。
定子。（笑つて。）その時は屋根をのけさせるのよ。
清少。まあ、お人の悪い！（笑つてゐる。）
定子。少納言。齋院様の御文にお前の草の庵のことが書いてあつたよ。それから昨日の門のこと迄、
清少。まあ、誰れが申し上げたんで御座いませう。門のことなんか、それこそ門外不出ですむと思ひましたのに。
定子。齋院様はお前をゆかしがつていらつしやるよ。
大輔。（出て來る。）朝餉（あさがれい）の用意が出來ました。聞こし召しませ。
定子。さう、（母屋へ入る。清少等もつき添ふて入る。御簾降りる。）

（殘りの女房達も東西の廂へ入り、右近の內侍のみ南廂に殘る。）

辨の尼。（西の廊から登場）右近様、いま、中門の廊のところへ關白殿の中將様が、おみえになりましたよ。
右近。あら！　さうで御座いますか。（立つて西の方をみ。）本當に中將様ですわ。內裏（うち）のお使ひにでもいらしつたのかしら。鳥渡申上げて來ませう。
辨。私も、もう山へ歸らねばなりません、宮様に御挨拶して參りませう。（二人母屋へ入る。）

（入れ違ひに左京と小宰相が母屋から出て來る。）

左京。寒いことね。私、早く內裏へ歸りたいわ。こんなとこ狹くていやだわ。
小宰相。だつてどうせ今日はお歸りになるんでせう。
左京。でも晩までいらつしやるのよ、きつと。
小宰相。ほゝゝゝゝ、いゝぢやないの、一日位頭中將のお顏が見られないつて、そんなにおむづかりになるものぢやないわよ。
左京。いやな方。私、それより頭中將様が清少さんなんぞやれこれ言つていらつしやるのが癪に障つてならないわ。
小宰相。本當にね。つん／＼してすかない人つてありやしない。
左京。私達なんぞ鼻の先であしらつてゐるのよ。いばつてるのね。宮さまのお氣に入りだもんだから。
小宰相。ずるい人ね、昨日だつて袴を汚していゝ氣味だと思つてたら、逆まに大進なんぞやりこめたりして、

（母屋の內に笑ふ聲頻りに聞こえる。）

小宰相。何かしら？
左京。又、清少さんが自慢の洒落でも言つてるんでせう。
小宰相。（生あくびして。）退屈ね、碁でもうちませうか。（碁盤の傍に座る。）

左京。えゝ。(同じく座る。)本宮に誰かあの人の鼻をあかしてやる人はないものかしら。

小宰相。私、黒をとるわ。

左京。それぢや勝目はないけれど、

(打ちはじめる。母屋の中から猶、笑ひ聲が聞えてゐる。

三位中將藤原隆家、(中宮の弟。十七歳。直衣　指貫。)主上の御文を持ち、西の渡殿を渡つて大進生昌と話し乍ら出て來る。伊周に比して精悍な男性的風貌。)

隆家。そんな弱いことをいはないで、ちつと淸少の鼻を折ることでも考へてくれ。君も進士出の人ぢやないか。(快活に笑つて。)僕はいま面白いことを考へてゐるんだぜ、敎へてやらうか。(耳に口をよせる。)

生昌。は、は、はあ、(呆れて。)そ、そんな惡いことをなさるものでは御座いません。

隆家。はゝゝゝ、面白いぜ。僕はきつと實行して、淸少に泣きつらをかゝせてやるよ。

生昌。しかし、

隆家。君達はまあ默つて見てゐるがいゝのさ。(南廂に入る。)

生昌。中將さまがお見えになりました。(言ひ置いて去る。)

隆家。何だ！　朝つぱらから勝負か、

二人。(笑ひ乍ら禮する。)

隆家。草の庵は何處へ行つた。御前にゐるのか？

小宰相。(笑ひ乍ら。)えゝ、何か御用で御座いますの？

隆家。いや、昨日の今日だから定めし、(手を鼻によせて。)これだらうと思つて。え、さうだらう？

二人。(顔見合はせて笑ひつゝうなづく。)

隆家。たまらないな。ま、宮樣にお目にかゝつて來樣、主上の御文を持つて來たんだから、(母屋へ去る。)

(二人、又、碁をうちはじめる。稍、間。淸少納言、母屋から出て來て、二人のゐる側の柱により、何か考へ乍ら碁を見てゐる。間。)

淸少。あ、いけないわ、左京さん、さう切つてしまつては。

左京。よろしいのよ。

小宰相。御助言は御無用よ。

淸少。(つまらなさうに默す。)

(母屋の內から、隆家の高調子にしやべる聲が明かに聞えて來る。)

隆家の聲。いくら何でもあんまり莫迦々々しすぎますよ。殿上人が揃つて草の庵を扇に書きつけて持ち步くなどは、まるでお祭騷ぎぢやありませんか――私はあゝいふ人氣に媚びる氣もちが大嫌ひなんです。

(何か、女の答へる氣配、聞えす。)

隆家。そりや宮さまは御ひいきだから――(間。)いや、私は斷じてさうは思ひませんね。あの位の飜譯を又とないもの丶樣にかつぎまわるのは、結局、殿上に人のないこと、内裏の朝夕のひまなことを證據だて丶ゐる樣なものです。決して喜ぶべき傾向ぢやありませんよ。

(又、女達の答へる氣配。)

隆家。あんなことでい丶氣になつてゐるとすれば、清少といふ女も存外い丶加減なものですな。は丶丶丶丶丶、當人は何と言つて居ります？

(稍、長き間。)

隆家。は丶丶、草の庵、草の庵、少納言は何處へ行つた！

(東京と小宰相、碁をうち乍ら目を見交はす。清少もその方に耳をとられ乍ら、わざと知らん顔をしてゐる。)

小宰相。(小聲に。)少納言さま。

清少。い丶のよ。

小宰相。でも、惡いことよ、おいでにならないと、

清少。(默つてゐる。)

(稍、間。)

右近。(登場。清少に。)あら！ そこにいらしつたの 中將さまが呼んでいらしつたのに、

清少。私、草の庵なんて名ぢやないんですもの。

右近。聞こえたでせう。

清少。(笑ふ。)

右近 相變らずでねえ、(左京等の方に。)鳥渡、もう碁なんぞうつていらしつちや駄目よ。宮さまはそろ〲御召しかへになるのよ。

左京。あら！ もう？

右近。え丶、今主人からの御文で、今日はおひるから上の御局で御遊びがあるんですつて。それで宮さまにも是非御同座遊ばす樣につて仰せつけで、急に還啓が早くなつたのよ。

左京。お遊びか、まあ嬉しいこと！

小宰相。左京さん、お樂しみね。頭の中將の御琵琶が聞かれるわ。

左京。いやだ！ 御自分のこと言つていらつしやるわ。(二人いそ〲母屋へ入る。)

右近。(清少に。)あなたもいらつしやいよ、中將樣はあとが怖いことよ。(去る。)

清少。(柱に凭つたま丶、浮かぬ顔してゐる。)

生昌。(登場。)あ、清少さん、恰度い丶ところで御目にか丶りました。

清少。(突然聲をかけられて、悸っとして立つ。)何ですか、私、宮樣の御用がありますから、(行かうとする。)

生昌。あ、成程。もう還啓になるさうですね――今、中將樣からうか丶ひました！――ぢや鳥渡、鳥渡でよう御座いますから。

清少。（迷惑さうに座る。）何？　御用は。
生昌。いゝえ、別に――矢張、昨日の門のことですが、私、早速兄の惟仲に話してやつたのです。すると兄も大變に感心しましてね――昨日、內裏から齋院へ御使ひに行つた時、あちらでおはなし申したさうです。
清少。（遮る樣に。）さうしたら齋院樣がお讚めになつたといふのでせう。そのお話しならもう外からうかゞひましたよ。
生昌。さうですか、もうおきゝになりましたか、何でも齋院樣は、
清少。（苛々して。）大進さん！
生昌。え、
清少。何故、貴方あんな話しをぺら〱おしやべりになるの？
生昌。は、惡いのですか？
清少。惡いつて――私は構ひませんけど、貴方の方がみつともないぢやありませんか。
生昌。（笑ふ。）私の外聞なんぞ――私は唯貴方の才を人に話してみたかつたのですよ。
清少。（吐き出す樣に。）莫迦々々しい！
生昌。（呆れて。）だつて、頭中將だつて貴方の才には舌をまいてゐるぢやありませんか。
清少。それとこれとは違ひますよ。
生昌。どう違ふのでせう。
清少。お解りにならなければいゝわ。私、氣の利かないお世辭は大嫌ひよ。（立つ。）
生昌。何がそんなにお氣に入らないのでせう。
清少。何でもよろしいわ。（母屋へ入る。）
生昌。何を思ひ違へてゐるんだらう。
隆家。（出て來て生昌の肩をたゝく。）莫迦だな、大進。返へす〴〵恥をかゝされて、君の顏は何處でたつんだ！
生昌、少納言は何を怒つたので御座いませう。
隆家。おい、君は餘程清少の奴にまゐつたらしいね。何處がそんなに氣に入つたんだい？
生昌。（狼狽する。）そ、それは違ひます。私、決して清少さんに、そんな――
隆家。噓をつき給へ。昨夜、清少の局に通つたといふぢやないか。
生昌。え、
隆家。はゝゝゝゝ、顏色を變へないでもいゝさ。僕も今聞いたばかりだよ。（罵る樣に。）可愛相に、清少の奴、君をいゝ嬲りものにしてゐるんだ。朝つぱらから、宮の御前で昨夜のことをしやべり散らしてゐたさうだよ。
生昌。（恐縮して。）恐入りました。申しわけ御座いません。全く一時の氣の迷ひで御座います。
隆家。何も僕に詫びることはないよ。しかし、君、逐ひかへされる

なんぞはちつと氣量が惡いね。そんなにふみつけられて。腹も立たないかい、え、本當に。

生昌。（やたらに恐縮して。）いえ、もう、私などには一向さういふことは解りません。

隆家。腹がたつかたゝないか解らない奴があるものか。（吐き出す樣に。）あの女は君を莫迦あつかひしてゐるんだぜ。

生昌。（悲しげな目に隆家をみて。）何といはれても仕方が御座いません。あんな身の程を知らない事をしたのは全く私が惡いのですから。

隆家。何が身の程を知らないんだい、たかがあんな女。君なんぞは知るまいが、淸少はあゝ見えて、隨分くだらない男を相手にする女なんだよ。現に、あの修理介則光なんかも

辨。（母屋から出て來る。）中將さま。宮さまが召します。

隆家。今行くよ。（辨を見て。）おや！　お前未だ居たのか！

辨。今、お惶するところで御座います。

隆家。（立ち乍ら。）まあ大進、ちつと思案して見給へ。人のいゝばかりが見榮でもないぜ。（入る。）

辨。（氣の毒さうに。）大進さん、中將さまのおつしやることなど氣になさるのではありませんよ。

生昌。面目ありません。貴方もお聞きになつたでせう、昨夜の始末を、

辨。（うなづく。）お氣を廣くお持ちなさいましよ。誰があんなことを何時迄、覺えてゐるものですか。つまらないもの恨みなぞなさらないのがいゝのですよ。

生昌。恨むなどゝ飛んでもない！　身から出た錆ですもの、（間。）誰が何と言つたつて淸少さんは私などには過ぎた女なのです。（再び間。）昨夜、忍んだのも强ち徒ら心からでも無かつたのですが、斯うなつては何と言はれても仕方がありません。（間。）しかし、どんなに笑はれても、あざけられても、私はあの人の才を讃めずには居られません。優れたものをたゝえることを、何故人は遠慮しなければならないのでせう。（吐息する。）

辨。（ほろ〳〵泣いて。）有難い御心ですこと、貴方の樣な方ばかりでしたら、人の世も淨土の樣に美しくなりませうに、

（稍、間。）

生昌。（突然。）尼君！

辨。え、

生昌。（躊躇し乍ら。）こんなことを言つて頭中將樣にすまないのですが、（間）中將樣は惡い惡戲を仕組んでいらつしやるのですよ。

淸少。（何心なく出てきて、ふと、耳をとゞめてきく。）

生昌。淸少さんに、敎へて上げ度いのですが、又、叱られるといけませんから、貴方に（耳に口よせ、私語く。）

辨。まあ、あの雪の山を！

生昌。え、、清少さんは廿日迄もつと言つてゐるんでせう。だから、それを十九日の晩に崩させて笑つてやる趣向なのださうです。(間。苦笑ひして。) 何、つまらないことですが、清少さんの樣な勝氣な人にはさぞ厭でせうと思つて。どうぞ、その積りで用心する樣に貴方から言つて置いて下さい。決して、私の口から漏れた樣に言つてはいけませんよ。や、つひ、しやべり込んで、供奉の用意は整つてゐるか、見て來なければ。(立つ。) ぢや、頼みましたよ、今のことは、(西の渡殿へ去る。)

辨。(凝つと見送つてたゞづむ。ふと背後をふり向くと、清少がぼんやり立つてゐる。) 清少さん!

清少。――

辨。おきゝになつて?

清少。(何氣なく。) 中將さまが私の雪の山を崩して笑はうとしていらつしやるんですつて?

辨。え、、大進が貴方の爲に敎へてくれました。(意味ありげに) 貴方、あの人を今も心から輕蔑することが御出來になりますか?

清少。出來ますとも。あんな意地も張りもない佛心に隨喜の涙を漏す樣なことで何處に私の生き甲斐がありませう。(反撥的に笑ふ。) 憐む樣な目で御笑になるのね。いやですよ、辨さま、昨夜の夢のつゞきなんぞ御覧になつては。

辨。(淋しく微笑む。) さうでしたね。ではお別れ致します。

清少。さよなら、御機嫌よう、

辨。(西の御殿へ去る。)

右近内侍。(母屋から出て來る。) 御裝束はすみました。早速、御輿を入れる樣に仰せで御座います。

(西廂にゐた女房一人領掌して西の渡殿に去る。隆家を先に、定子、服を更めて、(同じく小袿姿。) 母屋を出、南廂へ入る。大輔命婦の他の女房、女童、全部從ふ。)

定子。中將、貴方も一緒に内裏へ歸るのですか?

隆家。いゝえ、私に未だ左の大臣のところに參らなければなりません、御遊びまでにはきつと參殿致しますが、

(この中庭に筵道を敷き隨身數名と、雜色數人御輿をかいて來る。生昌、登場。)

生昌。(簀子に平伏して。) 用意は整ひまして御座います、

定子。では大進、いろ〳〵もてなしてくれて嬉しく思ひます。

生昌。仰せでは恐入ります。不行屆きは平におゆるし下さいませ。

大輔。(香を手にして進み出る。) 大進さま、これは先ごろ、内裏の御香合せに宮さまの勝ちをお取り遊ばした侍從で御座います。昨夜の御宿の料に賜はります。

生昌。(拜して受ける。) かたじけなう御座います。長く家の寶と致します。

定子。(輕く會釋して輿に乘る。)

（警蹕の聲。女房達隨身、皆輿に添ふて花道へ去る。清少納言も列の中に交り、何か生昌に心を殘して去る。隆家と生昌、階前に降り跣いて見送る。稍長い間。）

隆家。（立上つて。）君も氣づかれがしたらう。

生昌。どう致しまして、

隆家。まあ、ゆつくり休み給へ。僕ももう歸るよ。

女童一。（手に扇を持ち、向ふから走つて來る。）大進さま、少納言様がこれをさし上げてくれとおつしやいました。（扇を渡す。）

生昌。清少さんが、（不思議さうに受取つて開いて見る。）あ、これは昨日所望した草の庵の句だ。どうして、今頃くれる氣になつたのだらう。

隆家。何だ、草の庵を書いてよこしたつて、ふむ、（冷笑する。）鳥渡借し給へ。

生昌。（滿足さうに。）少納言は眞名をよく書きますな。（渡す。）

隆家。（默つて見てゐたが、突然、惡戯見らしい敏活さで、階上に駈け上ると、硯の筆を取つて、扇の字の上に墨を塗る。）

生昌。（驚いて。）あ、中將さま、何をなさいます。（手をおさへる。）飛んでもない！

隆家。（けろりとして。）何がさ。高慢らしい、こんなものを書いてよこす清少も清少なら、ほしがる君も君だ。まあ、僕のすることを見て居給へ。（呆れてゐる女童に。）おい！

女童。は、

隆家。お前、清少のところへこの扇を持つて歸るんだ。そして、大進がこんなに墨をつけてかへしたといふんだよ。

生昌。そ、そんなことを！（女童に。）言つちやいけないよ。決して言つちやいけないよ。

隆家。いゝんだ？ いゝんだ！ きつと僕の命令通りいふんだよ。（おどす様に。）隆家の名なんぞ出すとあとが怖いぞ！

女童。（泣出しさうになつて。）よろしう御座います。大進様がなさつたのだときつと申します。（かけ去る。）

生昌。（狼狽して。）そんな無茶な、いけない、いけないつていふのに、あてきさん！

隆家。（引きとめる。）いゝんだつてば。うつちやつて置き給へ。ふむ、清少の奴、あれを見てどんな顔をするか。見ものだぜ。（愉快さうに笑ふ。）あゝ、いゝ心もちだ、――昨日つからの溜飮が一度に下つたよ。本當に、

生昌。（稍、間。）（悄然として默つてゐる。）

隆家。君、氣を惡くしたのかい？

生昌。そんなことは御座いません。

隆家。僕はこれでも君の爲に氣を吐いてやつたつもりでゐるんだぜ。禮を言はれてもいゝ位に思ふがなあ。

生昌。（力なく。）有難う存じます。

隆家。氣のない返事だねえ。（間。）全く君は莫迦扱かひされるのを光榮に感じる程、あの女にうち込んでゐるのかい。併し、そんなら猶更今の樣にしてやるのがあの女を靡かせる近道だよ。御意のまゝになつてゐるから喜ぶなんて、そんな女ぢやないんだから。

生昌。（何か言ひたさうに隆家の顏をみる。）

隆家。何だい、何か言ひぶんがあるんなら、言つて見給へ。

生昌。いゝえ——別に、

隆家。（暫く凝つと生昌の顏を見てゐたが、突然、冷かに笑ふ。）怒ることを知らない心か——君も大分人間ばなれがしてゐるね。成程、それぢやあ僕の樣な俗人のすることは解るまい。尤もだ、尤もだよ。（猶笑ふ。）

生昌。（心細くうつむく。）

陽、いよ／＼麗かに、鶯の聲。

——幕——（一九二八・十二・二十夜）

略歴

八木秋子



南信州の木曾に生れました。

檜山が屛風のやうに鼻のさきへせまつて、晝間も小暗いやうな谿の中で——

七人目だつたので、名前も生み飽きたといふわけで、こんなふうについた。陽のめを見た時からざつとかういふ存在だつたのです。學問も小學校をすませただけ——

結婚で足をふみはづして世間へさまよひ出ました。

それからは女中をしたり、新聞記者になつたり、辛くも生きてきたのですが仕事といつては本誌の昨年十二月號に創作一篇ものした位のほかには、いふべき何ももちません。

私は誰よりも自分の故郷を愛してゐます。いつまでたつても田舍もので土が戀しいのですが、都會の生活は知らない間に私の眼つきをこんなふうに惡くしてしまひました。

こつこつと、歩いてゆきたい——。

「紫の戀」合評

中本たか子——望月百合子
林　芙美子——大井さち子
生田　花世——

五十女レアと青年シエリイとの愛戀を描いたもの。一氣に讀ませてしまふ吸引力がある透徹した觀察、銳利な感覺を以て盛上る構成力に壓感がある。其處には、光と響きと色彩とテンポがある。豐麗な文章と才氣溢れた會話の微妙さに讀む人を陶然とせしめる。

これはコロンタイの『赤い戀』と好對照をなす戀物語だ。彼には理論的理想的な躍進があり、此には寫實的先覺的なリヽシズムがある。藝術的價値から云へば『紫の戀』の方が遙かに上値を占むべきである。（たか子）

深尾さんは日本のコレットと云ひたい方です。但し深尾さんがコレットのやうに無數の戀を間斷なく織り出して來た方かどうかは知りませんけれど。感じがコレットと云ひたい方です。その深尾さんがコレットに會つて、まるで永遠の戀人にでも會つたやうに陶醉されたのは餘りに當然ですし、またその老年の愛慾の心境を描いたシエリイを譯されたのも、深尾さんの心境と一味通ずる處があるやうで面白く思はれます。愛讀に價する譯書です。男も女も、老も若きも。（百合子）

兎に角譯した人が詩人なので、大變譯が綺麗だつた。レアの奔放な情熱と、男娼シエリイのからみつくやうな細々とした姿が丁度影繪のやうに頭に來る。シエリイは、コレット女史の油の乘つた時の作だけに、面白く讀みました。コロンタイの赤い戀より引きつけられました。（芙美子）

なんといふ粋な物語り、そして粋な筆致、コロンタイの『赤い戀』を見むきもしなかつた自分、いま深尾さんの流麗な譯にあつた『紫の戀』にかそやかな吐息さへもらしながら讀了ました。燃えて飽までも壯んなコレット！シエリー、この美はしさ偶然を公してこそ、私はシエリに見えやう！　私はシエリをもてなさう。深尾さんが最初の辭にいつてらしやるやうに私も心にさうつぶやく。（さち子）

『紫の戀』、この深尾須磨子氏譯のフランスの小說は、原名『シエリー』といふもの、ウリー、コレット女史の代表作といつてもよい位のもので、約十年前の逃作だといふ。

私はこの『紫の戀』を讀んで、賣笑婦上りの金持女といふあくどい女人生活を（この日本などでは見付かりさうもない）種々に描き吝嗇の皮肉を見せ、性慾の贅澤を解剖してあるのを、やゝむかむかする心持の渦を感じつつ讀んだ。シエリーは、私のいやな男である。この作の中の男も女も私はいやである。しかし、いやではあるが、その印象はもう私から消えて了ひさうもない。私はトマトの腐れたのをおもひ出すやうないやさと、忘られないものとをこの小說から得たのを格別悔いもしないが、喜びにもおのへない。つまり私のや

魔惡と肉體

メトロ・ゴールドウイン映畫



またしても、愛慾と情熱との葛藤物語である。幼少の頃から血盟を誓つたレオと、アルリツヒとは軍隊生活の休暇を得て、共に歸鄕した。彼等の懷しい故鄕では、レオの母とアルリツヒの妹とが暖く彼等を迎へた。が、レオはそこで妖しくも美しき人妻フエリーシタスを見た。フエリシタスは、その瞳の動く如く、情熱の女だつた。彼等の間に戀の火華は散り、レオは遂に女の夫と決鬪する。レオは女の夫を刺したが、その爲三年間の流刑に處せられねばならなかつた。女は淚を流して、レオの歸國を待つ事を誓つた。三年間をアフリカで過して歸鄕したレオは、その瞬間まで自分を待つてゐる筈の女がアルリツヒの妻と



うな友人間は遂にこの小說の十分なる快美を發見し得ないのだ。が、しかも香水のむれる部屋での囁き、『ヌヌヌ！ ヌヌヌ！』このシエリイの甘え聲がいつ私の耳から拔けるだらう！『養ひ子』とかいふ年若い情夫のいろいろな歡樂と悲哀、マダム、レアの性愛上の心理姿態は、くたぶれた紫赤色のビロードの幕の如く、生溫い風にゆらぐ。私は少しくうんざりして、新しいとり立ての苺でも食べたい氣持だ。（花世）



ビラを撒く日

女人藝術の素晴しい進出。この機會をもつてさらにめざましい飛躍をわが帝都に試みやうとわが「女人藝術」が暮近い帝都の街頭に歩み出しました。

十二月二十二日、クリスマスのま近な丸ビルの表に一臺の自動車がとまつた、元氣な足どりで下りたつた女性は時雨女史をはじめとして今井邦子、生田花世、長谷川春子、堀江かどえ、望月百合子、林芙美子、大井さち子、城しづか、素川絹子、八木秋子、小池みどり女史等の顏ぶれ、十字路に立つてそれ〳〵ビラを撒き出した。まあ、勇敢な、——といつた表情ですぎゆく同性もあれば、「女人藝術？ 見てゐますよ、宣傳してあげまやうか」と微笑してゆく紳士もある。

新宿に乘り出して、あの賑かな通りで人に揉まれながらみんな赤い生々した頰 夜は目的地の銀座へ進出した。明るい灯、華かな色彩の波、兩側のペーヴメントは忽ち「女人藝術」のビラで時ならぬ雪を散らせたやうに眞つ白になる。

「非常に好い雜誌ですわ、折角、御奮鬪を……」

「電話は何番？ 店頭にはもう賣り切れてないのですよ」など、いろ〳〵な溫い言葉をきく。寒い冷たい風が砂塵をまいて吹きすぎるけれど、……エスキーモ……の卓子を圍んで熱いお茶をのむあたゝかさ——。

ビラは人々の手に讀まれた、昨年棹尾の活動のめざましかつたこと、更に今年はめざましい進出ぶりを示さうよ。

「では、さよなら……」「さよなら、樂しかつたわれ」親しみの微笑をなげ合つてこの一日を終つた女性は歸つてゆく。

なつてゐたのを見た。そしてレオの家には、アルリツヒの妹が彼の妻となるべくレオを待つてゐた。一方、フエリシタスは、歸つてまたレオに對して又心を動かさずにゐられなかつた。彼女は祕かにレオを語つた。が、いよ〳〵その日、アルリツヒに發見され、又しても決鬪といふ事になつた。フエリシタスはその事を知つて、驚いて仲裁に馳け出した。戀敵の男達は、然しふと昔からの彼等の親交を思ひ出した。彼等は飄然と武器を捨てた。

「お互ひに、彼女のことは諦めよう！」

が、その頃女は、雪どけの淵に墜ち込んでつひに、永遠にその妖しくも美しき姿を消してしまつたのだつた——。



主演　グレタ、ガルボ
監督　クラーレンス、ブラウン
原作　ヘルマス、ズーデルマン

婦人彙報

△婦人の公民權

井出菊江女史を中心とする地方自治體研究は、今度『日本婦人公民協會』と改稱した。その特別集會が對議會運動、對輿論運動、婦人參政權に對する大同團結運動等を議題として二十二日、大阪の基督教女子青年會館で開催された。

△公娼廢止滿場一致

埼玉縣通常縣會は公娼廢止に關する縣議案を滿場一致で通過した。縣議案の趣旨は『公娼は人道上存置すべきものでなく、殊に昭和の今日に於ては尙更である』といふ意味で委曲をつくしたものであつた。公娼廢止の件に就て努力中のところは尙他に長野、岡山兩縣がある。

△婦人園藝學校

去年アメリカ視察中に、キリスト女子青年會日本同盟全國總幹事の要職をポンと投出した河井道子女史は、婦人園藝學校を創立して今春四月から開校するさうである。女史は曰く『この學校は出來るだけよき婦人を農村へ送り出し農村問題の解決に資したい云々』と。

△市川房枝女史歸朝

ハワイ汎太平洋婦人會議からずつとアメリカの方へ廻つてゐた市川房枝女史は七日歸朝した。女史の新歸朝談は『アメリカの新大統領フーヴァー氏の當選は多分に婦人の支持によるものとして日本婦人の參政權獲得運動の勇氣を一層强く要望する。』とのことである。

△派出婦取締規則改正

警視廳では、今回派出婦取締規則を左の如く改正。十五日頃に公布卽日實施することになつた。これによつて從來嚴しすぎた規則も可成り寛大になつたが、それだけに罰則は嚴重になり、規則違反の場合は、營業停止乃至解散の處分をうけることになつた。

一、夫の承諾を得ずとも派出婦たりうること。

二、客席へ侍らせぬ條件で下宿、旅館料理店等へも派出し得ること。

△聖勞園の婦人部

市外雜司ヶ谷の東京聖勞園では今度婦人部を建設した。その婦人部は主として市内外に於ける女の乞食を收容し保護するのである。

△市社會局の新女人

東京市の社會局に今度羽田とく子女史が就任した。女史は大正十三年三月渡米し、テキサス州のポートフォース神學院で社會事業科幼稚部を卒業後五年間シャトルその他で實際經驗を積んだ有爲の婦人である。女史の努力はやがて市社會局の異彩となるであらう。

△女醫の警視廳進出

年から年中目のまわる程忙しい警視廳衛生部の防疫課に石森みきといふ婦人が女防疫醫として任命された。今春は警視廳管下の郡部を検診に巡廻するとのことである。みき子女史は大正五年の東京女子醫專の卒業生である。

△日本兒童の遊園協會の婦人理事

麴町山下町中山文化研究所に假事務所を置いた日本兒童遊園協會は、理事七名の中に一二の婦人を交へてゐる。それはアメリカカリフォルニヤ師範で兒童心理學を研究された末田ます子女史である。女史はこれまで日比谷公園のこどもの先生になつて四年間努力された方である。

△青梅の女消防隊

府下青梅在古里、小河内、兩村女子消防隊員五十名は一月五日青梅町小學校庭で、分列式の豫行演習を行つた。奥多摩の勝地に育くまれた勇ましき女性は、はち切れるやうな緊張ぶりで、隊旗を冬の日に翻しつつ鮮かに豫行をした。その後御親閲も濟んだのであるが、この女子消防隊が村のために働く活動的精神は廣く一般農村婦人に好影響を與へるであらう。

△新大學と婦人

東京、廣島、兩高等師範學校は愈々この四月から昇格して文、理科の新大學として開校されることゝなつた。その新大學學生募集中女子高等師範の卒業生が第一次資格者の中に特望されるさうである。これは女子のために今まで鎖されてゐた大學教育の門戸を堂々と開いたためで喜ばしいことである。昭和十年の春には幾人かまとまつた數の女文學士、女理學士が社會に送り出されるであらう。

△全國婦人同盟後援會

消費組合の先驅者丸岡氏の夫人丸岡秀子さんが、今度夫君の同僚である法政大學教授平氏の夫人と協力して全國婦人同盟後援會といふ團體を作り活動をはじめた。そこには岩内とみえ、織本貞代、菊川靜子さんなどゝいふ一騎當千の女闘士がこの運動のために懸命に働らかれるさうである。

△俳優協會の女子部新設

東京俳優協會では、劇界の統一目的としていろ〳〵劃策中であるが、今回更に女子部を新設し舞臺劇女優の統一を計ることゝなつた。その中の代表者三名の選擧に於て森律子、村田嘉久子、河村菊江の三氏が當選したといふ。

△佛教女子大學の進出

佛教女子青年會多年願望であつた佛教女子大學建設の議が愈々文部省へ提出された。佛教に對して理解ある婦人を作り日本文化のために正しき家庭を建設することその他佛教的見地に立つての眞婦人涵養が目的である。キリスト教女子教育機關が日本全國に二百八十八もあるのに、佛教方面の女子教育機關がその一割にも充たないので、その向に於ては大變力を入れてゐる。

△女大生六名の召喚

東京女子大生徒六名は、新黨準備會城西支部長山縣氏の指導の下にモツプル支部女子大學班を作り會員二十名を集め種々畫策中の事判明近く檢事局で取檢べられる筈である。

△女の有徽者

東京市衛生試驗所の血液檢査の成績發表に依れば、男の有徽毒者は百人に付十四人四分であるのに、女は二十八人二分といふ多數を占めてゐる。尙ほ注目すべきは有毒者は男にありては三十一歳以上四十歳以下が最高、それについで五十一歳以上六十歳以下。女にありては二十歳以上三十歳以下が最高、それについで十一歳以上二十歳以下の順序。つまり若い婦人が最も有毒者だといふことになる。

女工の專檢合格

六百餘名の受驗者の中から四十八名の合格者しか出さないといふ去秋の女子專檢合格者の中には感心な婦人が多いが、中にも小林まちといふ十八歳になる婦人は淺草某メリヤス工場の女工に棲み込み、愛國夜間女學校及び岩佐高等女學校等で熱心に勉強してこの光榮を擔つたものである。

△ガリクルチ夫人來朝の噂

世界的歌姫ガリクルチ夫人は、今度愈ゝ極東行を實現するといふ多分上海を經て、櫻の花の咲き匂ふ頃日本の土を踏むことになるであらう。夫人は實に驚嘆すべきソプラノの名手である。

△ブース女史總司か

現救世軍總司令官ブース大將はいま極度の神經衰弱で最起の見込もないが、その後繼者に就てはブース女史が最も有望視されてゐる。女史はブース大將の妹で兄にも恥づかしからぬ傑物で米國に於て非常な人氣を持つてゐる。女史はサンベリー・オンテームスの救世軍最高會議に列席のため英國に向つて行つてゐる。

△婦人飛行の新記錄

婦人單獨長時間の飛行記錄を作る目的で、今回飛行を開始したニユーヨークのヴアイオラ・ジエントリー女史は、飛行時間八時間六分三十七秒のレコードで、豪雨中を飛んだこれは婦人單獨飛行の新長時間記錄である。

△飛行機タクシーの女運轉手

飛行機も愈ゝ實行時代に移つた近くフランスでは小型飛行機のタクシーが開業することになり、先づ最初の運轉手が婦人飛行手であるとは愉快な事である。この飛行機タクシーはどこででもお客をごく輕便に拾つたり下したり離陸着陸自由自在、お客の要求に應ずるさうである。尙ほカレーからドーバーまで英佛海峽横斷の飛行機タクシーも出來るさうである。

△婦人辯護士

愈ゝ來る五十六議會に婦人にも辯護士の資格を與へようといふので、各方面の隱れたる女性の法律研究家が注目を惹いてゐる。中にも松本眞毅子さんは四十四歳であるが、これは二十二年前夫に背かれ、その制裁から法律の必要を女性のために痛感し熱心に勉強したといふ奇特な婦人である。かゝる婦人こそ大いに女性のために闘ふに相違ない。その他川村わか子、開地敏子氏などがあるが、いづれも人生の辛酸をつぶさになめて切實に法律の必要を痛感して立たれる婦人といふべきであらう。

△既成政黨と婦選案

民政黨の加藤鯛一氏外三代議士は、廿七日衆議院に普選法第五條の改正案を提出した。右は「……する男子」の四字を削除するもので、滿廿五歳以上の婦人に選擧權を附與せんとするのであるが黨としては自由問題として取扱ふ事になつた。更に治警第五條の改正案を提出し、婦人の結社加入を認めようとしてゐる。之に反し政府側では望月内相が、婦人に公民權を與へる事にすら、「輿論に非ざれば時期尙早」との意向を發表した。

編輯後記

早春の町――女人藝術社へのたのしい勤めにと私の歩く柳町に柳の芽ぶく日も追々に近づいて來る。柳は、書店の近くの寺の境内にあるのだ。その芽ぶく頃は女人藝術も益々よくなれかしと私は熱い期待をかける。吹雪もおそへば、空つ風も吹きのめす。浮世に出たばかりの乙女のやうな春の柳はためいきをする。暗い顔になる。いつそ引込んで了はうかともおもふ。これが乙女心ではあるまいか！とはいへ、この世智辛い世の中である。引込んで引込みのつくわけもない。諦めつくせば世の中は柳は綠、花は紅、君子も居れば惡漢もゐるといふわけ、娼婦もゐれば淑女もゐるこの人の世、傷つくのがいやなら生きてないにかぎるのだもの傷つかないで生きてゆくほどの強者のほこりをもち得ないものは物事すべて、十のところを五つも成就すればいい、人事をつくして天命を知ると考へつゝ、女人藝術社に來て私は校正する。（花世）

街のビルディングや舗道の上に陽が輝いてゐます。大氣はつめたいけれど、その光りは靜にあたゝかく「早春」のよろこびをのぞかせて笑つてゐる。「女人藝術」は春にさきがけて、綠の芽ぶきのころから美しい花を開かう[illegible]するこのごろ。床しい香りと色とで多くの喜びを人々にふり撒き、希望を與へてゐることは、何といふ樂しいことであらう。なすべきことは多い――お互さまに。（八木）

生れて始めて編輯後記なるものを書くので、今日は冬にめづらしくとても暖かな日だと云ふのに、實はぶる〱ふるへてゐるのです。震へる程しほらしくはないくせにつてみんなに笑はれ相ですけど、でもとてもたのしくはたらいてゐます。（みどり）

二月號はどこの雜誌も控へ目に編輯をするのがきまりのやうになつてゐるが、本誌は熱心な愛讀者がまい月增加してゆくので、雜誌の面目を高めて行くために、充實した編輯をすることを心がけてゐる。新年になつて、直接新らしい讀者の申込が多數あつたことは、本誌の發展を語るものに他ならない。讀者の皆さま、奮つて御後援下さい。（かど江）

みなさまお待ち遠さま。新年號は非常な歡びの中に、あんなに早く送り出しましたのに、一九二八年から二九年にかけて、お正月を中にしてゐる本號は、少々お寢坊をしてしまひました。でも、お寢坊はしてもこの子、なか〱おしやれは巧くて、御覽の通り、まづすきまのない、メーキアップです。さて、私のやつてゐるおでんや、へ、よく本誌を愛讀して下さる方が見えます。各大學の方々、それからもう四十位な紳士も可成りゐられて、みなさま好意ある批評をして下さるのは、何といつても嬉しい事の限りです。それが、所謂婦人雜誌的興味の對象として讀まれてゐない事を、はつきり感じられるだけに――どうぞ、みなさま、ますますこの子を愛して下さいますやうに。（しづか）

今日は寒中には珍らしい暖かい日で、編輯室の連中は、やれ海を見たいの、原つぱへ行つてねころびたいのと、校了日の繁忙の中で、戸外の麗らかな陽の色を眺めて口惜しがつてゐます。藪入りがしたいといふ人もあります。十五日ですから……。雜誌がみなさんにお目にかゝるのは、二十日ごろになりませうか。（素子）

昨夜明治座に菊五郎、三津五郎兩名人の「乘合船」の萬歲の踊りを見て、神に入る技藝の妙に感じ入つた。さて、浮世はすべて乘合船である。ことに今の世の荒波を乘切る覺悟の女人同衆は、共に掉さす一葉の船の心意氣でありたいと願ふ。ここにもまた、この編輯後記にしても、初春の乘合船の縮圖を樂しく描きだしてゐるではないか、今年の女人の惠方は女人藝術でありたいと祈る。（時雨）

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

△誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい
△郵便切手代用は一割増の事。

昭和四年一月十七日印刷
昭和四年二月一日發行
（毎月一回一日發行）

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區左內町三十一
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七五八二五

大賣捌　東京堂　大東館　北隆館　東海堂

泉鏡花原作

日本橋

映畫化　近藤經一
監督　溝口健二
撮影　横田達之

主演
岡田時彦　梅村蓉子
酒井米子　夏川靜江
高木永二　一木禮二



主演
中野英治　夏川靜江
英百合子　小杉勇
三桝豐　横山運平
村田宏壽　伊藤壽榮子



徳富蘆花原作

灰燼

脚色　如月敏
監督　村田實
撮影　青島順一郎

◆日活二大特作◆

昭和四年一月十日印刷納本 第二巻第二號 定價金四十錢（送料 五厘）

二月號

平凡

定價・五十錢

特大長編

賀川豊彦氏
加藤武雄氏
吉川英治氏
大佛次郎氏

新派

俳優と喜劇役者の會

連載長編

三上於菟吉氏
佐藤紅緑氏
宮島資夫氏
葱洋平氏

東京市麹町區下六番町
振替東京二九六三九
平凡社